

# 岡村遺跡発掘調査報告書

—亀の川中小河川改修工事に伴う発掘調査—

1990年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

## 序 文

和歌山市と海南市に広がる亀の川流域の平野部には、数多くの遺跡が密集して存在し、古くから人々の営みが盛んであったことを窺わせる地域です。

このたび、亀の川の改修工事に伴い岡村遺跡の発掘調査を実施しました。岡村遺跡は弥生時代を中心とした集落遺跡として知られており、県下でも有数の遺跡の一つです。

調査は、昭和63年度から平成元年度までの二箇年にわたり実施し、縄文時代から古墳時代にかけての時期の遺物が多量に出土しています。また、銅鐸形土製品・鳥形土製品をはじめとする県下でも出土例の少ない貴重な遺物が発見されるなど、調査面積が限られたものであるにも係らず、数多くの成果を収めることができました。

その後、平成元年度事業として出土遺物の整理を実施し、ここにその成果をとりまとめ報告書を刊行する次第です。本書が県民の皆様方の調査研究の一資料として御活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査及び出土遺物の整理にあたり、御指導・御協力いただいた関係各位ならびに地元の皆様方に厚く御礼申し上げると共に、今後なお一層の御鞭撻を賜りますようお願ひいたします。

平成2年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮 谷 志 良

## 例 言

1. 本書は、和歌山県和歌山市及び海南市に所在する岡村遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、亀の川中小河川改修工事に伴う事前調査として昭和63年度と平成元年度に、出土遺物整理は平成元年度にそれぞれ実施した。
3. 調査及び出土遺物整理は、和歌山県の委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4. 調査は和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員 竜磨正信・巽 三郎・都出比呂志・藤澤一夫各氏（和歌山県文化財保護審議会委員）の指導・助言を得た。
5. 調査及び報告書作成に際し、県土木部和歌山土木事務所・県文化財課・海南市教育委員会をはじめ地元諸氏の助言・協力のほか、下記の方々から指導・助言を得た。

植田法彦（県立星林高校）	黒崎 直（奈良国立文化財研究所）
佐原 真（奈良国立文化財研究所）	中尾憲市（県立貴志川高校）
中村貞史（紀伊風土記の丘管理事務所）	前田敬彦（財団法人 和歌山市文化体育振興事業団）
渋谷高秀（財団法人大阪府文化財協会）	川崎雅史
6. 出土木製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
7. 堆積物の微化石分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8. 8区堤防石垣の写真測量は、（株）パスコに委託した。
9. 調査及び出土遺物の整理は、財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課 主査山本高照、技師井石好裕・河内一浩・黒石哲夫・土井孝之が担当した。
10. 本書は、調査担当者の協議のうえ、井石好裕が編集した。本文の執筆分担は目次に示すとおりである。

## 凡 例

1. 本書で使用した遺構の記号は以下のとおりである。  
掘立柱建物—SB、溝—SD、土坑—SK、石垣—SV、土壙墓・その他—SX、ピット—P、縄紋時代の溝—JSD、縄紋時代の土坑—JSK、縄紋時代のピット—JP
2. 遺構番号は、本書作成に際し新たに整理し直し、通し番号とした。
3. 遺構実測図の基準線は、1977～79年度に海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会が実施した、岡村遺跡確認調査の基準点である『岡村1』から、北へ120m・東へ26mの地点を原点（NS0：EW0）とした、真南北・東西線である。
4. 遺物は、出土地区別に通し番号とし、頭にローマ字1文字を付した。  
例 1区出土遺物—A1～、……、6・7区出土遺物—F1～、8区出土遺物—G1～
5. 遺物番号は、実測図と写真図版において一致するが、一部写真図版のみ掲載したものがある。

## 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	井石 好裕	1
第Ⅱ章 調査と整理の経過	井石 好裕	5
第1節 発掘調査		5
第2節 層序		6
第3節 出土遺物整理		6
第Ⅲ章 遺構と遺物		11
第1節 1～5区の遺構と遺物		11
1区	黒石 哲夫	11
2区	土井 孝之	13
3区	井石 好裕	19
4区	河内 一浩	20
5区	井石 好裕	27
第2節 6～8区の遺構と遺物		37
6・7区	井石 好裕	37
8区	河内 一浩	70
注釈及び参考文献		75
付篇 微化石分析報告	(株)パリノ・サーヴェイ	79

## 図 版 目 次

PL. 1	1 遺跡遠景	PL. 11	1 7区E100~150全景
2	〃	2	7区東半全景
PL. 2	1 1区全景	PL. 12	1 SD35・SK01
2	SD01木器出土状況	2	SD37
3	SV01	3	SD37土層
PL. 3	1 2区縄紋時代遺構全景	4	SD35土層
2	〃	5	SD39土層
3	JSK02	PL. 13	1 SD40・41
4	JP7	2	SD40土層
PL. 4	1 2区弥生時代遺構全景	3	SD42土層
2	SD07土層	4	7区東端(E180)南北土層
3	SD06土層	PL. 14	1 SD44、SK04・05
4	SD09土層	2	SD45~50
5	SV02	3	SD45土層
PL. 5	1 3区全景	4	SD50土層
2	3区西半全景	5	SD50遺物出土状況
3	SD12	PL. 15	1 SK02
4	SD12土層	2	SK02遺物出土状況
PL. 6	1 4区全景	3	〃
2	SD22~27	4	SK01
PL. 7	1 SD17	5	SB01
2	SD17遺物出土状況	PL. 16	1 6区縄紋時代遺構全景
3	SV04	2	〃
PL. 8	1 5区全景	3	7区トレンチ
2	SD31	4	焼土坑2
3	SD31土層	PL. 17	1 8区全景
4	〃	2	SD53・54
PL. 9	1 SD28~30	PL. 18	1 SV05
2	SD30土層	2	SV06
3	SD30遺物出土状況	3	SD59土層
4	〃	4	SD58遺物出土状況
PL. 10	1 6区全景	PL. 19	1区出土遺物
2	7区西半全景	PL. 20	2区出土遺物

PL. 21	2区出土遺物	PL. 43	7区SD50出土遺物
PL. 22	3区出土遺物	PL. 44	7区SD50出土遺物
PL. 23	4区出土遺物	PL. 45	7区SD50出土遺物
PL. 24	4区出土遺物	PL. 46	6・7区SK02・03・05～07、 ピット出土遺物
PL. 25	4区出土遺物	PL. 47	7区SK04・10出土遺物
PL. 26	5区SD30出土遺物	PL. 48	6区出土繩紋土器
PL. 27	5区SD30出土遺物	PL. 49	6区出土繩紋土器
PL. 28	5区SD28・31出土遺物	PL. 50	6区出土繩紋土器
PL. 29	5区SD31出土遺物	PL. 51	6・7区包含層出土遺物
PL. 30	5区SD31出土遺物	PL. 52	紡錘車ほか
PL. 31	6区SD34出土遺物	PL. 53	8区出土遺物
PL. 32	6区SD34・35出土遺物	PL. 54	8区出土遺物
PL. 33	6区SD35・37出土遺物	PL. 55	土器細部
PL. 34	6区SD40出土遺物	PL. 56	石器 石包丁
PL. 35	6区SD40出土遺物	PL. 57	石器 石包丁
PL. 36	6区SD45出土遺物	PL. 58	石器 石鎌ほか
PL. 37	6・7区SD33・41・42・44出土遺物	PL. 59	石器 石斧
PL. 38	7区SD46～48・51・52出土遺物	PL. 60	石器 石錐ほか
PL. 39	7区SD50出土遺物	PL. 61	木器
PL. 40	7区SD50出土遺物	PL. 62	木器
PL. 41	7区SD50出土遺物		
PL. 42	7区SD50出土遺物		

## 挿 図 目 次

第1図 岡村遺跡位置図	1	第34図 SD30出土遺物	29
第2図 岡村遺跡と周辺の遺跡	2	第35図 SD28出土遺物	30
第3図 岡村遺跡の調査	3～4	第36図 SD31出土遺物	31
第4図 第1次調査 調査前の状況	5	第37図 SD31出土遺物	32
第5図 第2次調査 調査前の状況	5	第38図 木器実測図	33
第6図 地区割図	5	第39図 木器実測図	34
第7図 増水の状況	6	第40図 6～8区遺構平面図	35～36
第8図 基本層序	6	第41図 SD33出土遺物	37
第9図 遺構配置図	7～8	第42図 SD35土層図	38
第10図 1～5区遺構平面図	9～10	第43図 SD34出土遺物	39
第11図 SD01土層図	11	第44図 SD35出土遺物	40
第12図 1区出土遺物	12	第45図 SD37土層図	41
第13図 1区出土遺物	13	第46図 SD40土層図	41
第14図 2区縄紋時代遺構実測図	13	第47図 SD37出土遺物	41
第15図 JSK02・JP7実測図	14	第48図 SD42土層図	42
第16図 SD05～10土層図	15	第49図 SD40出土遺物	43
第17図 2区出土遺物	17	第50図 SD40出土遺物	44
第18図 2区出土遺物	18	第51図 SD49・50土層図	45
第19図 3区縄紋時代遺物包含層	19	第52図 SD41・42・44出土遺物	45
第20図 SD12・15土層図	19	第53図 SD45～48出土遺物	46
第21図 3区出土遺物	21	第54図 SD45・47・48出土遺物	47
第22図 SD17遺物出土状況	22	第55図 SD50出土遺物	48
第23図 SD17・22・24～27土層図	22	第56図 SD50出土遺物	49
第24図 空玉形青銅製品	23	第57図 SD50出土遺物	50
第25図 鳥形土製品	23	第58図 SD50出土遺物	51
第26図 銅鐸形土製品	24	第59図 SD50出土遺物	52
第27図 SV04出土遺物	24	第60図 SD50出土遺物	53
第28図 4区出土遺物	25	第61図 SD50出土遺物	54
第29図 4区出土遺物	26	第62図 SD50出土遺物	54
第30図 5区Tr.土層図	27	第63図 SD51・52出土遺物	55
第31図 SD30土層図	27	第64図 SK02実測図	56
第32図 SD31土層図	27	第65図 SK02遺物出土状況	56
第33図 SD30出土遺物	28	第66図 SK03土層図	57

第67図 SK02出土遺物	57	第80図 6・7区包含層出土遺物	65
第68図 SK03~05出土遺物	58	第81図 土器拓影図	66
第69図 SK06~10出土遺物	59	第82図 石器実測図	67
第70図 SB01実測図	60	第83図 石器実測図	68
第71図 ピット出土遺物	60	第84図 SD53・54・58・59土層図	70
第72図 JSK05・08土層図	60	第85図 JSD02実測図	71
第73図 6区縄紋時代遺構平面図	60	第86図 SV06断面図	72
第74図 6区出土縄紋土器	61	第87図 8区出土遺物	72
第75図 6区出土縄紋土器	62	第88図 8区出土遺物	73
第76図 6区出土縄紋土器	63	第89図 SV02~04実測図	76
第77図 6・7区包含層出土遺物	64	第90図 SV01~05実測図	77~78
第78図 紡錘車・円板法量図	65		
第79図 6・7区包含層出土遺物	65		

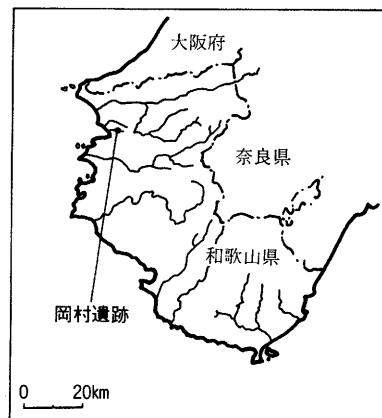
## 表 目 次

表1 溝一覧表 ..... 74 表2 紡錘車・円板一覧表 ..... 74

# 第Ⅰ章 位置と環境 (第1~3図、表1、P.L. 1)

岡村遺跡は、和歌山市本渡・海南市岡田を中心とした一帯に所在する集落遺跡である。遺跡は1950年代よりその存在が知られ、弥生時代の遺跡としては、和歌山市の太田・黒田遺跡と共に県下でも最大級の遺跡の一つであり、また、周辺には、条里制の地割りが整然と残るなど、早くからその重要性が指摘される地域もある。

遺跡周辺には、標高100m前後の独立丘陵が点在する。岡村遺跡はこれらの丘陵を縫って西流する亀の川が形成した、東西約3km・南北約1kmの沖積平野のほぼ中央に位置し、付近の標高は約6~8mである。遺跡の北側を流れる亀の川は新川とも呼ばれる



第1図 岡村遺跡位置図

ように、江戸時代の河川改修工事により現在の直線的な流路となったものであり、それ以前は本渡の南裾から山崎山北東裾に向かって蛇行しながら流れていたものと考えられている。

遺跡の周辺には、縄文時代から中世に至る多数の遺跡が発見されている。亀の川流域に人々が住みはじめたのは、この地が陸地化はじめたと考えられる縄文時代後期にまで遡る。この時代の遺跡には、岡村遺跡をはじめ、亀川遺跡・海南高校校庭遺跡・大野中遺跡・鳥居遺跡などがあり、後期から晩期にかけての遺物が出土している。なお、今回の調査地点から約1km西にある比丘尼橋付近から、草創期の有舌尖頭器2点が発見されているが、河川により上流域から移動し埋没したものと考えられる。

弥生時代に入ると、岡村遺跡では本格的な集落が形成されはじめ、なかでも中期においては、平野部東側の亀川遺跡と共にその規模を拡大させ、流域における中心的な位置を占めるようになる。また、後期の遺跡には、多田東遺跡や高地性集落である滝ヶ峰遺跡がある。

古墳時代の後期には、周辺の丘陵上に、山崎山・岡村・岡村八幡宮・且来下垣内・多田北山等の古墳群をはじめとして数多くの古墳が作られるようになる。なかでも、山崎山・岡村・岡村八幡宮の各古墳群はその位置からも、当遺跡の墓域としての直接的な関連性が指摘されている。

奈良時代以降の遺跡としては、川原寺系の軒丸瓦や鷦尾が出土する薬勝寺跡、7世紀から9世紀にかけての須恵器窯である内池窯跡などがある。また、遺跡の500m東方には熊野古道が南北に通っている。

**既往の調査** 岡村遺跡が遺跡として周知されて以来、系統だった調査は行われていなかったが、周辺の宅地開発に対応するため、海南市教育委員会により1977年度から遺跡の範囲と内容を把握するための確認調査が行われ、その後も河川の改修等に伴い発掘調査が実施されている。

- 1977~79年度 遺跡の範囲と内容を確認するために、遺物表面採集、坪堀り、試掘等の調査を実施。
- 1980年度 主に遺跡の東方への拡がりを確認する目的で、坪堀り調査、ボーリング調査を実施。
- 1982~83年度 河川改修工事に伴い、左右両岸を東西54~65m、面積約600m<sup>2</sup>を対象とした発掘調査。
- 1986~88年度 市道改良工事に伴い、南北長約130m、東西幅2~4mを対象とした発掘調査。
- 1989年度 宅地開発等に伴う、3ヶ所の発掘調査。調査面積は約190m<sup>2</sup>である。



- |            |                |           |           |             |
|------------|----------------|-----------|-----------|-------------|
| 1 広原古墳     | 2 赤津古墳群        | 3 冬野遺跡    | 4 朝日石槍出土地 | 5 城の前II遺跡   |
| 6 城の前I遺跡   | 7 大池遺跡         | 8 曾垣田遺跡   | 9 曾垣田II遺跡 | 10 曾垣田古墳    |
| 11 江南遺跡    | 12 薬師谷遺跡       | 13 松原II遺跡 | 14 松原2号墳  | 15 松原1号墳    |
| 16 東池3号墳   | 17 東池4号墳       | 18 松原I遺跡  | 19 薬勝寺遺跡  | 20 薬勝寺跡     |
| 21 仁井辺遺跡   | 22 薬勝寺南山古墳群    | 23 滝ヶ峯古墳群 | 24 滝ヶ峯遺跡  | 25 多田東遺跡    |
| 26 国主神社古墳群 | 27 多田北山古墳群     | 28 亀川遺跡   | 29 且来V遺跡  | 30 且来III遺跡  |
| 31 且来IV遺跡  | 32 且来I遺跡       | 33 且来II遺跡 | 34 岡村古墳群  | 35 岡村八幡宮古墳群 |
| 36 岡村遺跡    | 37 山崎山古墳群      | 38 室山古墳群  | 39 日方山城跡  | 40 且来下垣内古墳群 |
| 41 内池遺跡    | 42 内池窯跡        | 43 鰐田池遺跡  | 44 赤坂大池遺跡 | 45 海南高校校庭遺跡 |
| 46 大野中遺跡   | 47 海南第2中学校校庭遺跡 | 48 地藏寺山古墳 | 49 坂東山古墳群 |             |
| 50 柿本神社古墳  | 51 奥の谷遺跡       | 52 奥の谷古墳  | 53 鳥居遺跡   |             |

第2図 岡村遺跡と周辺の遺跡



海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会  
～29 昭和52年度 A 昭和61年度  
201～244 昭和53年度 B 昭和62年度  
301～316 昭和54年度 C 昭和63年度  
500～510 昭和55年度 D 平成元年度

社和歌山県文化財研究会  
E 昭和57年度  
F 昭和58年度  
G 昭和60年度

財和歌山県文化財センター  
H 昭和63年度  
～平成元年度(本報告書)

第3図 岡村遺跡の調査

## 第Ⅱ章 調査と整理の経過

### 第1節 発掘調査（第4～7図）

調査は、亀の川の左右両岸を1988年度から1989年度にかけて実施した。堤防改修工事との調整を図りながら、右岸約320m、左岸約300mを対象に3次に分けて調査を行った。

第1次調査 調査地は亀の川の右岸、1987年度調査地点の東側にあたり、途中1985年度の調査区間を挟んだ、延長約260m・面積約750m<sup>2</sup>を対象に、現地調査を1988年4月から5月まで実施した。その後、整理作業を行い、概要報告書を作成し、同年10月に事業を終了した。調査区は、調査範囲を便宜的に4分割し、西から順に1～4区と呼称した。

第2次調査 調査は、右岸の第1次調査地区の延長部分60mと、左岸の1988年度調査地点の東側延長部分約210m、面積約1400m<sup>2</sup>を対象に行った。現地調査は1988年10月から1989年3月にかけて実施し、右岸を5区、左岸を6・7区とした。

第3次調査 調査は、前年度に引き続き南岸部分の90m・面積約200m<sup>2</sup>を対象に行った（8区）。現地調査は1989年6月から8月まで実施し、1990年3月をもって事業を完了した。

調査は原則として、弥生時代遺物包含層の上面までを機械掘削とし、それ以下は人力で作業を行った。2・3・6～8区については縄紋時代の遺物包含層が比較的顕著に認められたため、弥生時代以降の遺構調査が終了した後、包含層を掘り下げ、遺構の検出作業を実施した。

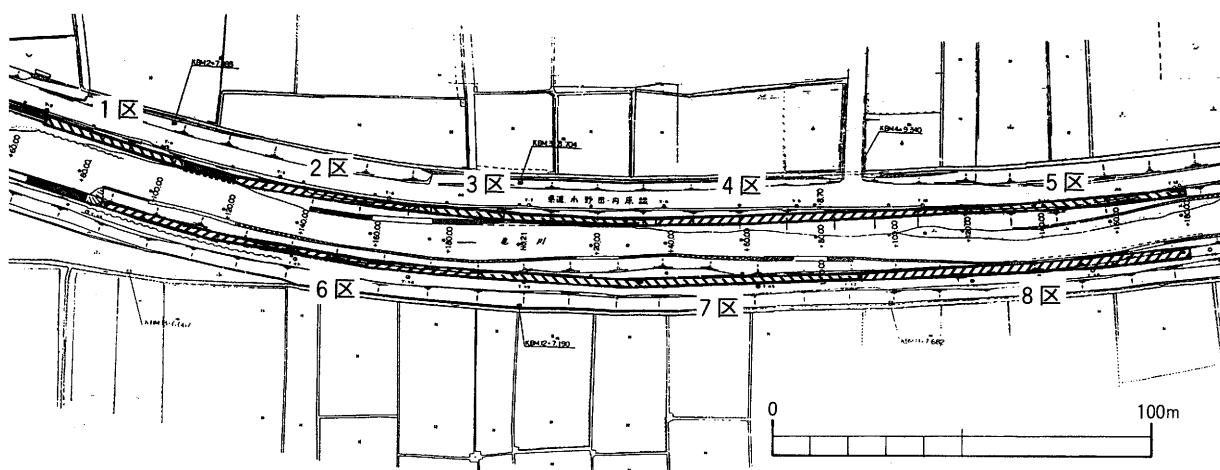
包含層出土遺物の取り上げは、調査区の西端を起点に、右岸は約4m、左岸は5m間隔で小区画を設



第4図 第1次調査 調査前の状況



第5図 第2次調査 調査前の状況



第6図 地区割図



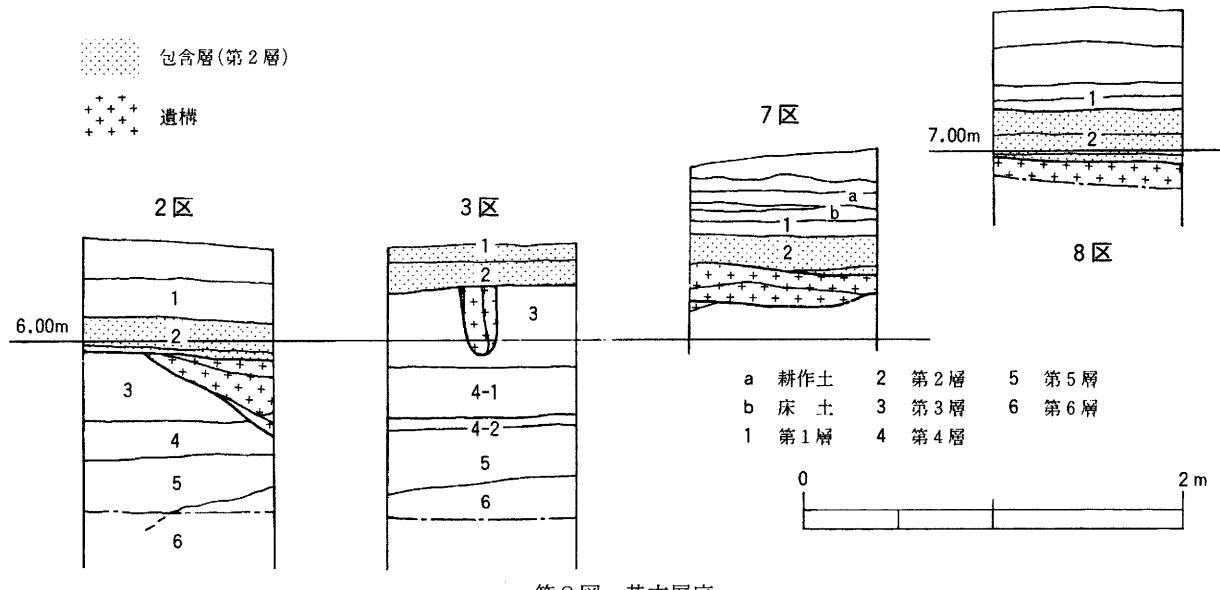
第7図 増水の状況

定して行ったが、右岸の南側及び左岸の北側部分は、江戸時代から現代に至る堤防護岸工事のため破壊され、調査区幅にはばらつきがあるため、1区画の面積は一定していない。6～7区の縄紋時代の遺物は、1区画をさらに南北に2分割し、取り上げている。

また、第2次調査途中、降雨による増水のため、遺構及び遺物や土層観察用の畔（以下、セクションと記す）の一部が流失するという被害が出た。流失した遺物は水位が下がった後、回収作業に努めた。

## 第2節 層序（第8図）

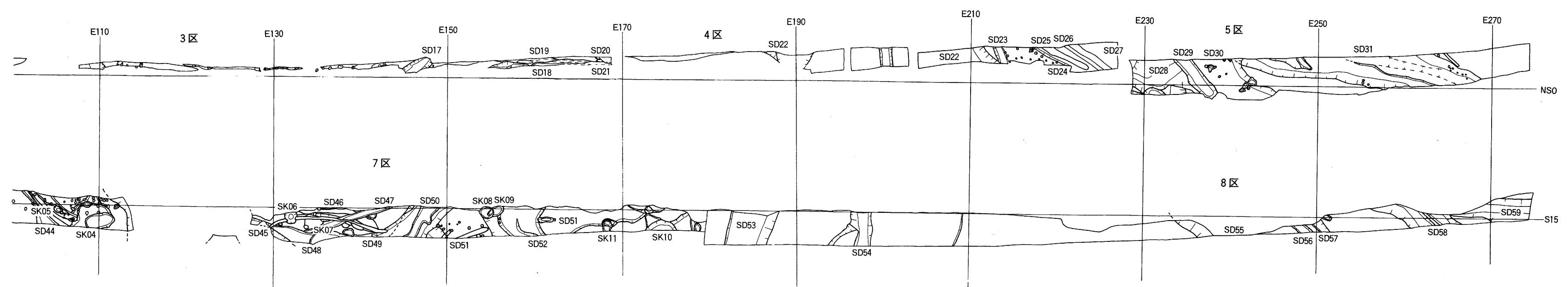
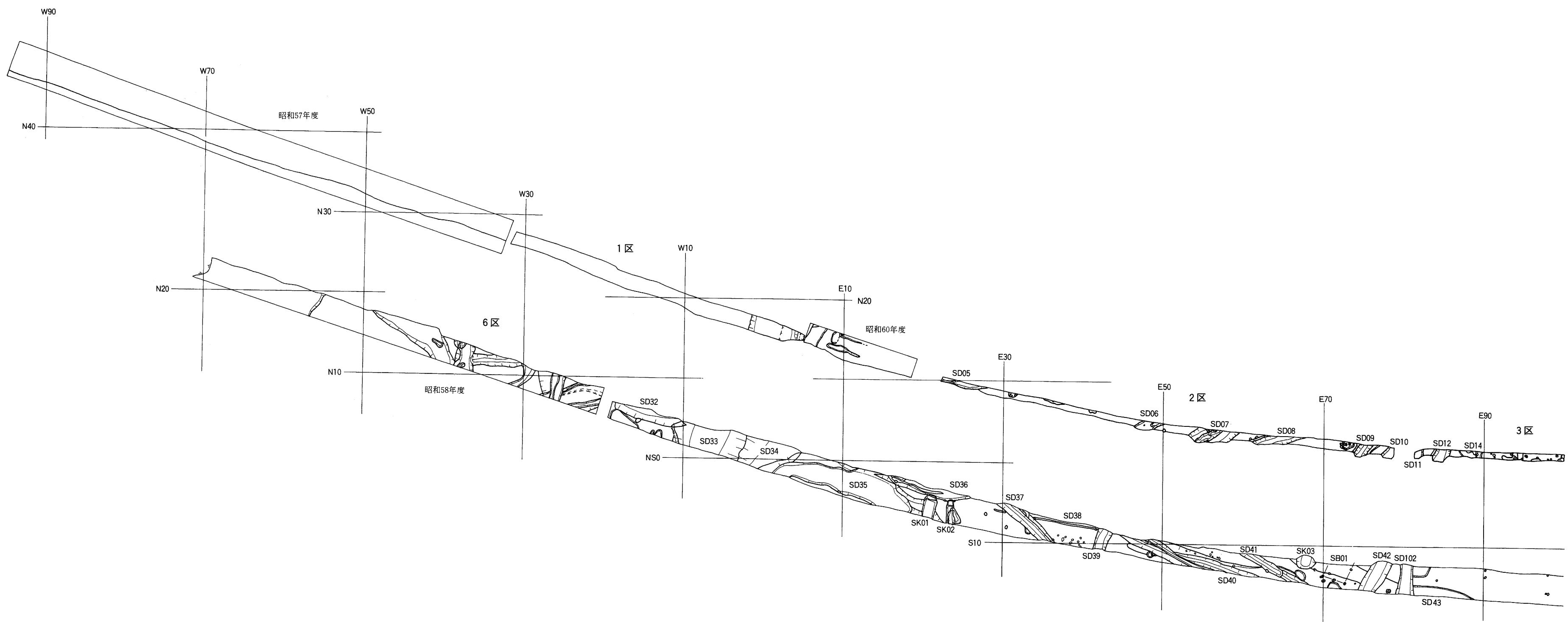
調査区の基本的な層序は第8図に示したとおりである。弥生時代の遺物包含層である第2層は、調査対象地のほぼ全域に認められる。地区によっては上下2層に分層が可能であり、遺物の出土量も異なる。また、上層には古墳時代から中世にかけての遺物を含む範囲があり、全ての地区における第2層が、必ずしも同一の土層であることを意味するものではない。弥生時代の遺構面である第3層上面は、東から西に向かって下降し、1区と8区との比高差は約1mである。第3～5層は縄紋時代の遺物包含層である。第3層には後期中葉の、第4・5層には後期前葉の遺物が含まれている。



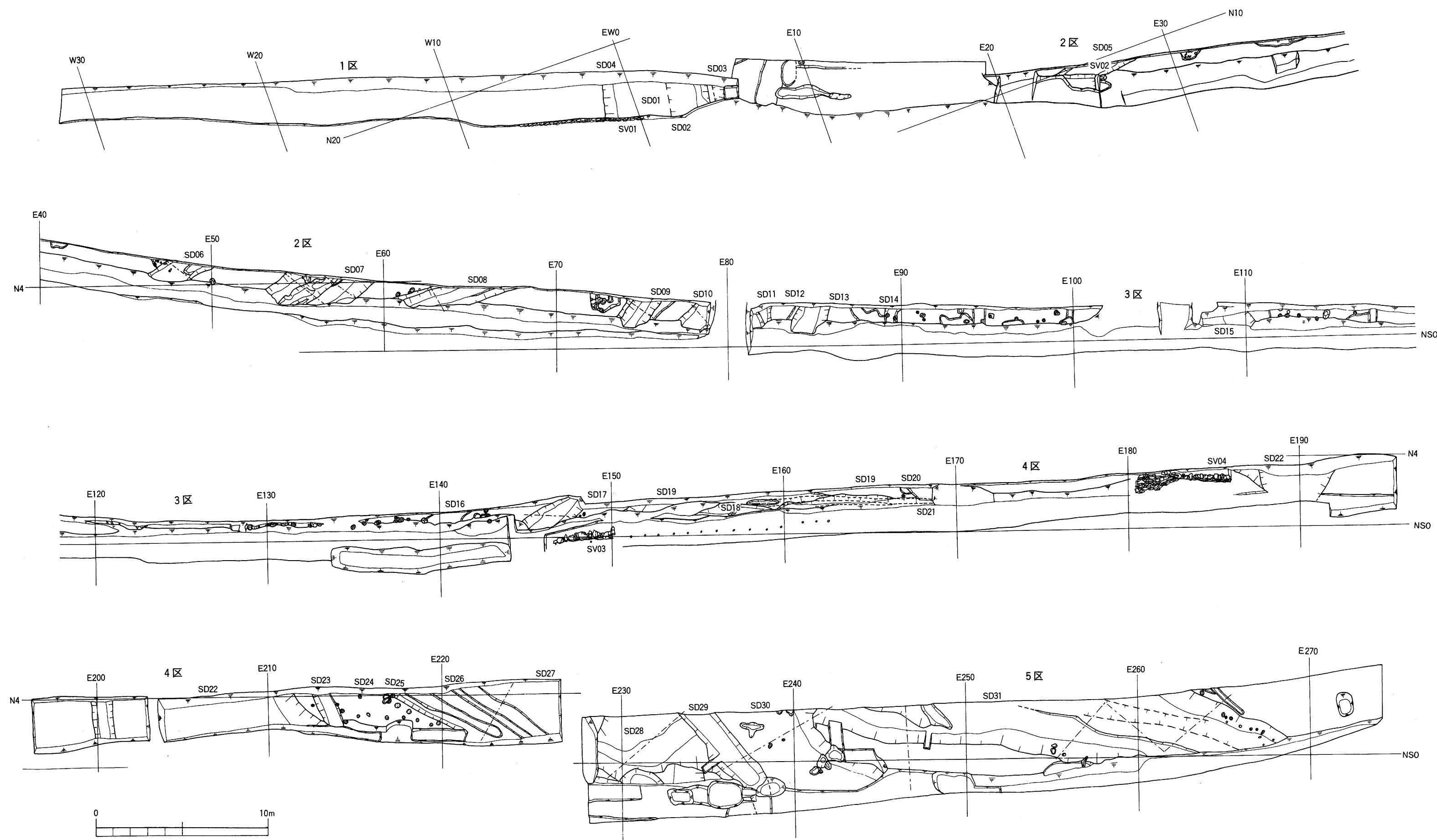
第8図 基本層序

## 第3節 出土遺物整理

出土遺物整理は1989年6月から1990年3月まで実施した。第1次調査出土遺物は、概報作成の段階で洗浄・注記・接合の殆どと主要遺物の実測は既に終了している。このため、整理作業は第2次調査出土遺物を中心に作業を進めた。第2次調査出土遺物は出土量が多く、事業期間の制約もあり、実測図の作成は洗浄・注記作業を行う中で主要な遺物を抽出し、報告書への掲載を考慮しつつ行った。第3次調査出土遺物は、調査が本事業と並行して行われているため、現地調査の終了を待って整理を実施した。



第9図 遺構配置



第10図 1～5区遺構平面図

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 1～5区の遺構と遺物

1区（第9～13・38・89図、表1、P.L. 2・19・61）

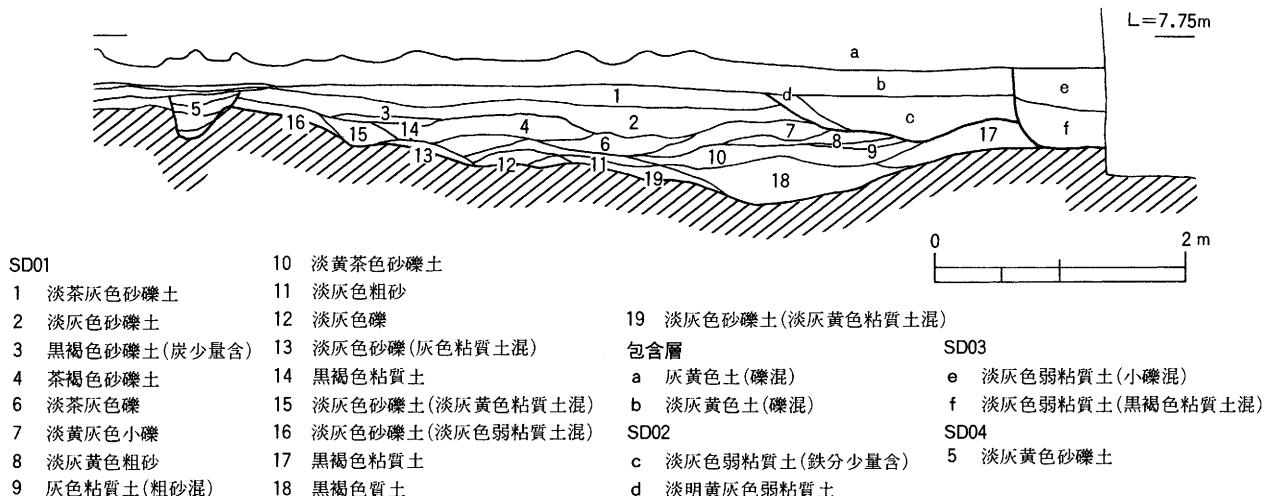
遺構（第10・11・90図、表1、P.L. 2）

1区は今回の調査区では最も西に位置し、1982年度と1985年度に実施した発掘調査区の間にあたる。今回検出した遺構は、近世中頃の堤防石垣（S V01）と、中世の溝（S D04）、弥生時代中期に埋没したと考えられる自然流路（S D01）である。

S V01 延長25mにわたって確認した近世の堤防石垣である。石材は遺跡の近辺で産出する結晶片岩の板石を使用している。50cm～70cm程の横長の大型石材を平積みにした後、その上に30cm程の小振りの石材を小口積みにし、これを何回か繰り返して積み上げている。石垣裏込めからは伊万里の染付碗の破片が出土しており、文献にみえる18世紀初頭の亀の川河川改修の際に築造された堤防と考えられる。

S D04 幅約0.6mの溝である。断面形態はU字形を呈する。瓦器碗の破片が出土しており、中世の溝と思われる。

S D01 幅6.9m以上、深さ1.0mを測り、土層の堆積状況などから自然流路であると考えられる。方向は北北東から南南西に流れている。土層は3層に大別でき、弥生時代中期（第四様式）の土器が上層から下層にかけて大量に出土しており、比較的短期間に埋没したようである。

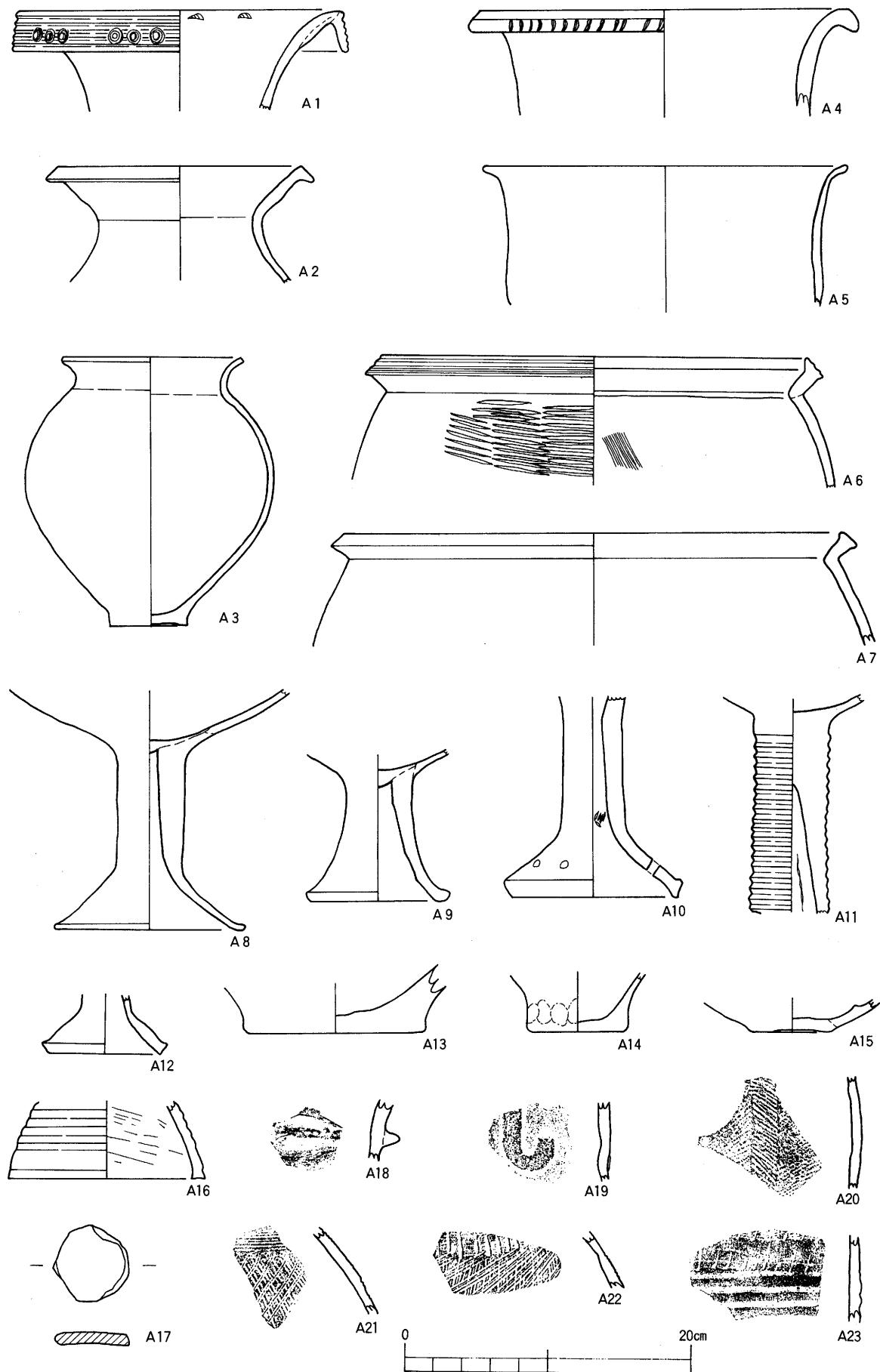


第11図 SD01土層図

遺物（第12・13・38図、P.L. 19・61）

S D01出土遺物 A 1は口縁端部に粘土帯を付けたして垂下させた中型の広口壺で、口縁端面に浅い凹線紋を施した後、円形浮紋を3個1単位として貼り付けている。口縁内面には扇形紋が施されている。

A 2は中型の広口壺で、口縁端部は斜め下に短く垂下する。A 3は小型の甕で、体部下半全面に煤が付着する。A 4は広口壺で口縁端面に刻み目がある。A 5は紀伊型甕と呼ばれる弥生前期の甕で、磨滅のため内外面の調整は不明である。A 6とA 7は大型の甕で、口縁が上方と下方につまみ出されて、端部



第12図 1区出土遺物

は面をなす。A 6の外面には粗いタタキがみられ、内面はハケで調整されている。A 8は中空の高杯脚部で、杯部とは円盤充填で接合している。

A 9は幅広で低脚の高杯脚部である。A 10は中空の高杯脚部で脚台部の3箇所に円孔を2個ずつ穿っている。A 11は中実の高杯脚部で、脚柱部には上から下まで凹線紋が施されている。A 12も高杯脚部。A 13・14は甕の底部、A 15は壺の底部である。A 16は鉢か器台の脚台部で凹線紋が施される。A 17は直径5.3cmの円板である。A 18は小さな耳状の把手を持ち、A 19はJ字形の浮紋が貼り付けられた土器片である。A 20～23は弥生中期の土器片で、A 20には綾杉紋、A 21には櫛描直線紋と斜格紋、A 22には簾状紋と斜格紋、A 23には簾状紋と凹線紋が施されている。A 26は長さ約1.4m、最大幅15cm、最小幅9cm、厚さ約4cmを測り、片面を平滑に削り、一方の横側面を直角に削り出し、段を付けている。材質は広葉樹だと思われ、建築部材の一種だと考えられる。

**その他の遺物** A 24はS V01出土の伊万里の染付碗で薄いコバルトブルーの呉須である。A 25はS D04出土の瓦器椀で内外面とも磨滅が著しく調整等は不明である。

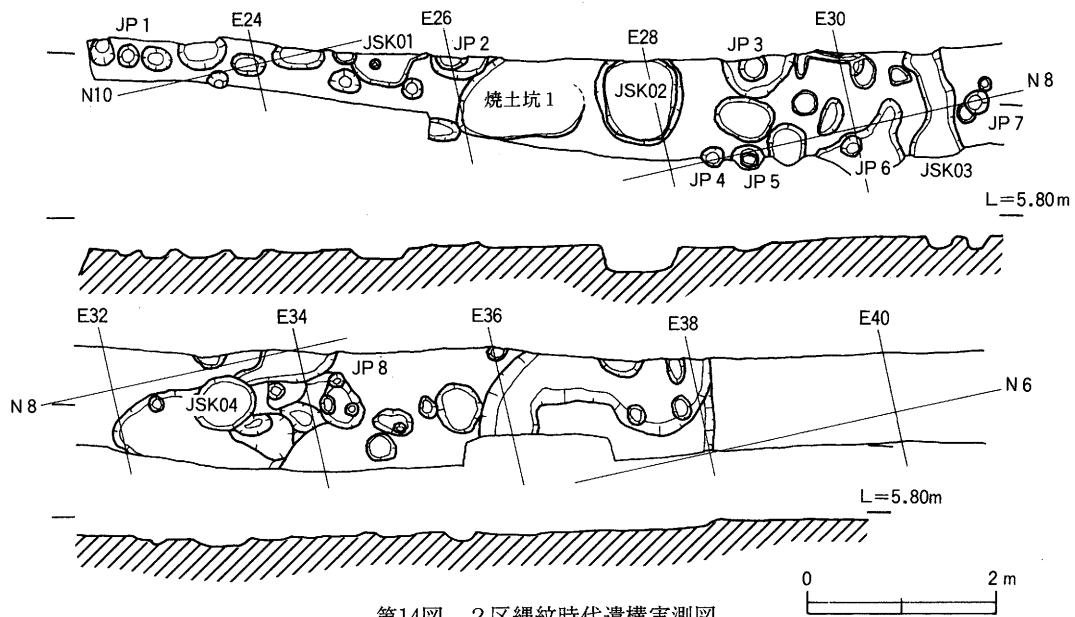
## 2区（第9・10・14～18・83・89図、表1、P L. 3・4・20・21・58・60）

2区の遺構・遺物は、縄紋時代後期と弥生時代中期に大別できる。縄紋時代の遺構は調査区の西半に集中し、基本土層第4層をベースとしている。縄紋時代の遺物分布は第3層に集中し、特に遺構密度の高い部分から多量の遺物が出土している。弥生時代の遺構は調査区全域にみられ、同一方向に延びる溝・浅い不定形土坑がある。遺構の上部を覆う弥生時代遺物包含層の遺物量は調査区東端に集中し、3区へ続いている。調査区西端では、弥生時代遺物包含層の存在しない部分もみられる。

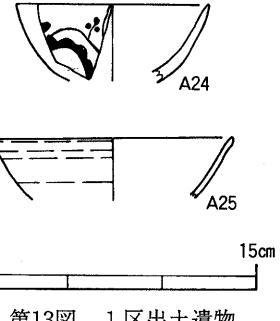
### 遺構

#### 縄紋時代の遺構（第14・15図、P L. 3）

縄紋時代の遺構は、E 22～E 38にかけての狭い範囲に集中し、この範囲が一段落ち込んだ状態を示す。遺構は、土坑と小柱穴状の遺構が重複して存在する。



第14図 2区縄紋時代遺構実測図



第13図 1区出土遺物

J S K02 一辺約84cm・深さ30cmを測り、隅丸方形を呈する。掘形は、ほぼ垂直に立ち上り、肩部はやや緩やかな傾斜で広がる。埋土の下層には厚さ約1～3cmの炭層が認められ、人為的に敷いたものと考えられる。炭層より下部では出土遺物は皆無である。

焼土坑1 長軸1.2m・短軸0.8m・深さ約4cmを測り、楕円形を呈する。焼土坑1は調査区北壁の土層を確認したところJ S K02より後出する可能性が考えられる。出土遺物は皆無である。

その他、深さ8～10cmを測る円形（J S K04）や不定形土坑（J S K01・02）がある。小柱穴状の遺構（JPで呼称）のうち、JP7は直径26cm・深さ15cmを測り、中から鉢（B20）があたかも埋置された状態で出土した。また、狭い調査範囲のため不明確ではあるが、JP2・4・6・7は弧状に並ぶ。また、遺構のベースとなる第4層から下部には、調査区全域に厚さ20～60cmに及ぶ自然堆積層（第4層～5層）が認められ、上述した遺構群よりも古い福田K II式ないし四ツ池式に並行する深鉢（B10）が出土している。このことは、岡村遺跡の所在する微高地の北辺部が早くも縄文時代後期前葉に形成されたことを傍証する一助に成り得るものである。

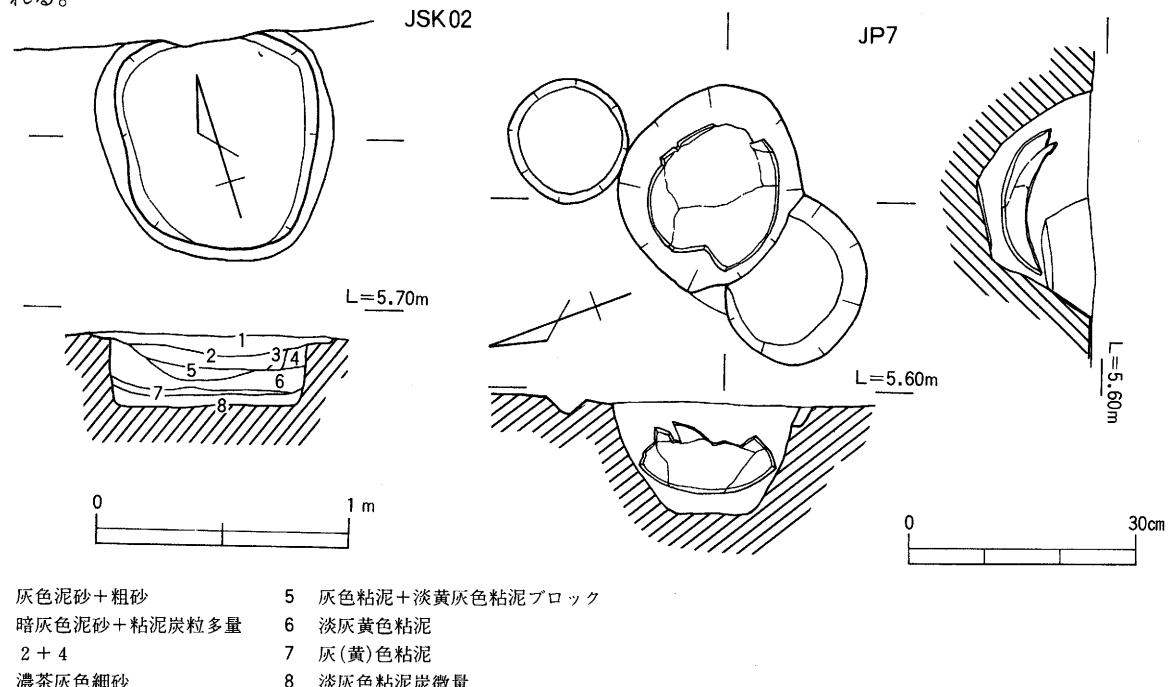
#### 弥生時代の遺構（第10・16図、表1、P.L. 4）

弥生時代の遺構は、溝6条、不定形土坑5基、小柱穴数ヶ所があり、単純である。

基本的に溝の底は、北東から南西方向に向って低くなるが、調査範囲が狭いため流れの方向を確定できなかった。溝内の埋土の状況から判断して、滯水の認められる溝（SD07～10）と認められない溝（SD05・06）に区別できる。

SD05 幅1.5m以上・深さ0.3mを測り、再掘削の認められる溝である。埋土の内、第4・5層は旧溝に、第1～3層は新溝に対応し、新溝の埋土は人為的に埋められた可能性が強い。

SD06 幅1.7m・深さ0.3mを測り、溝内北側に杭跡が存在する。第2・3層は、人為的埋土と考えられる。



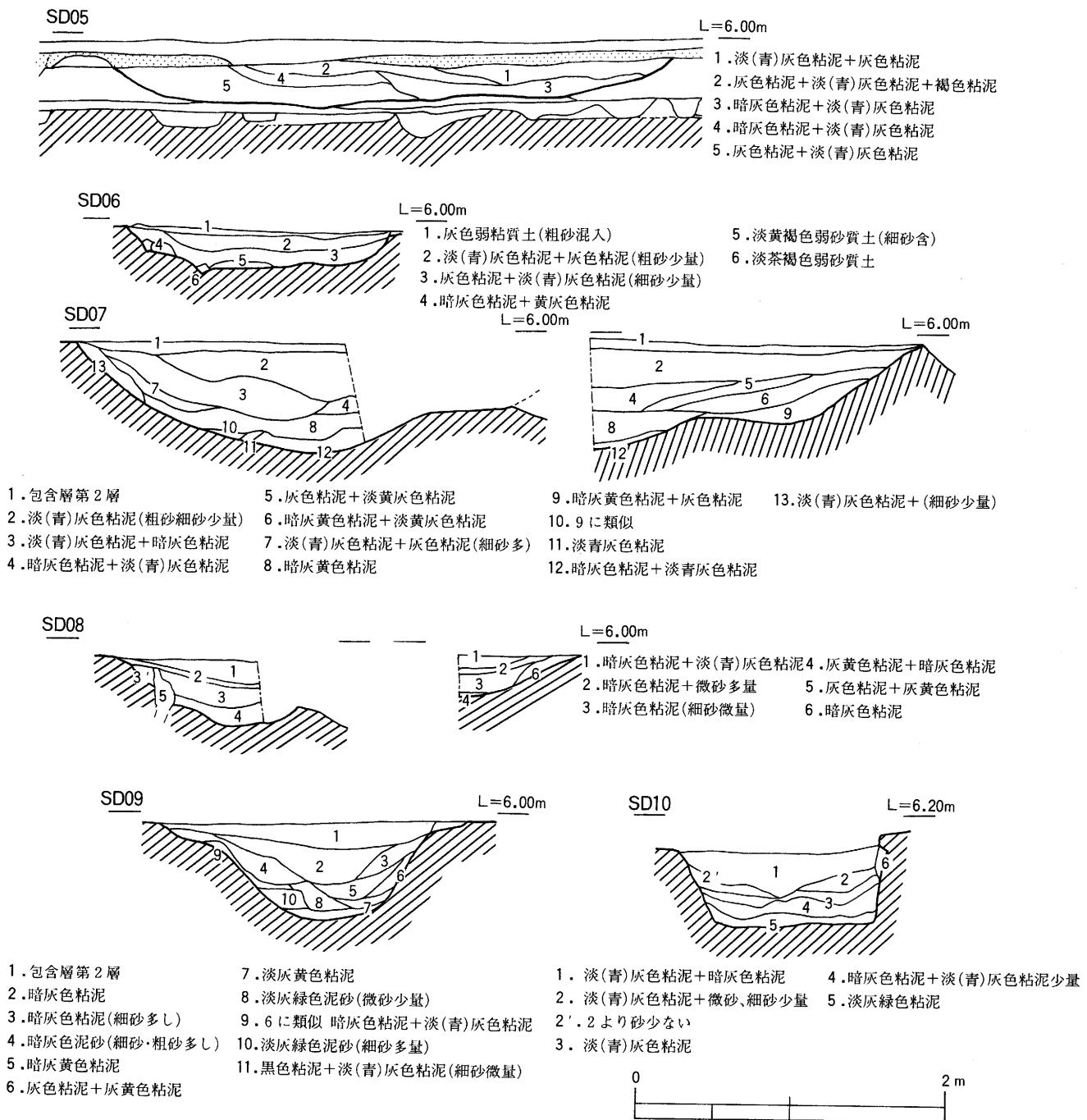
第15図 JSK02・JP7実測図

S D07 再掘削の認められる溝で、西側の深い部分が古く、東側の浅い部分が新しい。各々の規模は西溝で推定幅2.5m・深さ0.6m、東溝で幅1.85m・深さ0.5mを測る。第2～4層は、人為的埋土と考えられる。

S D08 幅2.1m・深さ0.3～0.4mを測り、溝内底で低い段が付く。第1層は、人為的埋土である。

S D09 幅2.1m・深さ0.65mを測り、断面U字形を呈する溝である。埋土の内、第2・3・5～7層は再掘削後の埋土と考えられ、第2・3層は人為的埋土である。

S D10 幅1.4m・深さ0.5mを測り、断面逆台形を呈する溝である。溝の埋土の基本堆積は、暗灰色な



第16図 SD05～10土層図

いしは灰色のブロック土を含む人為的と考えられる汚ない埋土（第1～3層）と滯水時の自然堆積層（第4・5層）に区別できる。

各溝は、埋土の状況から判断して、機能を喪失した直後に人為的に埋められた可能性が強い。

#### 江戸時代の遺構（第89図、P L. 4）

江戸時代の遺構は、E 22～E 26にかけて存在する石垣（S V02）と亀の川堤防の盛り土がある。

S V02 東西3mにわたり、地山を掘り込んだ傾斜面に人頭大の結晶片岩を貼るように積んでいる。石垣の下部は、小口積みの状態が2・3段依存する程度で崩壊が著しく、その上部に平積みの状態が4・5段依存している。石垣の東端下部には、石垣と直交する方向に径10cmの松材が横たえられており、それ以東に石垣は認められない。なお、石垣の傾斜角は約65°である。

#### 遺物

##### 縄紋時代の遺物（第17・18・83図、P L. 20・21・58）

縄紋時代の遺物は、大半が基本土層第3層と落ち込み堆積層から出土した縄紋土器である。

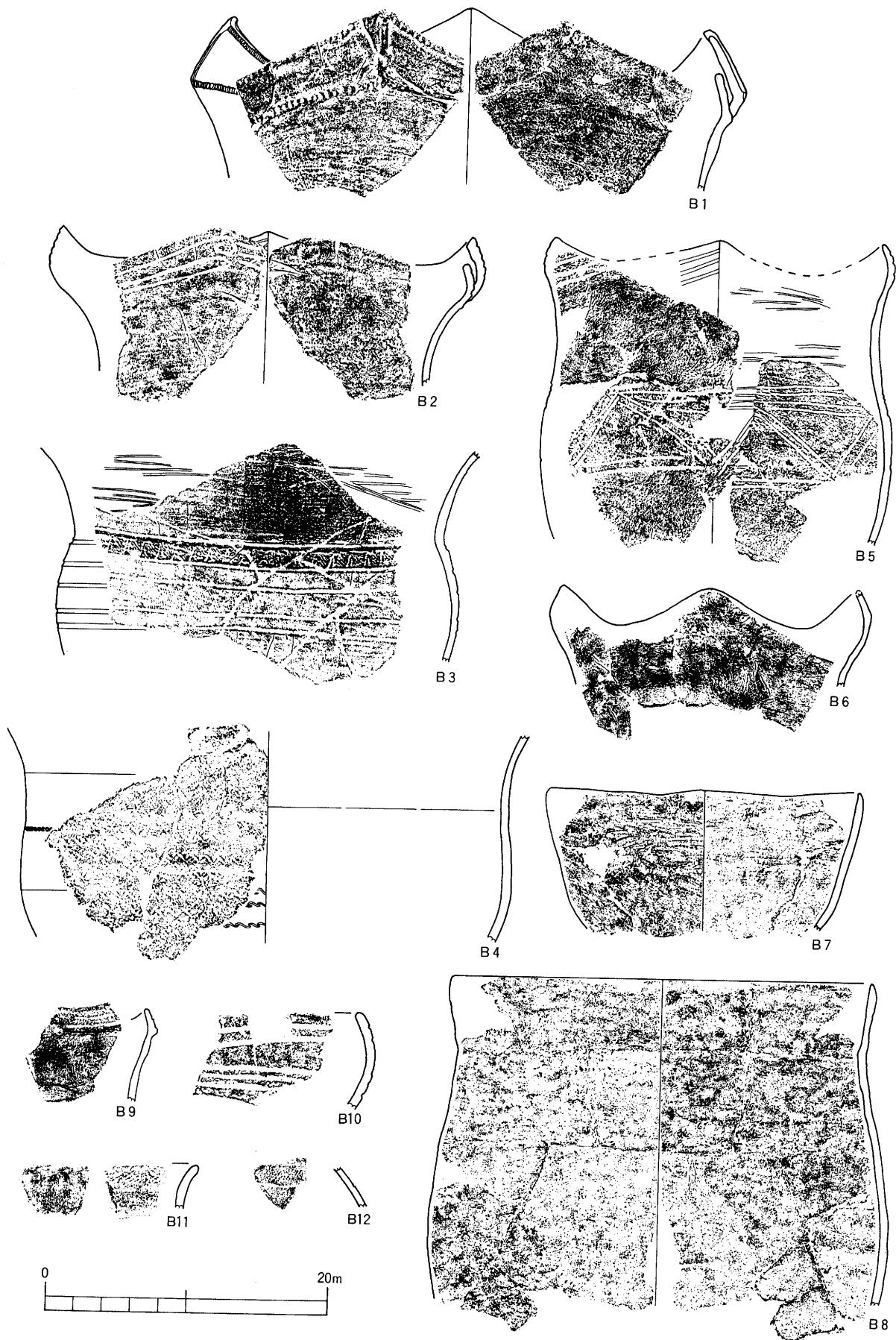
深鉢B 1は口縁端部と屈曲部に低い段を貼付け、ヘラによる刻みを施す。波頂部は小さい山形を呈し、屈曲部にかけて貼付け浮紋を垂下させる。外面屈曲部より下位にススの付着が認められる。深鉢B 2は波状口縁に沿う3条の沈線紋が施され、波頂部に円形紋を配する。深鉢B 3は体部にL Rの縄紋が施され、その上に沈線5条が施されている。深鉢B 4は体部に7条以上の結節縄紋が施され、胎土に微量の金雲母を含む。深鉢B 5は波状口縁に沿う3条の沈線紋と体部に直線による三角区画紋が施されている。体部の紋様帶には沈線以前にL Rの浅く細い縄紋が施される。深鉢B 6は無紋で内外面共に軽い条痕が施される。胎土は粗く、多量の小砂粒を含む。深鉢B 7・8は粗製で、内外面共に横方向の貝殻条痕が施される。深鉢B 9は縁帶部に縄紋と沈線2条が施される。深鉢B 10は口縁部に太い沈線を施した後、細い沈線を施す。注口土器の内、B 12・15は沈線内刺突が認められ、B 13・14には刻み目が施される。B 16・17は屈曲部の下に紋様帶をもつ小型の浅鉢と考えられる。深鉢B 20は椀形を呈し、内外面共に丁寧に磨かれる。浅鉢B 21は口縁部から屈曲部にかけて紋様帶を構成し、口縁端部に刻み目を施す。浅鉢B 22も同様の紋様構成を呈し、円形紋を配する。底部B 23～29は、上げ底が主体となる。

落ち込み堆積層と第3層の縄紋土器は、一括性に富むもので一乗寺K式を主体とし、少量の北白川上層式3期ないし元住吉山I式を含むものと考えられる。落ち込み堆積層と第3層全体の縄紋土器の組成は、深鉢721点（97.6%、内有紋21%・無紋76.6%）、浅鉢9点（1.2%）、注口土器9点（1.2%）で構成され、深鉢が圧倒的多数を占める。その他、少量のスクレイパー（B 102・103）、石鏃、石錘（B 37・104・105）がある。

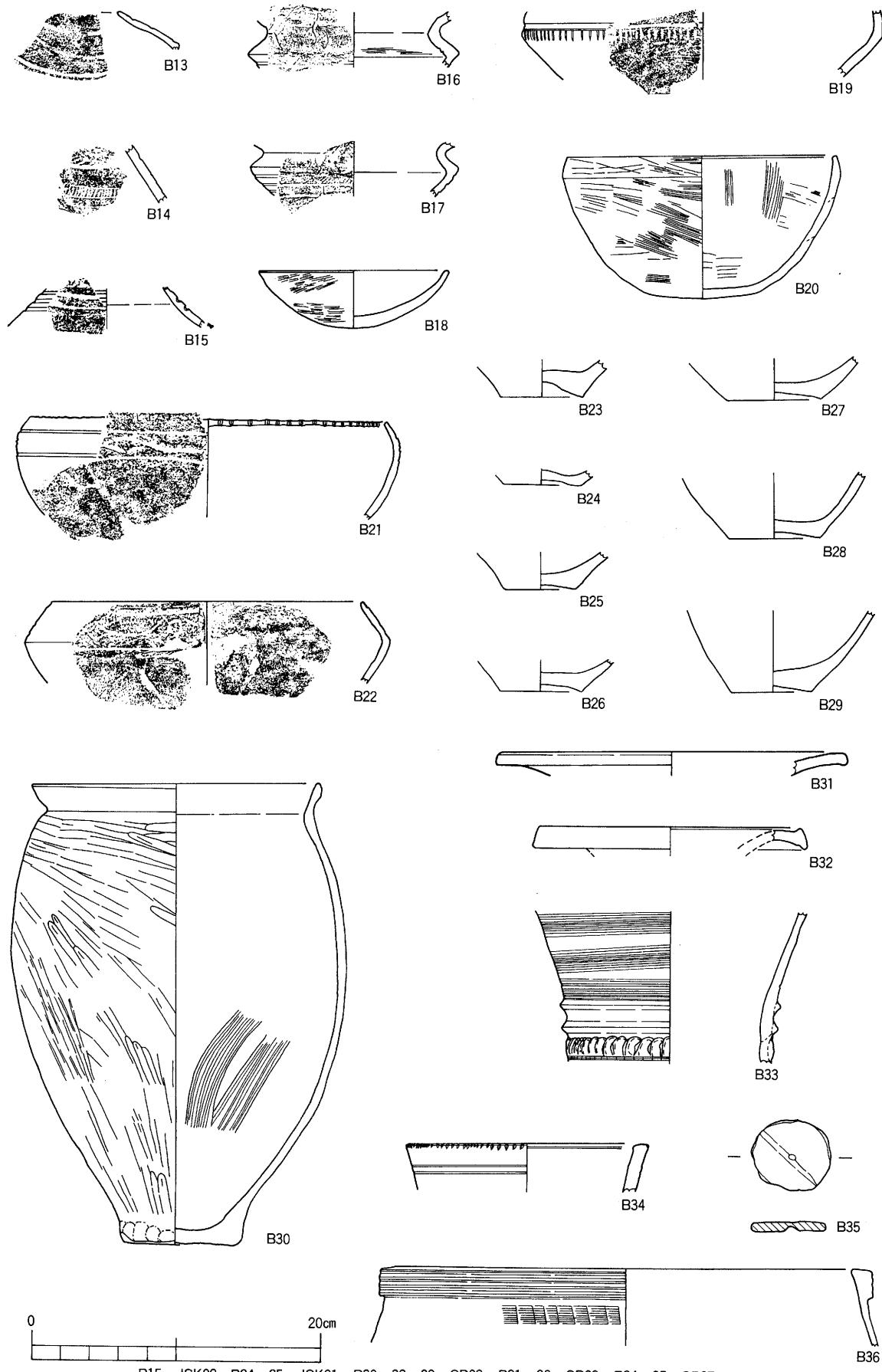
##### 弥生時代の遺物（第18図、P L. 21・60）

弥生時代の遺物のうち、溝内から出土した遺物はごく少量である。

甕B 30は、口縁部が比較的短く外傾し、体部は張りが弱い。外面は細い幅のヘラ削りが施されており、下半では底部から上方へ左上がりに削られている。底部を除く外面全体にススが付着する。第三様式古段階に属するものである。B 31は第一様式の広口壺、B 32は第三様式古段階の広口壺、B 33・34は第三様式中段階の直口壺、B 35は土製の円板で、土器転用の紡錘車未製品と考えられる。B 36は第四様式古段階の鉢である。以上から弥生時代の溝の時期は、出土遺物と埋土から判断してS D07西溝が第三様式



第17図 2区出土遺物



第18図 2区出土遺物

古段階、東溝は第三様式中段階、SD06・09は第三様式古段階、SD08は第三様式古・中段階、SD05・10は第三様式から第四様式にかけてのものと考えられる。

### 3区（第9・10・19～21図、表1、P.L. 5・22・58・60）

遺構の検出は第2層下層を除去した段階で行った。北壁面の土層観察によると、この層を切り込む遺構も存在するが、出土遺物を見るかぎりにおいて時期差は殆ど認められない。また、第2層下層のE81～100・136～144の範囲には、サヌカイト製の石器をはじめ、剥片や碎片が多量に含まれていた。検出した遺構には、溝・土坑・ピットがある。

#### 遺構（第10・19・20図、表1、P.L. 5）

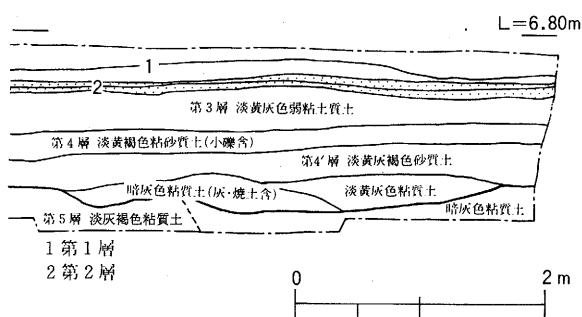
SD12 幅2.0m・深さ0.7mを測り、長さ約1.6mを検出した。断面の形態は逆台形を呈する。当地区で検出した遺構の中では最も多くの遺物が出土しており、その大半は4層に大別できる埋土の1・2層（第20図3～5）から出土している。

SD15 西側部分が搅乱により破壊されているため幅は不明であるが、深さ約0.9mを測る。

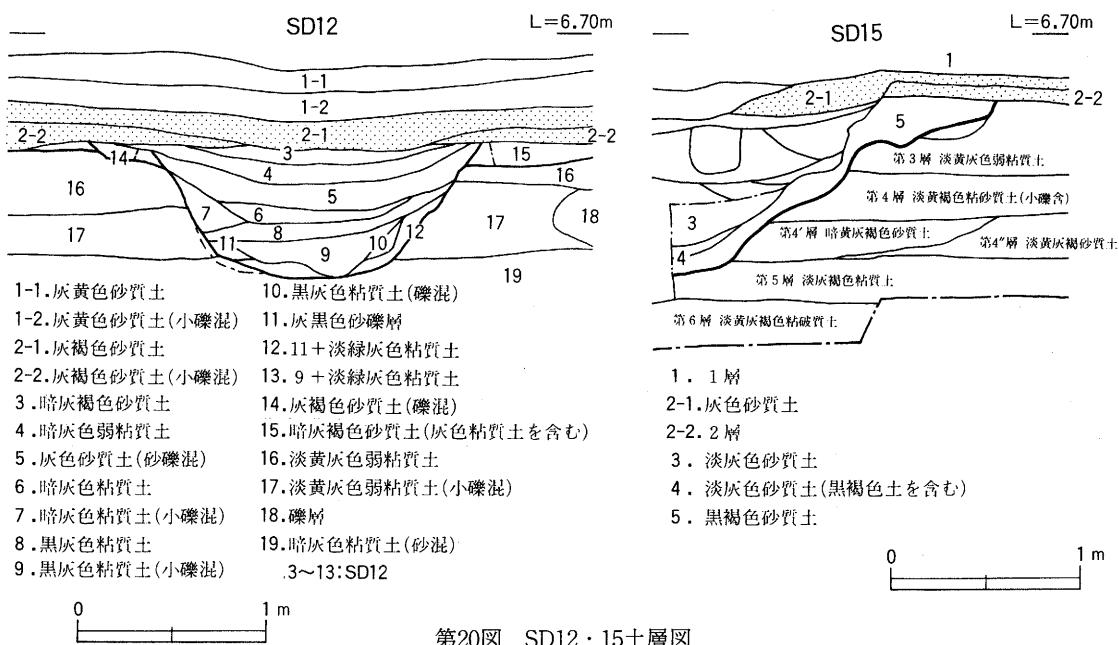
C8・9など弥生時代前期の遺物が少量出土している。

SD11・13・14・15 幅0.7～1.8mを測り、深さはいずれも0.1～0.2m前後と浅い。埋土は第2層に近似する灰褐色系の砂質土である。

ピット 当区の全域から直径0.1～0.4m・深さ0.1～0.5m前後の規模をもつ50余のピットを検出している。掘形の平面形態は円形・楕円形・四角形と様々である。出土遺物の大半は弥生時代のものであるが、細片のため図化できるものは少ない。ピットは検出状況から溝よりも新しい時期が考えられ、古墳時代以降に属するものも含まれている可能性がある。



第19図 3区縄紋時代遺物包含層



第20図 SD12・15土層図

縄紋時代の遺物包含層は地区のほぼ全域にみられるが、含まれている遺物の量は少なく、縄紋土器数点が出土したのみである。また、包含層を掘り下げる際に、E115付近において炭・焼土を含む幅3.5m・深さ20~30cm前後の土坑状の凹みを検出したが、調査区幅が狭く、遺構であるか否かを確認することはできなかった。

#### 遺物（第21図、P.L. 22・58・60）

**縄紋時代の遺物** C1は肥厚させた波頂部の端面に刺突を行い、外面は条痕による調整を施した後、口縁部に沿って沈線紋を入れる。C2は口縁部を内側に拡張し、外面に刺突紋・沈線紋・刻み目を施す。C3は内外面を丁寧にナデて平滑に仕上げた後、口縁部外面に指頭圧痕紋を巡らせる。C4は円形紋・弧状紋及び方形の区画紋で紋様帯を構成する。C5は口縁部直下に貼付け突帯を巡らせ、「D」字の刻み目を入れる。以上の縄紋土器は、C1・2は後期前葉の福田KII・四ツ池式に、C3・4が北白川上層式1期に、C5が晩期の長原式以降にそれぞれ比定できる。

**弥生時代の遺物** C8は口縁部内面に1条の貼付け突帯をもつ前期の壺である。C11は前期遠賀川系の甕である。直口壺C12・13はともに断面三角形の突帯を貼付け上下に櫛描き波状紋を施す。広口壺C14は口縁端部を垂下させ、外面は凹線紋を施紋した後円形浮紋を貼付ける。甕C15・16は口縁部をくの字形に屈曲させ端部は四角形を呈する。C17は高杯の脚柱部で中空である。広口壺C20は口縁端部を肥厚させ端部には竹管紋を施す。C21は器高6cm程の手づくね土器。土器底部C24・25の外面には粉の圧痕が認められる。C26・27は土器片を転用した紡錘車である。C28は焼成前に穿孔が行われており、当初より紡錘車として製作されたと考えられる。

#### 4区（第9・10・22~29・89図、表1、P.L. 6・7・23~25・52・59）

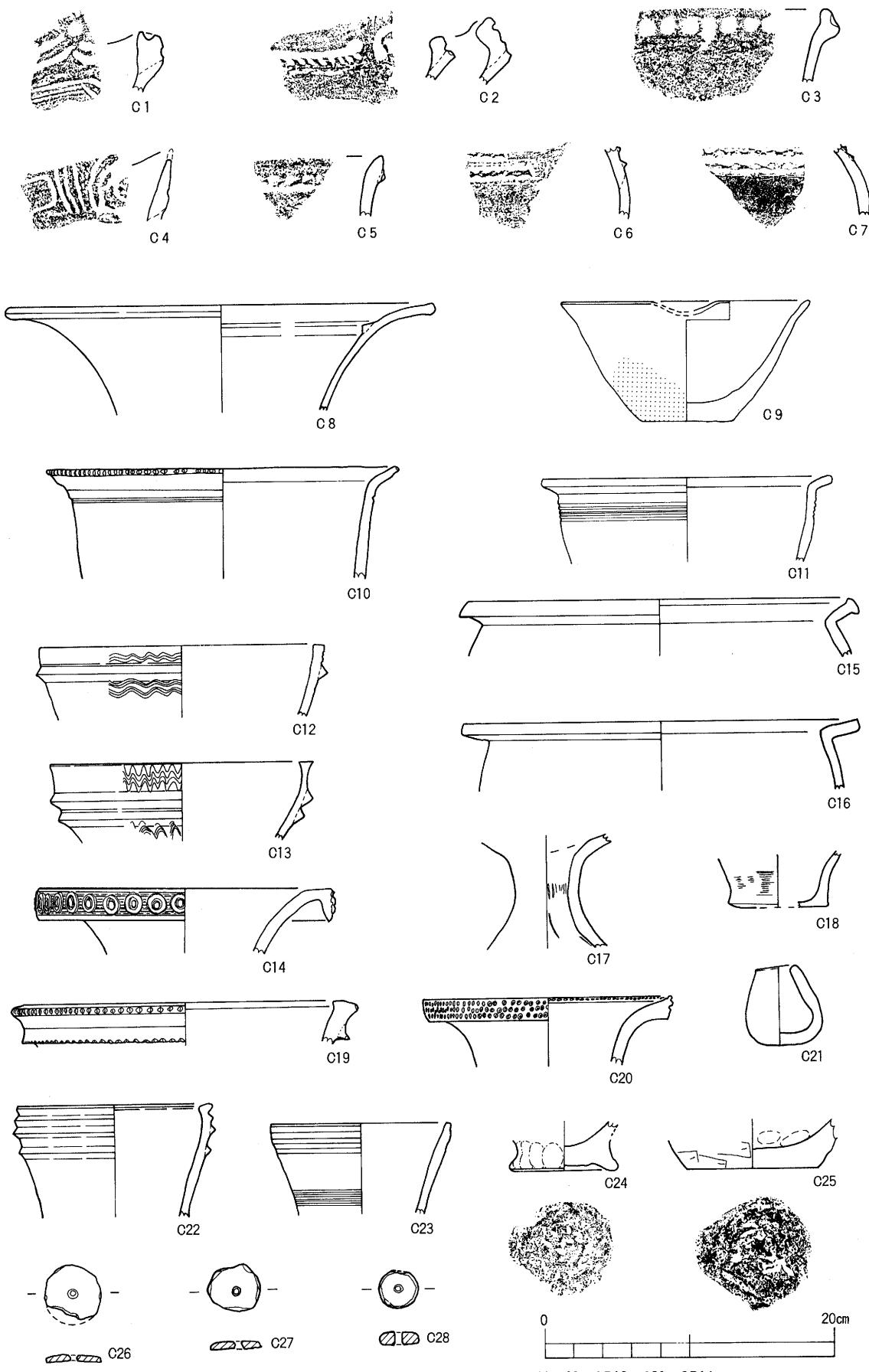
#### 遺構（第10・22・23・89図、表1、P.L. 6・7）

4区で検出した遺構には、近世の亀の川堤防、弥生時代から古墳時代の溝12条、中世の溝1条、時期不明なピット（小穴）群がある。

S V04 近世の亀の川堤防である。最も残りの良い所で7段分、土台から0.75mの高さを測る。石材は結晶片岩を用い、積み方は小口積みの部分と平積みの部分とがある。傾斜は部分的に異なるが、おおむね65度~80度に積まれている。裏込めには拳大から人頭大の川原石が使用され、その中に太形蛤刃石斧が混入していた（D102）。その他弥生時代から古墳時代、近世の遺物が出土した。近世の遺物には「くらわんか茶碗」（D6）が見られ、石垣が構築された1706年~1707年の年代とも符合する。石垣の下からは長さ約4m、直径15cmの表皮がついたままの丸太（胴木）が、石垣前面端に合致する形で検出された。この胴木を固定するための杭が打たれ、石垣の下になる部分は砂礫によって幅0.7mを測る頑丈な土台をつくりあげていた。石垣を構築するための幅1.2mの掘形も検出できた。

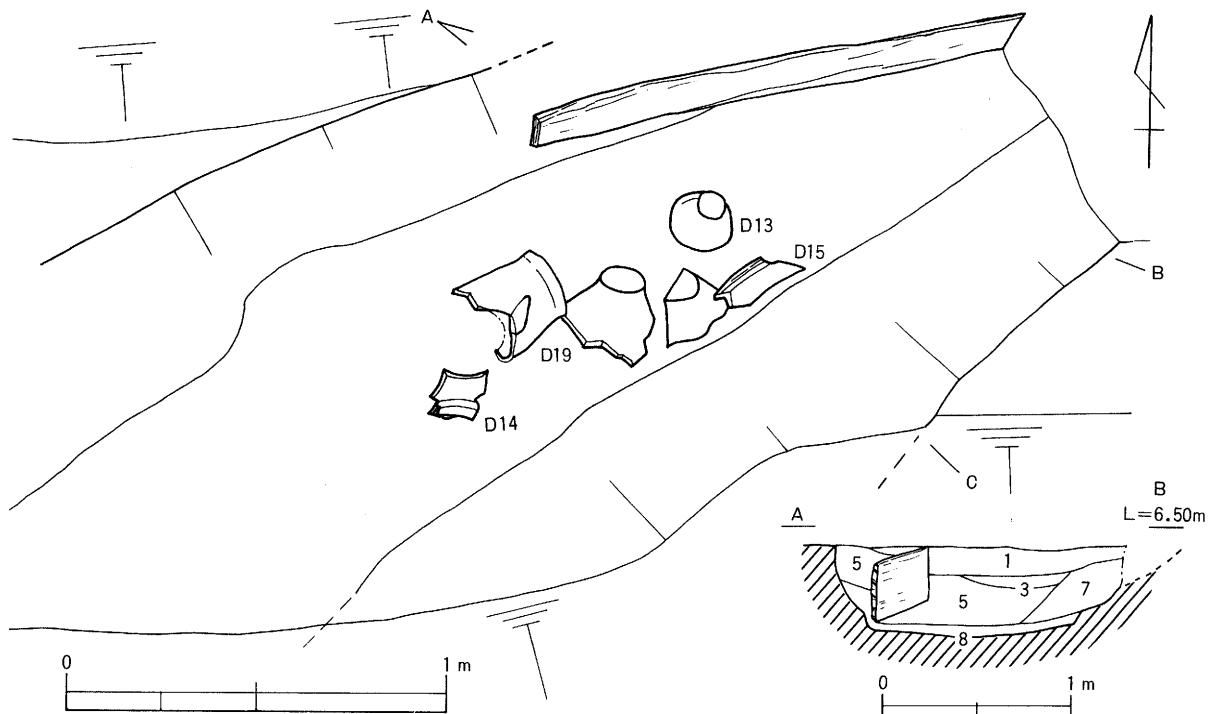
S D22 幅25m前後、深さ0.8~1.8mを測る大溝である。堆積状況から幾重にも流れる細い溝が確認でき、溝の底には弥生前期の土器だけを包含する堆積層があり、埋土の最上層からは第四様式古段階の土器が出土しており、同時期には溝の機能はなくなっていたであろう。

S D17・20 S D17は幅1.6m、深さ約0.9mを測り、調査区では唯一南西方向に流路をもつ。埋土は二層に大別でき、上層の暗灰褐色土から第四様式古段階の土器が、下層の淡灰色砂礫土からは、第三様式の土器と共に青銅製品、用途不明の板材（幅30cm、長さ120cm、厚さ2cm）が出土した。S D20は溝の

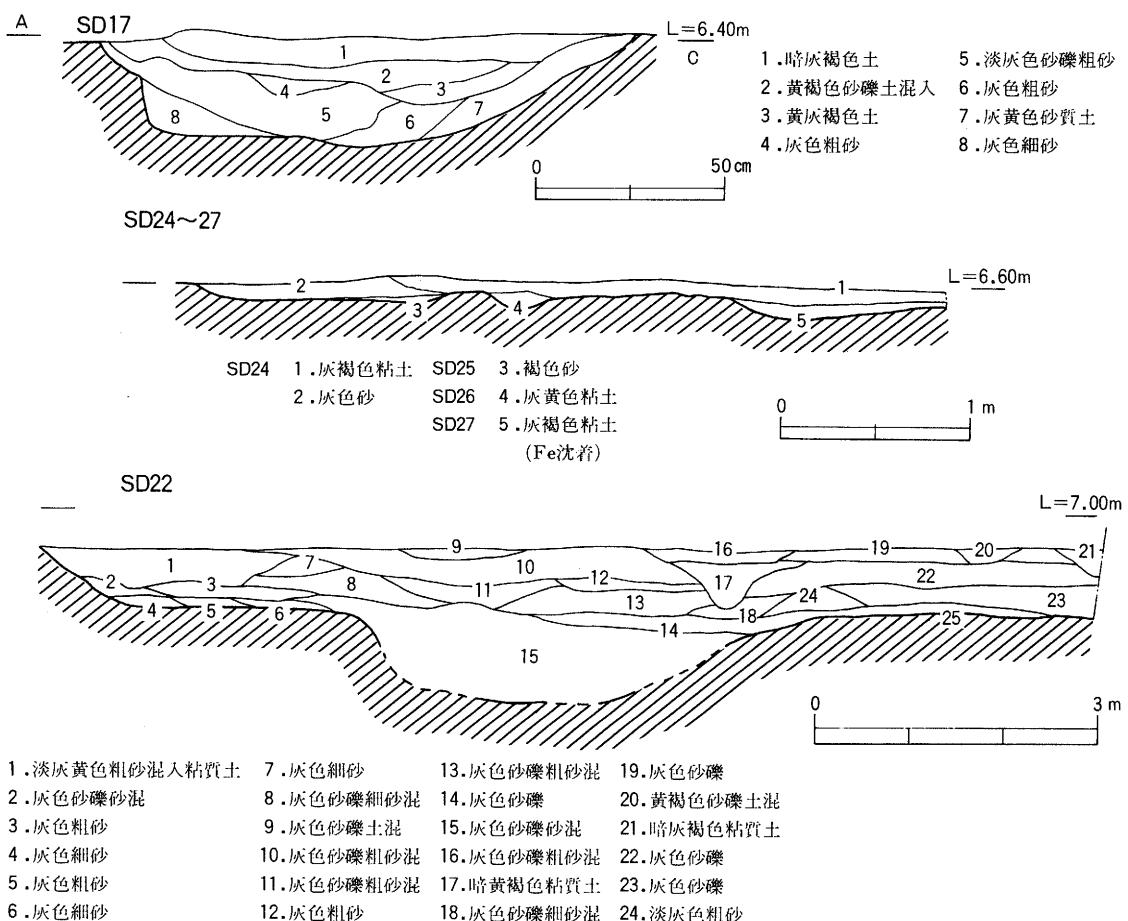


C6 - SD13 C8・9 - SD15 C11・24 - SD16 C12~18・28 - SD12 C26 - SD14

第21図 3区出土遺物



第22図 SD17遺物出土状況



第23図 SD17・22・24~27土層図

埋土や出土遺物の時期が S D17 に似かよっており、両者が同一の溝とすると、北西方向の S D20 と南西方向の S D17 は弧状を描くことになる。

S D19 S D17 と平行する形で検出した。同溝の南側は旧擁壁に破壊され北側の肩部のみが残存する状況であったが、建物が多量に出土し、とりわけ注目すべき遺物に銅鐸形土製品 2 点、鳥形土製品 2 点、回転台形土器 5 点がある。

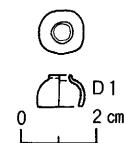
S D18 S D19 と重複し切り合い関係から S D18 の方が新しい。遺物は S D19 に比べ少ないが、弥生中期の土器片が出土している。また S D19 の下から S D21 を検出した。

古墳時代の溝 S D24 は深さ 10cm と浅いが、幅は 4m 以上と広い。遺物は土師器の他、須恵器杯身 (T K43 型式) が出土している。S D24 の底で、新たに S D27・26・25 を検出したが、遺物が皆無のため時期については不明である。S D23 は南北方向の溝で幅 1.1m、深さ 0.2m を測るが遺物は見られなかった。

#### 遺物 (第24~29図、P L. 23~25・52・59)

S D17 出土遺物 上層出土の D10 は前期の壺体部で突帯を貼付けた後刻み目を施す。

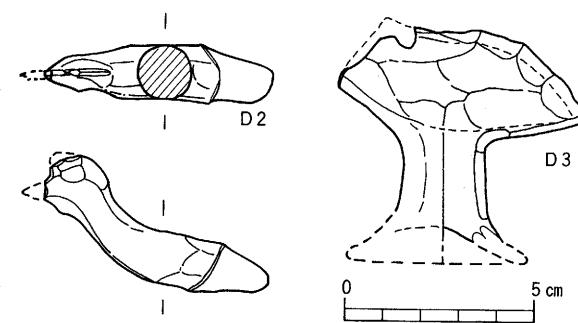
下層出土遺物には、壺・甕・脚台・回転台形土器がある。壺には、直口壺と無頸壺がある。直口壺 D11 は、口縁部外面に断面三角形の 2 条の突帯を巡らし、その上下に波状紋・直線紋を施す。D12 は頸部付近の破片で、断面三角形の突帯を 3 条貼付け、その下方に直線紋を 2 帯以上施す。D13 は体部下半に丁寧なヘラ磨きを施す。無頸壺 D14 は大型で、口縁端部外面に粘土帶を貼付ける。D15 は大型の甕で、口縁部がくの字に屈曲し、端部は上下に大きく拡張している。口縁部内面は横方向のハケ調整を行う。小型の甕 D18 は口縁端部を上下に肥厚させ、外面に凹線紋を施す。D19 はバケツを逆にした形態を呈する。外面を丁寧にナデ調整し、内面は指押さえによる成形痕が明瞭に残ることから大型の鉢とは考えにくく、むしろその形状からいわゆる「回転台形土器」と考えたい。脚台 D21 は脚部に細かい穴を装飾のために施す。時期は、発達した凹線紋を持たないことから、第三様式新段階であろう。また土器の他に特殊な遺物として空玉形の青銅製品 D1 が出土している。現状で直径 12mm、高さ 8mm の半球状を呈し、上部に直径 6mm の穴がある。類例がなく用途の不明な製品である。



第24図 空玉形  
青銅製品

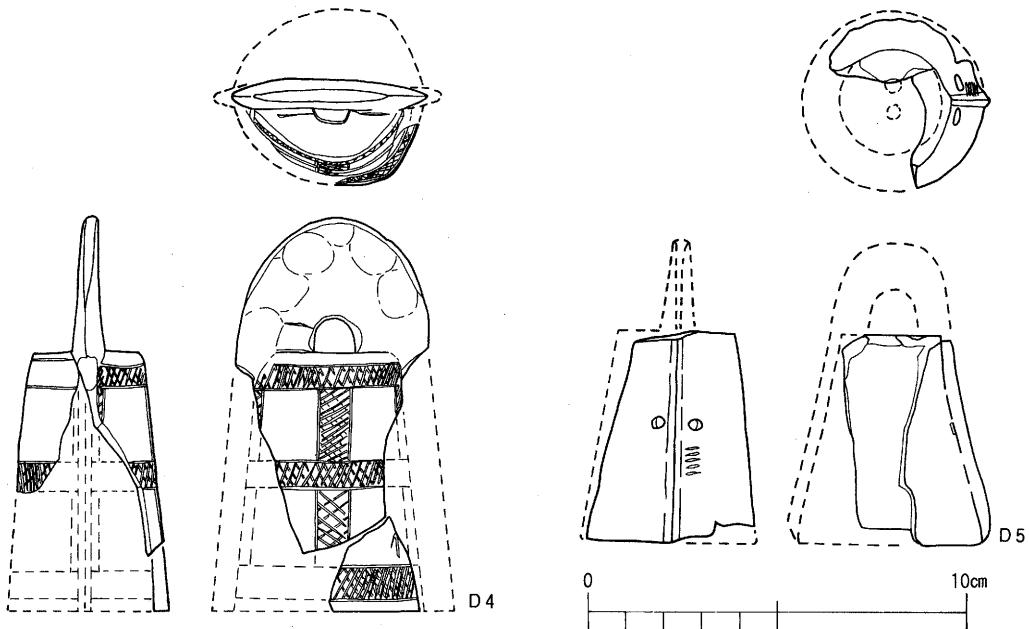
S D18 出土遺物 D8 は突帯を口縁直下に貼り付ける弥生時代前期の突帯紋系の甕である。広口壺 D43・44 は共に口縁端部を垂下させ、外面に凹線紋を施し、その上に円形浮紋を付す。また、D43 は円形浮紋間に縦方向の刻みを入れ、頸部付近には波状紋を巡らす。高杯 D40 は中実の脚柱部に屈曲して広がる裾部を持つ。D41 は杯部で脚柱部との境目を削る。

S D19 出土遺物 D2 は棒状に伸ばした粘土にくちばし・とさか・肉鬆を表現し、明らかに鶏を表現したものである。D3 は中空の胴部に別作りの頭部を挿入する穴があり、胴部には中実の脚が付されている。成型は手づくねである。愛知県朝日遺跡や兵庫県加茂遺跡に類例がある。銅鐸形土製品 D4 は最上層から出土している。復元高 10.4cm、紐の高さ 3.7cm・紐孔の高さ 0.9cm・舞の長径 3.8cm・



第25図 鳥形土製品

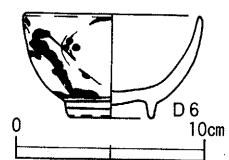
短径2.9cmを測る。紐孔や舞に型持ち孔が表現されているが、身の型持ちの孔や内面の凸帯については表現されていない。身に袈裟襷紋で4つの区画を表現する。紐と鰐は無紋である。D5は最下層から出土した銅鐸形土製品である。身の1/2と紐は欠損している。横断面は円形で、鰐の表現が見られるが、身には型持ち孔があり、無紋と考えられるが部分的に櫛のあとが認められる。銅鐸形土製品は県下では血縄遺跡と亀川遺跡の2遺跡から出土しているが、同一遺跡でしかも同一遺構から複数出土した例は初めてである。今回出土した土製品は、4区袈裟襷銅鐸を忠実に模しているように見えるが、最上段袈裟襷紋の上に無紋帯が存在する事や、内面に凸帯が見られないこと、D5のように銅鐸と少しき離れた形を有することから、銅鐸を実見していない人間が作ったものと考えられる。時期は第三様式から第四様式である。

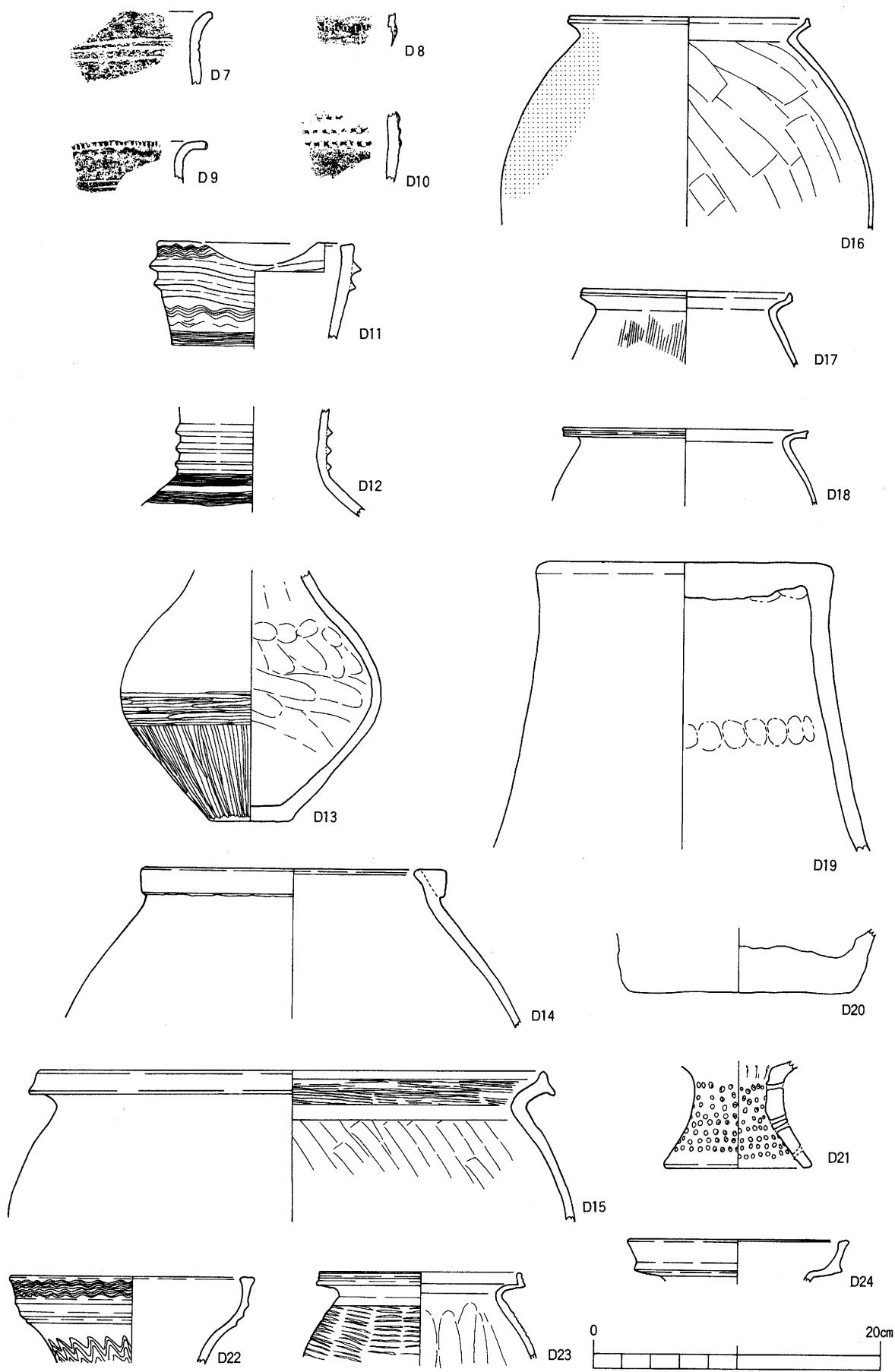


第26図 銅鐸形土製品

D7は口縁部を外反させ、頸部には3本の沈線が巡る。弥生時代前期の遠賀川系の甕である。直口壺D27は外面に断面三角形の貼付け突帯を巡らし、その上下に波状紋を施す。D25・26・29は広口壺である。D25は口縁端部を短く垂下させ、D26・29は端部を大きく垂下させる。外方に凹線紋を巡らし、その上に竹管紋を押す円形浮紋を貼付ける。蓋D28は頂部を左右に拡張する。甕底部D30は外面を削る。甕D31は口縁部をくの字形に屈曲させる。端部は上方につまみ上げ、外面に凹線紋を施す。器台D32・33は外面に凹線紋を密に施す。D34～37は回転台形土器である。D34・37は頂部を水平方向に大きく拡張させる。脚部の形態には、内傾するD35と直立気味のD34・35・37の2種がある。D38・39は高杯である。D38は皿型の杯部で、端部を内外に拡張する。D39は口縁部を垂下させる。脚柱部は中空で裾部に向かって緩やかにひろがる。裾部の端部は上下に拡張する。時期は、第四様式の遺物が主である。その他、石器には、石包丁・石斧・石鎌・石剣がある。

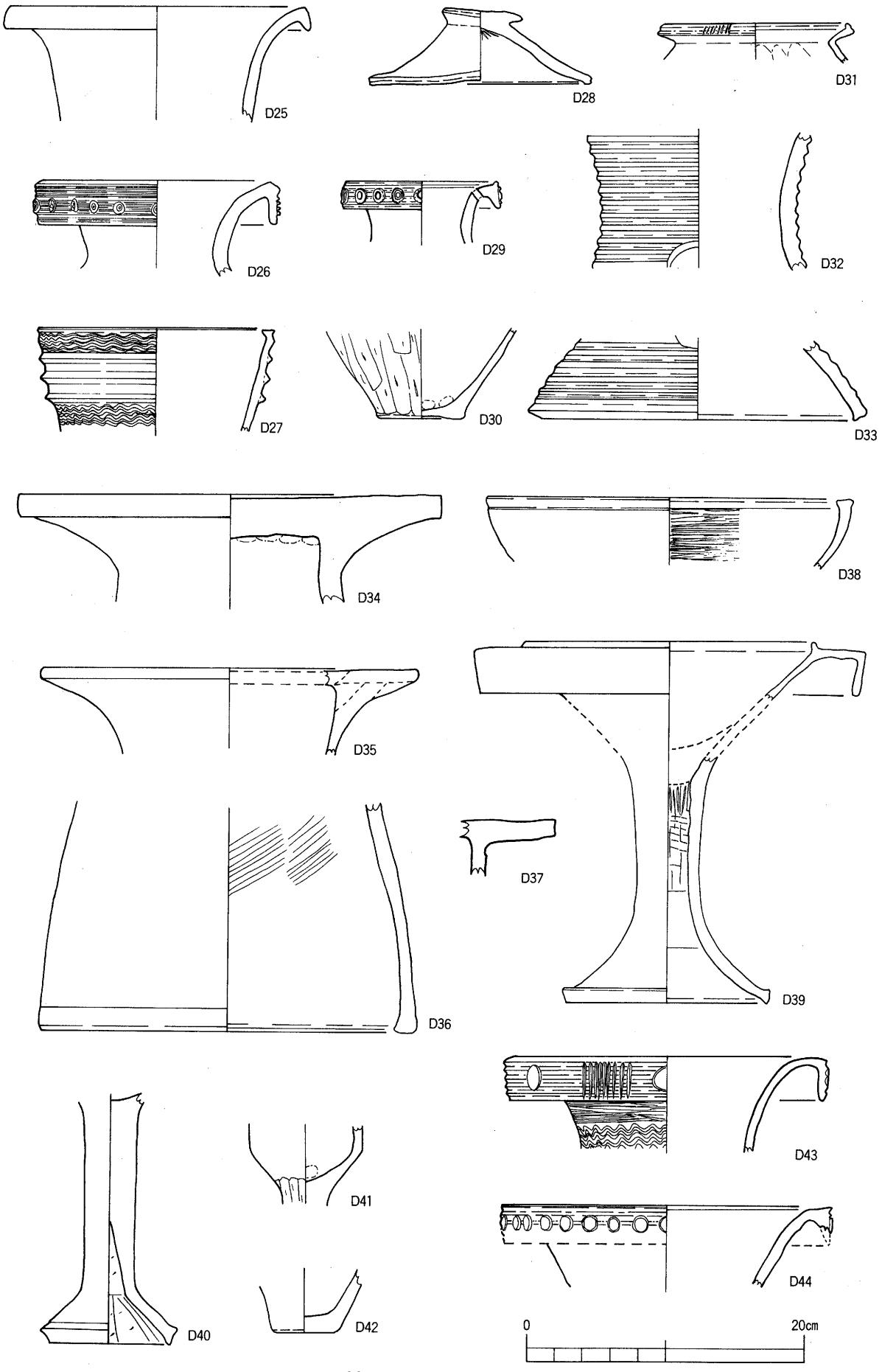
S D20出土遺物 大・小の甕D16・17が出土する。口縁部はくの字形に屈曲し 第27図 SV04出土遺物





D7・9-SD19 D8-SD18 D10~15・18~21-SD17 D16・17-SD20 D22~24-SD22

第28図 4区出土遺物



D25~39-SD19 D40~44-SD18

第29図 4区出土遺物

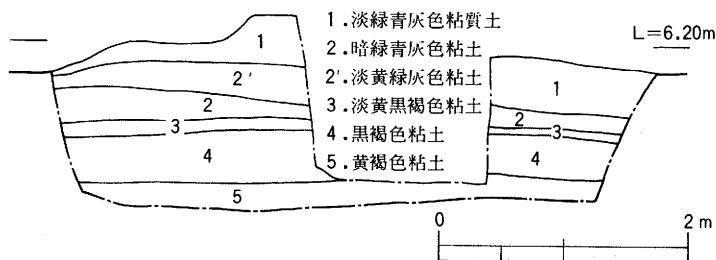
端部を上方につまみ上げる。D17の外面はハケで調整する。

S D22出土遺物 D22は直口壺である。外面には上から順に、波状紋・凹線紋・波状紋を施す。甕D23は口縁部が横方向に開き、端部を上方に大きくつまみ上げる。端

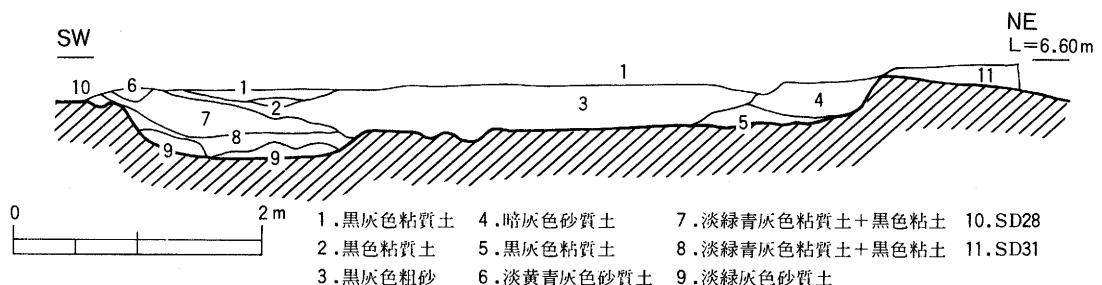
部外面には凹線紋を施し、体部外面にはタタキを施す。時期は第四様式である。

#### 5区（第10・30～39図、表1、P.L. 8・9・26～30・61・62）

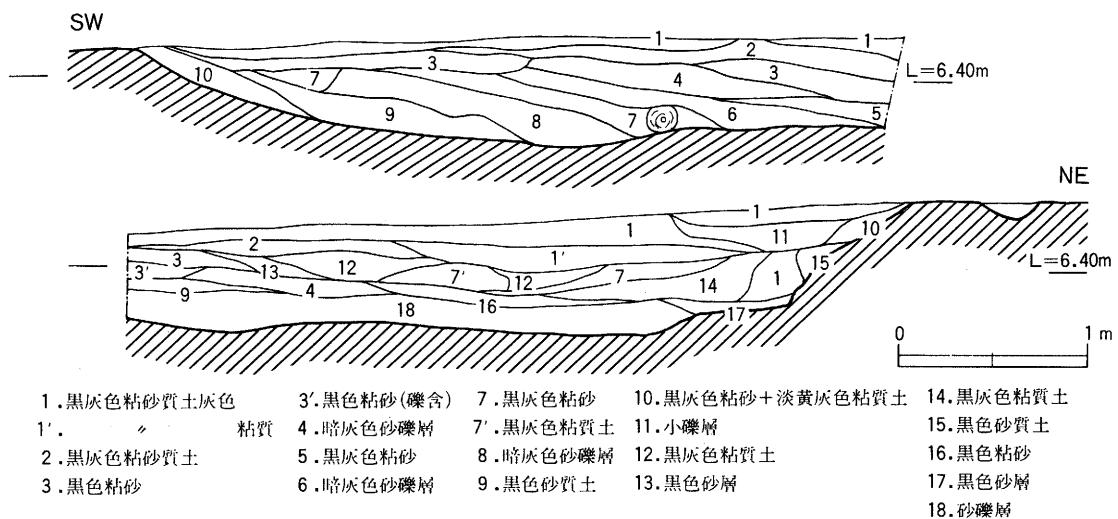
右岸（北岸）の調査範囲の中では最も東に位置する調査区である。調査区の幅は4～6mあり1～4区に比べやや広い。弥生時代末から古墳時代前期にかけての溝を数条検出した。遺構検出後、弥生時代後期以前の下層遺構の有無を確認するため、幅約1.5mのトレンチを調査区の長辺に沿って1本（約45m）、それに直行する形で3本（4～6m）を設定して掘り下げた。その結果、地山面である淡黄色～淡緑灰色の粘質土の下は黒色や黄褐色系の粘土層であり、遺物は出土しなかったため、以降の掘下げは行っていない。



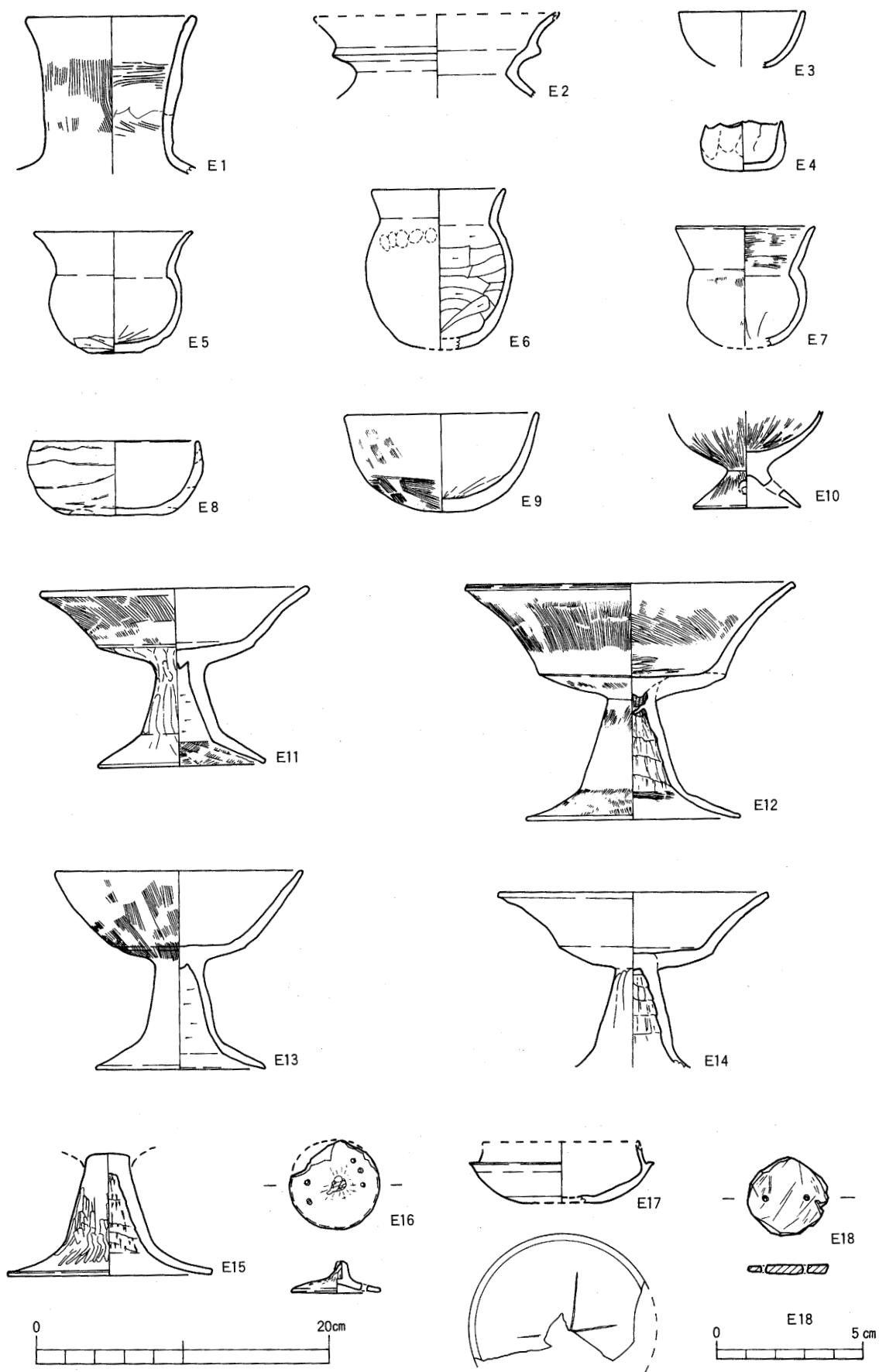
第30図 5区Tr.土層図



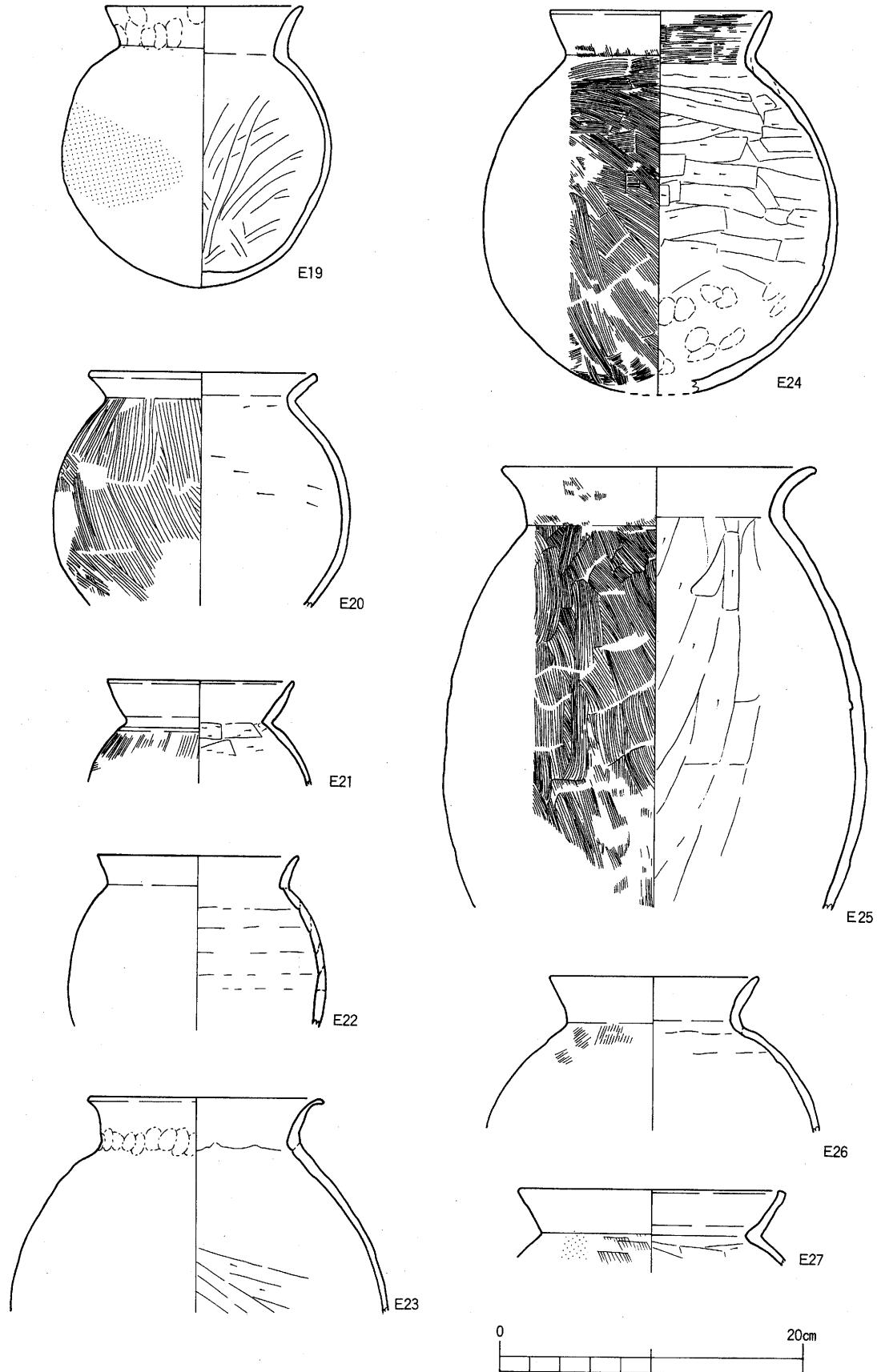
第31図 SD30土層図



第32図 SD31土層図



第33図 SD30出土遺物



第34図 SD30出土遺物

### 遺構（第10・30～32図、表1、P L. 8・9）

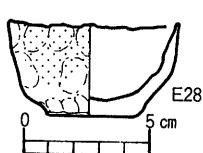
S D 30 調査区西半部で検出した溝状の遺構で、幅は最大10m、深さは0.6m前後である。第31図に示すように西肩部は一段低くなり、別の遺構（S D 29）である。埋土は2層に分層が可能で、上層は黒色系の粘質土、下層は灰色系の砂層及び粘質土である。遺物の大半は土師器であり、完形品を含む布留式土器の比較的新しい段階のものが多く出土している。

S D 31 調査区の中央部から東半部にかけて検出した幅6m前後、深さ約0.6mの溝で、方位はほぼ東西方向である。埋土は1～4層に大別でき、粘質土と砂層が互層をなす。出土遺物には、須恵器・土師器の他、製塩土器・ミニチュア土器・木器・流木・骨片などがある。

### 遺物（第33～39図、P L. 26～30・61・62）

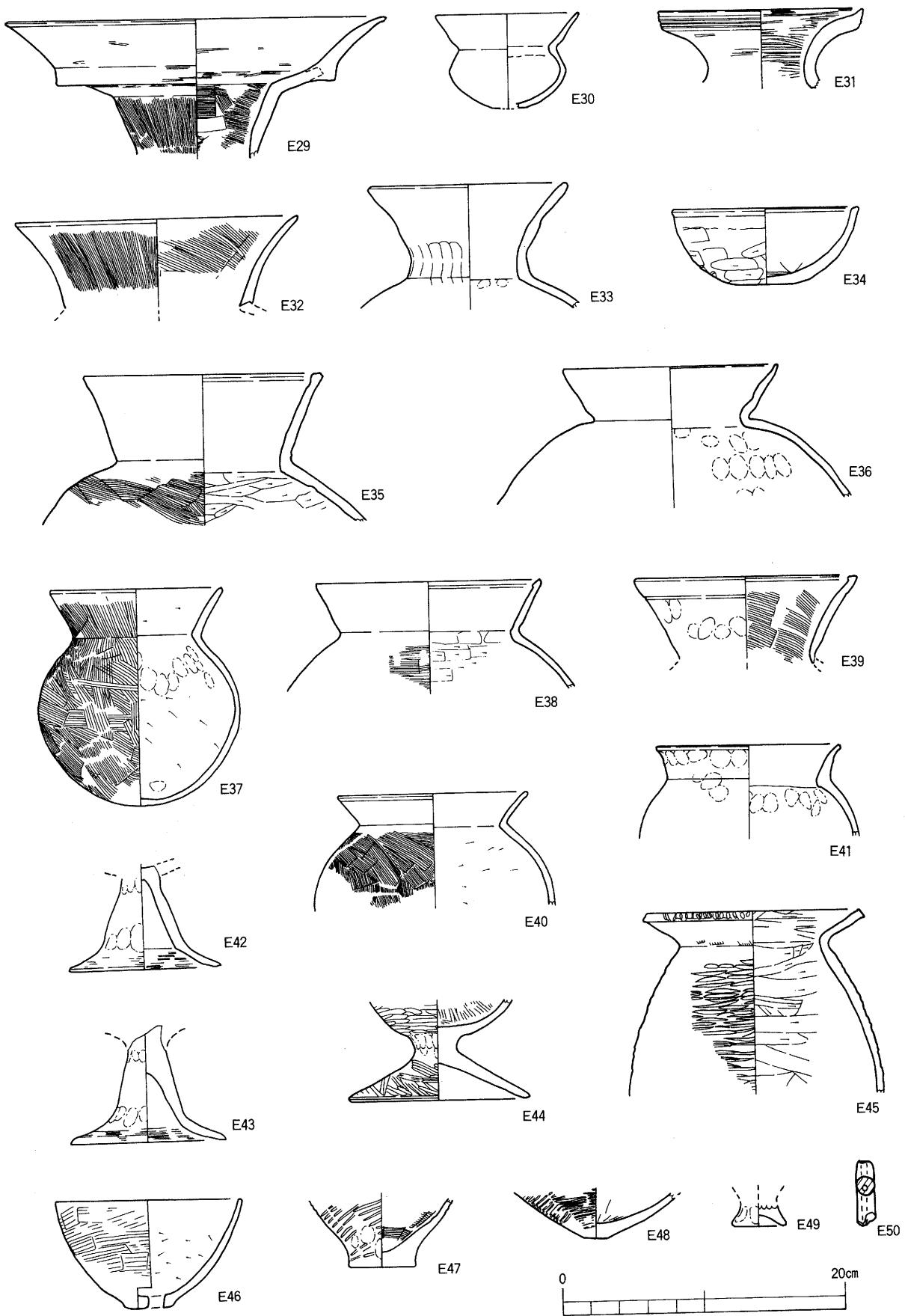
S D 30出土遺物 壺（E 1・2・5・6）・小型丸底壺（E 7）・甕（E 19～27）・鉢（E 8～10）・高杯（E 11～15）・手づくね土器（E 3・4）・蓋（E 16）・須恵器杯（E 17）が出土する。二重口縁壺E 2は口縁部をナデ調整する。甕は外面を細かいハケで調整し、内面はケズリ調整する。口縁部は外反するもの（E 19・22・23・26）とやや内湾するもの（E 27）とがある。鉢は外面無調整のもの（E 8）と底部をハケで調整したもの（E 9）がある。高杯は杯口縁部の外反が大きく、外面はハケ目調整をそのまま残す。脚柱部は粘土紐を巻き上げて作る。内面に粘土の巻上げの痕が残るE 12・14と板状の原体で削るE 11・13がある。E 16は蓋、E 18は滑石製の有孔円盤である。長頸壺E 1は弥生時代後期の、須恵器杯E 17は6世紀中頃のものである。

S D 31出土遺物 古墳時代の初頭から中期にかけての土師器が多量に出土している。壺と甕は口縁部の長さによって区分した。E 29は頸部外表面をケズリ調整した後ハケ調整する二重口縁の壺である。壺E 31・53は口縁端部をナデ調整し内面は磨き調整である。椀E 34の体部はゆるやかに内湾し底部は平坦である。口縁部は横ナデ、体部外表面は横方向にケズリ調整を行う。壺E 35・39は口縁端部を僅かに内に曲げるもので、口縁部外表面は横方向のナデ、体部内面の調整はE 35がヘラケズリ、E 39はハケである。壺E 37はくの字形に屈曲する口縁部に球形の体部をつける。焼成は良好で、外面は丁寧なハケ調整、内面は板状工具によるナデ調整である。甕E 36・38・40・41の口縁部はくの字形に屈曲し、体部は丸みを帯びるが何れも下半が欠損している。内面の調整にはヘラケズリ（E 38・40）・板状工具によるナデ（E 41）・指押さえ（E 36）があり、E 38・40の体部外表面はハケ調整である。E 42～44は高杯の脚柱部である。屈曲して拡がる裾部をもつE 42・43とスカート状に拡がる低脚のE 44がある。甕E 45はくの字形に屈曲する口縁部端面に刻み目を施す。体部外表面は横方向のタタキ、内面は横方向のケズリ調整である。E 46は有孔の鉢で、体部外表面は荒いハケ調整、内面は板状工具を使用してナデ調整を行う。E 47・48は甕底部で、E 48は丸底化しつつある。E 49は製塩土器の脚台部、E 50は棒状の土錐である。壺E 51・57は球形の体部に上外方にのびる口縁部をつける。E 51の口縁部外表面は横方向のナデ調整、E 51は縦方向に

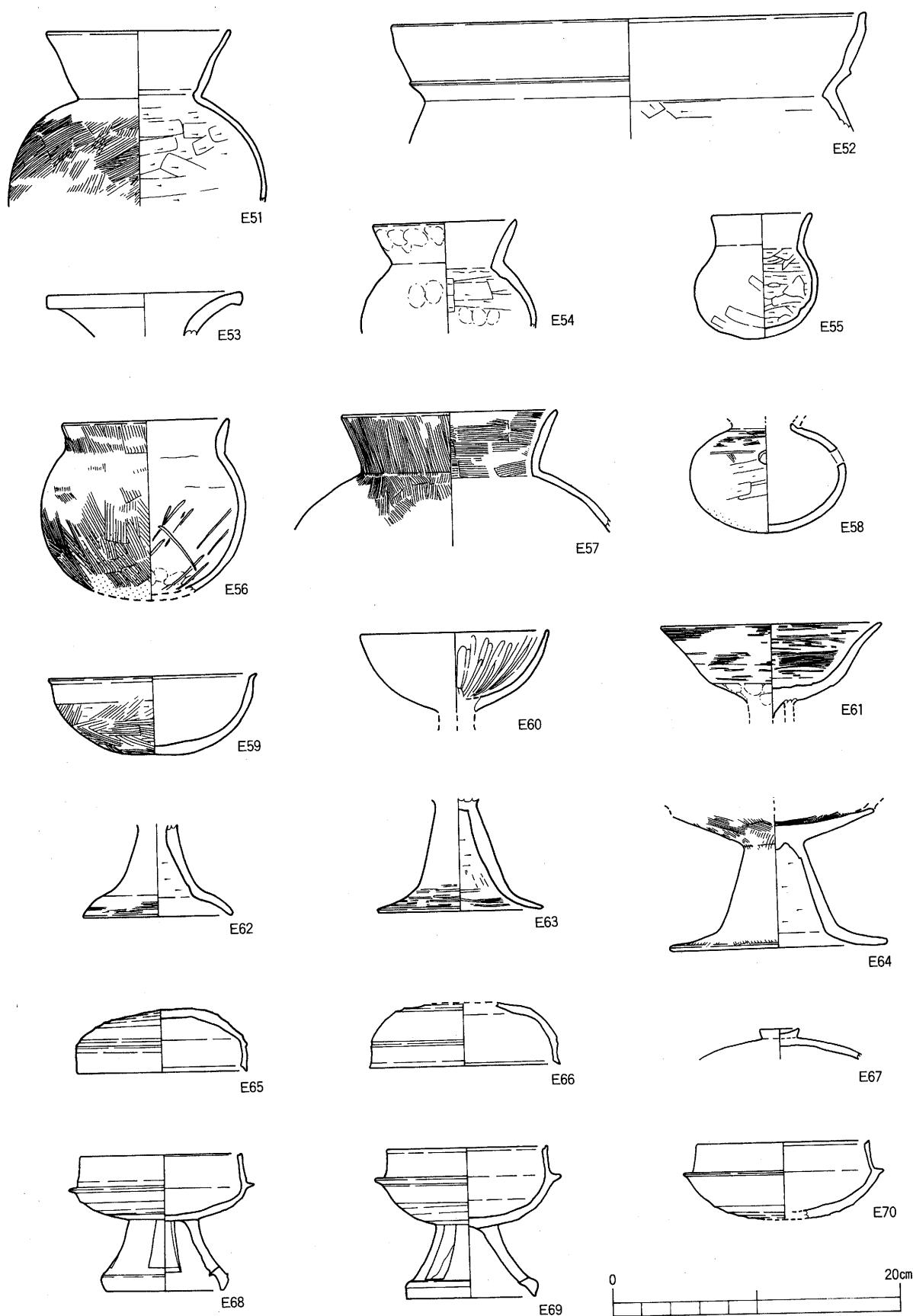


第35図 SD28出土遺物

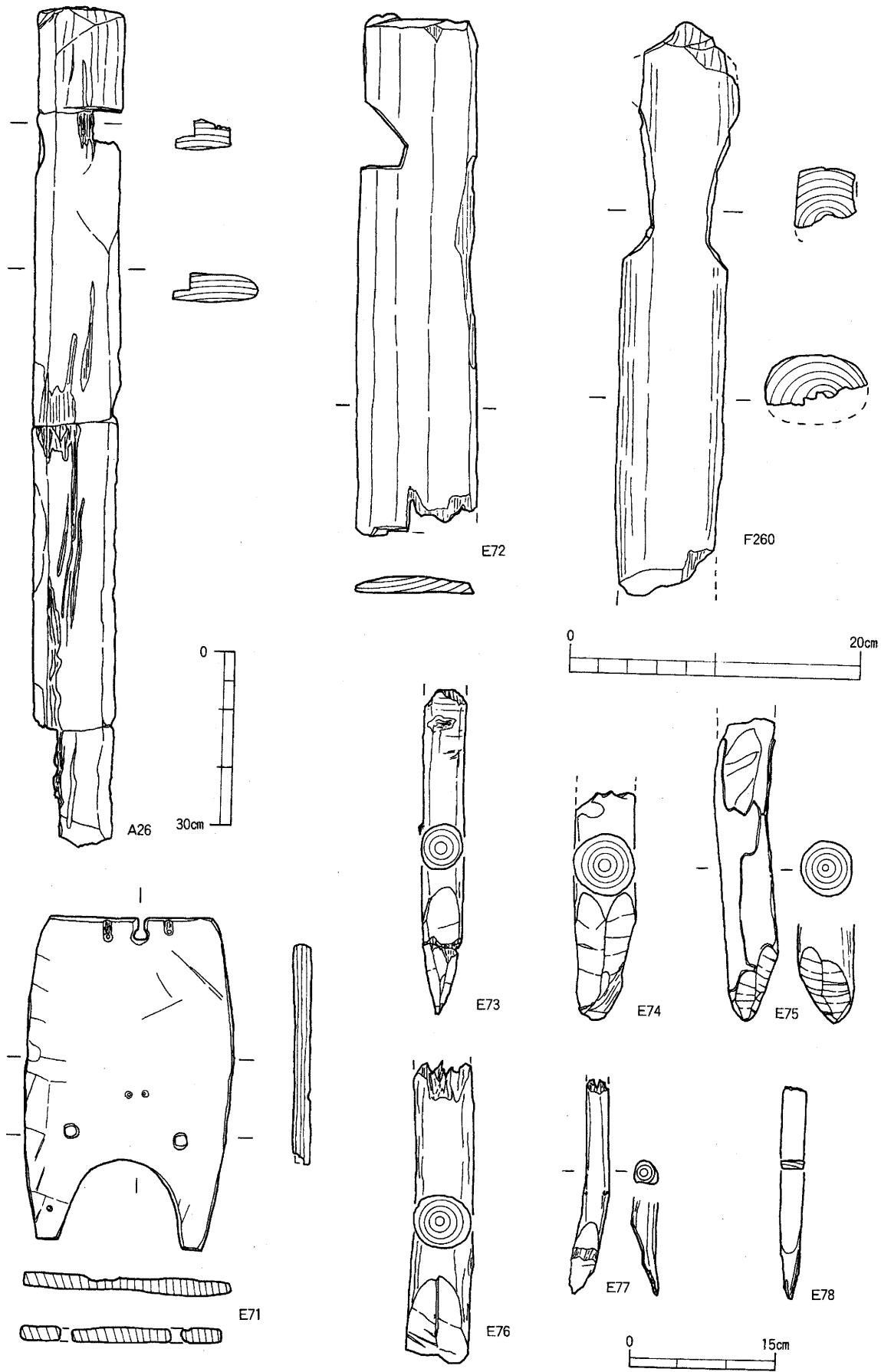
ハケ調整を行なう。体部外表面は共にハケ調整、内面はE 51がケズリ調整、E 57はケズリ調整のあとナデ調整を行なう。大型の壺E 52の口縁部は屈曲しながら上方にのびる。内面はケズリ調整である。小型の壺E 54～56の体部内面の調整は、E 54・55がケズリ、E 56はナデである。E 58の体部上半はヘラミガキ、下半はヘラミガキの後一部ナデ調整を行う。口縁部は欠損し、体部に



第36図 SD31出土遺物

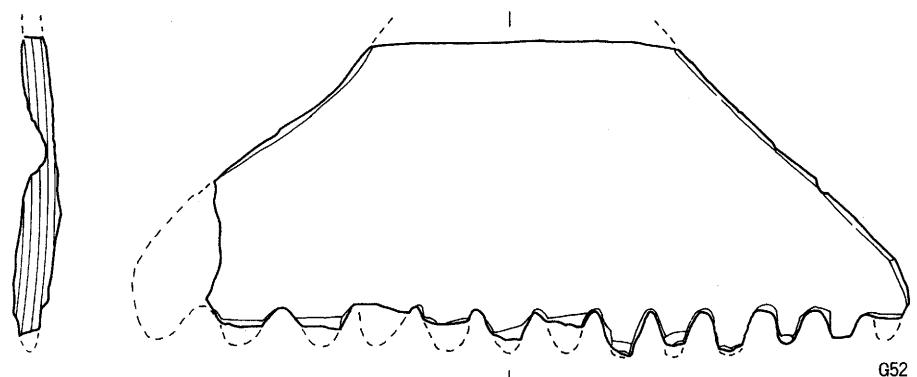
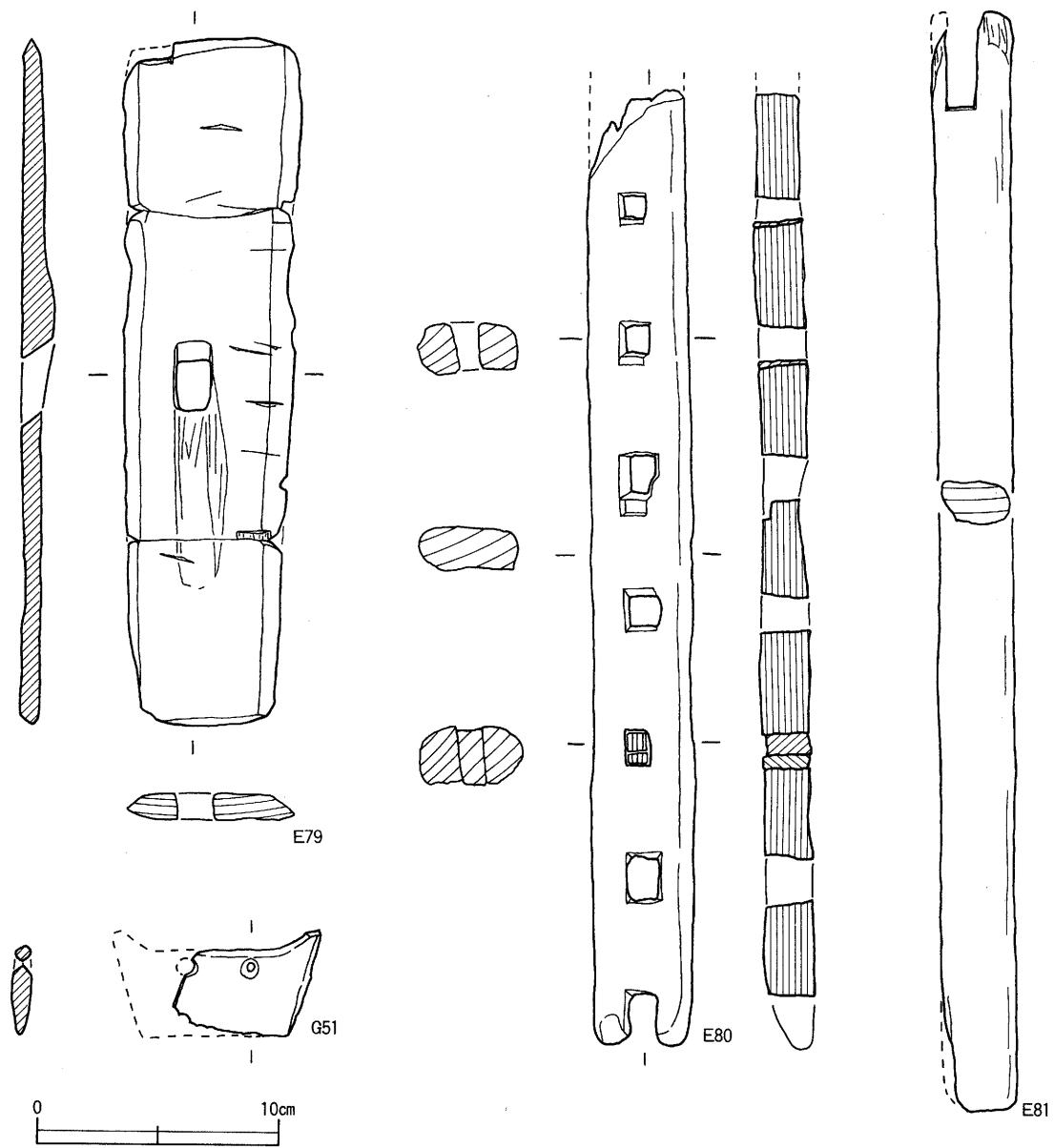


第37図 SD31出土遺物



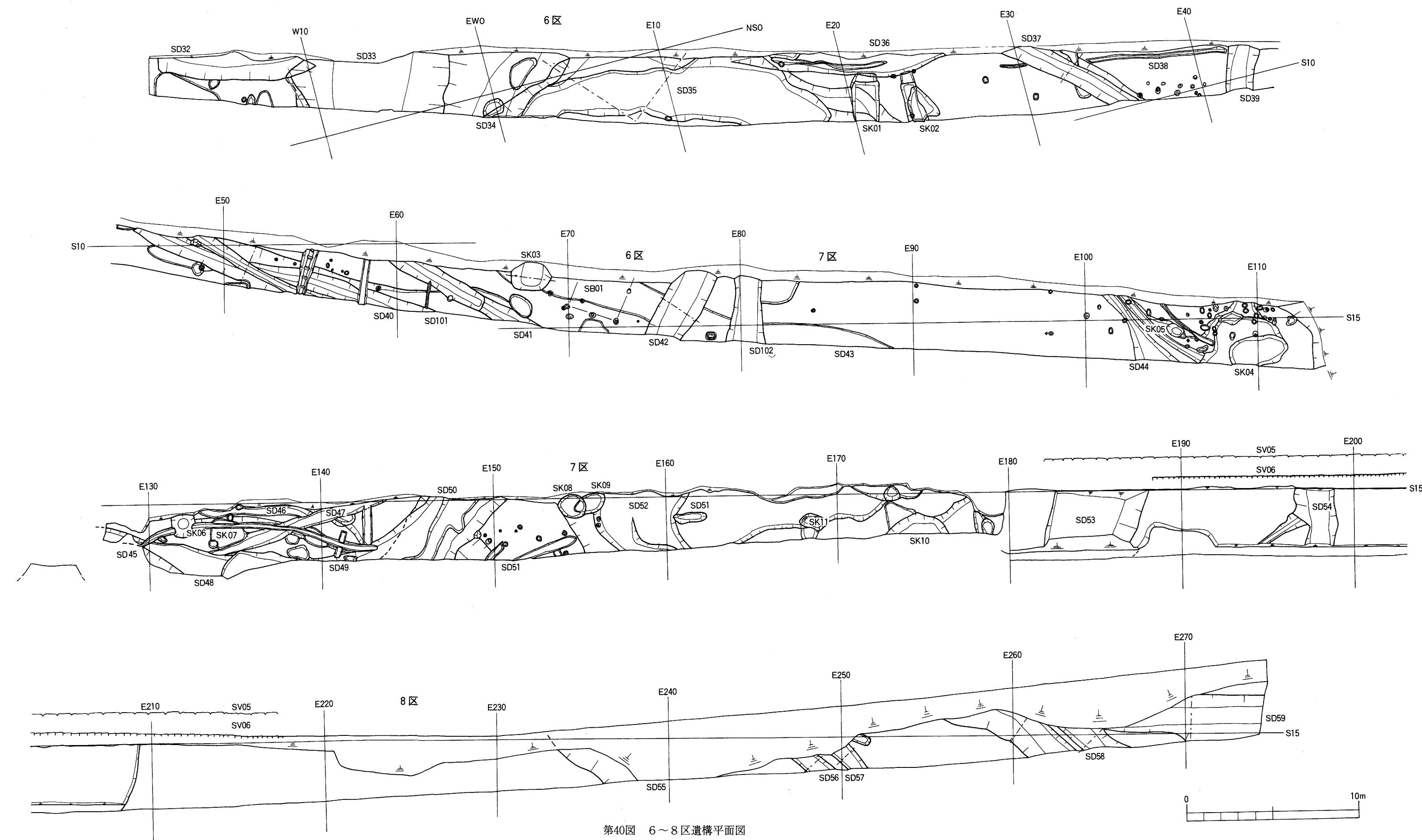
A26—SD01 E71・72・78—SD31 E73~75—SD29 E76—SD30 F260—SD42

第38図 木器実測図



E79~81—SD31 G51・52—SD58

第39図 木器実測図



第40図 6～8区遺構平面図

1孔を穿つ。E59は椀状を呈し、外面はハケ、口縁部はナデ調整を施す。高杯の杯部には、椀状のE60と屈曲するE61・64がある。E60の内面は縦方向に、E61の内外面は横方向にヘラミガキを行う。高杯脚部E62～64の裾部は何れも屈曲するが、E62の屈曲はゆるやかで内湾する。内面は全てケズリ調整やナデ調整を行い、粘土紐巻上げの痕跡を残すものはない。須恵器には蓋杯と高杯があり、時期は5世紀後半である。蓋E65・66の天井と口縁部を境する稜は丸みを帯びる。E67には紐が付される。高杯には、四方に透かしを入れるE68と三方透かしのE69がある。

**木器** E71は長方形を呈する田下駄である。短辺の一方を丸く抉り、3箇所に円孔を穿つ。E72は扁平な板状木製品で切込みを入れる。板材E78は先端を尖らせる。E79は長方形を呈する鉤で、中央に方形の孔を穿つ。E80は6個以上の方形の孔を穿つ大足である。E81にはU字形の切込みが入る。

## 第2節 6～8区の遺構と遺物

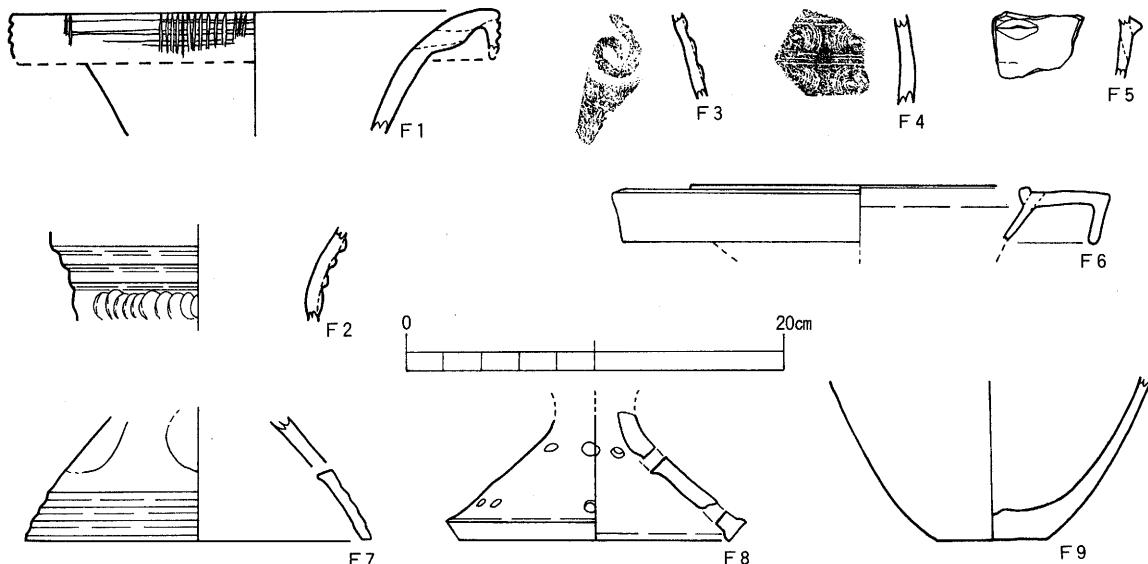
### 6・7区（第9・38・40～83図、表1、P L. 10～16・31～52・55～61）

亀の川左岸（南岸）の調査区である。調査区の幅は2.5～4m、東西は約200mと細長い。E80を境として6区及び7区と呼称して調査を行ったが、ここでは一括して記述を行う。調査区には弥生時代中期の遺物包含層（第2層）がほぼ全域に拡がっており、遺構検出はこの第2層を掘り下げた段階で行った。6区西側の約30mについては縄文時代の包含層を掘り下げた後、同時代の遺構検出を行った。また、第Ⅱ章でも記したように、降雨による増水のため遺物や遺構及び土層観察用の畔の一部が流失するという被害が出ている。

#### 遺構と遺物

S D33・34 共に南北方向に伸びる砂礫層を埋土とする自然流路である。S D33は幅約9.5m、S D34の幅は5～7m前後である。S D33が先行する。

**S D33出土遺物（第41図）** F1・2は広口壺である。垂下させた口縁部外面には凹線紋を巡らし、部分的に刻み目を施す。F2は頸部の破片で、断面三角形の貼付け突帶3条と指頭圧痕をもつ扁平な突帶1



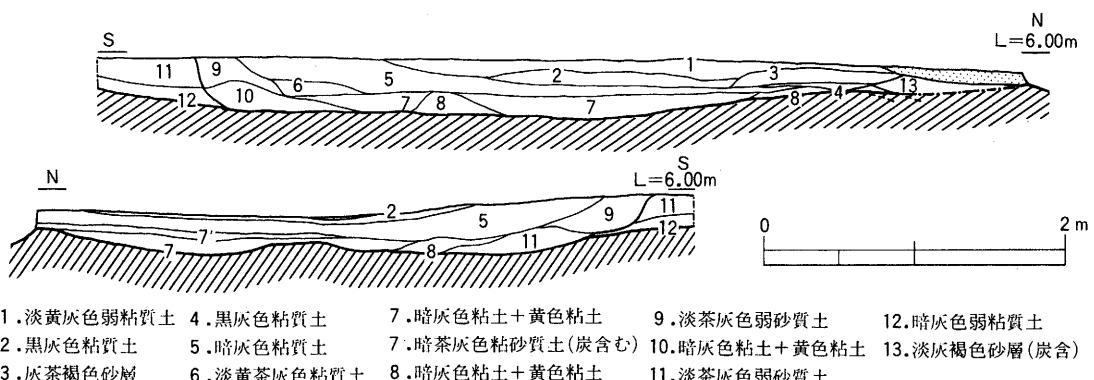
第41図 SD33出土遺物

条を巡らす。F 3・4は壺体部の破片である。F 3は蕨手状の粘土帯を貼付ける。F 4は直線紋間に扇形紋を配置する。F 6は垂下口縁の杯部をもつ高杯、F 7・8は高杯脚台部で、F 8は上下二段に2個一対の円孔を穿つ。F 9は底部である。時期は第四様式である。

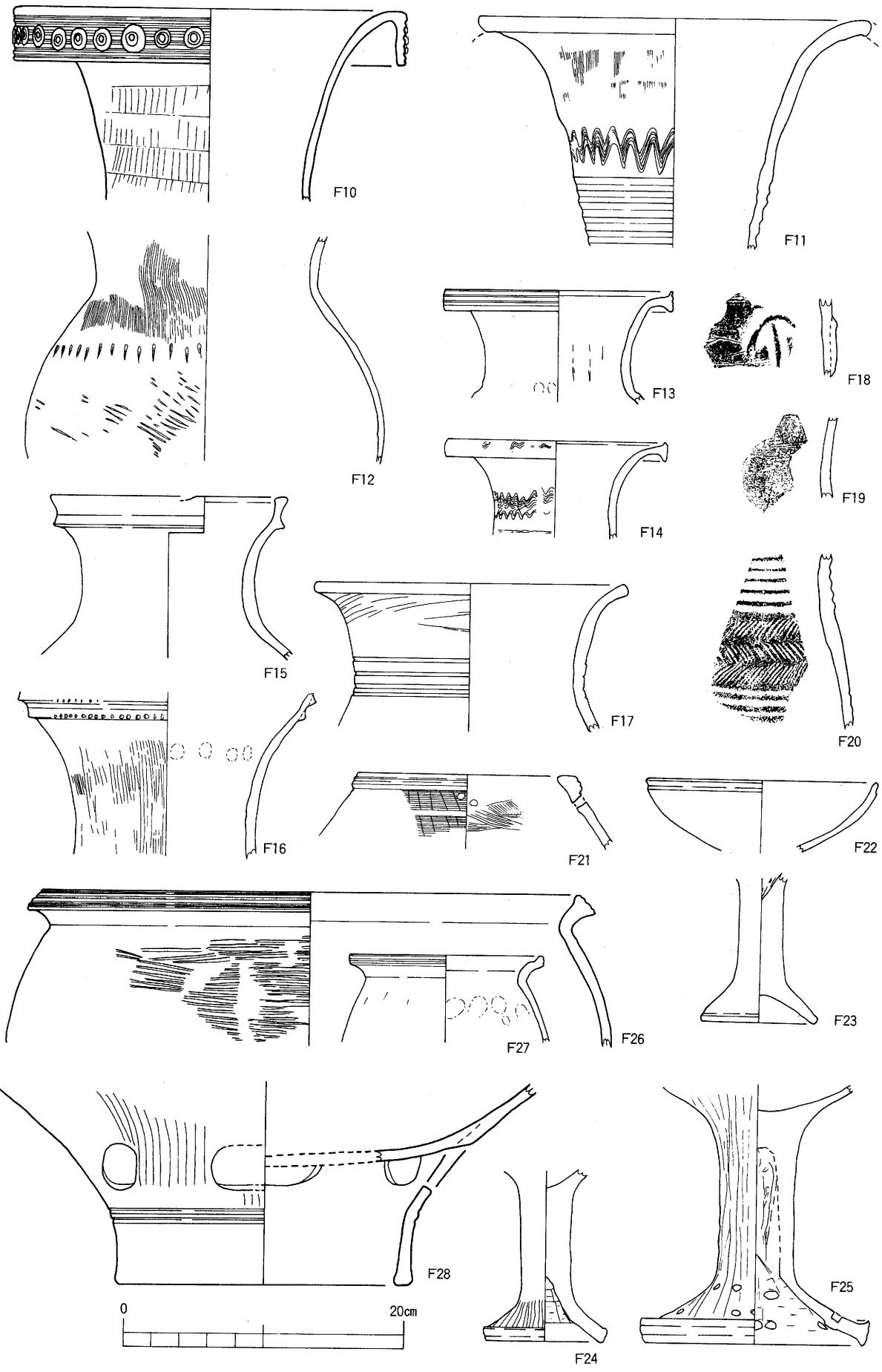
S D34出土遺物（第43図、P L. 31・32）壺には広口壺（F 10～14・17）・直口壺（F 15・16）・無頸壺（F 21）がある。F 10・11は垂下させた口縁部外方には凹線紋を巡らせる。F 10はその上に円形浮紋を貼付け、竹管状工具で刺突を行う。頸部には簾状紋を描く。F 11は頸部に多条の凹線紋を巡らし、その上方に1条の波状紋を描く。F 12は頸部から体部上半付近の破片で、横に一列の刻み目を施す。F 17は前期の広口壺である。頸部に4本の沈線紋を施す。F 13・14は口縁端部を上下に拡張するタイプで、F 13は端部外面に凹線紋を、F 14は口縁端部と頸部に波状紋を施す。F 15・16は口縁部下端に断面三角形の粘土帯を貼付ける。F 16は突带上に刻み目を付す。F 21は口縁端部外面に粘土を貼付け凹線紋を、体部には櫛描簾状紋を施す。F 18～20は壺体部の破片で、F 18は粘土紐を紋様状に貼付け、F 19には流水紋を、F 20には凹線紋と櫛状工具の刺突による羽状紋を施す。甕F 26・27は共に口縁端部を肥厚させ凹線紋を巡らせる。F 26の体部外面に横方向の平行タタキがある。F 22は皿型の高杯杯部で、口縁部には凹線紋を巡らす。F 23～25は高杯脚部である。脚柱部はF 23・24は中実、F 25は中空である。F 28は大型の台杯鉢で、鉢部と台部の境目に橢円形の孔を穿ち、台部中位に2条の凹線紋を巡らす。時期は一部の土器を除き第四様式古段階である。

S D35（第42図、P L. 12）幅約3.5m、深さ0.4m前後の溝で、調査区内ではコの字状に折れ曲がる。

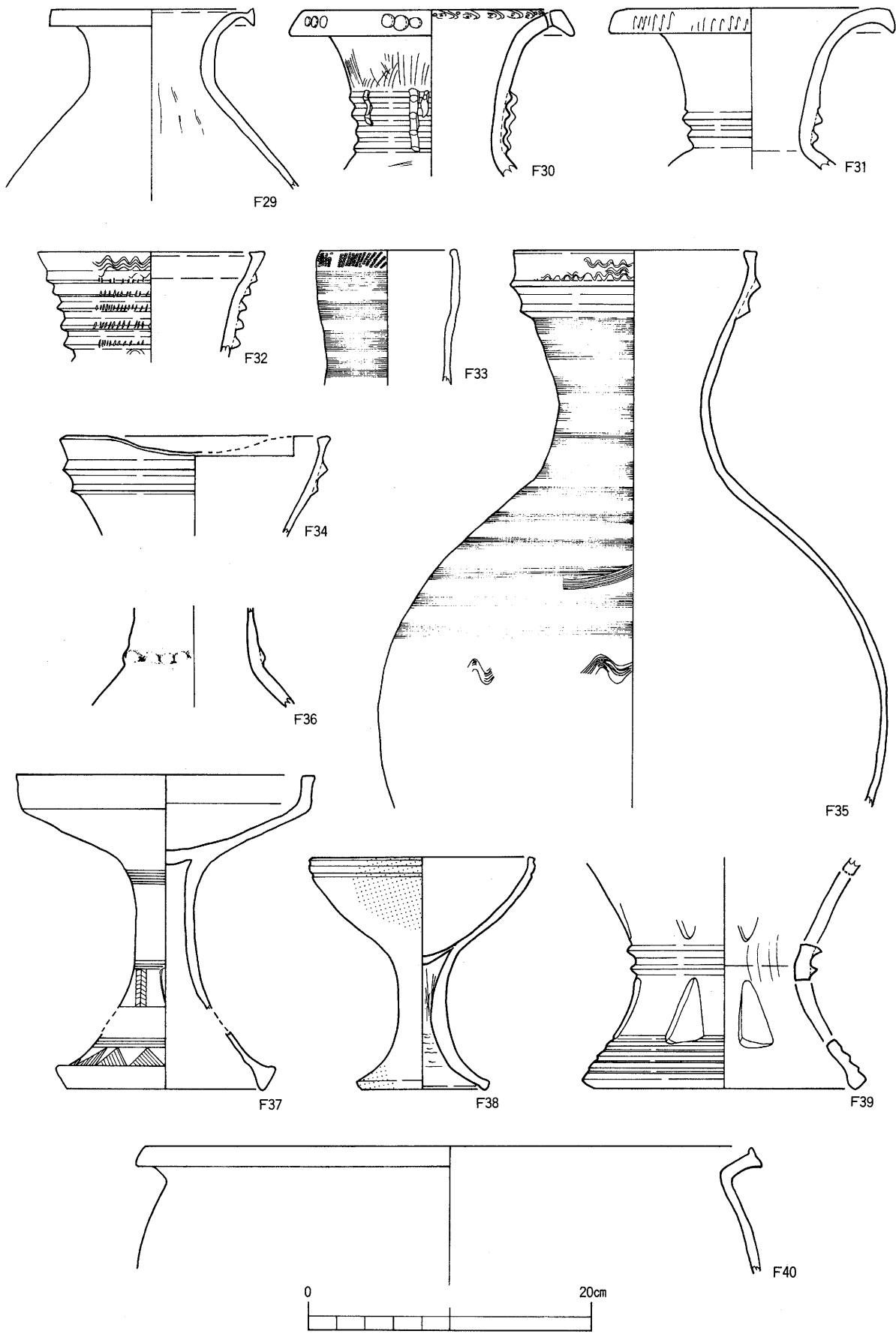
S D35出土遺物（第44図、P L. 32・33）壺には広口壺（F 29～31）と直口壺（F 32～36）がある。F 29は口縁端部を上下に拡張させ外方は面をもつ。F 30・31は口縁端部を斜め下方に折り曲げる。F 30は端部外面に3個1単位の円形浮紋を貼付け、内面には扇形紋を巡らす。頸部には断面三角形の突帯を4条巡らし、その上に縦方向の棒状浮紋を貼付ける。F 31は端部外面に刻み目を施し、頸部には断面三角形の突帯を貼付ける。F 32・34・35は口縁部に断面三角形の突帯を複数貼り付ける。F 32は突帶上方に波状紋を巡らせ、突帶には刻み目を施す。F 35は突帶上方に波状紋を巡らせ、突帶下位から体部上半にかけては12条の櫛描直線紋、その下には1条の波状紋を施す。F 33は外面に櫛状工具による列点紋と櫛描直線紋を施す。F 36は頸部の破片で、指頭圧痕紋突帯を貼付ける。F 40は、くの字に屈曲する短い口縁部の端面を上下に拡張させた大型の甕である。高杯F 37の杯口縁部は直立し、脚部は脚柱部から裾部にかけて緩やかに広がる。裾端部は上下に大きく拡張させる。三箇所に櫛描直線紋を施し、下位の直



第42図 SD35土層図



第43図 SD34出土遺物

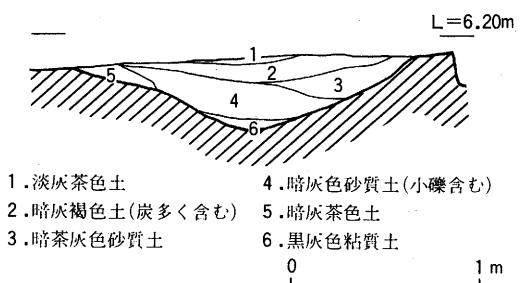
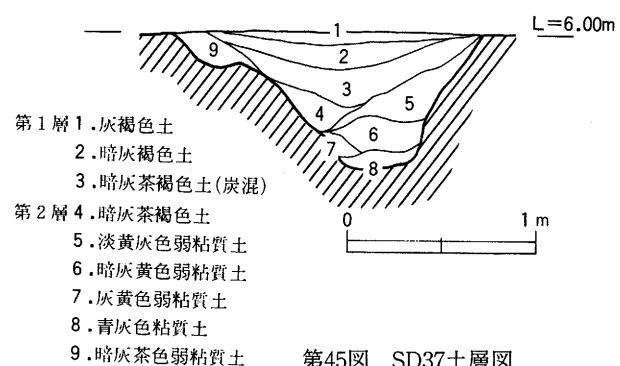


第44図 SD35出土遺物

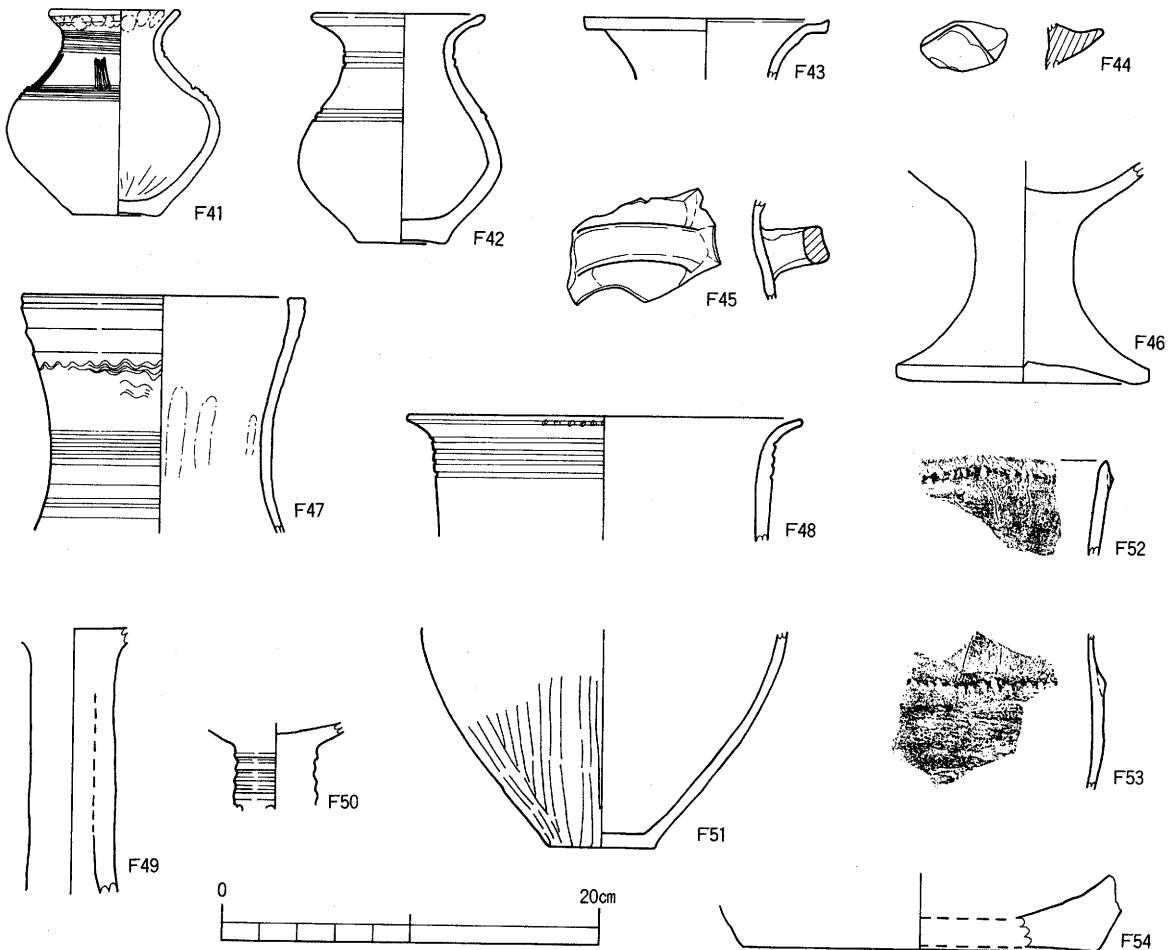
線紋下方には鋸歯紋を、中位の直線紋下方には透かしと縦方向の綾杉紋を施す。F38の杯部は皿型で、口縁端部には2条の凹線紋を巡らす。F39は鼓方を呈し、中央には2条の断面三角形の貼付け突帯を巡らし、その上下に三角形の透かしを5箇所穿つ。裾部には4条の凹線紋を巡らす。時期は第三様式である。

S D37（第45図、P L. 12） 北西～南東方向の溝で、幅約1.6m、深さは0.7～0.8mである。断面形は概ね逆台形であるがV字形を呈する箇所もある。遺物は、弥生時代前期の壺2点が完形で出土している他は、いずれも弥生時代中期のものである。

S D37出土遺物（第47図、P L. 33） 壺 F



第46図 SD40土層図



41・42は前期の壺である。共に完形品であり、器高は、F41が11cm、F42は12.1cmである。口縁部は短く外反し、口頸部と頸胴部の境には沈線を巡らせる。F41の体部上半には縦方向に4本一組の沈線を施し横方向の沈線間を6区に画しているが、紋様は描かれていません。直口壺F47の口縁端部はわずかに肥厚して上端は面を持つ。口縁端部には凹線紋を巡らし、頸部には櫛描波状紋と直線紋を施す。甕F48は口縁部端面に刻み目を施し、頸部には4本の沈線を施す。F49・50は高杯脚柱部の破片で、F50には凹線紋が施される。底部F54は前期の可能性がある。F52・53は前期の甕口縁部及び胴部の破片である。F52は口縁端部外面に低い断面三角形の刻み目突帯を巡らす。F53は2条突帯の甕で、突帯には刻み目を施している。

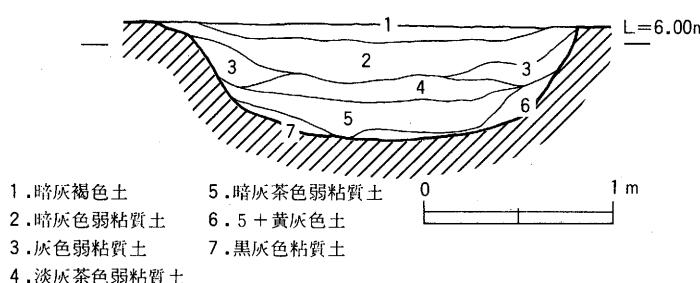
S D40（第46図、P L. 13） S D37と並行する溝で、幅は2.4m前後である。

S D40出土遺物（第49・50図、P L. 34・35） 壺には広口壺・直口壺・細頸壺・無頸壺・受口状口縁壺がある。広口壺（F55・58・59・61）は口縁端部を上下あるいは下方に拡張させる。F55は端部外面に凹線紋を、頸部には直線紋を施す。F58は直立する頸部に櫛描直線紋を多条に施す。直口壺F64は断面三角形の突帯を2条貼付け、その上下に櫛描波状紋を、頸部には直線紋を描く。細頸壺F65の口縁部には円形浮紋を貼付ける。F68・73・74・75は無頸壺である。F68は端部外面に斜線紋を、その下には簾状紋を施す。F73は凹線紋、F74は簾状紋を施す。F75は口縁端部外面に斜格紋、その下位には簾状紋を施す。F57・60・62・67は受口状口縁の壺である。口縁部はくの字形に屈曲し、F57はさらに垂下部をもつ。F57の口縁部外面には2段の列点紋、頸部には簾状紋を施す。F62は口縁部に凹線紋を施し、頸部には指頭圧痕紋突帯を貼付ける。F67は屈曲部に刻み目を施し、その下に貝殻腹縁による圧痕紋を巡らす。F69～72は壺体部の破片である。F69は列点紋、F71には簾状紋が施される。F70は削出突帯の可能性がある。F72は沈線上に刻み目をもつ粘土帯を貼付する。高杯には杯部の口縁を垂下させるF80と皿或いは椀型のF81・F83がある。F81は杯部に凹線紋4本を巡らす。F83は杯部上位と脚部に凹線紋を施し、脚柱部中位に円孔を穿つ。鉢F84は刻み目を加えた断面三角形の貼付突帯を2条巡らし、棒状浮紋を附加する。鉢F85は鉢部の中位に凹線紋を巡らす。脚台部F86・87は共に凹線紋をもち、F87には多数の円孔が穿たれている。甕には大型のF88～91と小型のF92があり、共にくの字形に屈曲する短い口縁部を持つ。F63は傘型の蓋である。時期は第三様式である。

S D41出土遺物（第52図、P L. 37） F93は体部中位に緩やかな稜線をもつ紀伊型甕、F94・95は突帯紋系の甕、F96はミニチュアの土製品である。時期は第一様式中段階から新段階であろう。

S D42（第48図） 6区東端で検出した北東～南西方向の溝。幅2.3m、深さは0.6mである。断面形は逆

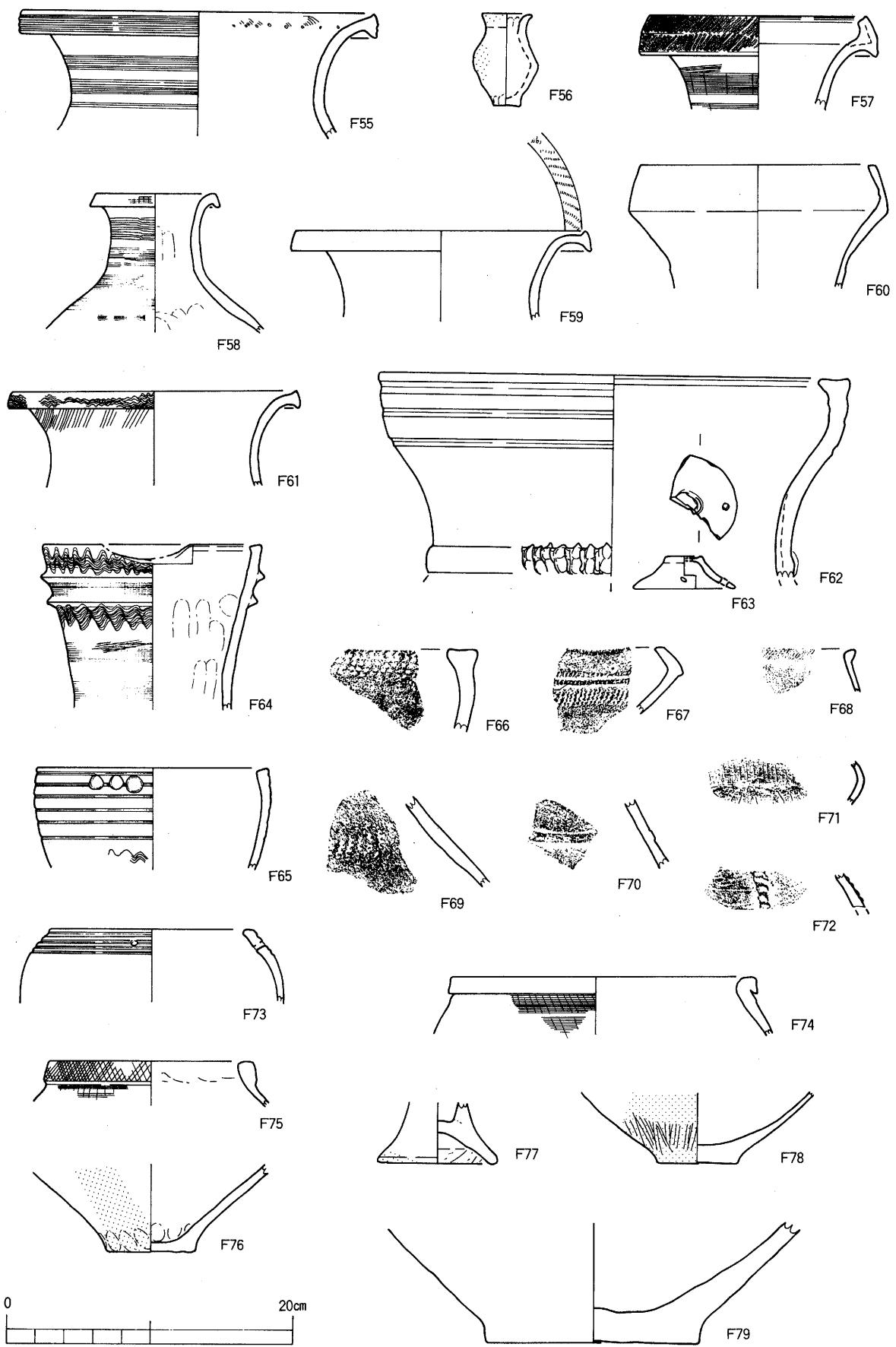
台形を呈する



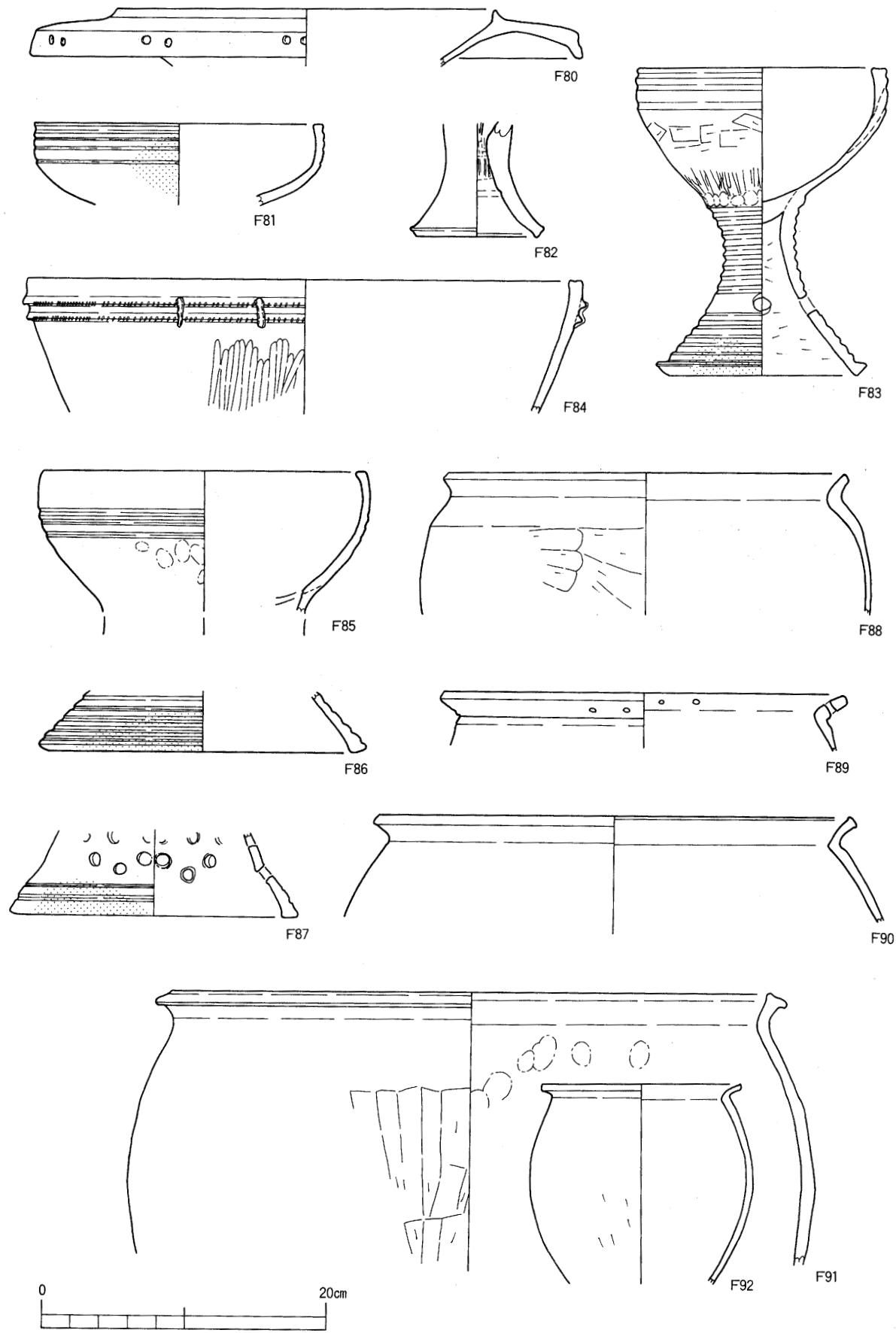
第48図 SD42土層図

S D42出土遺物（第51図、P L. 37）

F98～102は壺体部の破片である。  
F98・99は刻み目を加えた突帯を貼付け、F100～102は沈線を施す。  
F103は円盤状の壺用蓋である。  
時期は第一様式中段階から新段階である。



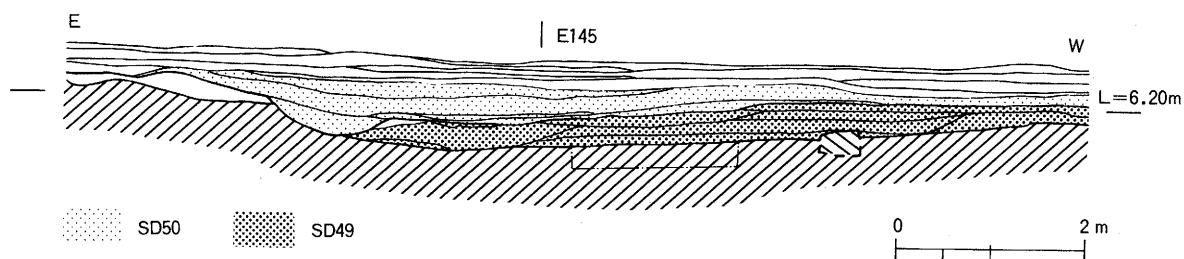
第49図 SD40出土遺物



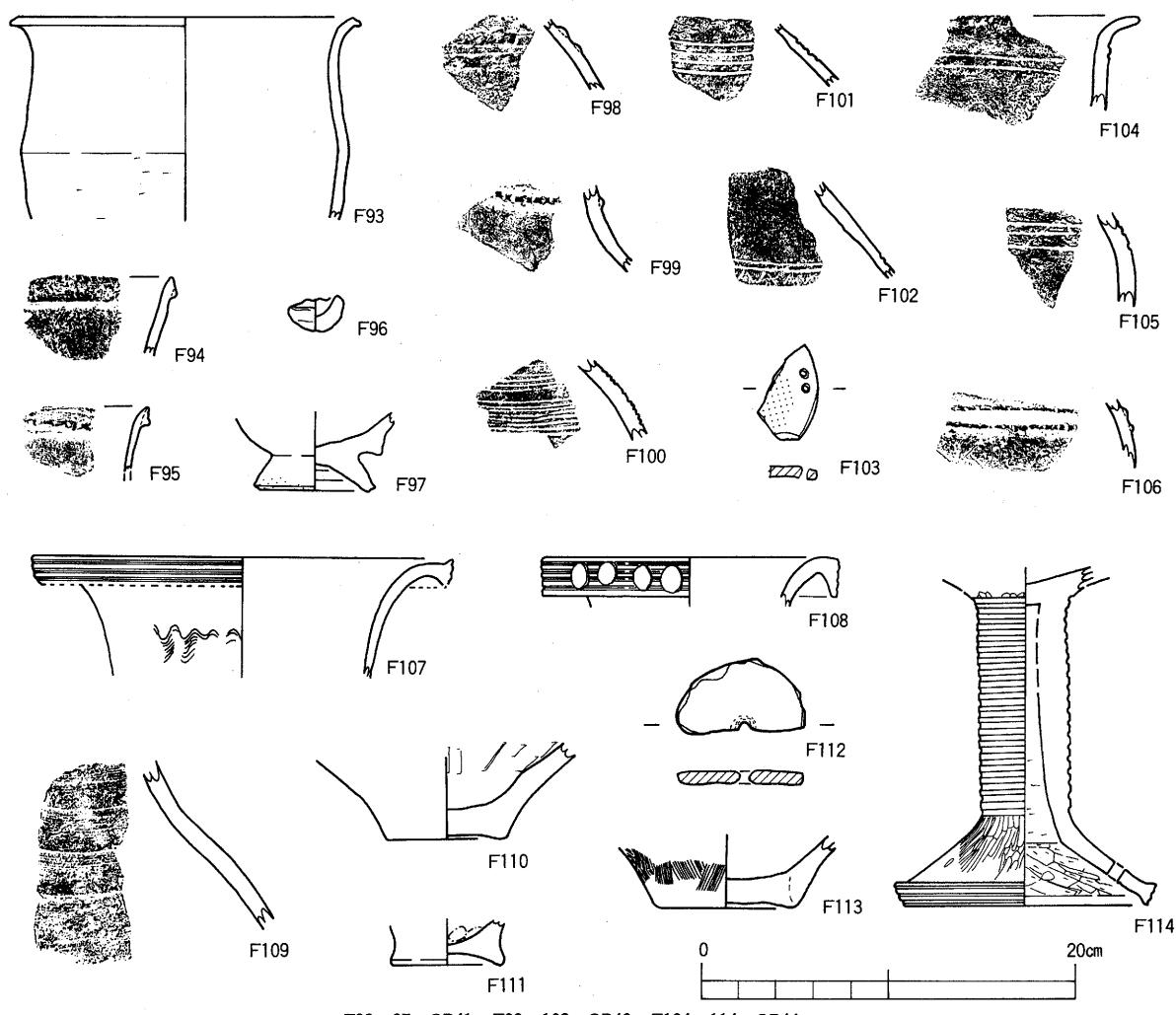
第50図 SD40出土遺物

S D 44出土遺物（第52図、P L. 37） F104は口縁端部に刻み目、口縁下に沈線2本を施す前期の甕である。F105・106は前期の土器体部破片で、F105は沈線が施され、F106には刻み目を加えた突帯を貼付ける。F114は複合土器の脚柱部と考えられる。F107～109とF114は中期に属するものである。

S D 45出土遺物（第53・54図、P L. 36） 壺F115は口縁部端面に斜格紋を施す。F116・119・120は壺頸部の破片である。F116は櫛描紋、F119・120は突帯を貼付け刻み目を加える。甕F117・121は刻み目と沈線紋を施す。F118・122は突帯紋系の甕である。F133・134・136は直口壺、F135・137・138は広口壺である。F134・136は櫛描直線紋を多用する。鉢F139は口縁端部に刻み目をもつ。高杯脚部



第51図 SD49・50土層図



F93～97-SD41 F98～103-SD42 F104～114-SD44

第52図 SD41・42・44出土遺物

F 140・141はハの字状に開く。時期は第一様式新段階から第二様式である。

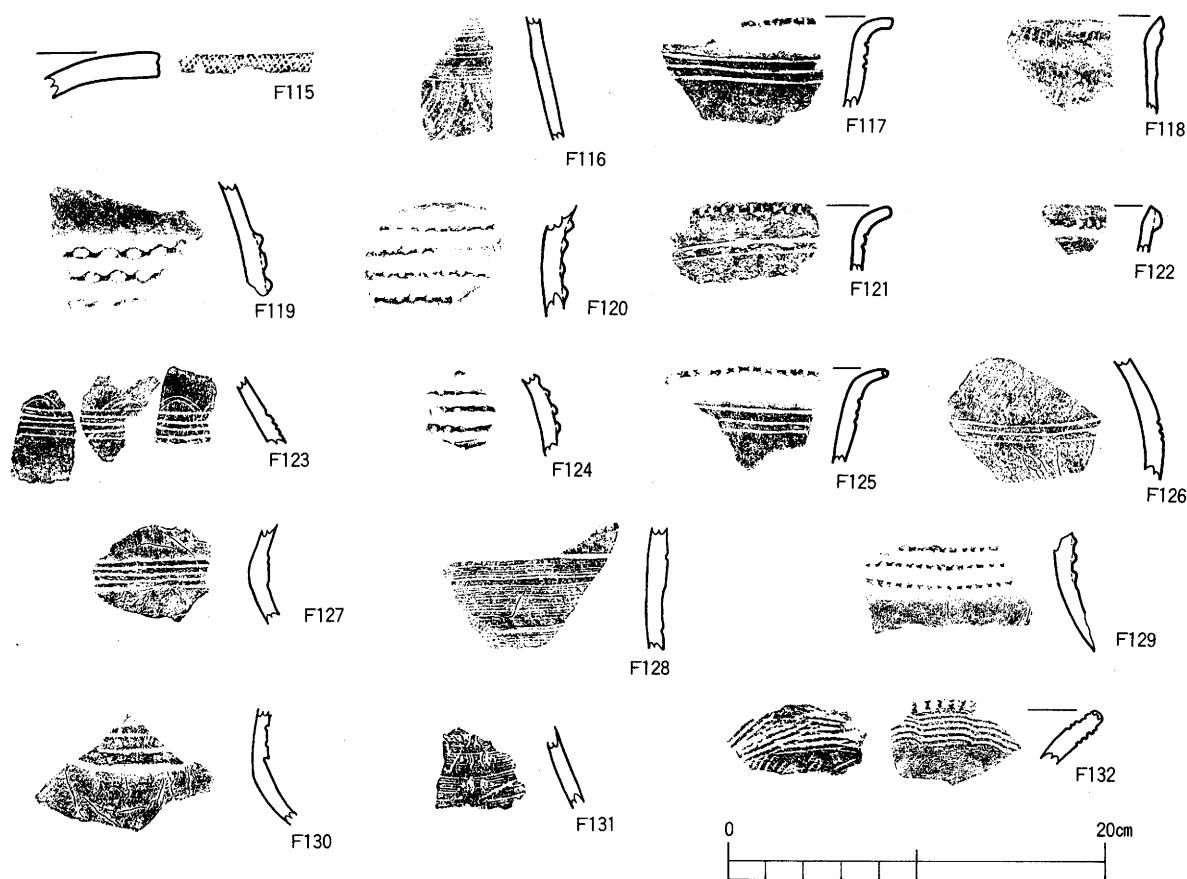
S D46出土遺物（第53図、P L. 38） F 132は外面に貝殻条痕と思われる調整痕をもつ壺の口縁部破片である。

S D47出土遺物（第53・54図、P L. 38） F 123・124・126～128は壺体部の破片である。紋様は、F 123は沈線による直線紋と重弧紋、F 124は貼付突帶、F 127は削出突帶と沈線紋、F 128は沈線紋と櫛描直線紋の併用である。F 125は外反する口縁端部に刻み目、体部上位に沈線紋をもつ甕である。F 142～144は広口壺で、F 142は口縁端部に斜格紋を施し、F 143は頸部に削出突帶、F 144は内面に突帶をもつ。時期は第一様式から第二様式である。

S D48出土遺物（第53・54図、P L. 38） F 129～131は前期の壺頸部付近の破片である。甕F 145は遠賀川系の甕で、口縁端部を刻み、頸部に4条の沈線紋を施す。時期は第一様式新段階である。

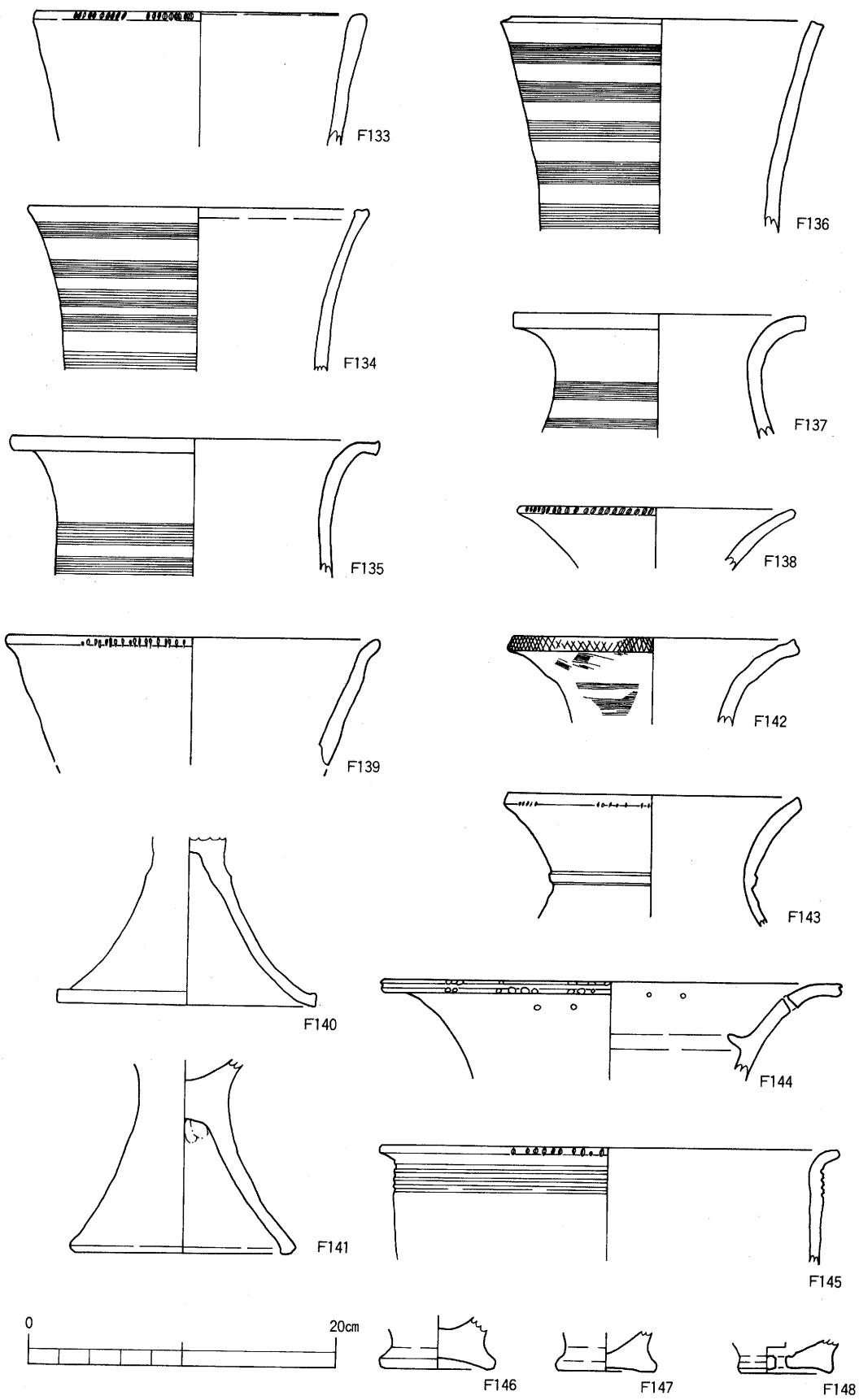
S D50（第51図、P L. 14） 幅約3.9m、深さは0.7m前後である。調査区南側でS D48に繋がる可能性がある。埋土は粘質土および砂質土で、粘質土中には炭が多く含まれていた。

S D50出土遺物（第55～62図、P L. 39～45） 壺には、広口壺（F 149～151・153～155・160・192～195・198・199・203・204）・細頸壺（F 156・159）・受口状口縁壺（F 157・163）・無頸壺（F 158）・直口壺（F 161・162・196・197・200）の他、口縁部及び体部の破片がある。広口壺には、外反させた口縁端部をそのままの状態にするもの（F 149・150・195）、僅かに上下に拡張させるもの（F 151・153・155・160）などがある。



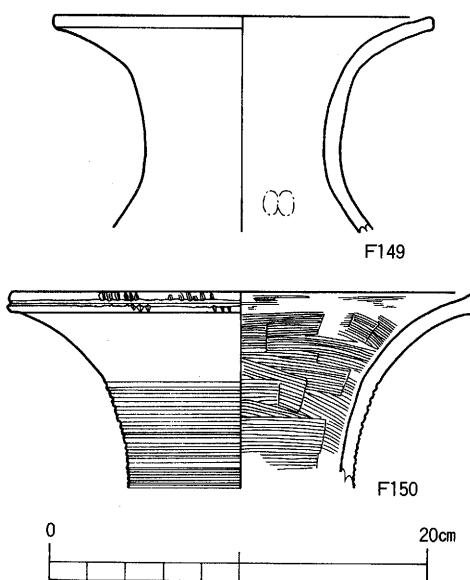
F115～122—SD45 F123～128—SD47 F129～131—SD48 F132—SD46

第53図 SD45～48出土遺物



F133~141・146~148—SD45 F142~144—SD47 F145—SD48

第54図 SD45・47・48出土遺物

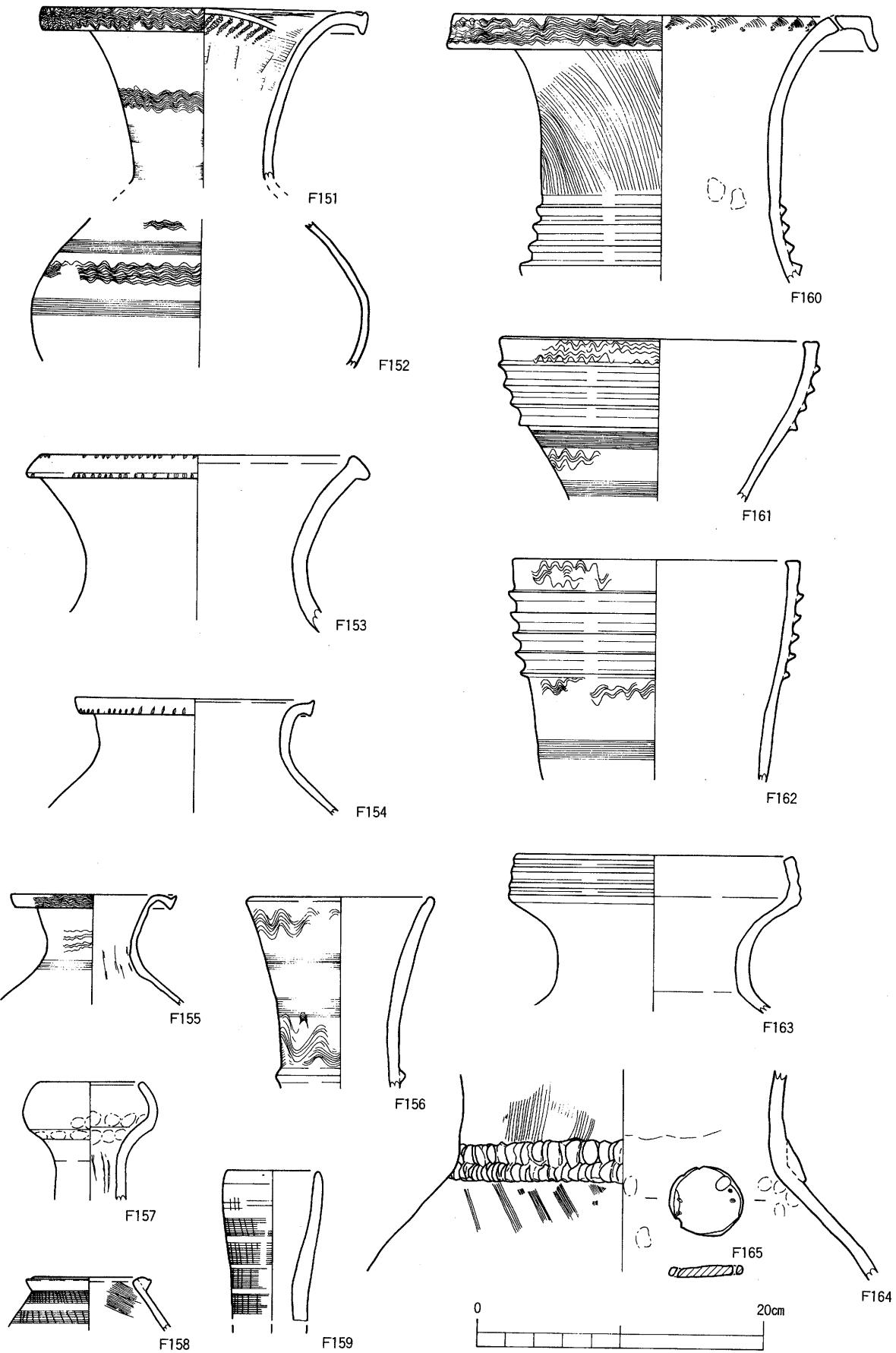


第55図 SD50出土遺物

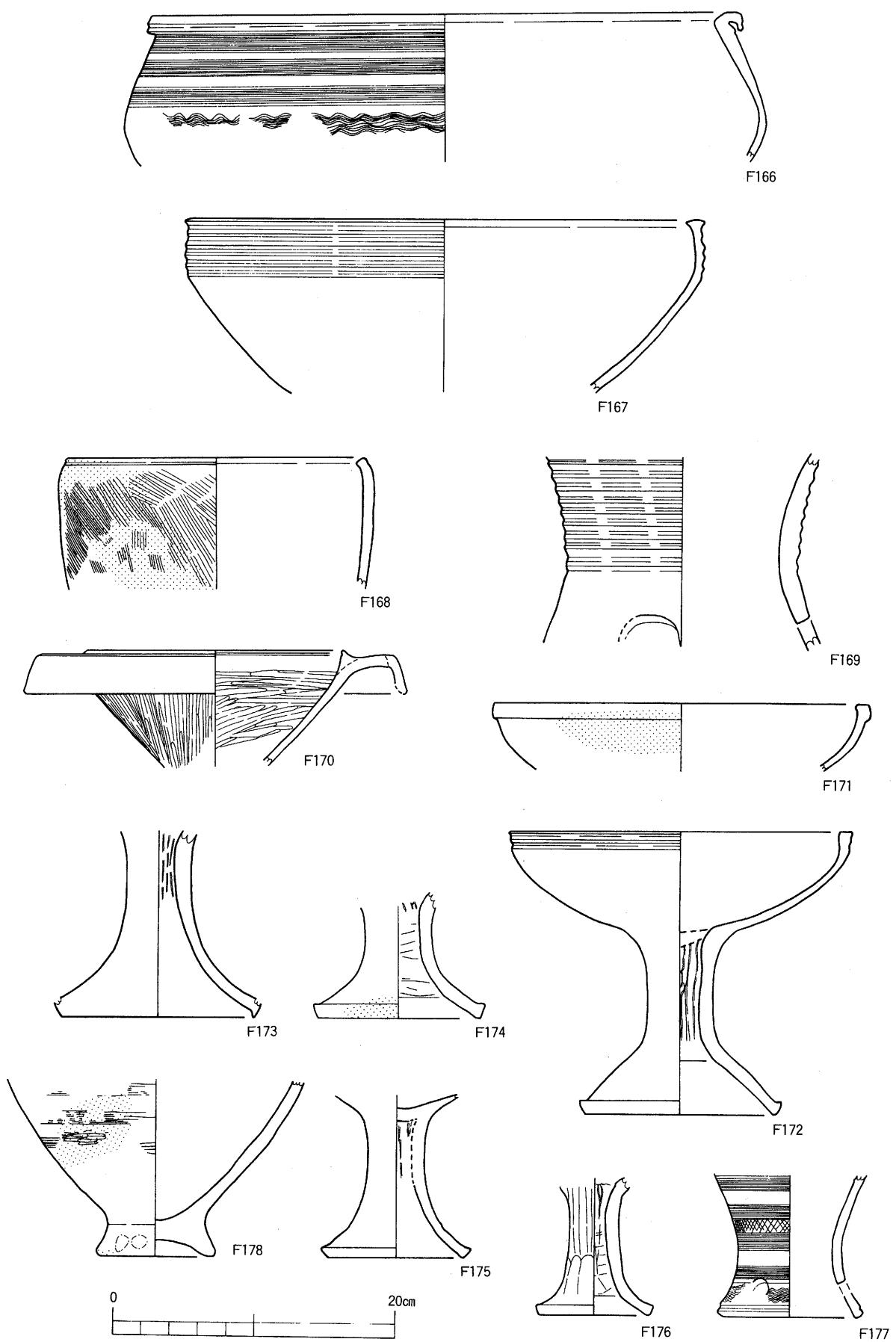
154)、大きく垂下させるもの (F160・192~194・198・199) がある。F150は口縁部端面に凹線紋を巡らし、頸部には櫛描直線紋を幅広く入れる。F151は口縁部内面に刺突紋を施し、頸部内面はハケで調整を行う。F155は口縁部を大きく屈曲させ、拡張させた端面には波状紋を巡らす。F160・199は頸部外面に3条~4条の突帯を貼付ける。垂下させた口縁部外面の紋様には、波状紋 (F160)・円形浮紋 (F192・193)・凹線紋 (F192~194・198)・刻み目 (F194)などがある。F160・193・194・198の口縁部内面には扇形紋が描かれる。細頸壺F156・159の外面は波状紋・直線紋・簾状紋を、無頸壺F158には簾状紋を施す。受口状口縁壺F163の口縁部外面は凹線紋を巡らす。直口壺F161・162・196・197の口縁部外面には1~5条の突帯を貼付け、突帯の上方と下方には波状紋や直線紋が施される。F203・204は口縁部内面に突帯を貼付ける前期の壺である。F205~209は頸部及び体部の破片である。紋様は、F205は沈線紋と直線紋、F206は綾杉紋、F207は扇形紋、F208は流水紋、F209は指頭圧痕紋貼付突帯である。F179~190・227~229・231・232は甕である。F188は紀伊型甕で、体部下半はケズリ調整する。F231・232は頸部に沈線紋を施す前期の甕である。F179は上下に拡張させた口縁端部に凹線紋を巡らせ、頸部には粘土帯を貼付け指頭圧痕を施す。体部外面は、ハケで調整するF182~184・186・189・190やケズリ調整のF185がある。鉢には、口縁部が直立するF168・212と内湾するF166・167・210があり、F166は端部を外方に折り曲げ、F167・210は肥厚させる。外面には、F166が直線紋と波状紋、F167は凹線紋、F210には斜格紋と凹線紋が施される。高杯杯部の形態には、椀状のF211・213、皿状のF171・172、口縁部を垂下させるF170・214~217がある。F211の脚台部はスカート状に開き、口縁端部には刻み目を施す。F213は口縁部に凹線紋を描く。F172は口縁端部に凹線紋を巡らし、脚柱部は直立する。F169・220は器台で、F169には凹線紋を巡らす。脚台部には、中空のF173~176・218・219・223・224・226と中実のF221・225がある。F218は2条の突帯を付し、楕円形を呈する孔を4個穿つ。外面の紋様は、直線紋・斜格紋・鋸歯紋・波状紋である。F219も2条の突帯を杯部と脚柱部の境界に貼付ける。F224は裾部上位に孔を穿ち、裾部下端には円孔を刺突する。F225は2孔1対の孔を穿つ。F226の脚部内面は絞り痕を残す。F191・233~239は壺・甕の底部である。F230は台形土器、F240はミニチュア土器である。F242の外面は三区画され、鋸歯紋が描かれる。

S D51出土遺物 (第63図、P L. 38) F255は貼付突帯の甕、F256は沈線紋と刺突紋を施す壺の体部破片である。第一様式新段階であろう。

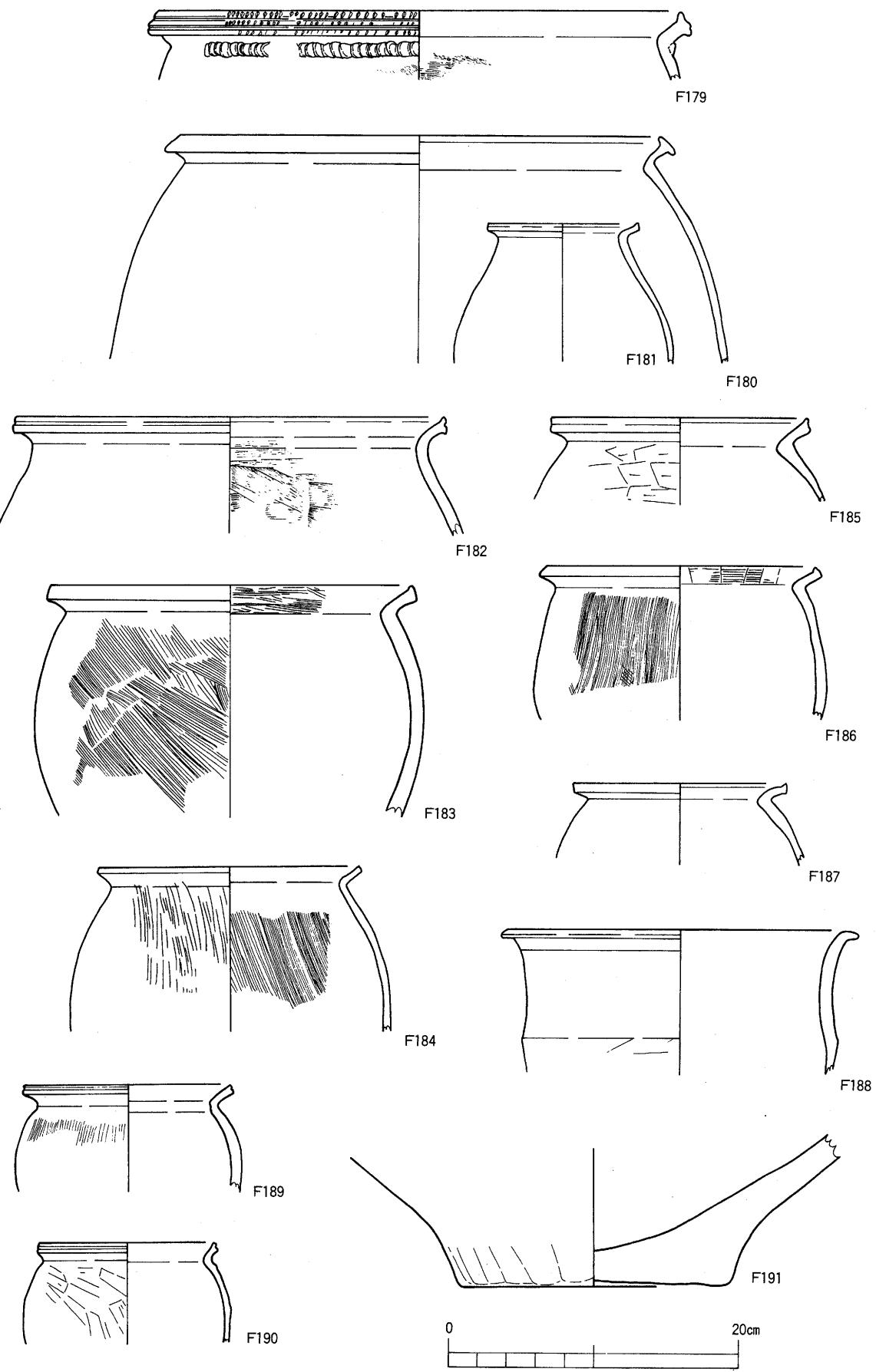
S D52出土遺物 (第63図、P L. 38) F245は口縁部に凹線紋を施し円形浮紋を貼付ける広口壺である。壺の体部破片には、突帯を貼付け上端に刻み目を加えるF246・247・248と、沈線紋を施すF249~253がある。F254は貼付突帯の甕口縁部、F257は頸部に沈線を施した甕である。F245以外は第一様式新段階に属するものである。



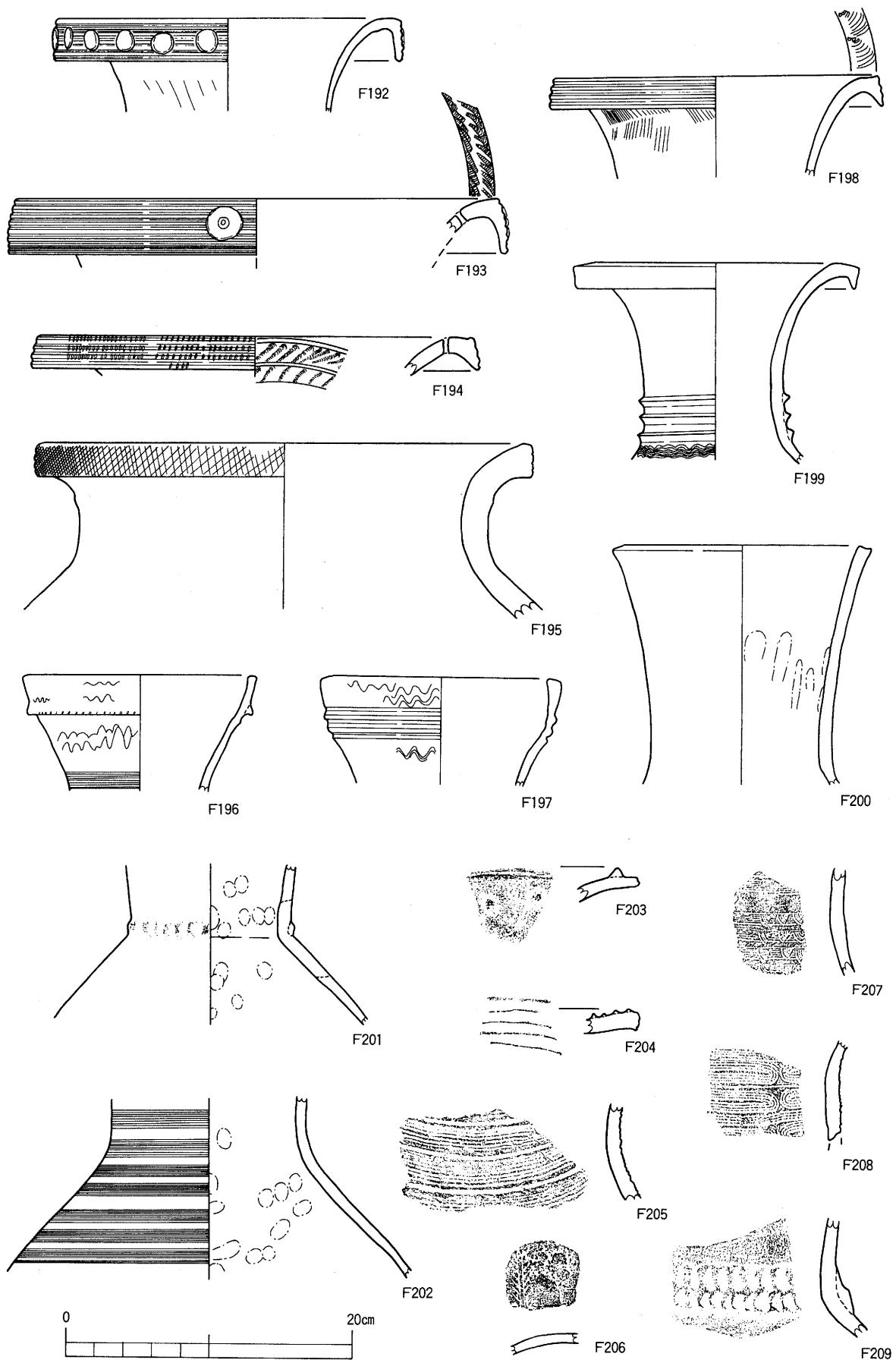
第56図 SD50出土遺物



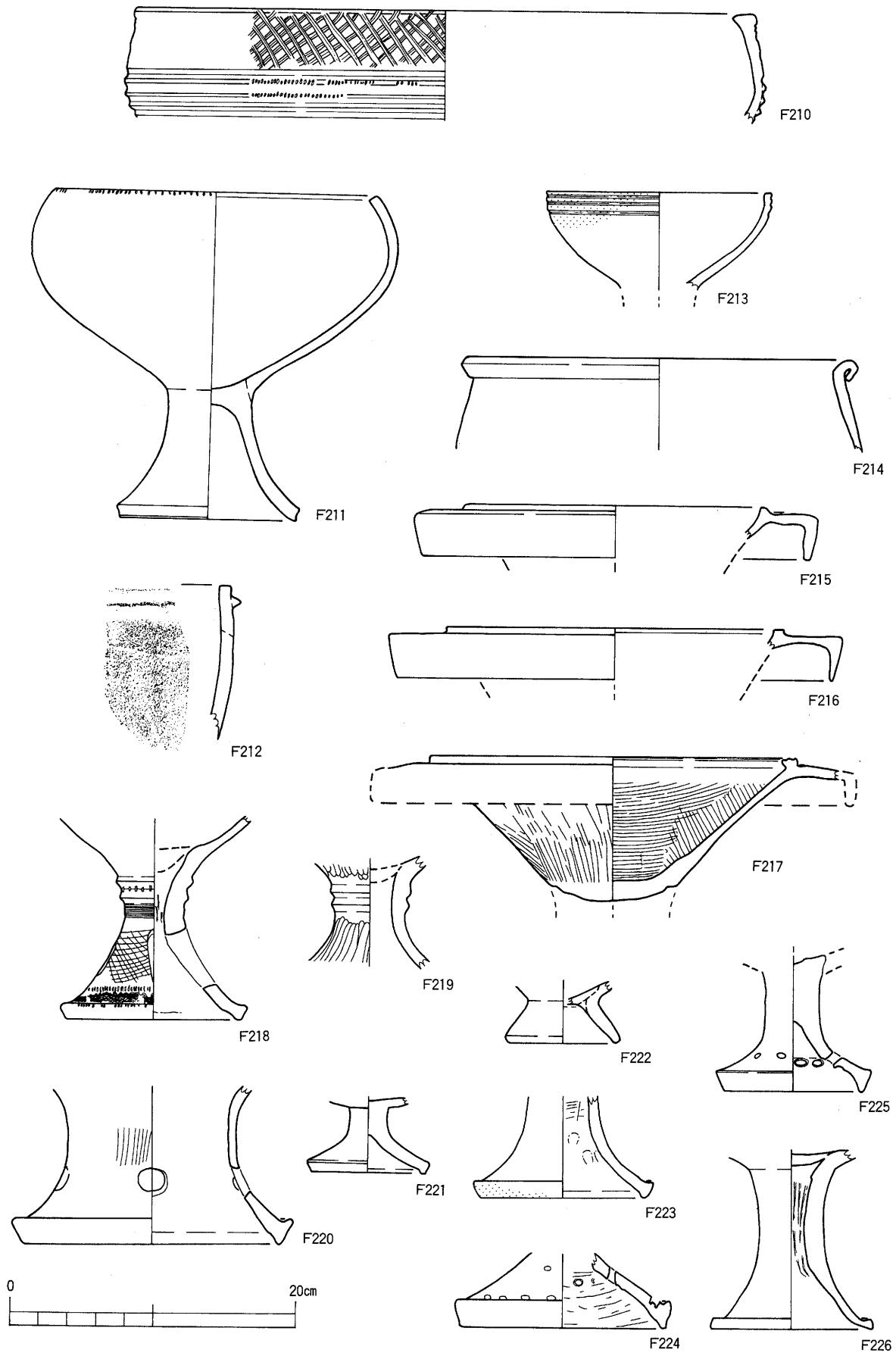
第57図 SD50出土遺物



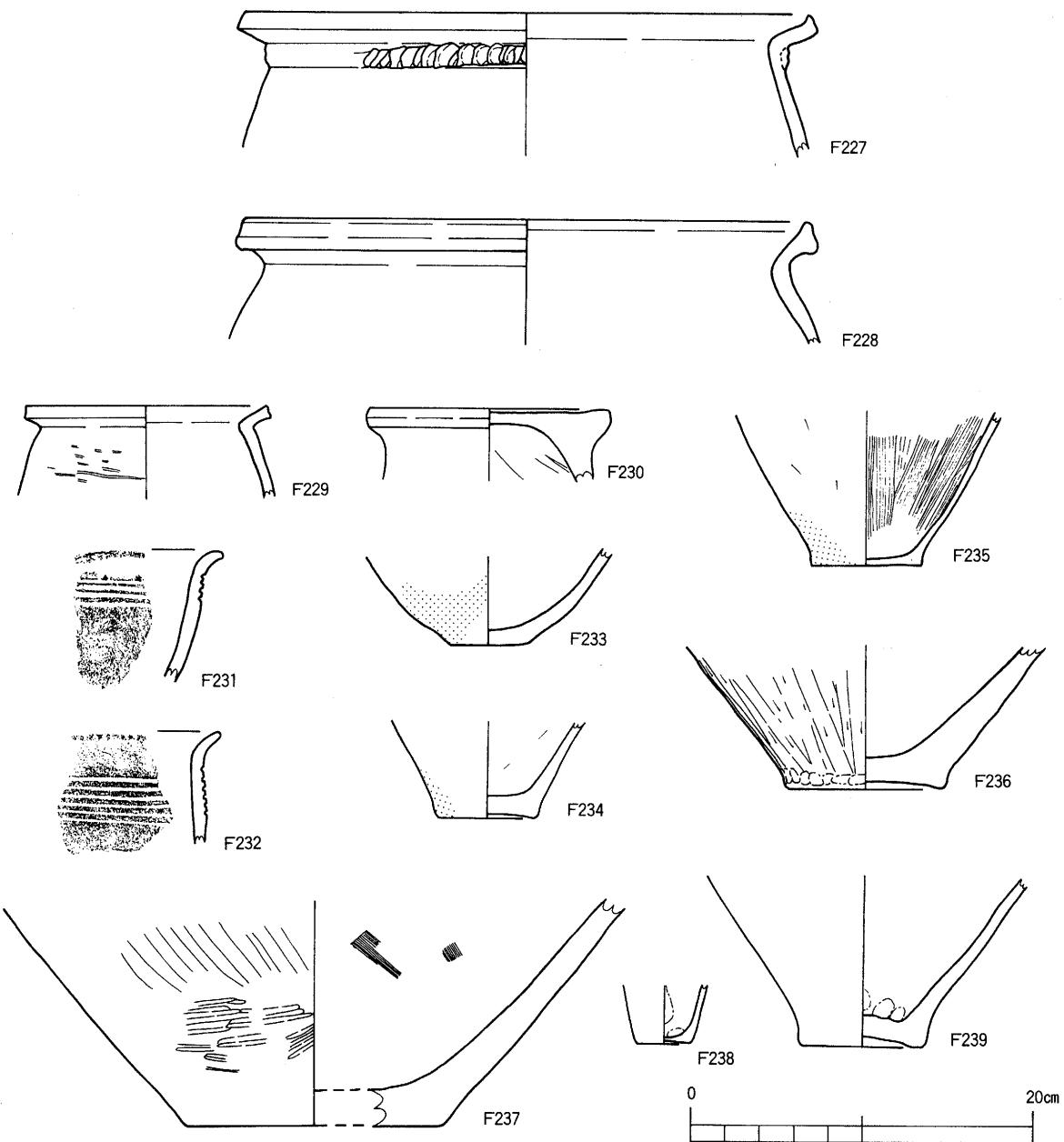
第58図 SD50出土遺物



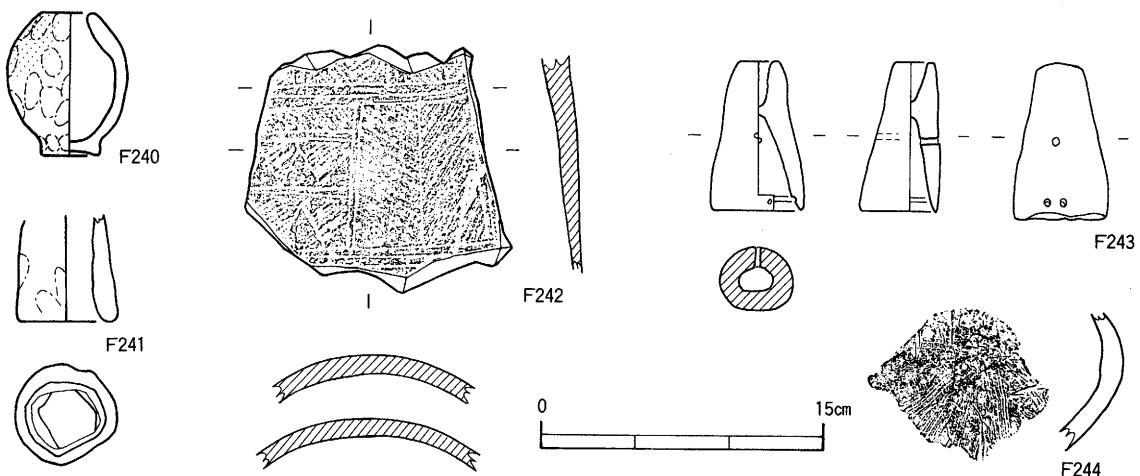
第59図 SD50出土遺物



第60図 SD50出土遺物



第61図 SD50出土遺物



第62図 SD50出土遺物

S K01 (P L. 15) E 20で検出した1.6m×2.2m以上の長方形を呈する土坑である。底面より0.2~0.3m上で、長辺（南北）方向に平行する形で木材（板材）が遺存していた。

S K02 (第64・65図、P L. 15) 6区中央部付近で検出した土坑。規模は南北約1.8m×東西1.5m、深さは20cm前後である。広口壺2個体がほぼ完形で出土している。土壙墓の可能性が考えられる。

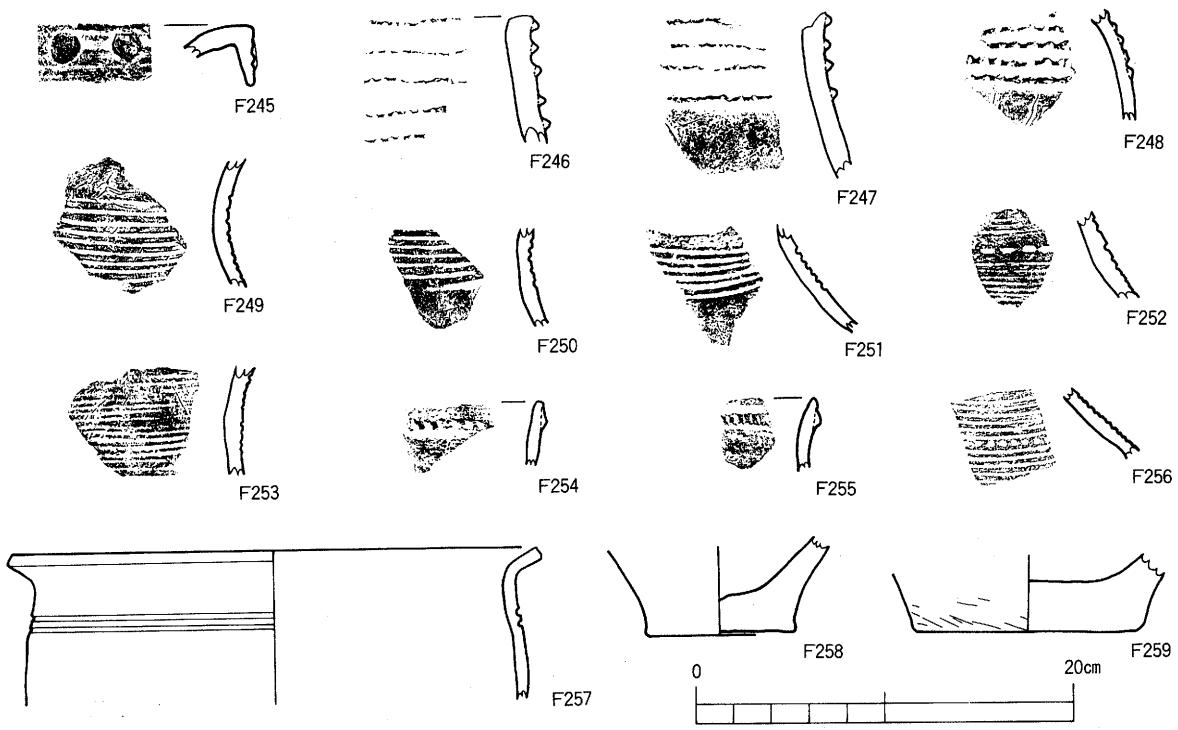
S K02出土遺物 (第67図、P L. 46) F 261・262は共に器高30cm前後の広口壺である。頸部は直立し、くの字形に屈曲させた口縁部の端部はわずかに拡張させる。壺頸部の破片F 263には指頭圧痕紋突帯を。直口壺F 264には断面三角形の突帯を5条貼付ける。F 265・266は高杯の脚柱部及び裾部である。F 267は短く屈曲する口縁部の端部を拡張させた甕。時期は第三様式新段階から第四様式古段階である。

S K03出土遺物 (第68図、P L. 46) F 268は直立する頸部から口縁部がゆるやかに外反する広口壺である。頸部はハケ調整の後、多条沈線紋を施す。時期は第二様式である。

S K04出土遺物 (第68図、P L. 47・52) F 274~276は広口壺である。F 274・276は櫛描直線紋を施す。直口壺には、頸部に突帯を貼付けるF 277と内湾する口縁部に突帯を貼付け刻み目を施すF 278がある。F 282には疑流水紋が描かれる。F 279は沈線紋を施す広口壺と考えられる頸部の破片である。F 283は外反させた口縁部端面を刻み、頸部付近には波状紋を施す。その他、台形土器 (F 280)・小型鉢 (F 281)・壺頸部破片 (F 284・285)・底部 (F 286・287)・紡錘車 (F 288・289) がある。

S K05出土遺物 (第68図、P L. 46) F 272は垂下させた口縁部をもつ広口壺である。内面には扇形紋を、外面は凹線紋を巡らせた後棒状浮紋を付加する。F 273は口縁部がゆるやかに外反する甕あるいは鉢である。F 272は第三様式、F 273は第一様式新段階から第二様式にかけての土器である。

S K06出土遺物 (第69図、P L. 46) F 290は外反する口縁部に続く頸部に沈線紋を施す壺、F 291は



F245~254・257~259-SD52 F255・256-SD51

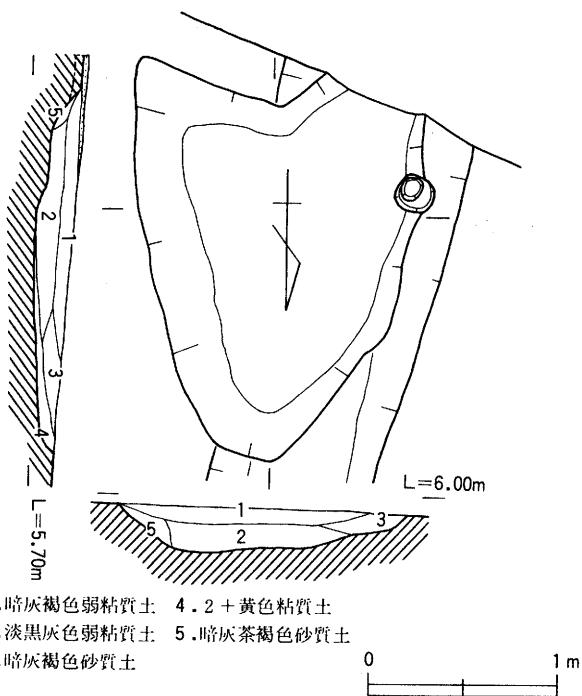
第63図 SD51・52出土遺物

突帯を貼付け貝殻条痕を施したと考えられるもので、東海系の土器である可能性がある。共に時期は第一様式である。

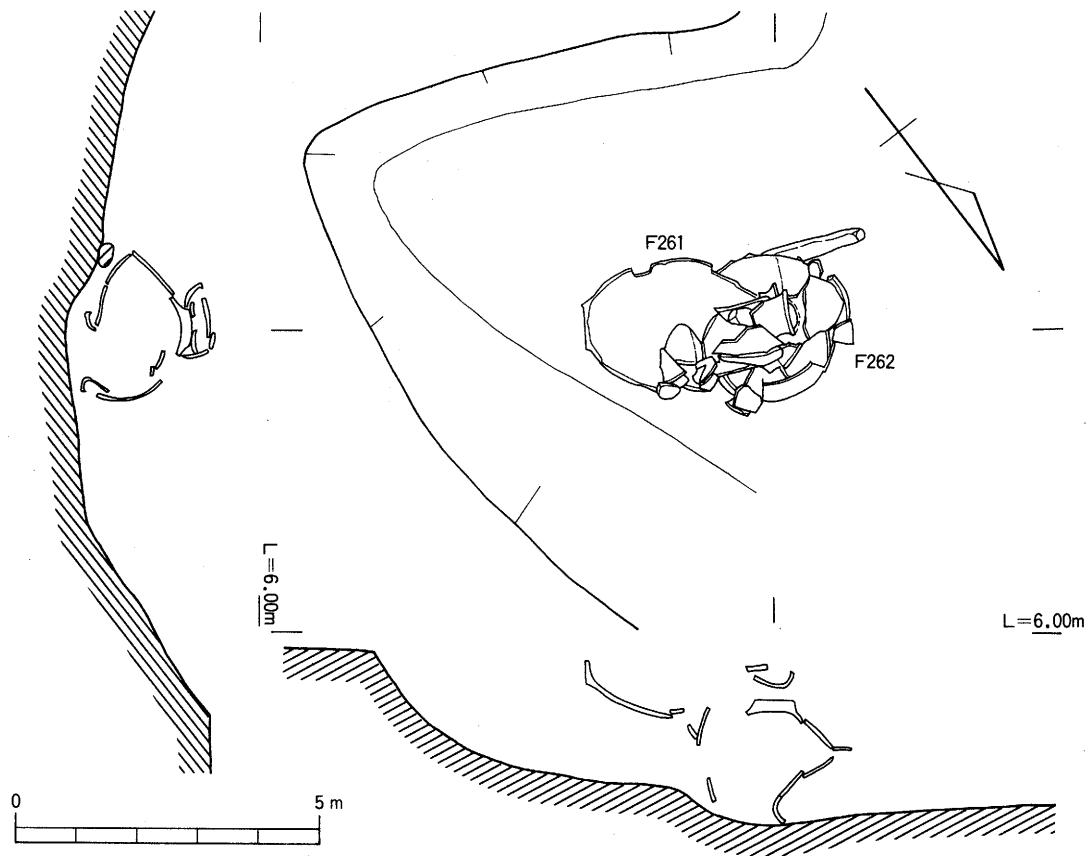
S K07出土遺物（第69図、P L. 46） F293は壺体部の破片で、櫛描直線紋と扇形紋を組み合わせて施紋する。F 292・294は第一様式から第二様式にかけての壺である。

S K08出土遺物（第69図） F 296は第一様式新段階の壺頸部付近の破片で、突帯を貼付け刻み目を施す。F 295は口縁部を鋭く屈曲させ、体部外面をハケ調整する中期の壺である。

S K09出土遺物（第69図） F 297は口縁部端面に刻み目を施す第一様式もしくは第二様式の壺である。F 298はくの字形に屈曲する壺である。F 299は断面三角形の突帯2条を貼付け、突帯上位に波状紋を、下位には波状紋と直線紋を施す直口壺である。共に第三様式に属する。



第64図 SK02実測図

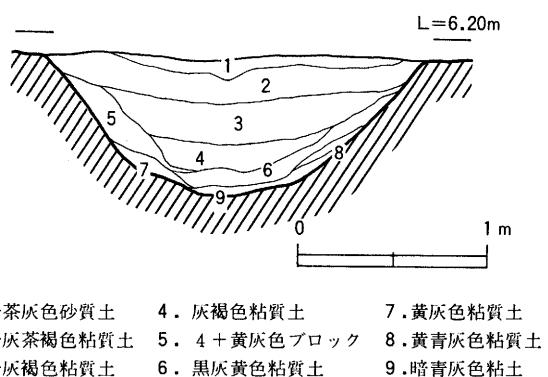


第65図 SK02遺物出土状況

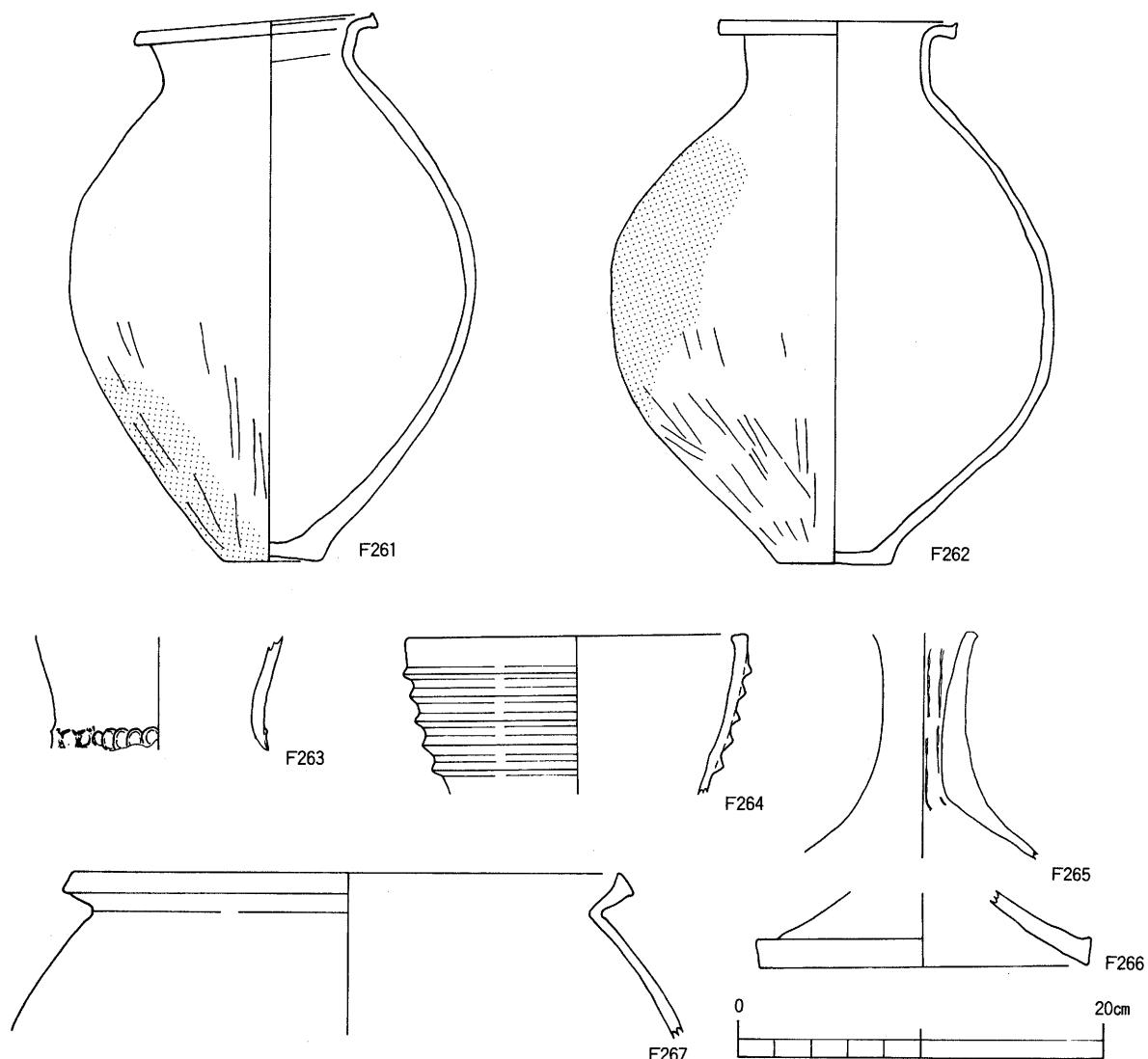
S K10出土遺物（第69図、P L. 47） F300はあまり類例のない遺物である。口縁部はわずかに外反させ、外面にはヘラで弧状紋を描き、刻み目を加えた突帯を付す。

S B01（第70図、P L. 15） 6区東端のE70~75で検出した掘立柱建物。東西2間×南北1間分を検出している。柱間は、東西方向が1.5m・1.4m、南北は約2mである。掘形は概ね円形で、直径は約30cm、深さは10cm前後である。

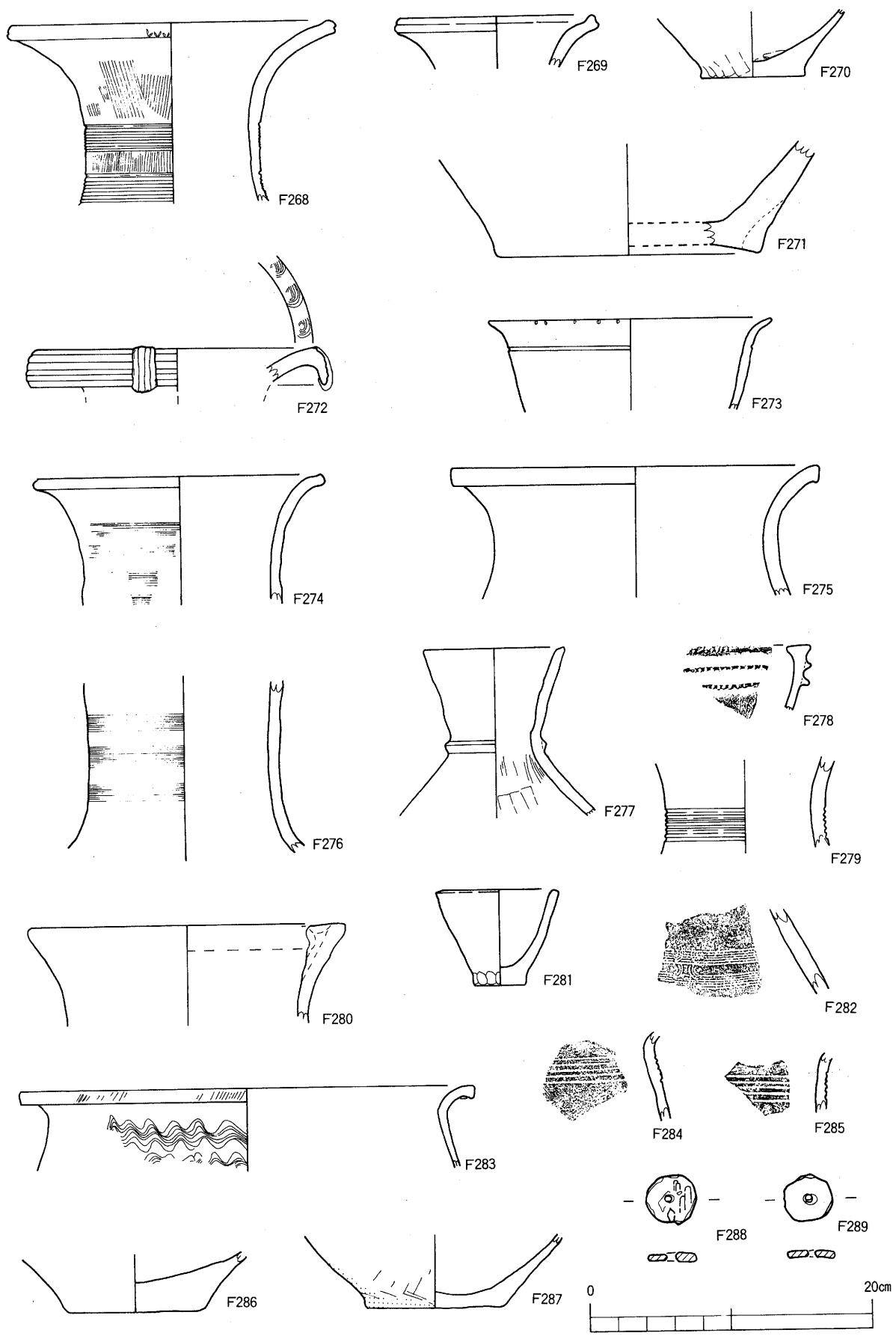
ピット出土遺物（第71図、P L. 46） F302はいわゆる複合土器である。杯部屈曲部に凹線紋を巡らせ、凹線紋と円形浮紋で装飾した垂下する円帯を付ける。杯部外面は横方向に丁寧にヘラミガキを行い、内面は横ナデを施す。口縁部には黒斑が認められる。脚台部の



第66図 SK03土層図



第67図 SK02出土遺物



F268~271-SK03 F272・273-SK05 F274~289-SK04

第68図 SK03~05出土遺物

殆どは欠損するが、僅かに残った部分には沈線紋が施されている。

#### 縄紋時代の遺構（第72・73図、P L. 16）

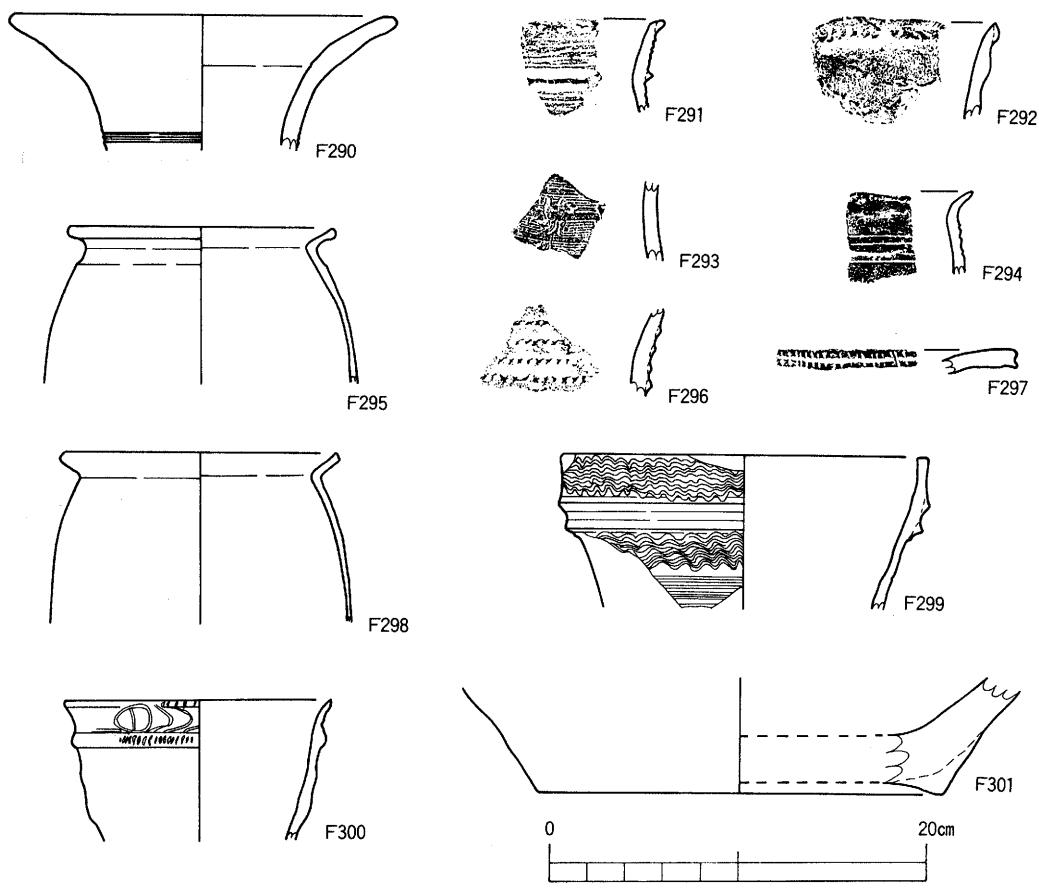
E 10～40の範囲について縄紋時代の包含層を掘下げ遺構の検出を行った。遺構面の高さは、縄紋の遺構を検出している対岸の2区に比べ約10～20cm低くなっている。検出した遺構には溝・土坑がある。J S K08は落ち込み状地形の肩部であろう。遺構はこれから一段低くなる西側で検出され、深さは何れも数cmと浅い。また、E92で埋土中に炭と焼土が多量に含まれる土坑を検出している。平面プランは不整形で、規模は最大東西1.8m×南北2.1m、深さは10～20cm前後である。

#### 縄紋土器（第74～76図、P L. 48～50）

J S D01・S D35 F303は3単位の波状口縁をもつ深鉢である。口縁部と胴部は平行する2本の沈線間にLRの縄紋を施した磨消縄紋帯を描き、波頂部と胴部には蛇行する沈線紋を施す。北白川上層式3期から一乗寺K式に属すると考えられる。

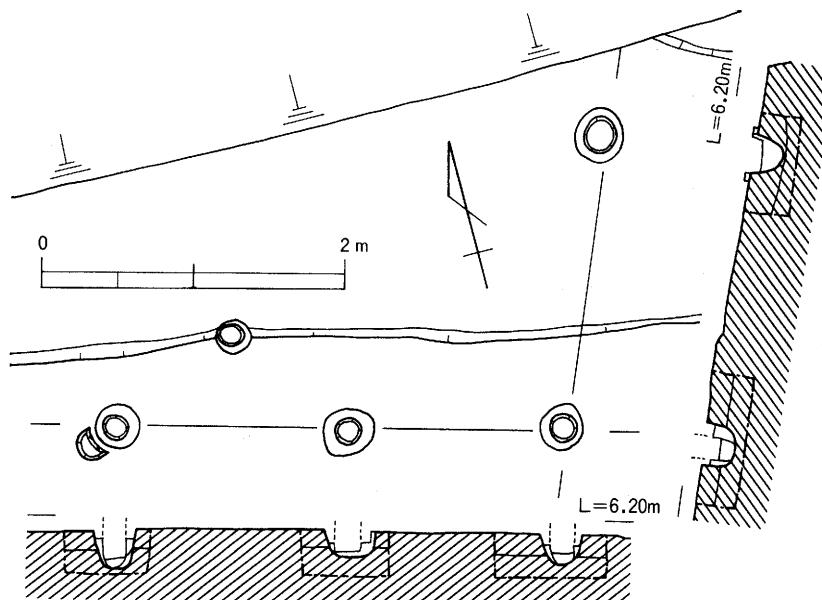
J S D01 F307は結節縄紋を施す一乗寺K式の深鉢体部破片、F311は粗製深鉢の口縁部破片である。

J S K08 (F327・331・332・334・337～341・343～345・347～349) F327は口縁部に結節縄紋を2条施し器壁は厚い。F331・332・334は粗製深鉢の口縁部破片である。F338は深鉢胴部破片で円弧状の沈線を施す。F339は沈線内にRLの縄紋を施す。F340は横方向の直線的な沈線によって磨消縄紋をつくる。F341・343・344は深鉢の体部で、F344は結節縄紋をもつ。F345は頸部から胴部間に段をもち、結節



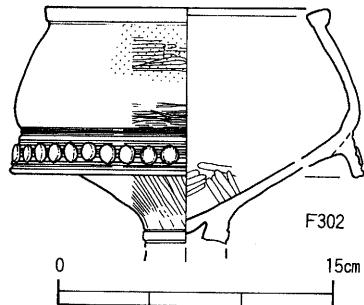
F290・291-SK06 F292～294・301-SK07 F295・296-SK08 F297～299-SK09・F300-SK10

第69図 SK06～10出土遺物



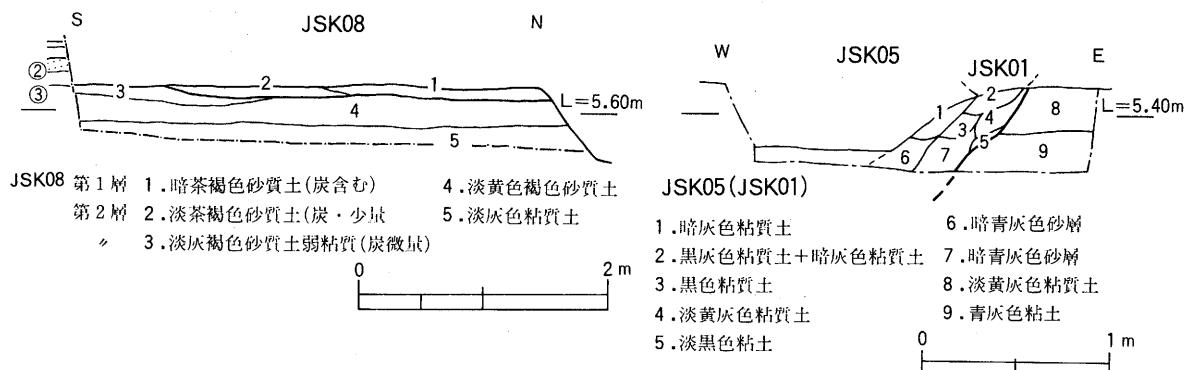
第70図 SB01実測図

縄紋を施す深鉢胴部である。F 347・348・349はやや窪む平底の底部である。時期は一乗寺K式から元住吉山I式である。  
包含層出土遺物 第9層出土遺物：粗製の深鉢口縁部F 315が出土する。  
第8層出土遺物 (F 308～310・314)：F 309・310は2本の沈線を施す深鉢胴部である。第7層出土遺物 (F 304～306・

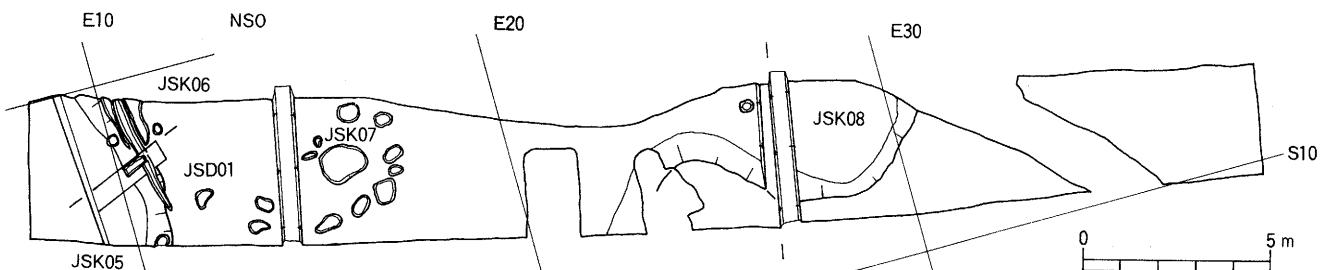


第71図 ピット出土遺物

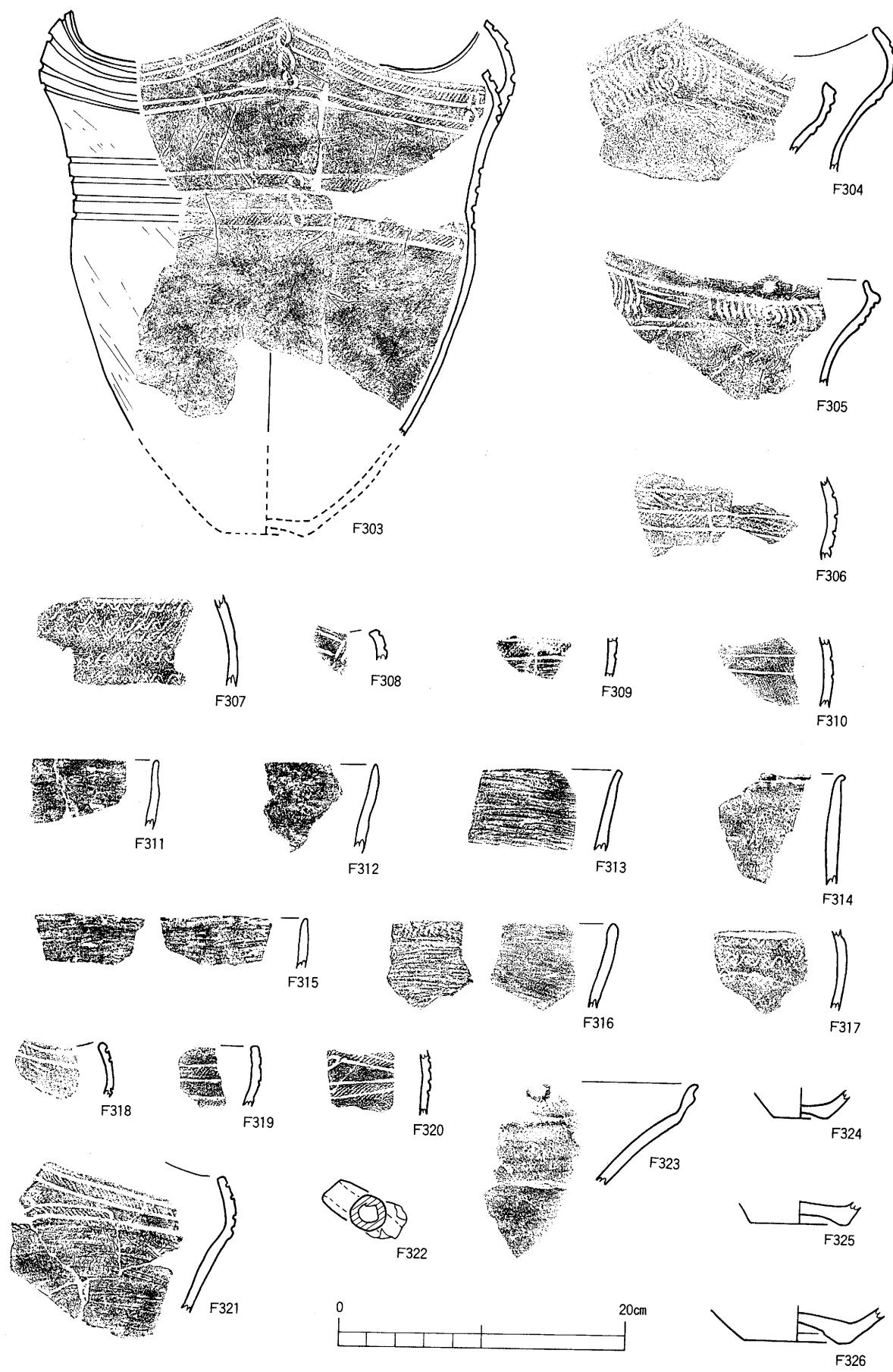
312・316)：F 304は波状口縁をもつ有紋の深鉢である。波頂部には縦方向に連なる渦巻き紋を施し、沈線内的一部分に刺突を施す。F 305は口縁部に円弧紋を施し、刺突された突起をもつ深鉢である。F 306は沈線に磨消縄紋を施した深鉢である。F 312・316は粗製深鉢口縁の破片である。第6層出土遺物 (F 313・319・325)：F 313は粗製深鉢の口縁部、底部F 325はくぼみ底である。F 319には沈線と結節縄紋が施される。第5層出土遺物 (317・318・320・321・324・326)：F 317は結節縄紋を施す一乗寺K式の胴部破片である。



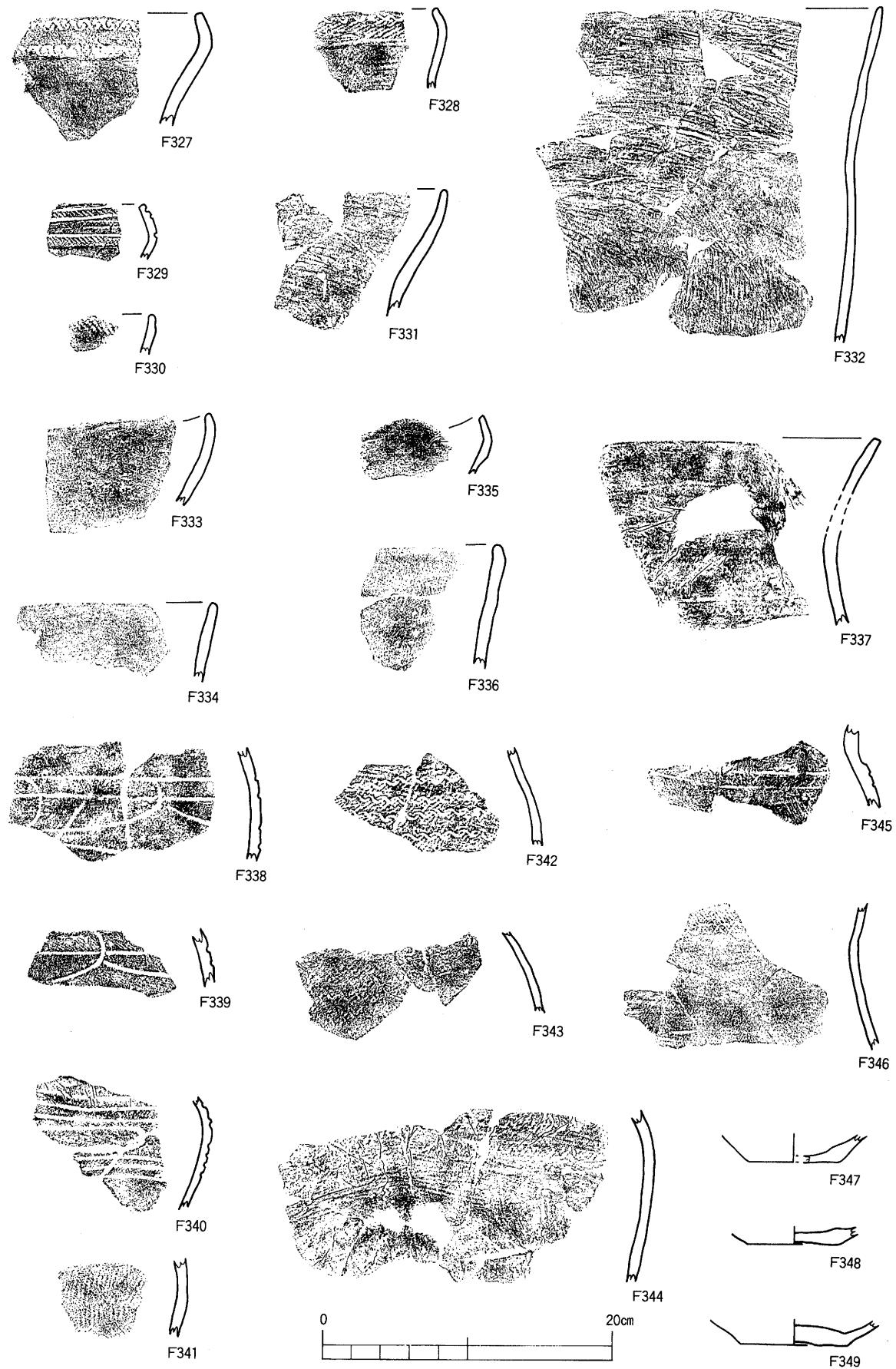
第72図 JSK05・08土層図



第73図 6区縄紋時代遺構平面図



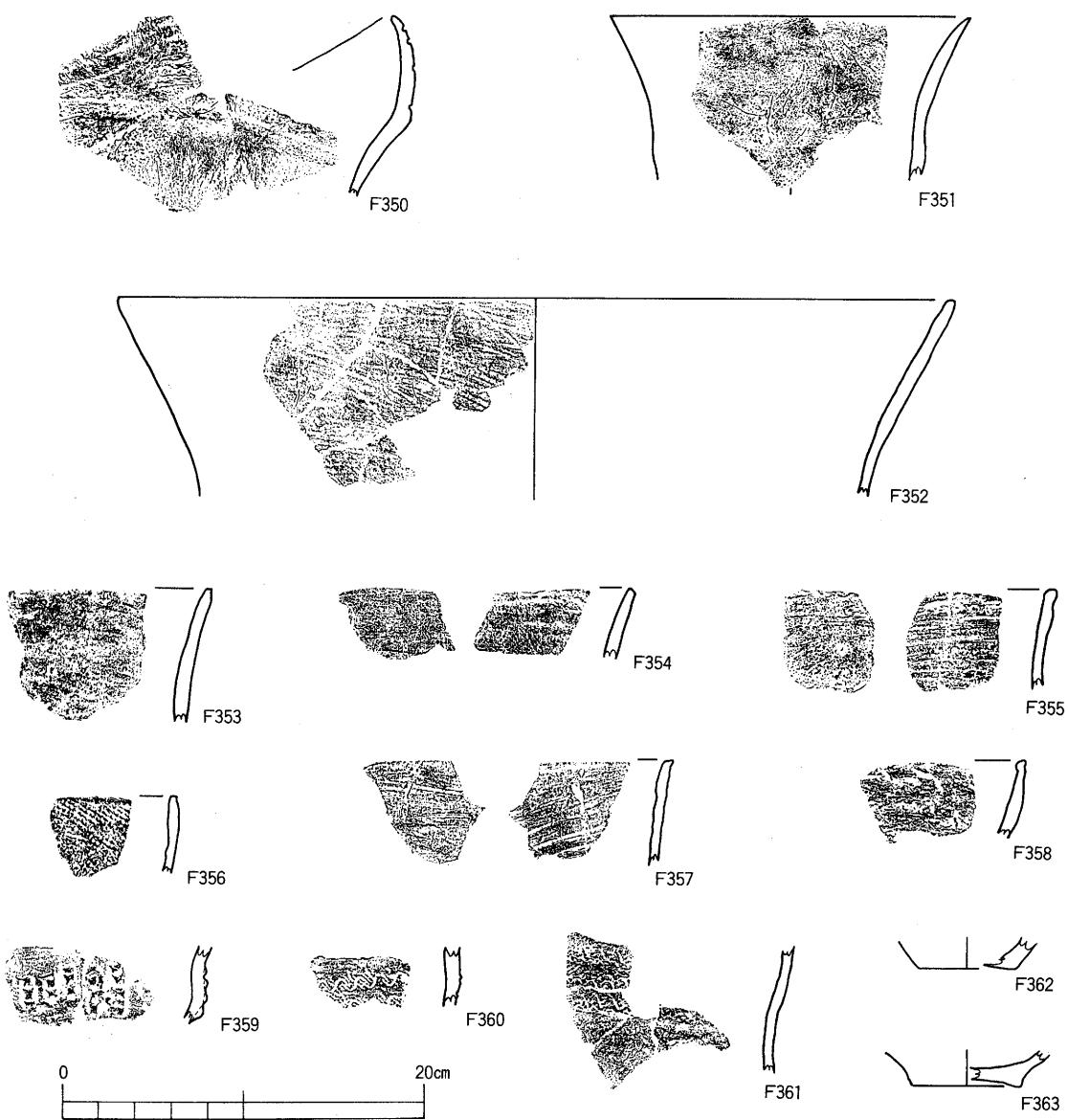
第74図 6区出土繩紋土器



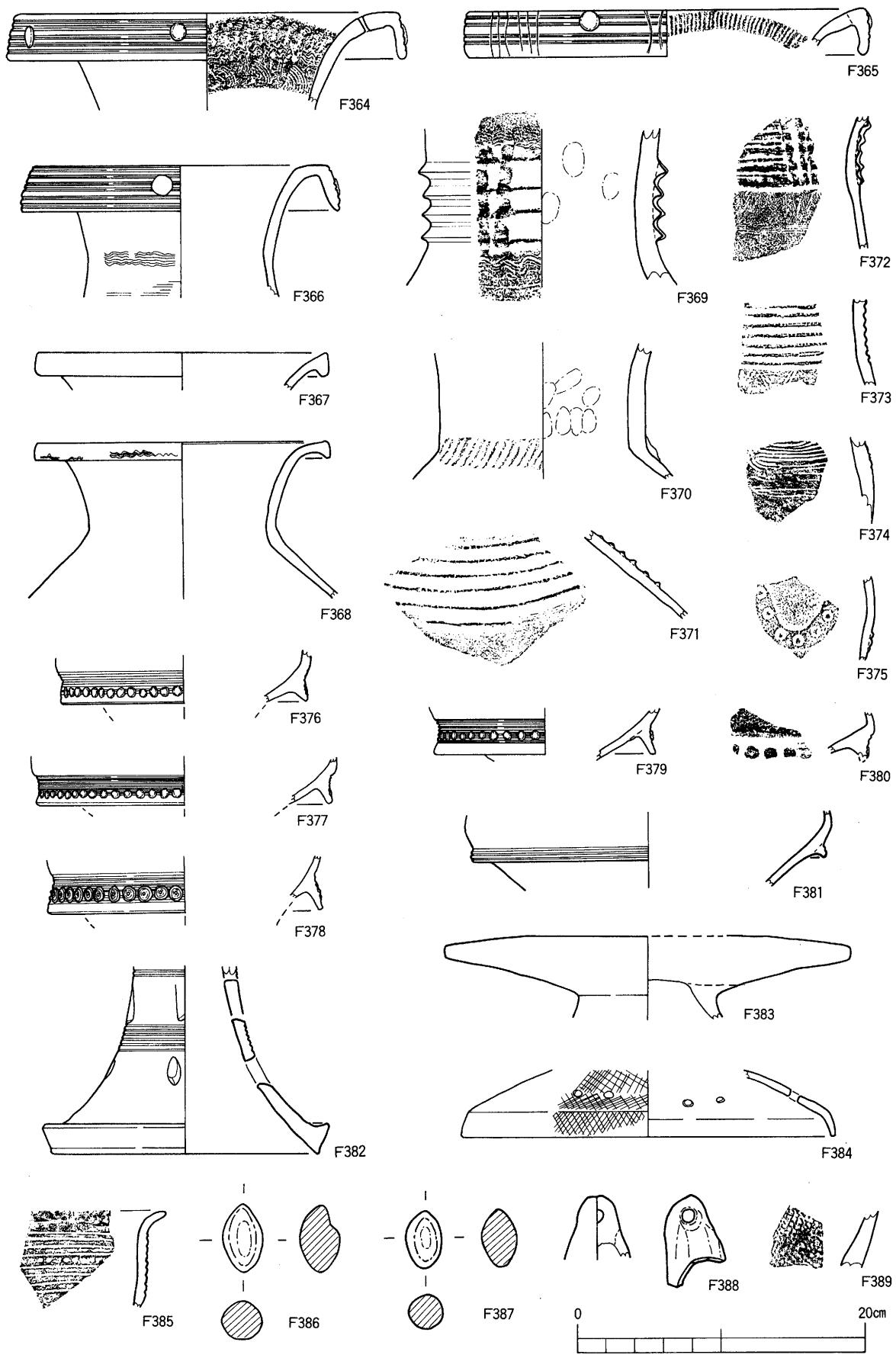
第75図 6区出土縄紋土器

F318は3本の沈線が、F320・321には磨消繩紋が施される。F324・326はくぼみ底の底部である。第4層出土遺物（F322・323・328～330・333・335・336・342・346）：F322は注口土器の注口部破片である。F328・342・346は結節繩紋を、F329は磨消繩紋を施した深鉢口縁部である。F333は浅鉢の可能性を持つ。第3層出土遺物（F350～363）：F350は沈線紋を、F360・F361は結節繩紋を施す深鉢体部である。F359は観塚Ⅲ式併行の深鉢体部である。F362・363の底部は僅かにくぼむ。以上、包含層出土遺物の時期は、何れも北白川上層式3期から一乗寺K式に納まると考えられる。

**包含層出土遺物**（第77～80図、表2、P.L. 51・52） F364～366は垂下させた口縁部の外面に凹線紋を巡らし円形浮紋を貼付ける広口壺である。F364は口縁部内面に扇形紋を施し、上端には1孔を穿つ。F369～375は壺の破片である。F369・372は断面三角形の突帯を貼付け、棒状浮紋を付加する。F370は頸部と体部の境界部に粘土を貼付け、刻み目を入れる。F373は凹線紋間に刻み目を施す。F374は流

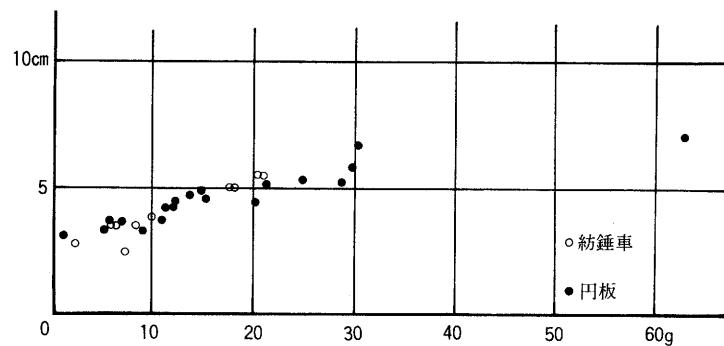


第76図 6区出土繩紋土器

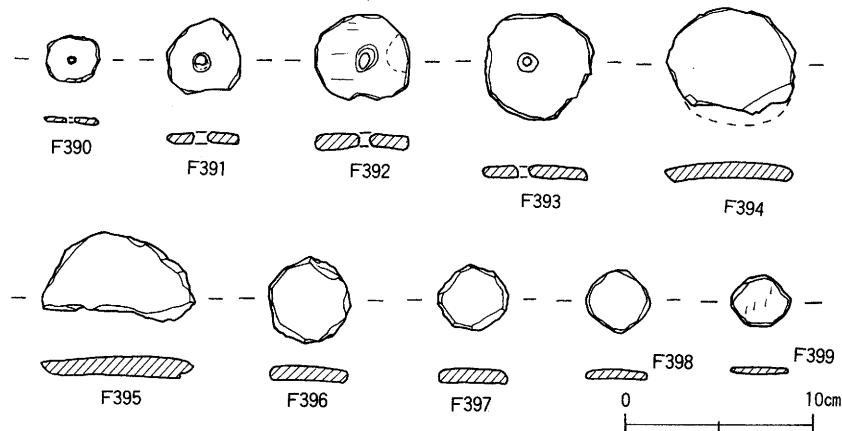


第77図 6・7区包含層出土遺物

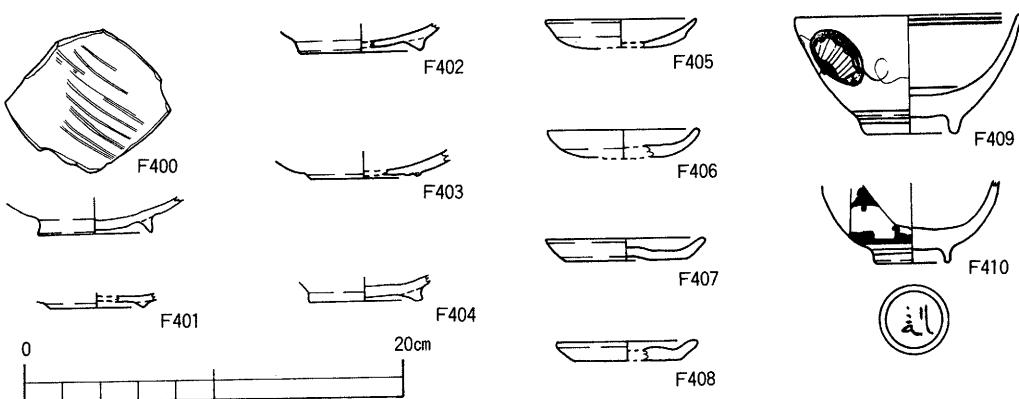
水紋、F375は帯状の粘土を貼付け竹管紋を加える。甕F385はくの字形に短く外反する口縁部をもち、外面に沈線紋を施し、沈線間に刺突を行う。F376～381は複合土器の小破片である。F382は孔を四方に穿ち沈線を巡らす高杯脚台部である。F383は台形土器と考えられる。上面を大きく拡張して平坦面を作り出す。F384の外面には斜格紋が施紋される。F386・387は大きさ4～5cmの土製投弾である。重量はF386が28g、F387が19gである。F388は須恵器の蜻蛉で、県内での出土は希少である。F390～393は紡錘車、F394～399は円板である。F400～403・405・406は瓦器の椀と皿、F404は黒色土器A類、F407・408は土師器皿、F409・410は近世の肥前系染付碗である。



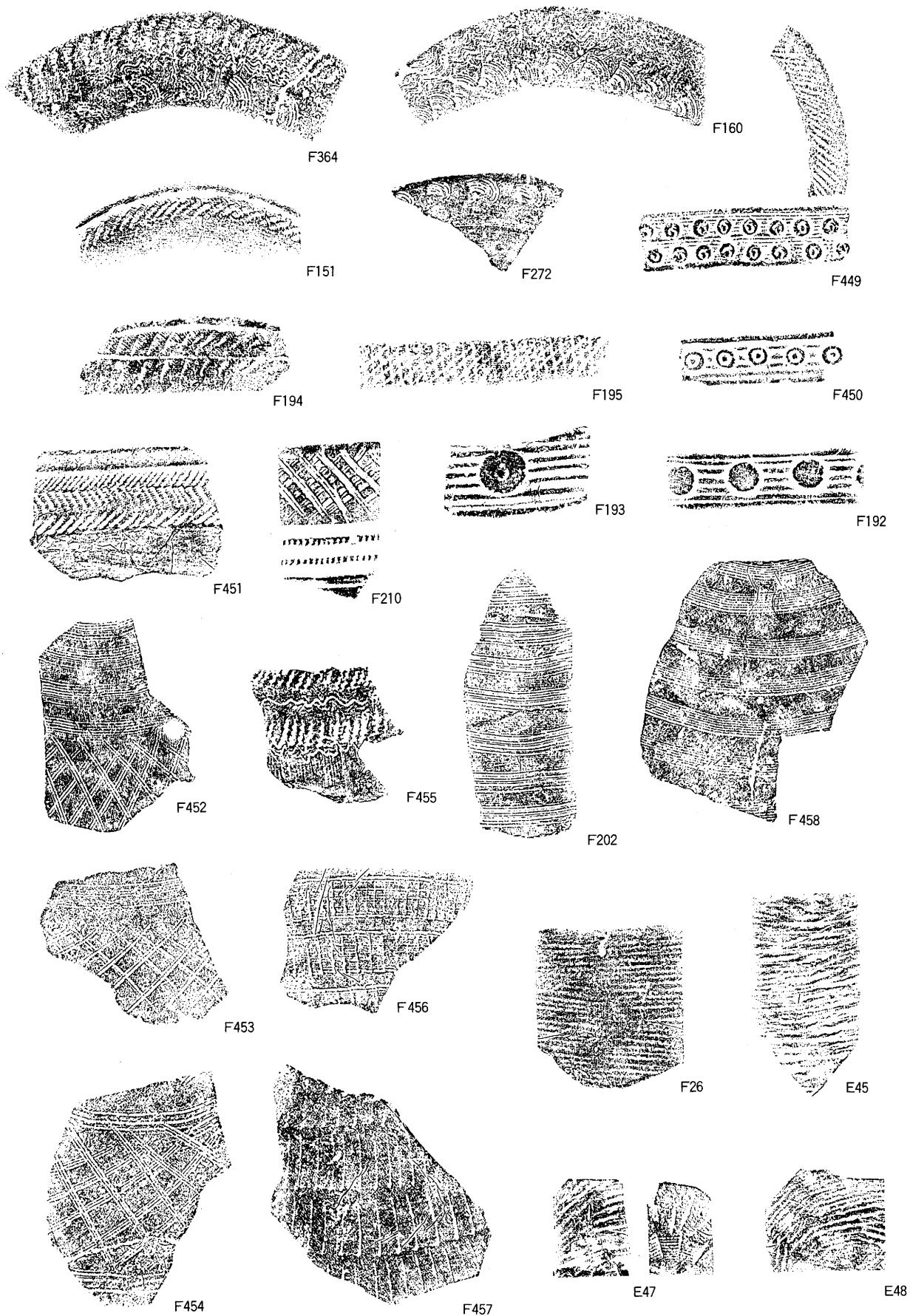
第78図 紡錘車・円板法量図



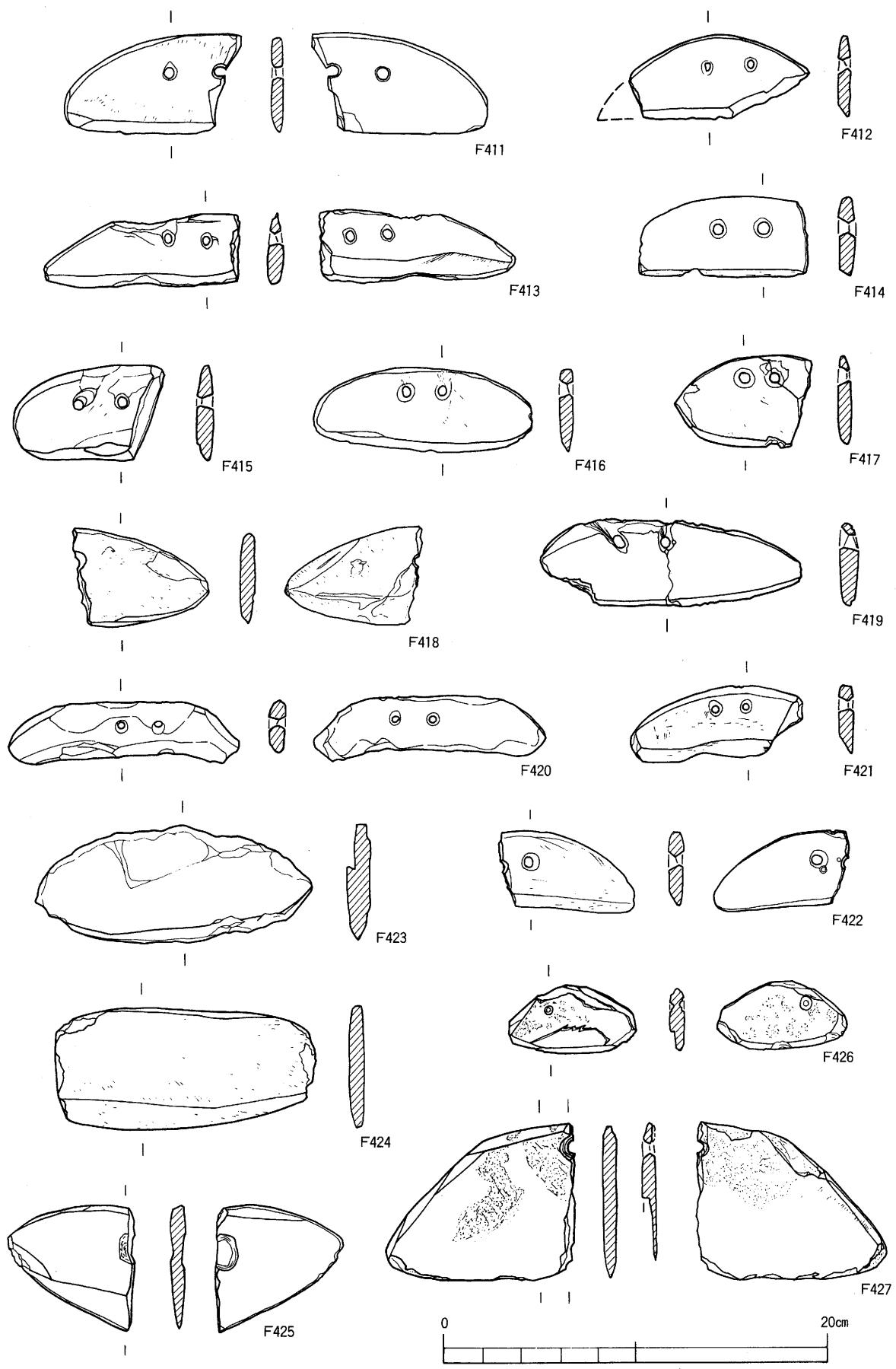
第79図 6・7区包含層出土遺物



第80図 6・7区包含層出土遺物

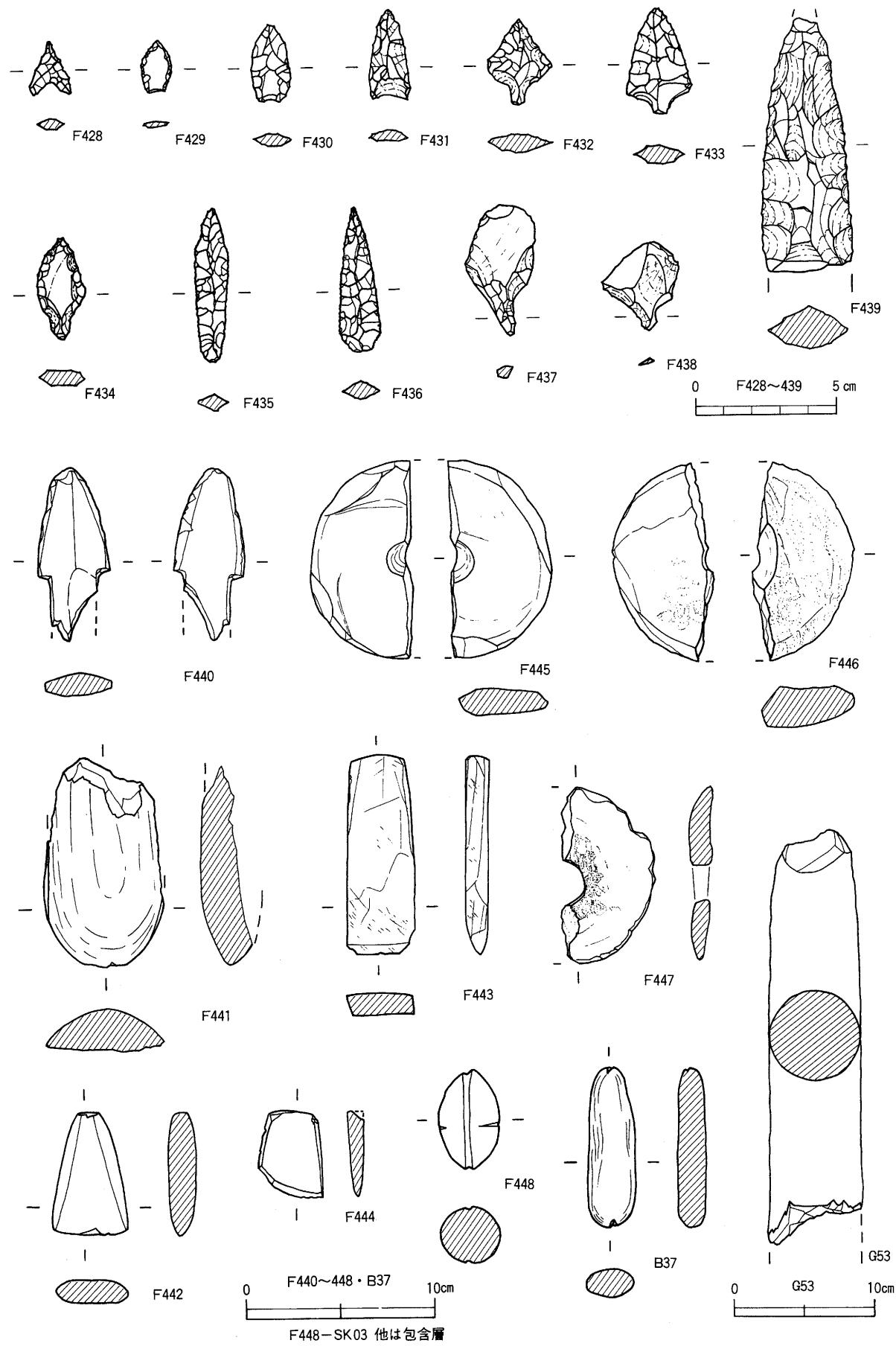


第81図 土器拓影図



F416・418—SD50 F423—SK09 F424—SD45 他は包含層

第82図 石器実測図



第83図 石器実測図

石器（第82・83図、P.L. 56～60） 石包丁は7・8区で全27点が出土している。多くは破損しており完形品は少ない。刃部が直線で半月形のF411～414、杏仁形のF415～419・423・425・426、長方形のF424、刃部が内彎するF420～422に分類できる。F423～426は未製品である。F423・424は体部と刃部が研磨された段階で、F425は敲打により凹部を設けた段階で止まっている。F426は直接錐による穿孔が行われているが貫通していない。F427は復元長約20cmの大型石包丁である。刃部は直線で背部は台形状を呈する。孔は単孔である。F428～436は何れも打製の石鎌である。F428は凹基無茎式、F429～431は平基式であるが基辺はややくぼむ。F432～436は有茎式で、F435・436は柳葉形を呈する。F437・438は石錐である。錐部は共に小さく、F438は頭部下端がそのまま錐部となる。F439は石槍で、先端部と基部が欠損する。F440は磨製石剣で、現存長は9.2cm、幅は最大3.7cmである。F441は大型蛤刃石斧、F442は小型の磨製石斧で片刃である。F443は完形の扁平片刃石斧で、平面形は長方形を呈する。長さ11.6cm、幅は3.7cm、厚さは1.2cmである。基部には装着痕が認められる。F444は石包丁を再加工したと思われる小型の扁平片刃石斧である。F445～447は環状石斧である。いずれも全体の約1/2が欠失し、F447は片面も破損している。外径は9.5～10.7cm、厚さは1.3～2.1cm、復元推定重量は300～350gである。F445の内孔径は0.9cmと小さく未製品である可能性がある。F448は砂岩を加工した有溝石錐である。

## 8区（第9・40・84~88・90図、表1、P.L. 17・18・53・54・60・62）

溝と護岸用の石垣を検出した。7条検出した溝の時期は、弥生時代が3条、古墳時代が1条、奈良時代3条である。石垣には新旧がある。部分的にトレンチを設定して縄文時代の遺構の有無について確認を行ったところ、溝1条を検出した。

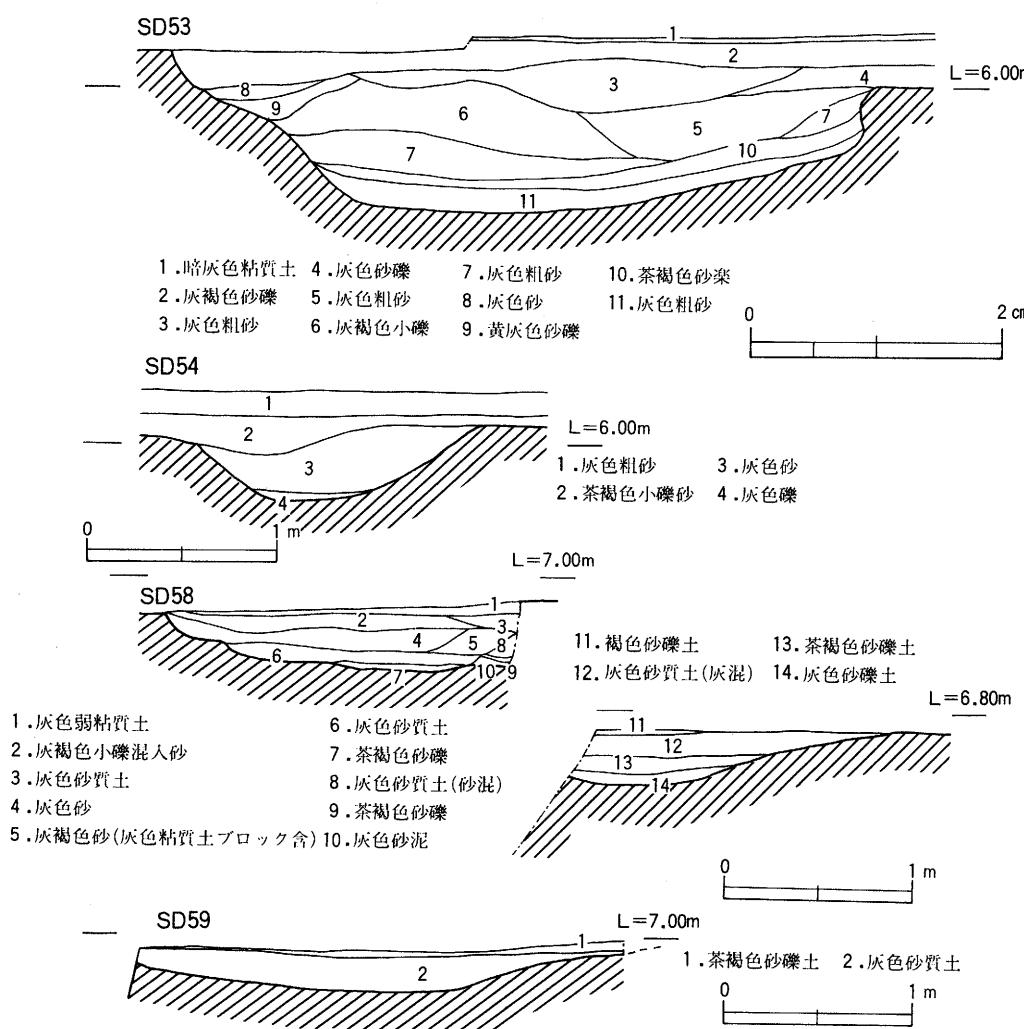
### 遺構（第40・84~86・90図、P.L. 17・18）

S D53 深さ1m・幅は6m以上あり、今回の調査で検出した溝の中では規模の大きい部類に属する。上層から少量の弥生土器が出土している。

S D54 溝埋土や方向により、4区検出のSD51に続くものと思われる。当調査区内では遺物は出土していないが、4区では弥生時代前期の土器が出土している。

S D55 東肩は現代の堤防構築の際に破壊されており規模は不明である。溝内から少量の弥生土器が出土している。今回の調査で検出した弥生時代の溝の内、最東端に位置する。

S D58 古墳時代の溝である。上層では須恵器が出土するものの、下層からは土師器のみが多量に出土する。他に、えぶりや木包丁などの木製品も出土している。



第84図 SD53・54・58・59土層図

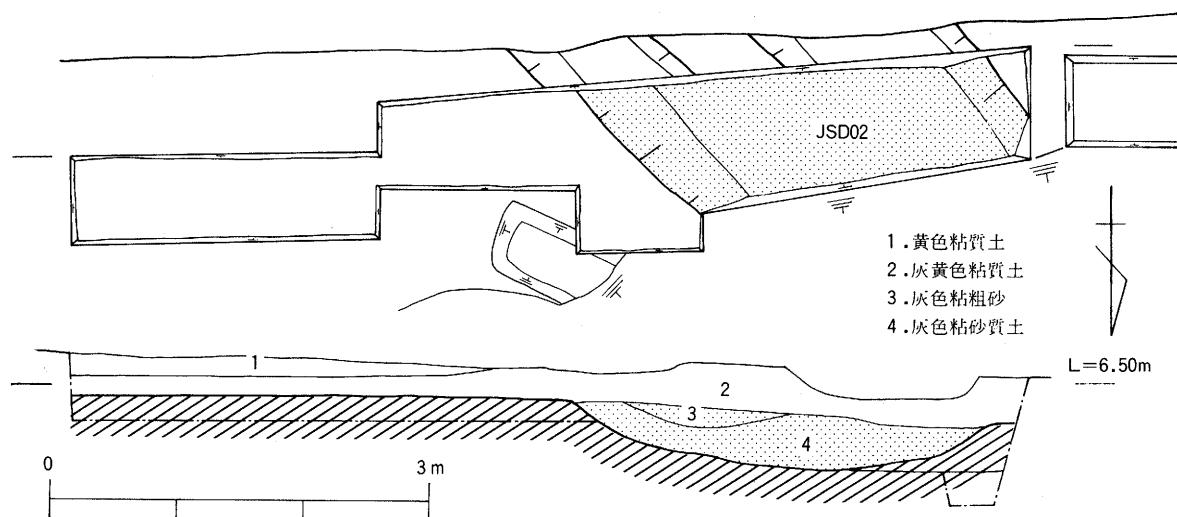
S D 56・57・59 何れも奈良時代の溝であるが、出土遺物は少量である。

S V 05・06 S V 05は全長33mにわたる護岸の石垣である。積み方等から比較的古い時期に属するものと思われるため、写真測量により記録保存した。また、この石垣を除去した後、さらに内側から破損の著しい石垣（S V 06）の存在が明らかになった。

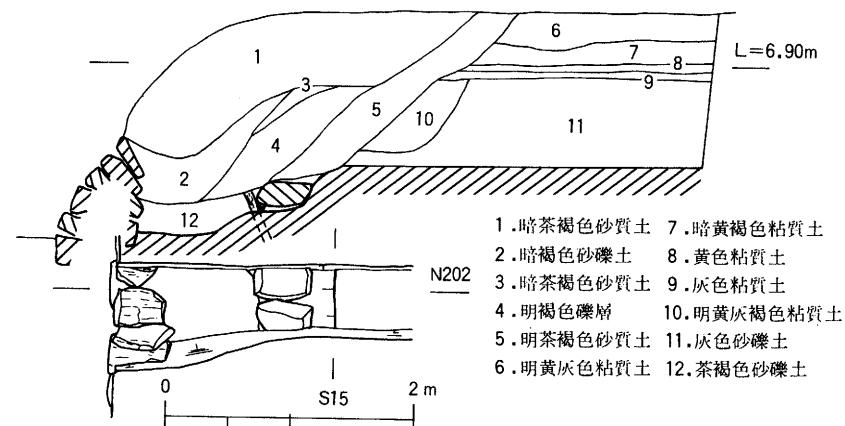
J S D 02 E 247～252にかけて検出した縄文時代の溝で、幅は2.7m、深さは約0.5mである。溝の方向は弥生時代のものと同一である。

遺物（第39・83・87・88図、P L. 53・54・60・62）

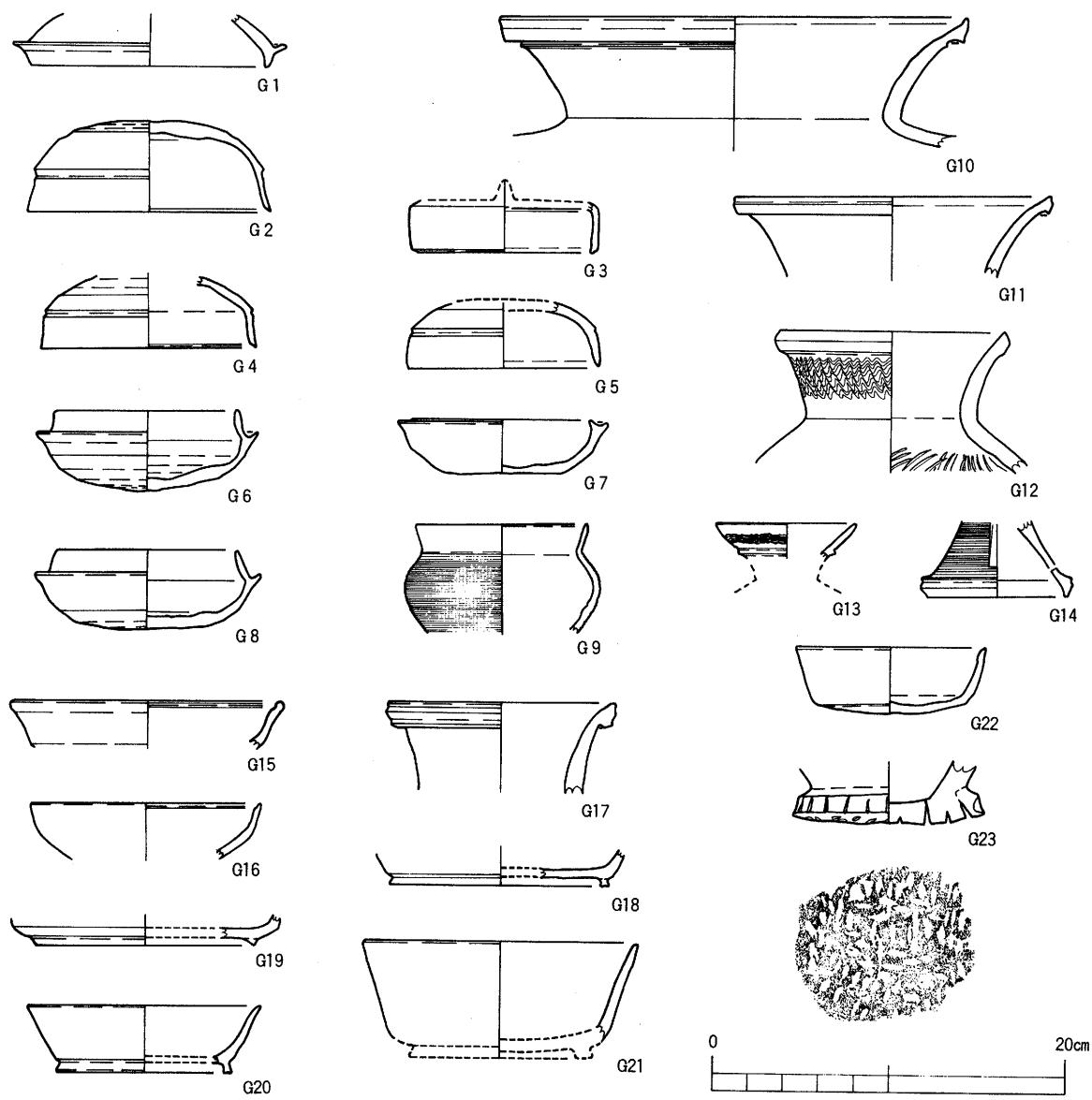
古墳時代の須恵器には、杯蓋（G 1～5）・杯身（G 6～8）・壺（G 9・12）・甕（G 10・11）・甌（G 13）・高杯（G 14）がある。G 1の杯蓋は類例の少ない器形である。G 6の底部外面のヘラ削りの範囲は1/2であるのに対し、G 8では1/3弱である。G 7のたちあがりは極めて短く形骸化している。G 13は甌口縁部の破片である。G 14は短脚四方透かしの高杯である。土師器の杯G 15は口縁端部を丸め、G 16の口縁部は屈曲している。G 18～22は奈良時代の須恵器である。壺G 17は口縁部を外反し端部は垂下させる。G 18～21は高台の付く杯B、G 22は杯Aである。G 24～28は土師器の鉢である。G 24は口縁部をくの字形に屈曲させ、底部には葉の跡がある。土師器の甕G 29～42は口縁部をくの字形に屈曲させ口縁端部は丸くおさめる。G 35～40は口縁部内面をハケ調整、体部内面は、G 32～40がケズリ調整、G 30はハケ調整である。G 45～50は土師器高杯である。杯部は屈曲して外上方にのびる。脚柱部G 49・50の内面はヘラケズリにより調整を行う。G 51は木包丁で、全体の4割近くは欠損している。全長は9cm前後と推定される。G 52はえぶりである。左の端部と上部は欠損する。



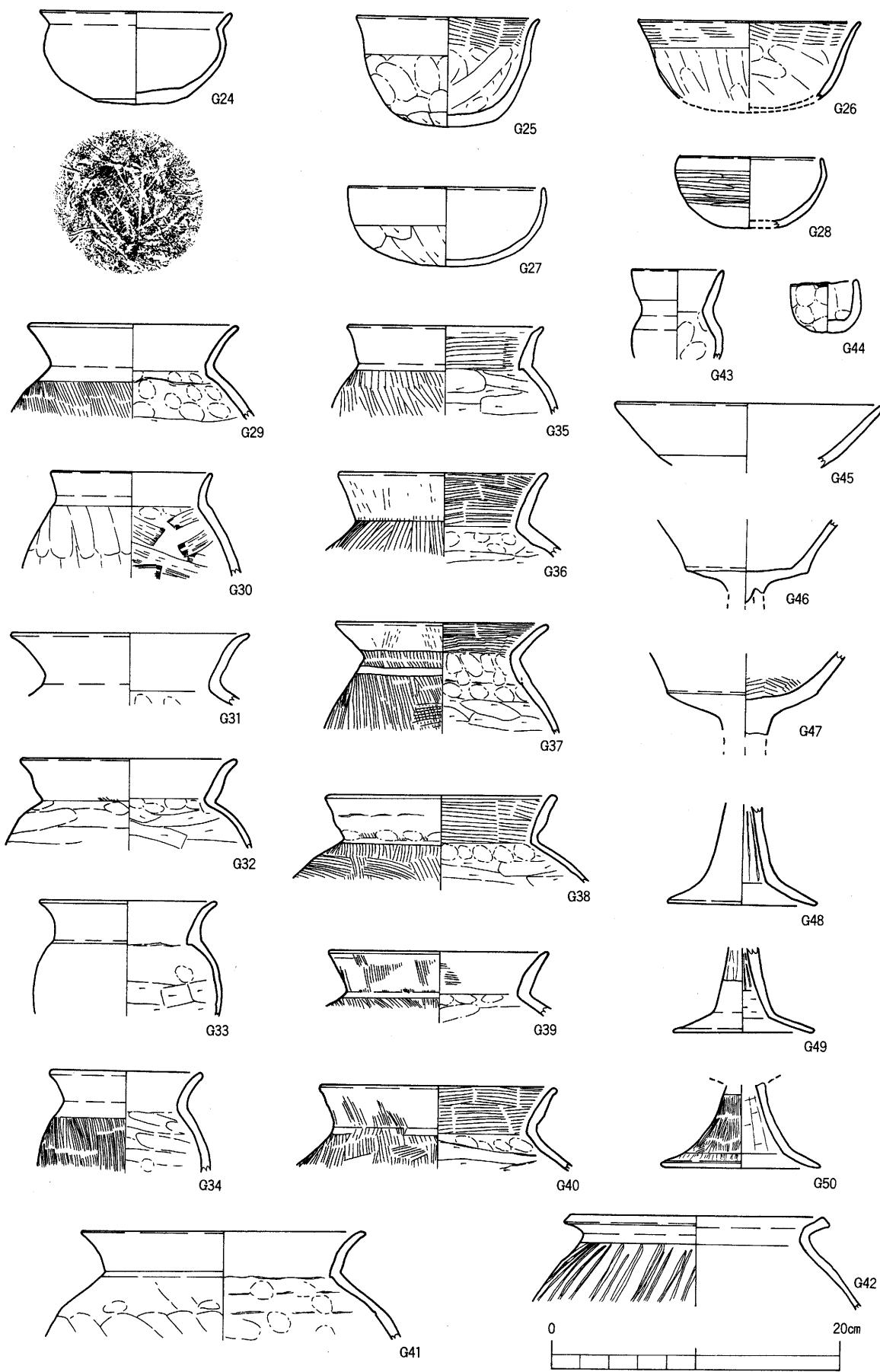
第85図 JSD02実測図



第86図 SV06断面図



第87図 8区出土遺物



第88図 8区（S D58）出土遺物

表1 溝 (SD) 一覧表 (単位: m)

区	SD	幅	底	方向	区	SD	幅	底	方向
1	01	(6.9)	5.1	N-10° -E	6	32	(1.7)	5.3	E-20° -S
〃	02	(2.0)	5.6	—	〃	33	9.5	5.2	N-25° -E
〃	03	(0.8)	5.6	—	〃	34	7.0	5.5	N-45° -E
〃	04	0.6	5.6	—	〃	35	(3.5)	5.6	—
2	05	4.0	5.5	E-35° -N	〃	36	(1.4)	5.5	E-20° -S
〃	06	1.7	5.7	E-40° -N	〃	37	1.6	5.3	N-45° -W
〃	07	3.8	5.2	N-40° -E	〃	38	0.3	6.0	E-10° -S
〃	08	2.1	5.5	E-20° -N	〃	39	1.8	5.6	N-15° -E
〃	09	2.1	5.3	N-35° -E	〃	40	2.4	5.7	E-25° -S
〃	10	1.4	5.5	N-45° -E	〃	41	1.2	5.9	E-30° -S
3	11	(1.2)	6.0	N- 0° -E	〃	42	2.3	5.5	N-25° -E
〃	12	2.0	5.4	N-20° -E	〃	43	2.0	6.0	E-20° -S
〃	13	(1.7)	6.0	N-20° -W	7	44	1.6	6.0	N-40° -W
〃	14	0.7	6.0	N- 0° -E	〃	45	0.3	5.9	E- 0° -S
〃	15	(2.7)	5.4	N-30° -W	〃	46	0.6	5.9	E- 0° -S
〃	16	1.8	6.2	N-30° -E	〃	47	0.9	5.9	E-20° -N
4	17	1.6	5.9	N-45° -E	〃	48	(1.6)	5.7	E-15° -S
〃	18	(0.9)	5.6	—	〃	49	(2.0)	5.7	E-30° -N
〃	19	(0.6)	6.0	—	〃	50	3.9	5.8	N-30° -E
〃	20	(1.6)	6.2	N-45° -W	〃	51	0.5	6.2	E-20° -N
〃	21	(0.6)	5.8	—	〃	52	5.0	6.1	N-15° -W
〃	22	25.2	5.8	N-45° -W	8	53	6.8	5.3	N-25° -E
〃	23	1.1	6.4	N-25° -W	〃	54	2.1	5.7	N- 0° -E
〃	24	(4.4)	6.5	E-30° -S	〃	55	—	4.9	E-35° -S
〃	25	0.8	6.5	E-30° -S	〃	56	1.4	6.3	N-45° -W
〃	26	0.4	6.5	E-35° -S	〃	57	1.2	6.5	N-45° -W
〃	27	(2.8)	6.4	E-35° -S	〃	58	4.7	6.5	N-35° -W
5	28	(3.0)	5.9	—	〃	59	3.8	6.7	E- 3° -S
〃	29	2.0	5.8	N-40° -W	7	101	0.2	6.0	N-10° -E
〃	30	10.0	6.0	N-40° -W	〃	102	2.0	5.7	N- 0° -E
〃	31	6.0	6.0	E-20° -S					

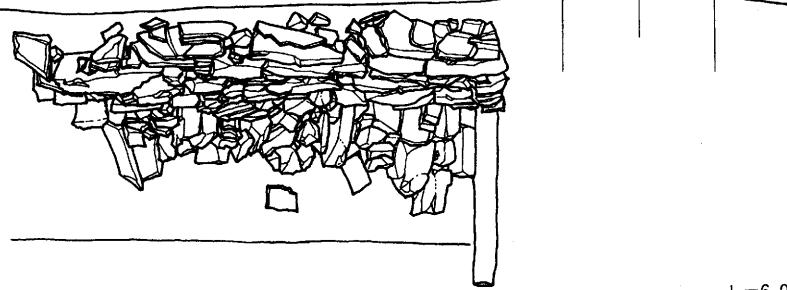
表2 紡錘車・円板一覧表 ( ) ; 現存値 単位: cm · g

遺物番号	遺構	法 量				遺物番号	遺構	法 量			
		径	厚	孔径	重量			径	厚	孔径	重量
B35	SD07	5.5×4.9	0.7	—	20.35		SD50	3.7×3.5	0.5	—	6.93
C28	SD12	2.5×2.7	0.85	0.6×0.4	7.19		〃	5.3×5.8	0.8	—	29.09
C26	SD14	3.8×(3.5)	0.4	0.6×0.35	(7.42)		〃	4.3×(4.2)	0.7	—	(11.45)
F112	SD44	(3.2)×6.75	0.7	0.9×0.5	(22.2)		〃	5.2×4.9	1.0	—	21.15
F503	SD50	5.0×4.5	0.7	0.8×0.4	17.65		SD51	4.9×(4.0)	0.9	—	(17.33)
G101	SD58	3.9×(2.1)	0.6	0.7×0.45	(3.91)	F505	SD52	6.2×(4.2)	0.7	—	(20.48)
F288	SK04	3.4×3.5	0.6	0.9×0.5	8.35		〃	3.7×(3.4)	0.4	—	5.52
F289	〃	3.25×3.5	0.45	0.6×0.4	5.62		〃	4.4×4.0	0.9	—	20.22
C27	2層	3.1×3.5	0.45	0.5×0.4	6.37		SK04	(6.1)×8.0	0.8	—	(40.41)
F390	〃	2.8×2.45	0.3	0.35×0.29	2.26	F394	2層	(5.2)×6.7	0.75	—	30.04
F391	〃	3.75×3.8	0.6	0.9×0.7	9.93	F395	〃	8.1×(4.1)	0.95	—	(35.67)
F392	〃	4.2×5.0	0.7	1.3×0.6	18.02	F396	〃	4.2×4.5	0.7	—	15.45
F393	〃	5.5×5.5	0.6	1.1×0.5	21.00	F397	〃	3.65×3.4	0.8	—	11.10
A17	SD01	5.3×5.2	0.8	—	24.92	F398	〃	3.25×3.2	0.55	—	5.15
	SD35	6.7×7.15	0.9	—	62.77	F399	〃	3.07×2.6	0.35	—	2.32
	SD36	4.6×(3.4)	0.55	—	(9.42)	F506	〃	3.1×3.3	0.85	—	9.19
	〃	4.6×(2.8)	0.9	—	(13.39)		〃	4.8×(3.3)	0.6	—	(10.82)
	〃	5.9×5.3	0.9	—	28.64		〃	4.1×4.3	0.55	—	12.00
	SD40	4.5×4.2	0.6	—	12.28		〃	4.9×4.4	0.55	—	14.57
F504	SD50	4.7×4.1	0.6	—	13.94		〃	4.4×3.8	0.75	—	12.61

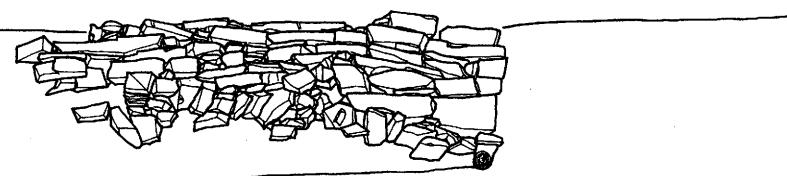
## 注釈及び参考文献

- 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』 和歌山県教育委員会 1989.3
- 『和歌山の研究 地質・考古篇』 清文堂 1979.3
- 『和歌山県史 考古資料』 和歌山県 1983.
- 『和歌山県の地名』 日本歴史地名大系第31巻 平凡社 1983.2
- 『海南市史 第3巻 史料編Ⅰ』 海南市・市史編さん室 1979.3
- 『海南市史研究 第9号』 海南市・市史編さん室 1986
- 『岡村遺跡確認調査概報』 海南省教育委員会・海南省文化財調査研究会 1980
- 桃野真晃 「海南市岡村遺跡確認調査」  
『和歌山県埋蔵文化財情報 No.10』 社団法人 和歌山県文化財研究会 1978.4・5合併号
- 『岡田八幡宮周辺遺跡群調査概報』 海南省教育委員会・海南省文化財調査研究会 1981.3
- 『岡村遺跡発掘調査概報 一亜の川改修工事に伴う発掘調査』 社団法人 和歌山県文化財研究会 1983.7
- 土井孝之 「昭和60年度亜の川災害復旧工事に伴う岡村遺跡発掘調査の概要」  
『和歌山県埋蔵文化財情報 No.18』 社団法人 和歌山県文化財研究会
- 『岡村遺跡 亜の川中小河川改修工事に伴う弥生遺跡発掘調査概報』  
財団法人 和歌山県文化財センター 1988.10
- 井石好裕 「岡村遺跡の調査」  
『(財) 和歌山県文化財センター年報1988』 財団法人 和歌山県文化財センター 1989.6
- 『亀川遺跡ほか発掘調査概報』 海南省教育委員会・海南省文化財調査研究会 1990.3

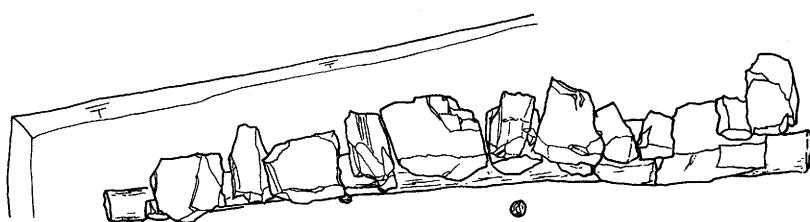
SV02



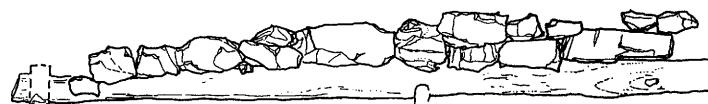
L=6.00m



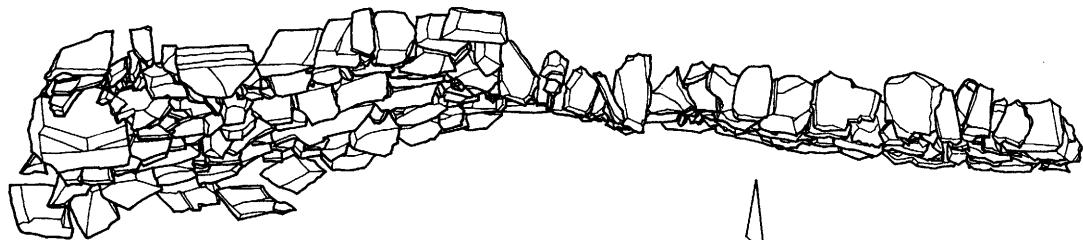
SV03



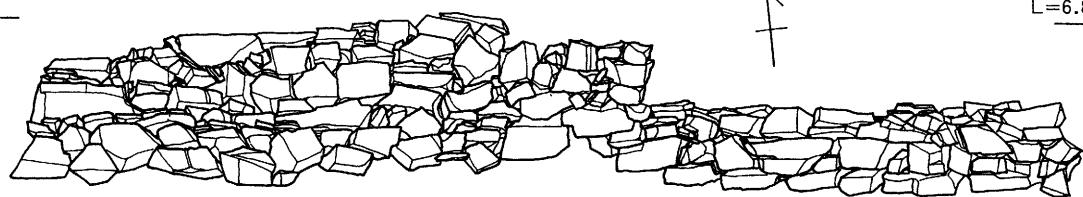
L=6.00m



SV04

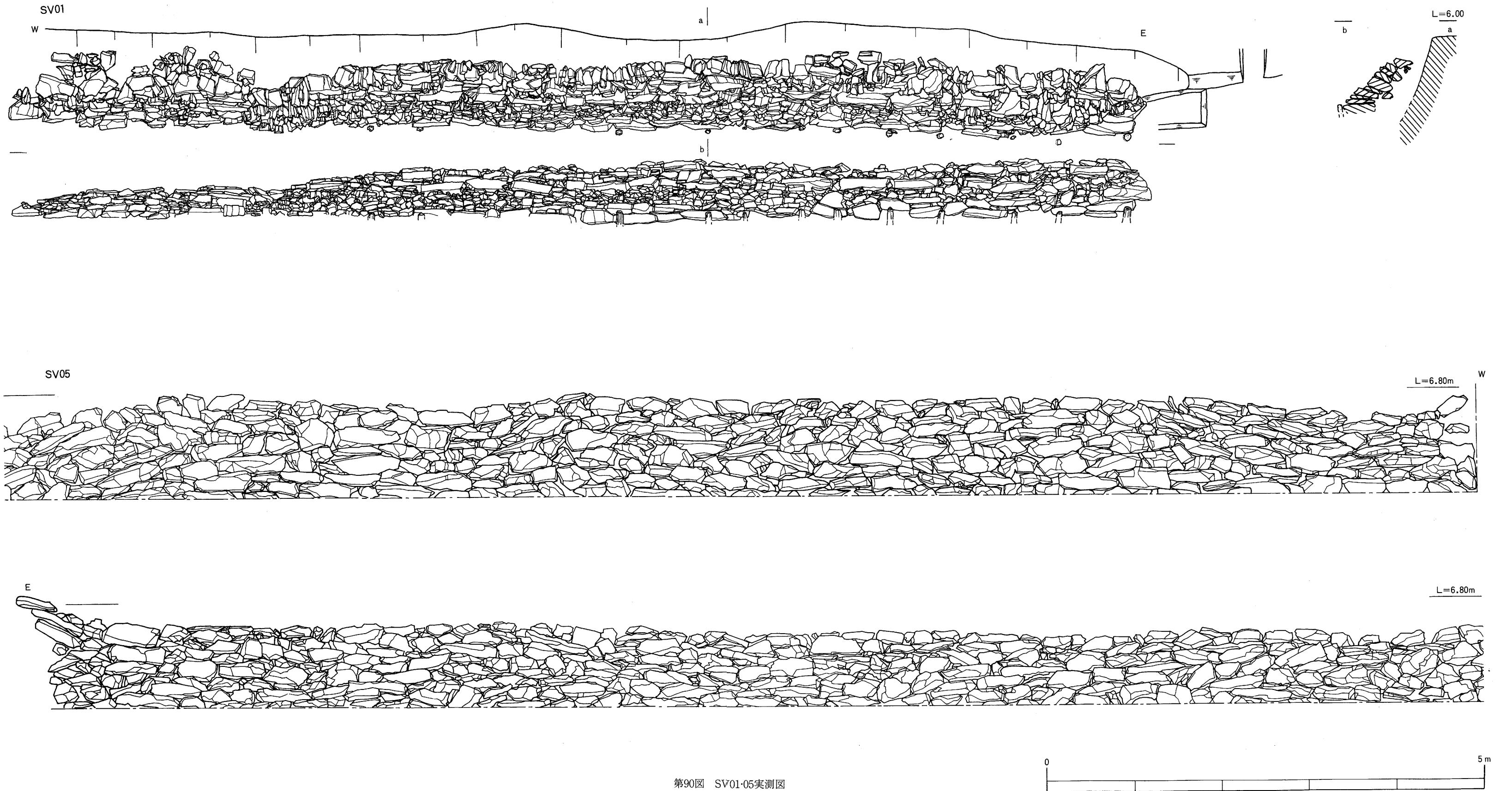


L=6.80m



0 2 m

第89図 SV02~04実測図



# 付篇 微化石分析報告

—岡村遺跡2・5・6区縄文、弥生、古墳時代に属する堆積物の微化石分析—

(株) パリノ・サーヴェイ

## 1. はじめに

岡村遺跡は海南市の北西部、亀川の氾濫源に立地する遺跡である。河川の改修工事にともなって従来より発掘調査がおこなわれ、これまでに縄文時代から古墳時代にかけての遺構や遺物が多数確認されている。今回は、遺物等より時代・時期が明かな遺構内の堆積物及び遺物包含層について花粉分析と珪藻分析を行うことにより、各時期の古植生と堆積環境について解析することを目的とした。

## 2. 分析試料

岡村遺跡は、亀川の河川敷に沿って、1区から8区までの調査区域が設定されている。本分析では2区・5区・6区の各地区から、縄文時代から古墳時代に至る遺構内覆土及び遺物包含層より採取された12点の土壤試料を対象とした。分析試料については表1に一覧表を示す。なお、花粉・珪藻の両分析を行うため、同一試料を2分して使用した。

## 3. 硅藻分析

### 3-1. 分析方法

湿重約7gについて、過酸化水素水と塩酸により試料の泥化と有機物の分解・漂泊を行う。分散剤を加え、蒸留水を満たし放置した後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4~5回繰り返す。次に、L字形管分離で砂質分を除去し、検鏡し易い濃度に希釈、カバーガラス上に滴下し、乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下、乾燥させる。次に、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお珪藻殻が半分以上破損したものについては、同定・計数を行っていない。

珪藻の形態及び生態については、K. Krammer & Lange-Bertalot (1986)などを参考にした。

検出された珪藻化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水~汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した。

堆積環境の変遷を考察するため、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成した。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、2%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示した(図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%以下の種を、○印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示した。また、殻の破損していない物を完形殻、破損したも

のを非完形からとして表示した。

珪藻の各生態性（塩分・pH・流水）に対する適応性の詳細については、まとめて表2・3に示した。

### 3—2. 分析結果

分析を実施した12試料のうち、試料No.4、8、9、10以外の8試料から多量の珪藻化石を検出した。検出種群は、淡水生種を主体とし、海水～汽水生種、汽水生種を伴っており、30属・134種・23変種・1品種・種不明（属のレベルまでしか同定できなかったもの）8の計166分類群であった。産出種群中では、貧潮一不定性種、好アルカリ性種、流水不定性種が多産するが（図1）、試料によっては好酸性種および好流水性種が多産するものもある。殻の保存度については、殆どの試料が60%と比較的高い傾向にあり、殻の保存状態としては良好である。

各試料毎の珪藻化石の産出傾向を、以下に述べる。

#### 2区

縄文落ち（試料No.4）

珪藻化石は産出しなかった。

SD09（試料No.3）

好止水性種・好流水性種が多く認められた。完形殻の出現率は70%と高く、現地性の堆積物とみることができる（図1）。多産種は、好止水性種のGomphonema gracile、Navicula rhychocephala、好流水性種のGomphonema parvulum、Coccconeis placentulaである。

SD08（試料No.2）

流水不定性種、陸生珪藻（小杉、1986）および好止水性種が多産した。多産種は、流水不定性種のE-unotia pectinalis var. minor、Gomphonema angustum、Navicula rhychocephala、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Pinnularia schroederi、好止水性種のCymbella tumida、Stauroneis phoenicenteronである。好止水性種のCymbella tumida、きれいな水域を好む好清水性種とされている（渡辺他、1988）。

SD07（試料No.1）

流水不定性種および陸生珪藻が多産した。多産種は、流水不定性種のAmphora ovalis var. affinis、Navicula rhychocephala、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Navicula confervaceaである。

#### 5区

SD31（試料No.5）

流水不定性種が多産している。多産種は、流水不定性種のAmphora ovalis var. affinis、Eunotia pectinalis var. minor、Pinnularia viridisである。

SD30（試料No.6）

流水不定性種、好流水性種および陸生珪藻が多産する傾向が認められる。多産種は、流水不定性種のEunotia pectinalis car. minor、Navicula pupula、好流水性種のCoccconeis placentula、Gomphonema parvulum、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Navicula muticaである。

SD29（試料No.7）

流水不定性種および好流水性種が多産している。多産種は流水不定性種のEunotia pectinalis var. minor、Gomphonema angustum、Navicula pupula、好流水性種のAchnanthes rostrataである。なお、好止水性種のNavicula pupulaは、好汚濁性種とされる。

## 6区

縄文時代後期の遺物包含層2（試料No.8）

珪藻化石は、産出しなかった。

縄文時代後期の遺物包含層1（試料No.9）

珪藻化石は、産出しなかった。

SD37（試料No.10）

珪藻化石は、産出しなかった。

SD37（試料No.11）

好止水性種および好流水性種が多産している。多産種は、好止水性種のGomphonema gracile、G. acuminatum、好流水性種のGomphonema parvulumである。

SD42（試料No.12）

流水不定性種および好止水性種が多産した。多産種は、流水不定性種のNavicula rhychocephala、Eunotia pectinalis var. minor、好止水性種のGyrosigma spenceriiである。流水不定性種のNavicula rhychocephalaは淡水域に広く認められるが、淡水域でも塩類濃度の高い水域、更に汽水域にも生育することが知られている（Patric, 1966）。

## 3—3. 堆積環境の検討

### 2区

縄文落ち（試料No.4）

珪藻化石が産出しなかったため、堆積環境を推定することはできない。化石が産出しない原因について、いくつか述べておく。珪藻は、一般に光合成に必要なだけの光の届く所であれば地球上のあらゆる水域に生育するが、水域だけでなくある程度の水分があれば土壤表層、樹木の表面等にも生育することが知られている。また、珪藻の細胞を取り巻く殻は、珪酸質でできているため、死後も堆積物中に残り易い。それにもかかわらず珪藻化石が認められないのは、

1) 硅藻が生育できないような環境であった（たとえば、他の植物の勢力が強いために硅藻が繁茂できない等）。

2) 堆積後の続成作用により溶解消失した。

3) 堆積時には存在しても、その後に同等の粒子であるシルトとともに流されてしまった。

等の原因が考えられるが、その原因を一つに限定することはできない。この問題は珪藻分析における今後の検討課題である。

SD09（試料No.3）

本遺構は、弥生時代中期の溝と考えられている。分析を行った試料は、溝内の中位（5層）から得られたものである。検出した珪藻化石群集は好止水性種の産出割合が高く好流水性種も伴うことから、通

常は止水域であったと考えられるが時として流水域に転じることもあったと考えられる。また、高率に産出した好止水性種は、池または湖に見られるような浮遊生種ではなく水底の基物に付着生育する群集であることから、水深を持たない浅い水域であったと考えられる。溜っていた水は、塩類濃度が高い水であった可能性もある。

#### SD08（試料No.2）

本遺構も弥生時代中期の溝と考えられている。本遺構は、前述のSD09遺構と近接し時代的にも同時代と見られている。検出した珪藻化石群集は、流水不定性種および好止水性種が大半を占めており、SD09遺構と同様の停滞水域であったと考えられる。また、陸生珪藻のなかでも特に乾燥状態に耐性のある群集（伊藤・堀内、1989）の産出割合が高いが、それらは停滞水中に生育していた群集と考えるよりも、溝の壁面などの土壤表層やそこに生育する苔等に付着生育していたものと考えた方が妥当である。したがって、溝壁や溝外からの堆積物の落込みも著しかったと思われる。また、好アルカリ性種の産出割合が高く、本溝内の水は弱アルカリ性を呈していた可能性が高い。

#### SD07（試料No.1）

本遺構試料からは、流水不定性種を主体に好流水性種と好止水性種もある程度検出された。堆積環境はSD09・08とほぼ同様と考えられ、通常は停滞水域であったが流水域に転じることもしばしばあったと考えられる。また、SD08と同様に溝の周辺からの落込みもあったと考えられる。水質は、弱アルカリ性であり汚濁状態ではなかったと思われる。

### 5区

#### SD31（試料No.5）・SD30（試料No.6）・SD29（試料No.7）

本区における3遺構は、いずれも古墳時代（5c～6c）の溝と考えられている。各遺構試料における群集構成は幾分異なるものの、珪藻化石群集から堆積される堆積環境はほぼ同様と考えられるので、一括して述べる。群集は、2区の各試料とは異なり好流水性種が多産し、また湿地等で認められる好酸性種が高率に産出したことから、流水の影響を受ける池沼的な堆積環境が推定される。特にSD30（試料No.6）・SD29（試料No.7）は流水の影響が強いと考えられるが、両試料の層相は砂質分の含有量が高く、材片等を含むことは調和的である。その水質は、2区の結果と比べ酸性の度合いが強いと考えられ、また好汚濁性種（渡辺他、1988）が産出したことから、これらの溝内の水質が悪化したことが示唆される。

### 6区

#### 縄文時代後期の遺物包含層2（試料No.8）・包含層1（試料No.9）・SD37（試料No.10）

珪藻化石が産出しなかったため、堆積環境を推定するのは困難である。その原因としては、2区の縄文落ち（試料No.4）と同様の諸点があげられる。

#### SD37（試料No.11）

本試料は、弥生時代（前期？）の溝内堆積物Ⅷ層で、好止水性種が高率に産出し好流水性種の一種が多産したことから、基本的には水深の浅い止水域であったが、流水域に転じたこともあると推定される。

#### SD42（試料No.12）

本試料は弥生時代（中期）の溝内堆積物Ⅳ層で、流水不定性種が最も高率に産出し好止水性種も比較的割合が高いことから、殆ど水の流れのない止水域が推定される。層相も黒灰色の粘質土で静かな環境

にしたものと考えられ、本分析結果と調和的である。

#### 3—4. まとめ

珪藻は、その生態学的な特性からみて生育する場所の堆積環境が異なれば、たとえ近接した地点でも群集組成が異なっている場合が多い。しかし今回の場合、分岐地点が異なっているにもかかわらず、時代毎に群集組成に共通した特徴が確認された。今後さらに検討すべき点も多いが、とりあえず各時代別にその特徴をまとめておく。

まず縄文時代の試料では、珪藻化石が産出しなかった。また弥生時代前期?とされる試料からは、珪藻化石の産出はみたものの絶対量は少なかった。さらに弥生時代中期の試料になると、珪藻化石は多産するようになる。その体積環境は基本的には停滞水域であったが、流水の影響を受けることもあったと推定される。その水質は弱アルカリの比較的きれいな水であったであろう。古墳時代の各試料では、通常は止水域であったと考えられるが、弥生時代に比較して流水の影響が強くなったと考えられる。その水質は悪化し、汚濁が進行したと考えられる。

以上、各時代毎の堆積環境をまとめてみた。これらが本遺跡周辺における各時代の堆積環境の変遷を物語る可能性もあるが、溝内試料ではその垂直的な採取位置など（底付近が上位かなど）によって群集組成が異なる可能性もある。今後遺構内堆積物を連続的に採取・分析したうえで改めて検討する必要がある。

### 4. 花粉分析

#### 4—1. 分析方法および結果の表示法

花粉・胞子化石の抽出は、以下に示した方法で行った。

試料を湿重で10~15 g 秤量し、フッ化水素（HF）処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う次に重液（ZnBr<sub>2</sub> 比重2.2）を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトトリル処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解して、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。

処理後の残渣はよく攪拌し、マイクロピペットで適量をとり、グリセリンで封入しプレパラートを作成した。検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類（Taxa）について同定・計数した。

古植生の検討を行うために、花粉化石群集変遷図を作成した。出現率は木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉数を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で算出した。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

#### 4—2. 結 果

花粉分析結果を図2a・b、表5に示す。以下に、花粉化石群集の特徴を各試料別に述べる。

##### 2区

SD07（試料No.1）

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科・スギ属がこれに次ぐ。草本ではイネ科が高率で出現しており、ガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属といった水生植物の花粉化石も少量ながら出現している。また、水生のシダ類であるミズワラビ属・サンショウモの胞子化石も出現している。

#### SD08 (試料No.2)

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、マキ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科・スギ属をともなっている。草本ではイネ科が高率に出現しており、ヒルムシロ属・オモダカ属といった水生植物の花粉化石も少量ながら出現する。

#### SD09 (試料No.3)

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、マキ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科・スギ属をともなっている。草本ではイネ科・クワ科・ヨモギ属が多く出現しており、オモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属といった水生植物の花粉・胞子化石も少量ながら出現する。

#### 縄文落ち (試料No.4)

本地点では花粉・胞子化石の保存状態が悪く、化石はほとんど検出されなかった。

### 5区

#### SD31 (試料No.5)

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、マツ属復総管束亜属・スギ属などをともなっている。草木ではイネ科・ヨモギ属が多く出現し、ガマ属・オモダカ属・ミズワラビ属といった水生植物の花粉・胞子化石も少量ながら出現する。

#### SD30 (試料No.6)

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、マツ属復総管束亜属・ニレ属・ケヤキ属などをともなっている。草本ではイネ科・ヨモギ属が多く出現し、ガマ属・ヒルムシロ属・オモダカ属・ミズアオイ属といった水生植物の花粉・胞子化石も少量ながら出現する。そのうちイネ科・オモダカ属は、花粉化石が塊状で出現するものもあった。

#### SD29 (試料No.7)

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、マキ属・ニレ属・ケヤキ属などをともなっている。草本ではガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が多く出現する。そのうちガマ属は、4集粒ものものが多数出現している。

### 6区

#### 縄文時代後期遺物包含層1・2 (試料No.8、9)

本試料では花粉・胞子化石の保存状態が悪く、花粉化石がほとんど検出されなかった。

#### SD37 (試料No.10、11)

試料No.10は、花粉・胞子化石の保存状態が悪く、花粉化石がほとんど検出されなかった。

試料No.11は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率に出現し、マキ属・ニレ属・ケヤキ属などをともなっている。草本花粉ではイネ科・クワ科・ヨモギ属が多く出現し、花粉・胞子全体に

占める草本花粉の割合が著しく高くなっている。そのうちイネ科・ヨモギ属は、花粉化石が塊状で出現するものもあった。可食植物であるキュウリ属の花粉も検出されている。

#### SD42（試料No.12）

本試料における花粉化石群集の組成は、木本ではコナラ属アカガシ亜属とシイノキ属が高率で出現し、マキ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科・スギ属をともなっている。草本ではイネ科・ヨモギ属が高率で出現しており、オモダカ属・ミズアオイ属といった水生植物の花粉化石も少量ながら出現する。

### 4—3. 考 察

本分析試料の年代については、遺物などから縄文時代後期より古墳時代にかけてとされている。このうち縄文時代後期の各試料からは花粉・胞子化石がほとんど検出されなかつたので、弥生時代以降の堆積物について考察を行う。なお、花粉・胞子花粉がほとんど検出されなかつた原因としては、好気的条件下における酸化や土壤微生物によって花粉が分解してしまつた可能性がある。

本調査で得られた花粉化石群集は全地点ともほぼ同様な組成を示すことから、弥生時代から古墳時代にかけて古植生の変化はあまり見られなかつたものと推測される。したがつて、亀川の集水域周辺の古植生は、シイ類・カシ類などが優先する照葉樹林であった。また、マキ属・ヤマモモ属・シキミ属・ハイノキ属・ティカカズラ属などといった照葉樹林の構成種の花粉化石が出現することからも、亀川の集水域周辺は照葉樹林帯に属していたと考えられる。これら照葉樹林には混交ないしはモザイク状に住分けるような形で、スギやヒノキ科といった針葉樹も生育していたを推測される。

ところで、本遺跡ではシイノキ属の花粉が30%~40%と高率を占めるのが特徴である。シイノキ属は虫媒性であり、花粉の生産量・散布量ともに低く花粉組成中での出現率は過小評価される傾向があることから、今回のような高率の出現率はシイ林が成立していたことを強く示唆する（松下ほか、1988）。シイ類は照葉樹の中では潮風の影響に強く沿岸部にも生育することができるが、しかし、カシ類は潮風に弱いため、沿岸部にはシイ林、内陸部にはカシ林という層状構造を有することになる（服部、1988）ことから、沿岸部に位置する本遺跡周辺にはシイ類が多く分布していたものと推測される。

古墳時代である試料No.6では、ニヨウマツ類の花粉化石が多くなっている。これは、人間が自然植生に干渉することによって、代償植生を構成する種類の一つであるニヨウマツ類が増加したと考えられる。従来の研究成果によると関西地方に於いてはほぼ1500年前から増加するとされており（那須、1980）、本調査結果もほぼこれに一致している。また、和歌山県沿岸部では新宮市の浮島の森湿原で花粉分析が行われている（松下、1988）が、ほぼ同時代と思われるSGU-II帶上部ではシイ・カシ類が優占しており、本調査結果とほぼ同様な森林植生を示していたものと考えられる。

一方、各時代の溝中の堆積物からはガマ属・オモダカ属・ミズアオイ属・コキヅル属・ミズワラビ属などといった花粉・胞子化石が検出されており、溝およびその周辺にはこれらの種類が生育するような湿地もしくはみずたまりのようなものが存在していた可能性がある。特に古墳時代の試料No.6ではイネ科とオモダカ属の花粉化石が、弥生時代前期？の試料No.11ではイネ科とヨモギ属の花粉化石がそれぞれ塊状で出現することから、これらの花粉を放出した母植物が近くに存在していたと推測される。また試料No.11では、ヨモギ属・イネ科の花粉化石が高率に出現し、乾燥した草地に生育するオオバコ属

も出現し、さらに草本花粉の割合も高いことから、付近には草地があったと推測される。また、可食植物であるとされるキュウリ属の花粉化石が出現する点も注意される。

#### 4—4. まとめ

本調査により、遺跡周辺の古植生は次のように推測される。弥生時代以降の遺跡周辺は照葉樹帯に属し、シイ類・カシ類などの照葉樹によって構成され、溝には湿地を好むような植物が生育していたと推測される。また、古墳時代には、人類活動の影響と思われるニヨウマツ類の増加のきざしがみられる。本調査によって以上の事が明らかになったが、今後は遺跡内の標準土層や溝内堆積物についての連続試料を採取・分析し、これにもとづく植生変遷や栽培植物の検討を行っていく必要がある。

### 5. 総括

本分析対象は土層断面から連続的に採集された試料ではないため、各時代ごとの堆積環境や古植生の変遷を検討するうえで残された課題が多い。今回の分析結果は、今後基本層序の連続試料などが分析された時点で再評価する必要があろう。ここでは、各分析結果より得られた考察を併記するにとどめる。なお、縄文時代については花粉・珪藻分析結果から、古植生や堆積環境を推定することはできなかった。

弥生時代以降の溝内は基本的に停滞水域であったが、しばしば水が流れることもあった。水質は、弱アルカリ性を呈していたが、古墳時代になると若干水質が汚濁したと考えられる。

一方、遺跡周辺の古植生は、少なくとも弥生時代以降シイ類・カシ類などの照葉樹によって構成される照葉樹林帯であったと考えられ、溝周辺には湿地を好むような水湿地性の植物が生育していたと推測される。また、古墳時代になると人類活動の影響を示唆するニヨウマツ類の増加のきざしがみられる。

#### 引用文献

- 服部 保 (1988) 日本国のシータブ型照葉樹林の群落生態学的研究. pp98.
- Hustedt, F. (1930) Bacillariophyta (Diatomeae). In Pascher, Die Süsswasser Flora Mitteleuropas, Part 10, 466p. Jena, G. Fischer
- 伊藤良永・堀内誠示 (1989) 古環境解析からみた陸生珪藻の検討—陸生珪藻の細分—. 日本珪藻学会第10回大海講演要旨集, p.17.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, p.9-44.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1): p.1-876.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1988) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2 (2): p.1-596.
- 松下まり子・前田保夫・松本英二・松島義章 (1988) 新宮(紀伊半島)および室戸岬の完新世植物史—とくにシイ林の成立について. 日本生態学会誌 38, No. 1, p.1-8.
- 那須孝悌 (1980) 花粉分析からみた二次林の出現. 関西自然保護機構会報, No. 4, p.3-9.
- 田中宏之・吉田武雄・中島啓治 (1977) 奥利根地域の珪藻類. 奥利根地域学術調査報告書Ⅱ, p.114-135.
- 渡辺仁治・根来健一郎・福島 博・小林 弘・浅井一視・後藤敏一・南雲 保・小林艶子・真山茂樹・伯耆晶子 (1986) 硅藻群集を生物指標とする陸水汚濁の定量的環境評価法の研究. 日産科学振興財団研究報告書, vol.9 (昭和61年度), pp.139-167.
- 渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視 (1988) 硅藻群集による有機汚濁指数(DAIpo)の止水域への適用. 水質汚濁研究, 第11巻, 第12号, 765-773, 1982.

表1 岡村遺跡珪藻・花粉分析試料一覧表

試料番号	地区	遺構	層位	土質	備考
1	2	SD07 (W)	4	灰色シルト質粘土	弥生時代（中期）
2	2	SD08	2	黄灰色シルト質粘土	弥生時代（中期）
3	2	SD09	3	灰色シルト質粘土	弥生時代（中期）
4	2	縄文落ち	1	灰色シルト質粘土	縄文時代の落ち込み
5	5	SD31	1	黄灰色シルト質粘土	古墳時代
6	5	SD30	2	黄灰色シルト質粘土	古墳時代
7	5	SD29		黄灰色シルト質粘土	古墳時代
8	6	包含層	3	オリーブ灰色粘土質シルト	縄文時代遺物包含層2
9	6	包含層	3	オリーブ灰色砂質粘土	縄文時代遺物包含層1
10	6	SD37	4	オリーブ灰色砂質粘土	弥生時代（前期）
11	6	SD37	8	オリーブ灰色砂質粘土	弥生時代（前期）
12	6	SD42	4	オリーブ灰色シルト	弥生時代（中期）

表2 珪藻の生態分類

塩分濃度に対する区分	塩分に対する適応性	生育環境（例）
海水性種： 真塩生種（Euhalobous）	塩分濃度40.0%以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖
	海産生種、塩分濃度30.0~40.0%に出現するもの	一般海域（ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域）
汽水性種： 中塩性種（Mesohalobous）	汽水生種：塩分濃度0.5~30.0%に出現するもの 強中塩性種（ $\alpha$ -Mesohalobous） 弱中塩性種（ $\beta$ -Mesohalobous）	河口・内溝・沿岸・塩水湖・潟
淡水生種： 貧塩生種（Oligohalobous）	淡水生種：塩分濃度0.5%以下に出現するもの	一般陸水域（ex 湿地・池・沼・河川・川・沼沢地・泉）

表3 淡水生種の各生態性に対する適応性

塩分・pH・流水に対する区分	塩分・pH・流水に対する適応性	生育環境（例）
塩分に対する適応性	貧塩-好塩性種（Halophilous）	小量の塩分がある方がよく生育するもの 高塩域（塩水遷上域・温泉・耕作土壠）
	貧塩-不定性種（Indifferent）	小量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの 一般陸水域（湖沼・池・沼・河川・沼沢地 etc）
	貧塩-嫌塩性種（Halophobous）	小量の塩分にも耐えることができないもの 温泉・湿地・沼沢地
	広域塩性種（Euryhalinous）	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現する種類 一般淡水～汽水域
pHに対する適応性	真酸性種（Acidobiotic）	pH.7以下に出現、pH.5.5以下で最もよく生育するもの 温泉・湿地・火口湖（酸性水）
	好酸性種（Acidophilous）	pH.7付近に出現、pH.7以下で最もよく生育するもの 温泉・湿地・沼沢地
	pH-不定性種（Indifferent）	pH.7付近で最もよく生育するもの 一般陸水（ex 湖沼・池沼・河川）
	好アルカリ性種（Alkaliphilous）	pH.7付近に出現、pH.7以上で最もよく生育するもの
	真アルカリ性種（Alkalibiotic）	pH.8.5以上のアルカリ性水域にのみ出現するもの アルカリ性水域（少ない）
流水に対する適応性	真止水性種（Limnobiotic）	止水にのみ出現するもの 流水のない湖沼・池沼
	好止水性種（Limophilous）	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの 湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種（Indifferent）	止水にも流水にも普通に出現するもの 河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種（Rheophilous）	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの 河川・川・小川・上流域
	真流水性種（Rheobiotic）	流水域にのみ出現するもの 河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生珪藻	好気性種（Aerophilous）	好気的環境（Aerial habitats） 多少湿り気があれば土壤表面中やコケの表面に生育可能である。 特に土壤中に生育するものについての環境をSoil habitatsといふ。 ○土壤表面中、○岩幹や倒木上のコケに付着 ○コケに付着、○木の根元のコケに付着 ○濡れた岩の表面に付着、○濡れたコケに付着 ○水辺のコケに付着、○滝の飛沫で濡ったコケ や岩上の壁に付着、○石炭岩上に生えたコケに付着などさまざまな生活形態がある。

（区分、適応性は田中・吉田・中島、1977 奥利根地域学術調査報告 II p.114-135を基に一部削除、環境については加工し作成した）

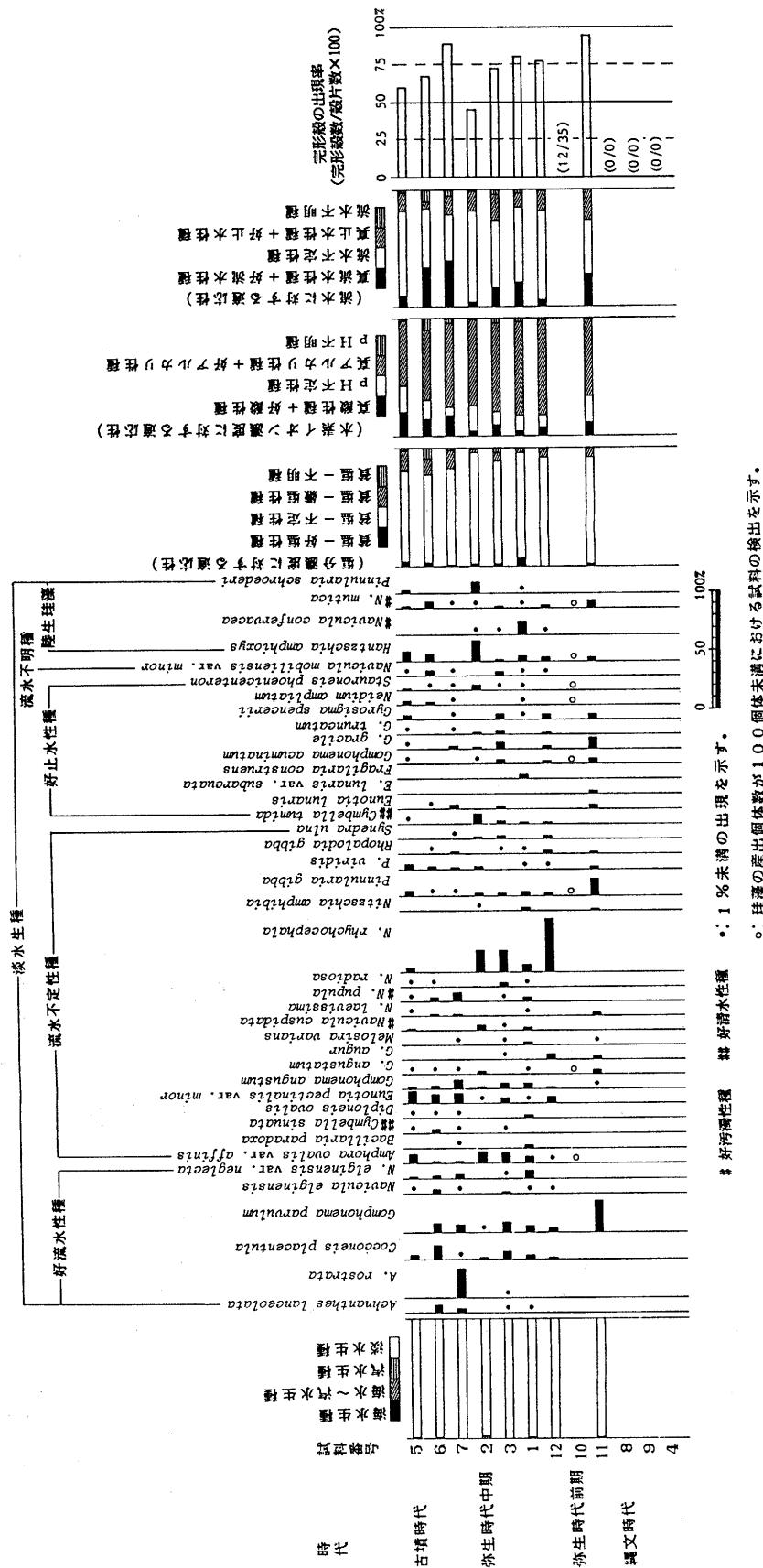


図1 岡村遺跡における主要珪藻化石群集変遷  
(各種産出棒グラフ及び海水・汽水・淡水生の帶グラフは全体基數、右側の貧塩性種の各生態性に対する適応性  
(各種の帶グラフは貧塩性種として表示した。なお、いずれも100個体以上検出された試料について記した。)

表4 岡村遺跡珪藻分析結果

Species Name	Ecology				5	6	7	2	3	1	12	10	11	8	9	4
	H.R.	pH	C.R.													
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.)W.Smith	Euh-Meh			-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Achnanthes brevipes</i> var. <i>Intermedia</i> (Kuetz.)Cleve	Meh				1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
<i>Amphora strigosa</i> Hustedt	Meh				-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula digitoradiata</i> (Greg.)A.Schumidt	Meh				-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cf. peregrina</i> (Ehr.)Kuetzing	Meh				-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula salinarus</i> Grunov	Meh				1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia littoralis</i> Grunov	Meh				-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira bramputrae</i> (Ehr.)Hakansson & Locker	Meh				-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>#Achnanthes exigua</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunov	Ogh-hil	al-il	ind		-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>#Achnanthes japonica</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunov	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	13	7	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes rostrata</i> Destrup	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	51	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Actinella brasiliensis</i> Grunov	Ogh-ind	ac-il	ind		-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora inariensis</i> Kramer	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>·Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	Ind	Ind		1	2	1	1	1	2	1	-	1	-	-	-
<i>·Amphora normanii</i> Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		2	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.)IV.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind		15	3	3	20	21	10	2	2	-	-	-	-
<i>Anoaeoneis gomphonemata</i> (Grun.)H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Anoaeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.)Pfizer	Ogh-hil	al-bl	ind		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Bacillaria paradoxum</i> Gmelin	Ogh-hil	al-il	ind		-	-	1	-	-	5	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph		3	1	-	-	1	4	-	1	-	-	-	-
<i>·Caloneis leptosoma</i> Kramer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	Ind	Ind		3	-	-	1	-	3	3	5	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis</i> sp.1	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placenta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		6	24	2	3	16	7	3	-	-	-	-	-
<i>#Cymbella aspera</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	Ind	Ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cymbella cistula</i> (Hemp.)Grunov	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	-	2	-	3	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella heteroleura</i> var. <i>minor</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	L-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella mesiana</i> Cholnoky	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	Ind	L-ph		5	-	2	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>#Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	Ind	Ind		1	1	1	4	2	1	1	-	-	-	-	-
<i>#Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	al-il	ind		1	6	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella subaequalis</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	L-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>#Cymbella tunida</i> (Breb.)Heurck	Ogh-ind	al-il	L-ph		2	-	-	16	5	3	3	-	-	-	-	-
<i>#Cymbella turgidula</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>#Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i> Skvortzov	Ogh-ind	al-il	r-bl		-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diatomea balteolana</i> (W.Smith)Greville	Ogh-ind	Ind	Ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis oblongula</i> (Naegeli)Cleve-Euler	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	2	1	-	-	5	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia turgida</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	-	4	1	3	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia exigua</i> (Breb.)Grunov	Ogh-hob	ac-bl	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia formica</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind		2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia lunaris</i> (Ehr.)Grunov	Ogh-hob	ac-il	L-ph		-	1	7	-	5	-	-	6	-	-	-	-
<i>Eunotia lunaris</i> var. <i>subarcuata</i> (Naeg.)Grunov	Ogh-hob	ac-il	L-ph		-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	1	1	-	3	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ac-il	ind		20	15	16	1	10	2	10	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bident</i> Grunov	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>rupestris</i> (Skv.)Ando	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria bicapitata</i> A.Mayer	Ogh-ind	Ind	Ind		-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	L-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunov	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-
<i>#Fragilaria construens</i> var. <i>vener</i> (Ehr.)Grunov	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>#Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	1	-	-	2	-	-	4	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	L-ph		1	-	-	2	8	-	5	-	9	-	-	-
<i>Gomphonema</i> cf. <i>acutiusculum</i> (O.Muller)Cleve-Euler	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Gomphonema angustum</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		3	4	15	3	11	9	3	-	2	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		2	1	1	5	-	2	-	5	6	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	8	-	5	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i> (Ehr.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	Ind	L-ph		-	-	-	1	3	1	3	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-bl	L-ph		2	-	5	3	12	-	5	1	20	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	15	12	2	20	11	7	-	56	-	-	-
<i>#Gomphonema pseudounguiflorum</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bl	ind		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>#Gomphonema quadrifundatum</i> (Oestrl.)Wisl.	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema sphaerophorum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	Ind	Ind		-	1	-	-	4	-	2	-	3	-	-	-
<i>Gomphonema sumatrense</i> Fricke	Ogh-ind	Ind	Ind		-	-	-	-	4	-	2	-	3	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	L-ph		1	-	1	3	6	-	3	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-bl	ind		3	3	-	2	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> cf. <i>acuminatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-bl	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma scallopoides</i> (Rabb.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gyrosigma spencerii</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	L-ph		7	-	2	-	9	2	9	-	8	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunov	Ogh-ind	al-il	ind		17	12	-	35	3	8	6	7	7	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>vivax</i> (Hantz.)Grunov	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia elongata</i> (Hust.)Grunov	Ogh-ind	Ind	Ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-hil	al-bl	ind		-	-	1	-	2	5	-	1	-	-	-	-
<i>#Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bl		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula americana</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	1	1	1	-	1	1	-	2	-	-	-
<i>Navicula bacillum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula bryophila</i> Bové-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	L-ph		-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
<i>#Navicula confervacea</i> (Kuetz.)Grunov	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	2	2	24	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula cryptothecula</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cryptotenella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	Ind	Ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

Species Name	Ecology														
	H.R.	ph	C.R.	5	6	7	2	3	1	12	10	11	8	9	4
# <i>Navicula cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	3	-	-	8	1	4	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula decussis</i> Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	2	7	1	-	3	1	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	3	4	6	-	1	12	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula halophila</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hil	al-il	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cf. hasta</i> Pantocsek	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
- <i>Navicula kotschyi</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula laevissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	1	3	3	-	-	1	-	5	-	-	-	-
<i>Navicula lanceolata</i> (Agardh)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula meniscus</i> Schumann	Ogh-ind	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula meristicus</i> Schumann	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula mobilis</i> var. <i>minor</i> Patrick	Ogh-unk	unk	unk	2	9	1	-	8	1	2	-	-	-	-	-
-# <i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	3	10	1	1	3	2	4	2	12	-	-	-
<i>Navicula cf. oppugnata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula phyllepta</i> Kuetzing	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
# <i>Navicula pupula</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	2	6	15	-	2	6	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula radiosa</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	2	1	-	-	7	2	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula rhizoccephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	6	-	-	38	45	12	94	-	-	-	-	-
- <i>Navicula tokyoensis</i> N.Kobayashi	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
# <i>Navicula viridula</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	2	-	2	-	3	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula</i> sp.-10	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nelium apicatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	6	4	2	-	-	1	-	2	-	-	-	-
<i>Nelium hitchcockii</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nelium iridis</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nelium cf. septentrionale</i> Cleve-Euler	Ogh-ind	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	5	-	3	-	-	-	-
<i>Nitzschia angustata</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	unk	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia cf. angustata</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunov	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia fonticola</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia helderi</i> Meister	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
# <i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia rostellata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia tryblionella</i> var. <i>victoriae</i> Grunov	Ogh-hil	al-il	ind	3	2	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Destrupia bicontrata</i> (Oestrup)Lange-Bertalot & Krammer	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acicola</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acroshaerla</i> W.Smith	Ogh-hob	al-il	l-ph	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bl	l-ph	-	2	3	-	1	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	8	1	1	4	4	6	4	3	29	-	-	-
<i>Pinnularia cf. gibba</i> fo. <i>subundulata</i> Mayer	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-
# <i>Pinnularia interrupta</i> W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	1	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
# <i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia cf. microstauron</i> var. <i>bifundulata</i> (O.Muller)Hustedt	Ogh-ind	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
# <i>Pinnularia molaris</i> Grunov	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> var. <i>capitata</i> A.Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
- <i>Pinnularia schoederi</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	4	-	-	19	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-
- <i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	ind	3	4	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>sublancoidea</i> Petersen	Ogh-ind	unk	unk	-	1	4	-	-	2	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	9	5	3	4	-	1	2	-	5	-	-	-
<i>Pinnularia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
# <i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (Ag.)Lange-Bertalot	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)J.O.Muller	Ogh-hil	al-il	ind	-	2	3	-	2	1	5	-	3	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)J.O.Muller	Ogh-hil	al-il	ind	4	2	-	-	-	1	1	-	3	-	-	-
<i>Rhopalodia quisubrigia</i> Skvortzov	Ogh-hil	al-il	ind	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	2	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis lauenburgiana</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicentera</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	3	2	2	8	1	2	-	4	-	-	-	-
<i>Stauroneis saithii</i> Grunov	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	1	-	2	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Surirella robusta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
# <i>Synedra acus</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Synedra rumpens</i> var. <i>familiaris</i> (Kuetz.)Grunov	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	2	3	5	-	5	-	-	-	-	-
Total Number of Diatoms	205	215	209	212	256	217	211	35	213	0	0	0	0	0	0

## LEGEND

H.R.: 湿地 ·/· 水中 ·/· 岩石 ·/· 砂砾  
 pH : 酸性 ·/· 中性 ·/· 碱性 ·/· 弱酸性  
 C.R.: 陸生 ·/· 水生 ·/· 岩石 ·/· 砂砾  
 Euh-Meh: 潮湿 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 Meh: 高溫 ·/· 干燥 ·/· 高濕 ·/· 低濕  
 Ogh-hil: 潮濕 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 Ogh-ind: 潮濕 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 Ogh-hob: 潮濕 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 Ogh-unk: 潮濕 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 ac-bl: 潮濕 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 ac-il: 潮濕 ·/· 干燥 ·/· 高溫 ·/· 低溫  
 l-ph: 中性 ·/· 弱酸性 ·/· 弱鹼性 ·/· 酸性  
 l-bi: 中性 ·/· 弱酸性 ·/· 弱鹼性 ·/· 酸性  
 ind: pH - 弱酸性 ·/· 弱鹼性 ·/· 中性 ·/· 強酸性 ·/· 強鹼性  
 r-bi: pH - 強酸性 ·/· 強鹼性 ·/· 中性 ·/· 弱酸性 ·/· 弱鹼性  
 r-ph: 強酸性 ·/· 強鹼性 ·/· 中性 ·/· 弱酸性 ·/· 弱鹼性

· 陸生珪藻    ♀ 好汚濁性種    ♂ 好清水性種

表5 岡村遺跡花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	5	4	5	6	7	8	9	10	11	12
木本花粉													
マキ属	11	4	9	-	1	3	24	-	-	-	11	15	
モミ属	1	1	2	-	4	-	4	-	-	-	1	1	3
ツガ属	1	2	1	-	12	11	4	-	-	-	1	1	3
マツ属複数管束亞属	5	5	-	-	13	31	5	-	-	-	6	5	-
マツ属(不明)	1	-	1	-	2	1	-	-	-	-	7	2	2
コウヤマキ属	4	5	1	-	5	4	2	-	-	2	4	9	
スギ属	29	16	13	-	18	11	9	-	-	-	29	12	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	31	9	4	-	8	7	15	-	-	-	-	-	
ヤナギ属	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	1	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
クルミ属	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	
クマシデ属-アサダ属	1	2	1	-	-	1	-	-	-	-	1	1	2
ハシバミ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	
カバノキ属	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブナ属	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
コナラ属-コナラ亜属	7	3	3	-	5	4	2	-	-	-	8	12	
コナラ属-アカガシ亜属	64	63	102	2	59	77	71	1	-	6	70	86	
クリ属	7	1	-	-	2	2	1	-	-	17	-	3	
シノキ属	50	77	73	1	92	53	71	-	-	-	36	60	
ニレ属-ヤキ属	-	2	5	-	4	18	23	-	-	-	1	-	
エノキ属-ムクノキ属	6	5	6	-	-	2	14	-	-	-	15	9	
シキミ属	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
シラキ属	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モチノキ属	-	3	-	-	1	7	1	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
トチノキ属	1	1	3	-	-	-	-	2	-	-	-	-	
クロウメモドキ科	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	-	2	-	-	3	-	3	-	-	-	2	-	
ノブドウ属	-	-	-	-	1	6	3	-	-	-	1	2	
ツバキ属	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	
グミ属	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	
アオキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
エゴノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボタノキ属	2	-	1	-	2	4	1	-	-	-	-	1	-
トネリコ属	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
ティカカラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガマズミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スイカズラ属	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
草本花粉													
ガマ属	5	-	-	-	2	3	59	-	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	-	2	-	-	-	1	7	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	9	3	2	-	2	12	-	-	-	-	2	5	
イネ科	326	176	114	-	60	69	26	-	-	1	833	155	
カヤツリグサ科	16	12	5	-	6	1	29	-	-	-	32	13	
ホシクサ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ミズアオイ属	6	-	7	-	-	1	-	-	-	-	2	4	
ユリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クワ科	35	3	97	-	-	11	-	-	-	1	652	59	
ギンギシ属	3	-	-	-	-	2	1	-	-	-	2	3	
ミズヒキ節	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
サンエイタデ節-ウナギツカミ節	5	3	6	-	7	2	7	-	-	-	31	2	
タデ属	-	1	1	-	1	5	1	-	-	-	30	8	
アカザ科	4	15	1	-	1	5	1	-	-	-	3	2	
ナデシコ科	1	3	1	-	2	7	-	-	-	-	-	-	
キンポウゲ科	1	1	-	-	-	3	5	-	-	-	-	-	
アブランソ科	3	6	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ユキノシタ科	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バラ科	-	-	-	1	-	1	2	-	-	-	-	-	
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	
トウダイグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
アカバナ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
フサモモ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
セリ科	7	1	4	-	1	1	6	-	-	1	1	17	
ネナンカズラ属	-	-	-	-	3	5	-	-	-	-	-	-	
シソ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ゴキヅル属	3	5	2	-	3	-	-	-	-	-	-	2	
キュウリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ヨモギ属	18	39	83	-	28	45	36	-	-	10	1066	131	
オナモミ属	14	17	4	-	2	-	6	-	-	-	19	4	
他のキク亜科	4	-	4	-	1	-	-	-	-	3	15	1	
タンポポ亜科	-	2	-	-	1	-	-	-	1	2	-	-	
不明花粉	3	10	7	-	12	14	10	-	-	-	13	5	
シダ類胞子	2	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	1	
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
サンショウモ属	39	86	137	4	45	92	43	30	2	17	31	32	
合計	木本花粉	224	208	232	3	243	254	264	1	0	26	196	226
草本花粉	462	291	343	0	121	184	185	0	0	17	2707	407	
不明花粉	3	10	7	0	12	14	10	0	0	0	13	5	
シダ類胞子	41	86	138	5	46	92	43	30	2	17	31	34	
総花粉・胞子	730	595	720	8	422	544	502	31	2	60	2947	672	

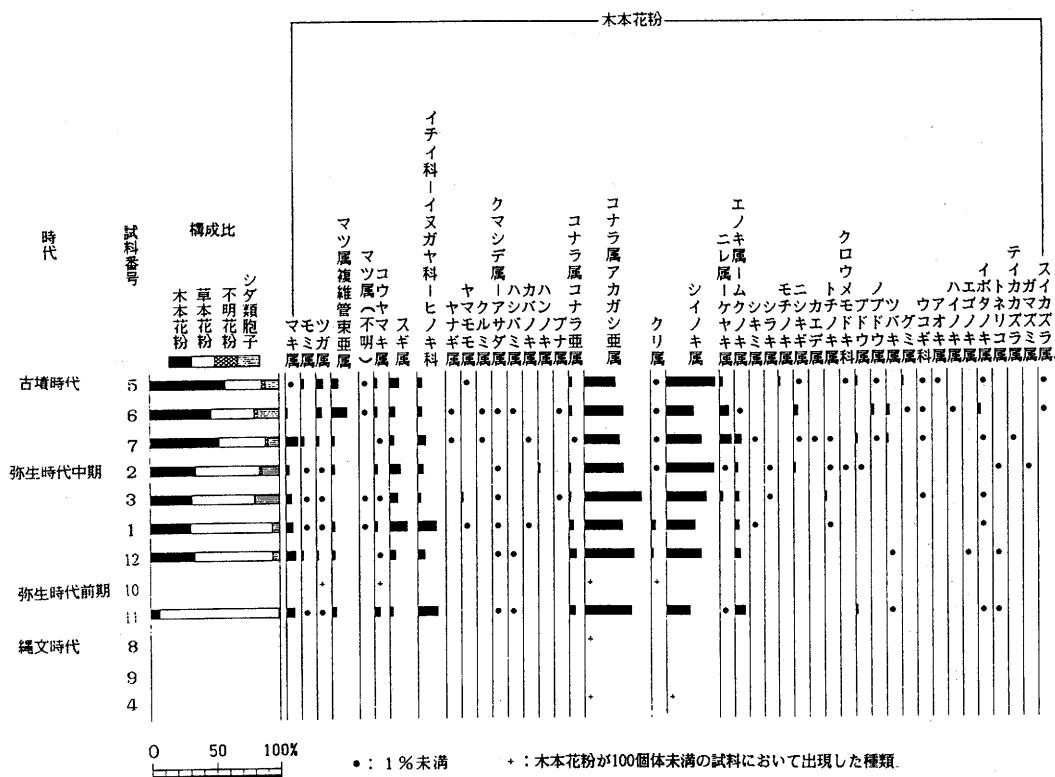


図2a 岡村遺跡における花粉化石群集変遷図1

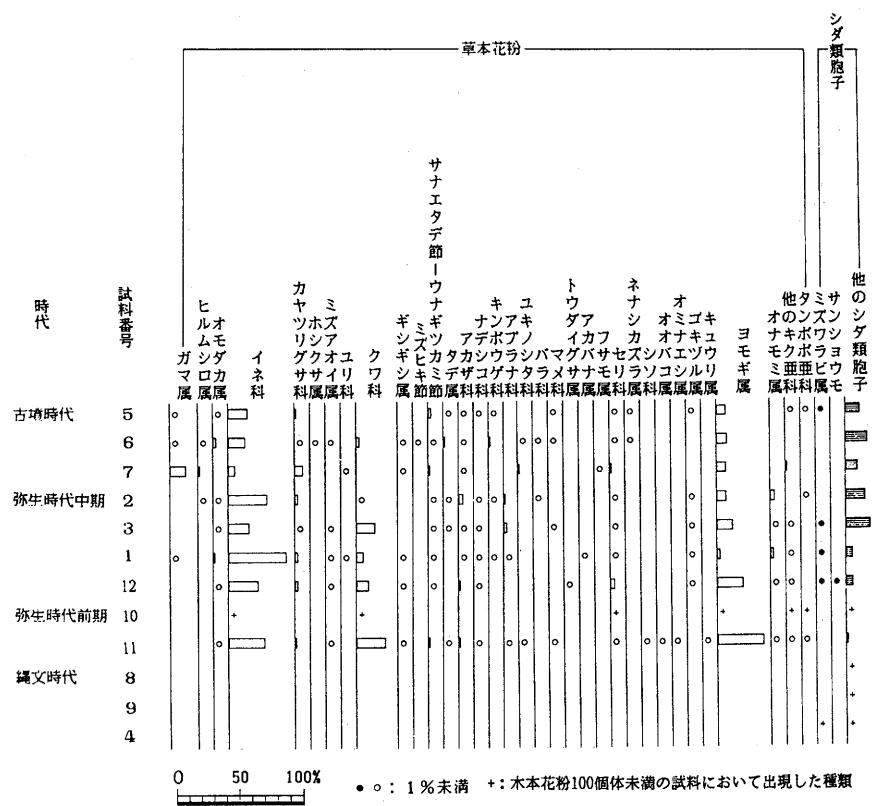
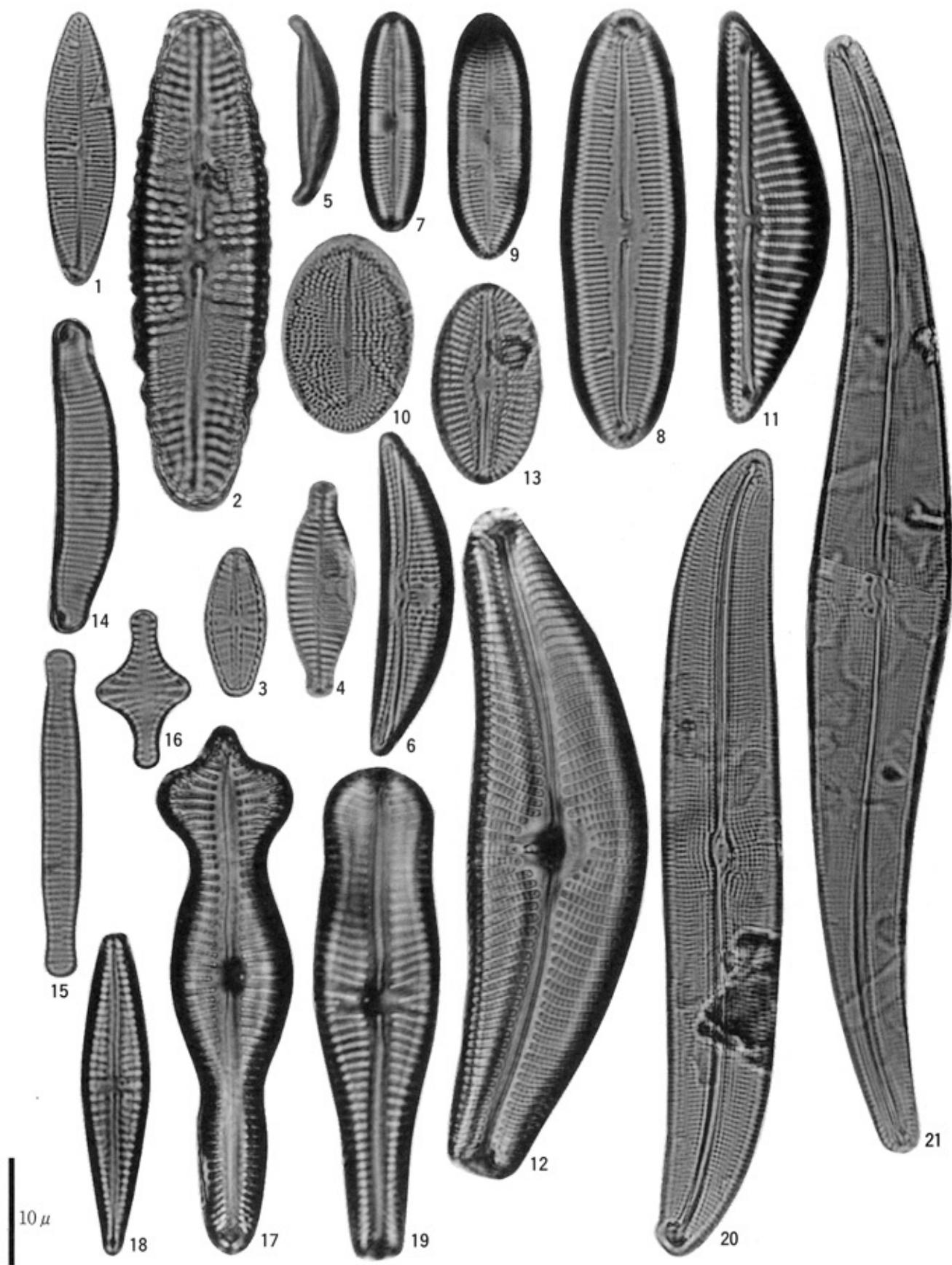


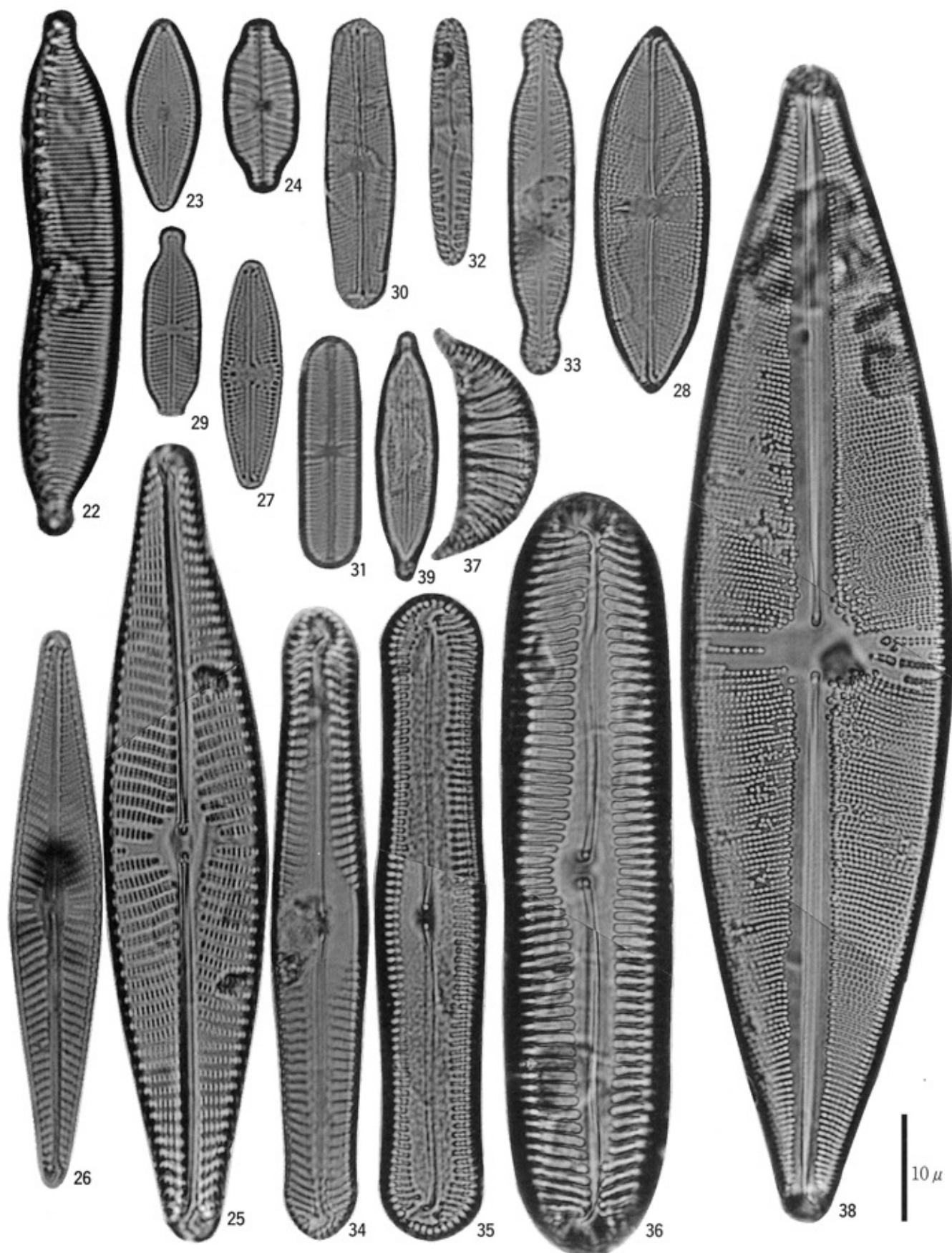
図2 b 岡村遺跡における花粉化石群集変遷図2

## 図版説明

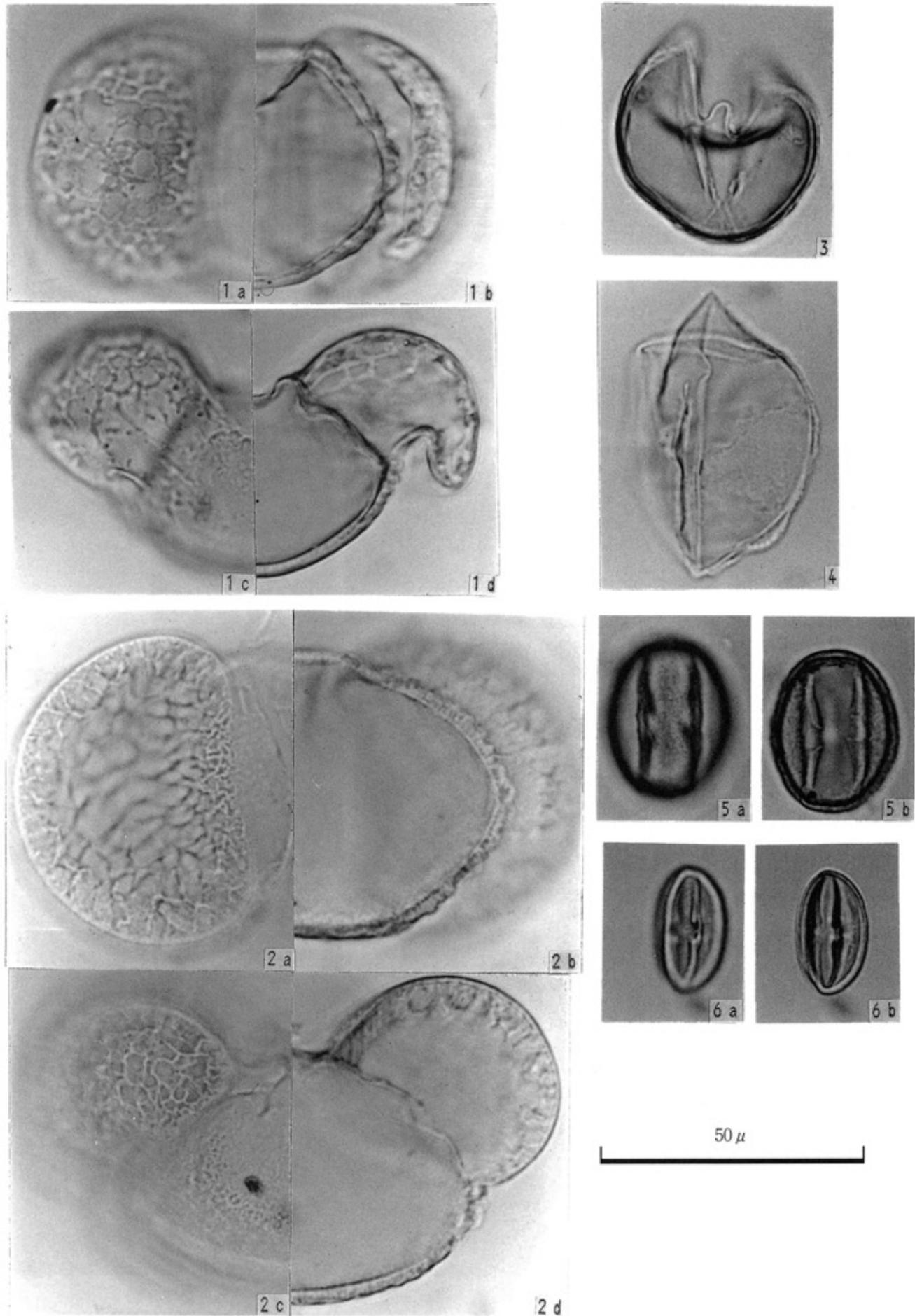
	写真番号	珪藻化石種名	試料番号
図版 1	1	<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	1
	2	<i>A. brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Keutz.) Cleve	12
	3	<i>A. lanceolata</i> (Breb.) Grunow	6
	4	<i>A. rostrata</i> Oestrup	7
	5	<i>Amphora montana</i> Krasske	1
	6	<i>A. ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) V. Heurck	3
	7,9	<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Mereschkowsky	1,3
	8	<i>C. silicula</i> (Ehr.) Cleve	3
	10	<i>Coccconeis placentula</i> (Ehr.) Cleve	6
	11	<i>Cymbella mesiana</i> Cholnoky	7
	12	<i>C. tumida</i> (Breb.) V. Heurck	12
	13	<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	1
	14	<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	5
	15	<i>Fragilaria bicapitata</i> A. Mayer	1
	16	<i>F. construens</i> (Ehr.) Grunow	1
	17	<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	3
	18	<i>G. gracile</i> Ehrenberg	11
	19	<i>G. truncatum</i> Ehrenberg	12
	20	<i>Gyrosiguma acuminatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	6
	21	<i>G. spencerii</i> (W. Smith) Cleve	12
図版 2	22	<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	2
	23	<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	1
	24	<i>N. elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick	1
	25	<i>N. cf. peregrina</i> (Ehr.) Kuetzing	1
	26	<i>N. rhynchocephala</i> Kuetzing	1
	27	<i>N. mutica</i> Kuetzing	7
	28	<i>N. mobilis</i> var. <i>minor</i> patrick	3
	29	<i>N. kotschy</i> Grunow	5
	30	<i>N. pupula</i> Kuetzing	6
	31	<i>N. laevissima</i> Kuetzing	7
	32	<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	5
	33	<i>P. interrupta</i> W. Smith	6
	34	<i>P. gibba</i> Ehrenberg	7
	35	<i>P. acrosphaeria</i> W. Smith	11
	36	<i>P. viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	11
	37	<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller	5
	38	<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	1
	39	<i>S. smithii</i> Grunow	6

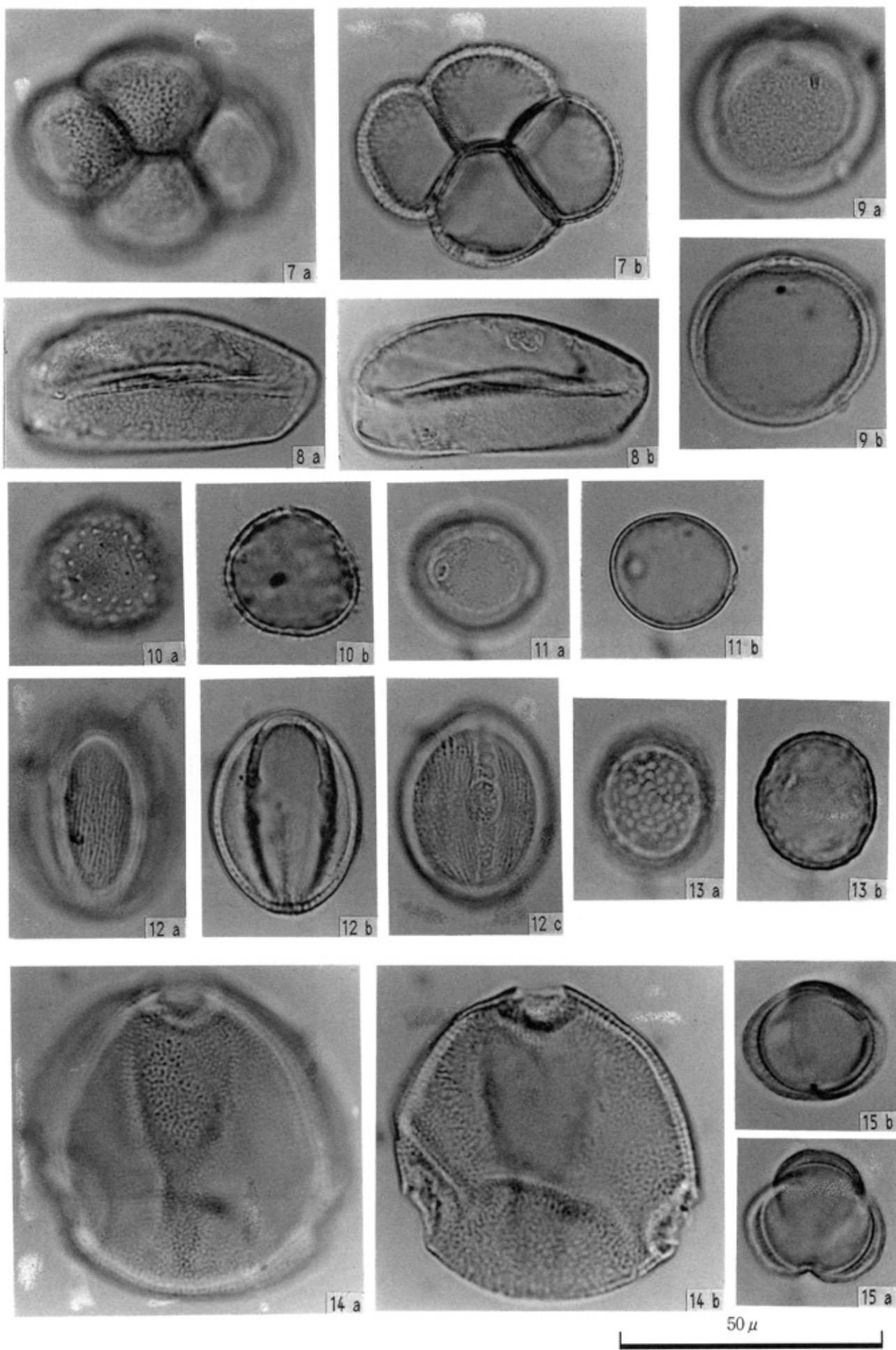
	写真番号	花粉化石名	試料番号
図版 3	1 a-d	マキ属	7
	2 a-b	マツ属複維管束亞属	1
	3	スギ属	7
	4	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1
	5 a-b	コナラ属アカガシ亞属	6
	6 a-b	シイノキ属	1
図版 4	7 a-b	ガマ属	7
	8 a-b	ミズアオイ属	1
	9 a-b	イネ科	1 1
	10 a-b	オモダカ属	1
	11 a-b	クワ科	1 1
	12 a-b-c	ゴキヅル属	5
	13 a-b	オオバコ属	1 1
	14 a-b	キュウリ属	1 1
	15 a-b	ヨモギ属	1 1





図版 3

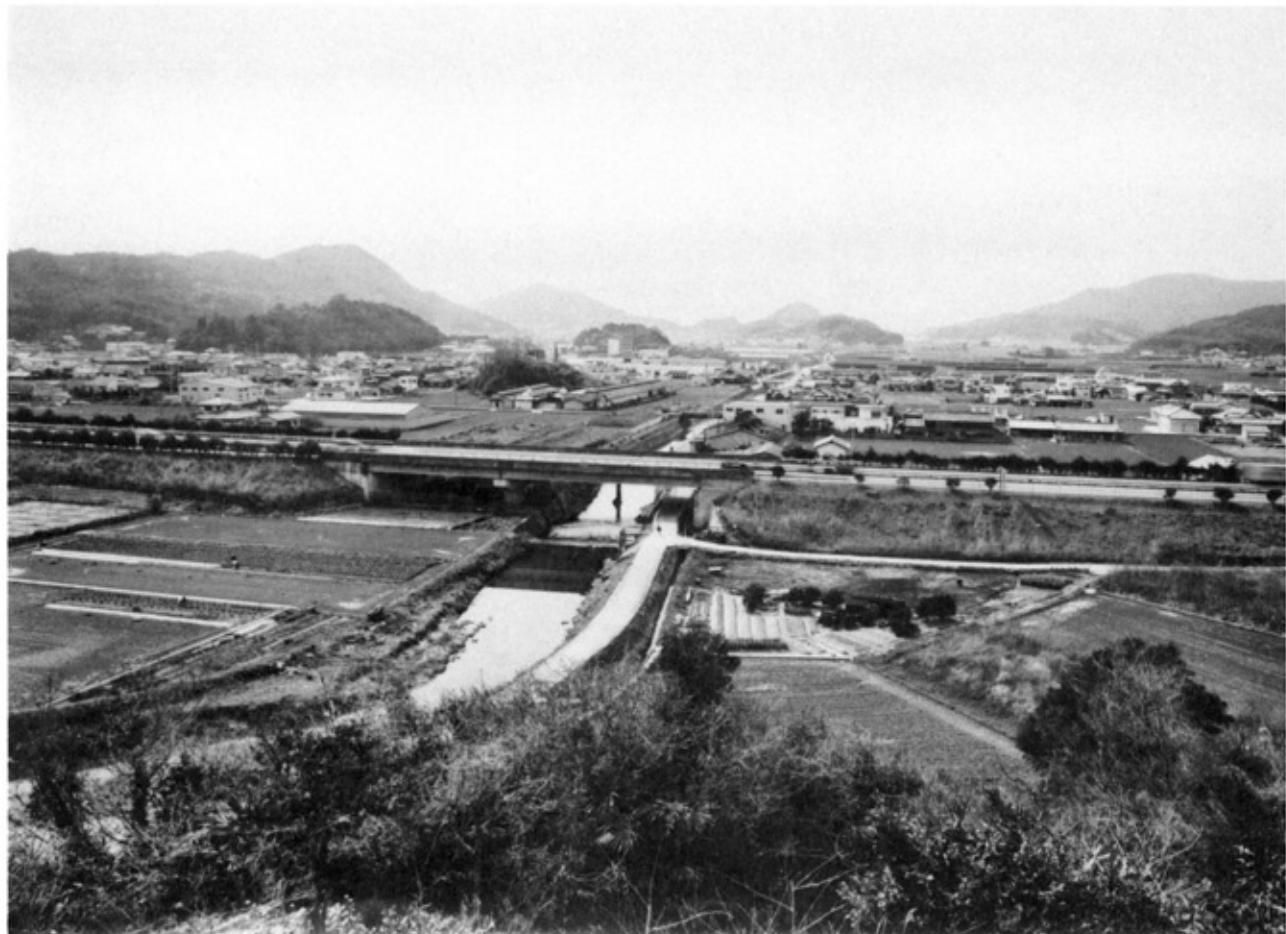




# 図版



1 遠跡遠景（北から）



2 同（東から）



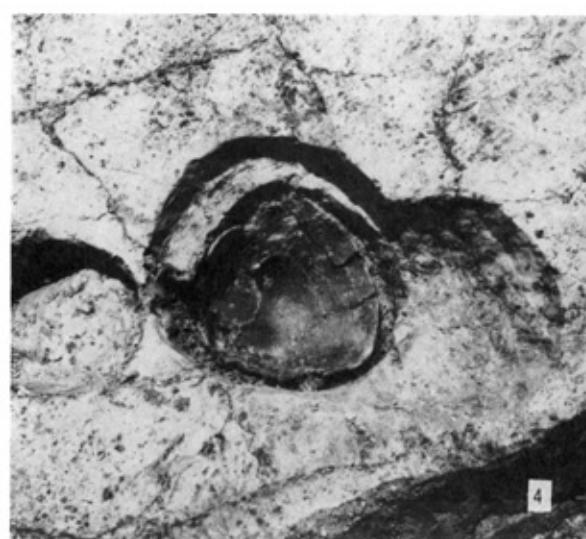
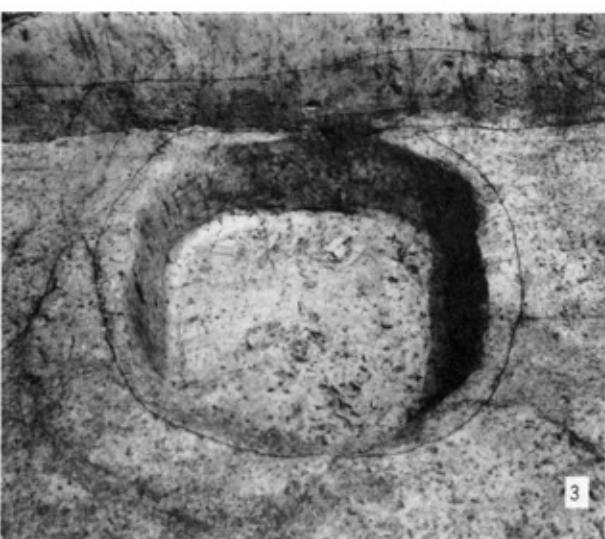
1 1区全景（東から）



2 S D01木器出土状況

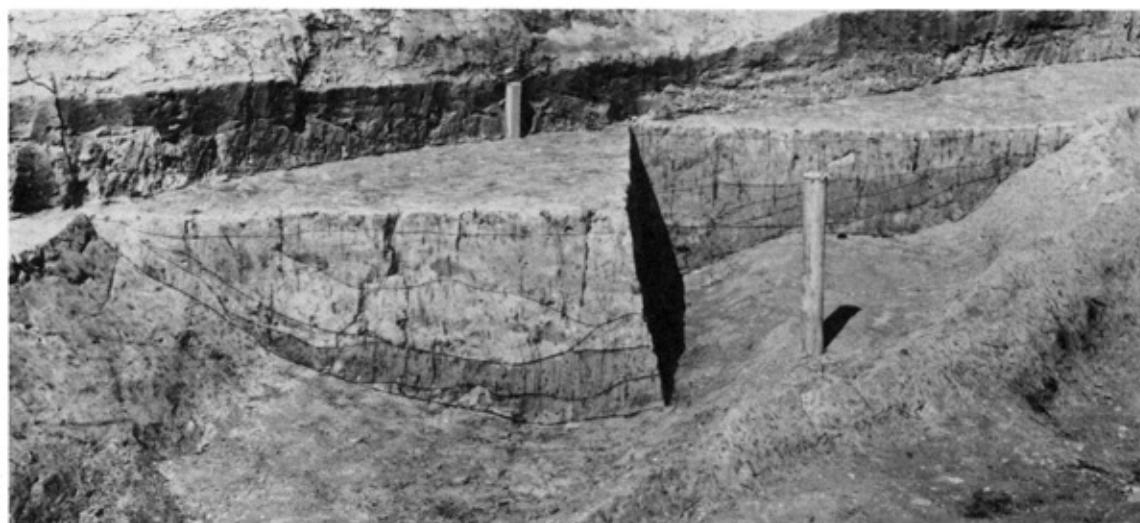


3 S V01（東から）





1 2区弥生時代  
遺構全景  
(東から)



2 S D07土層



3 S D06土層



4 S D09土層



5 S V02  
(東から)

4

5



1 3区全景  
(東から)



2 3区西半全景  
(東から)



3 S D12 (南から)



4 S D12土層



1 4区全景  
(西から)



2 S D22~27  
(東から)



1 S D17  
(南東から)



2 S D17遺物  
出土状況  
(南から)



3 S V04  
(南から)



1 5区全景  
(南西から)

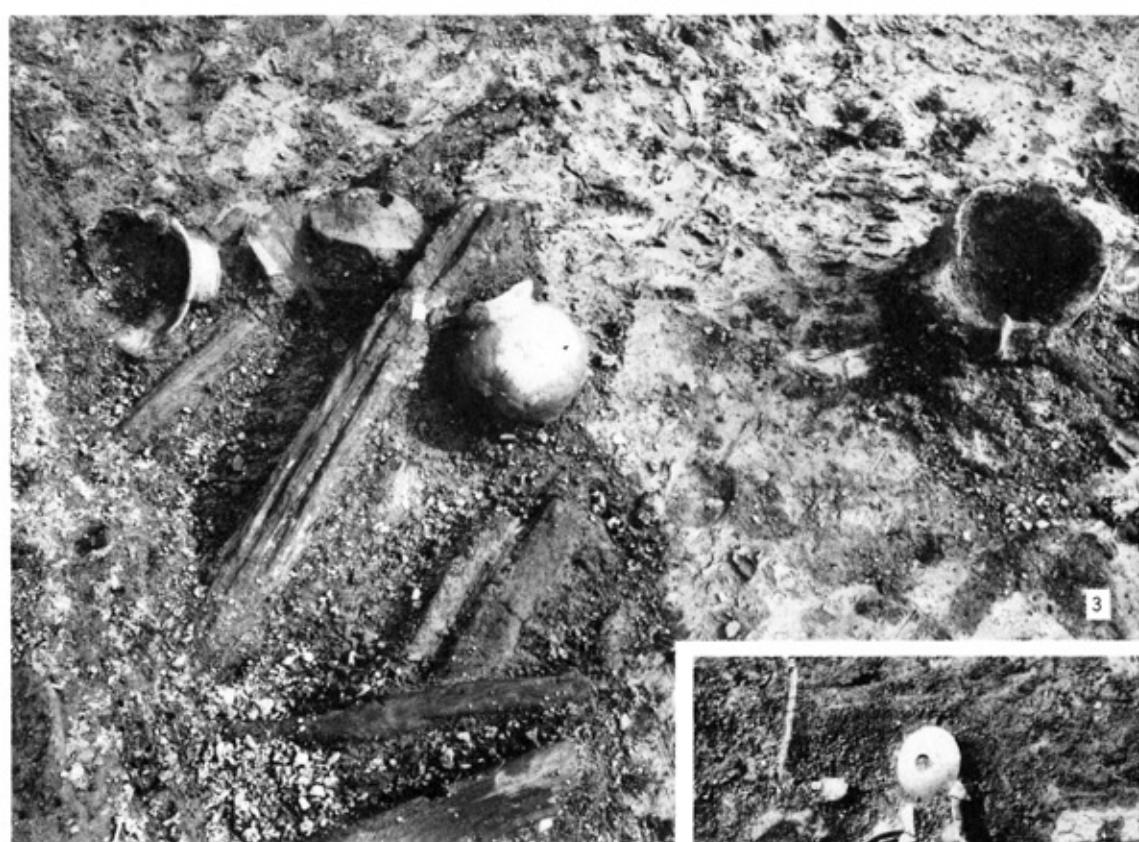
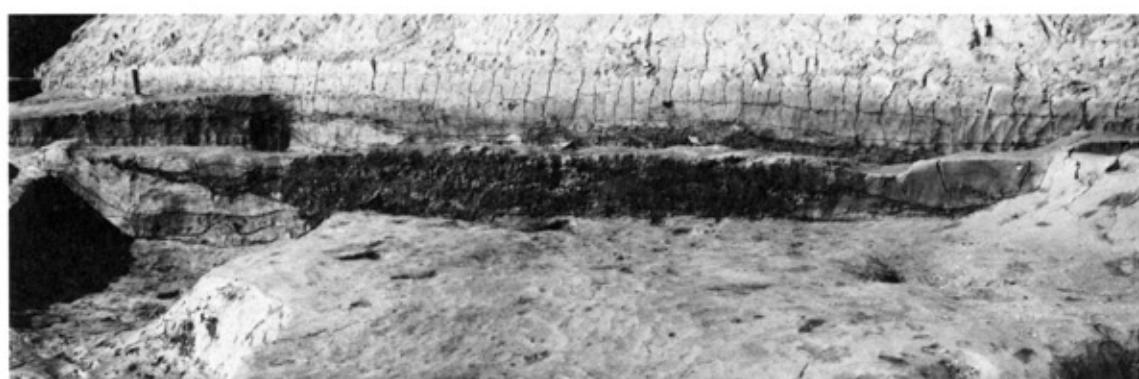


2 S D31  
(西から)



3・4 S D31土層





3・4 S D 30遺物出土状況





1 6区全景  
(東から)



2 7区西半全景  
(西から)



1 7区  
E100~150全景  
(東から)



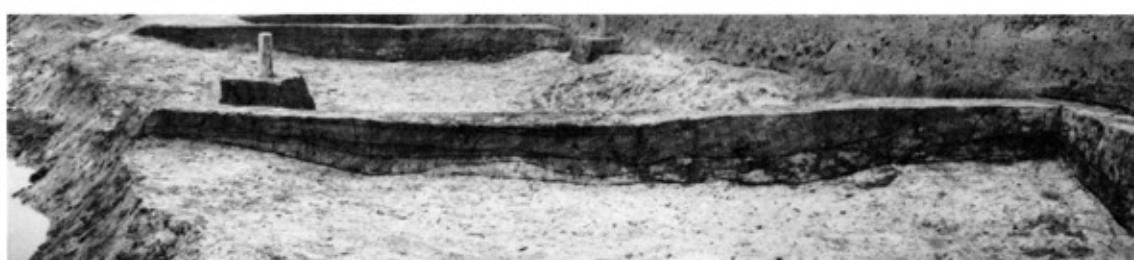
2 7区東半全景  
(東から)



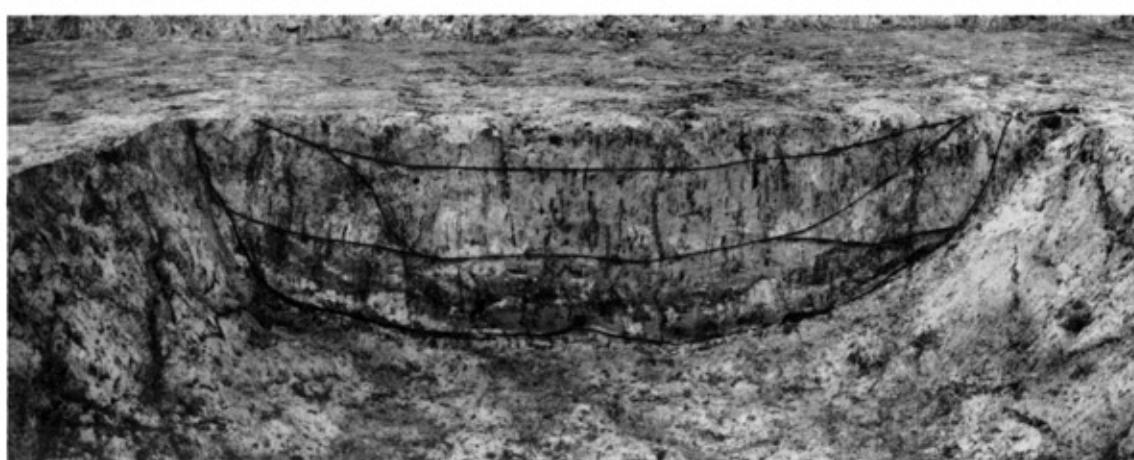
1 S D35・S K01  
(東から)  
2 S D37 (南から)



3 S D37土層



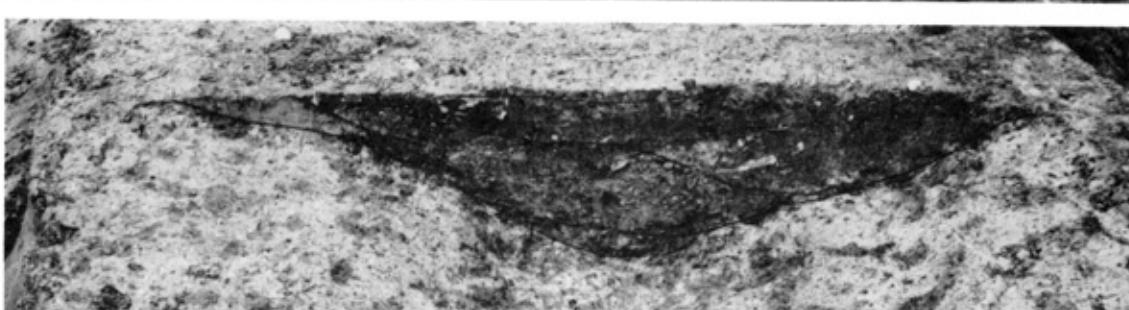
4 S D35土層



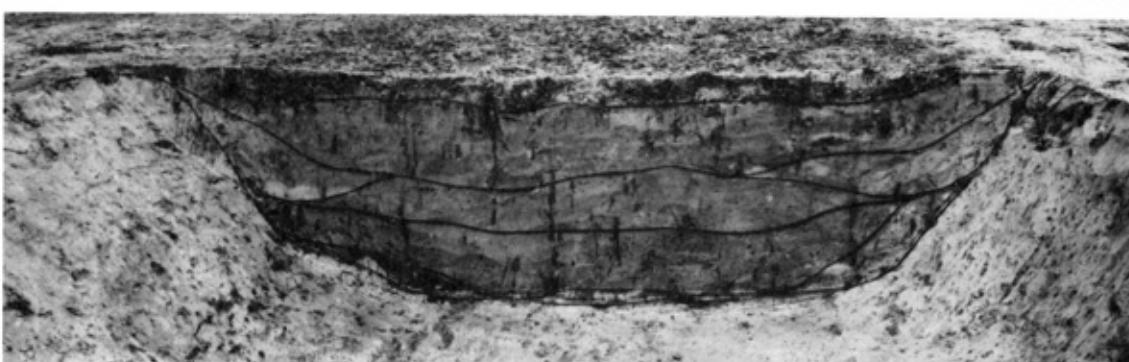
5 S D39土層



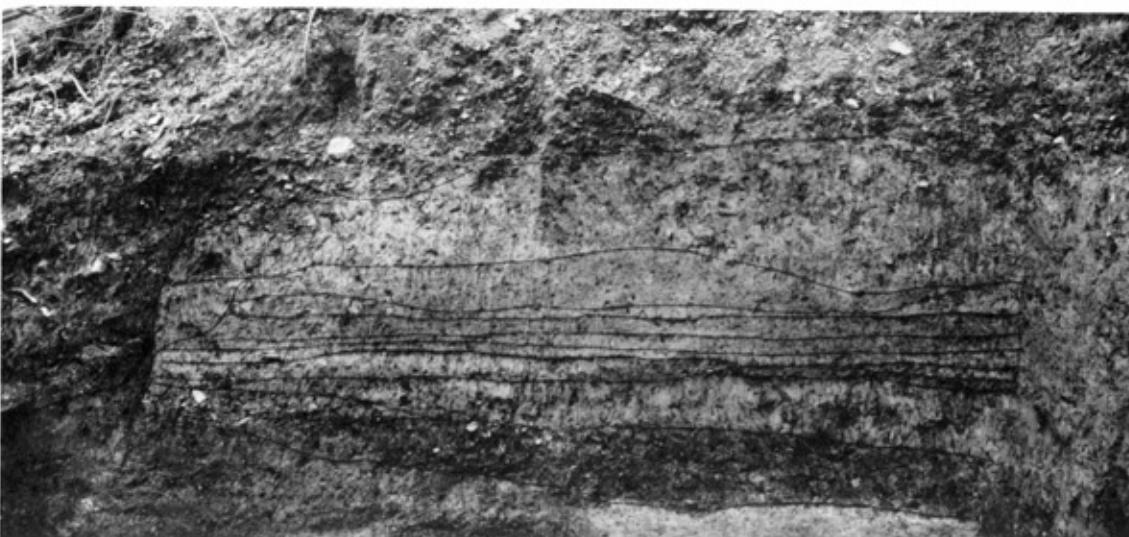
1 SD40・41  
(南東から)



2 SD40土層

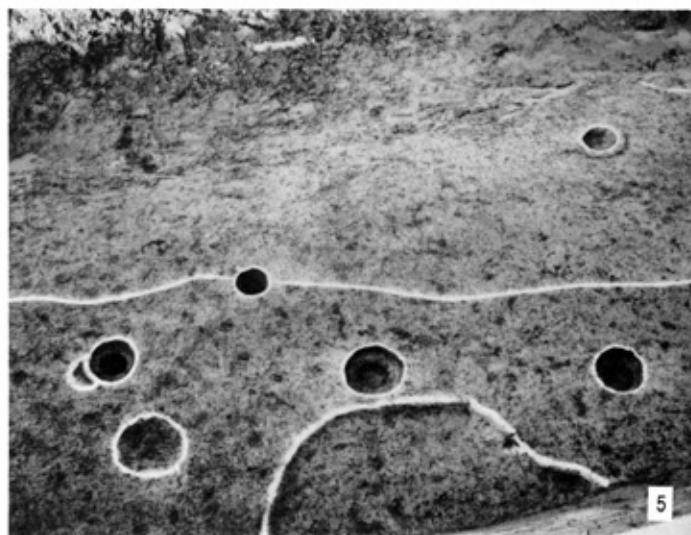
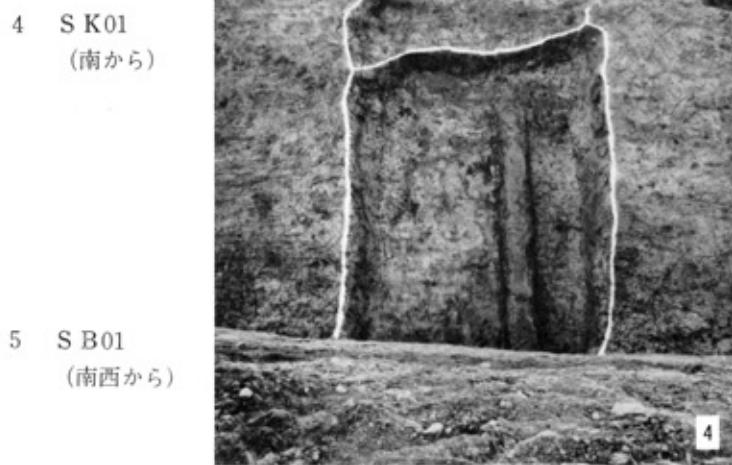
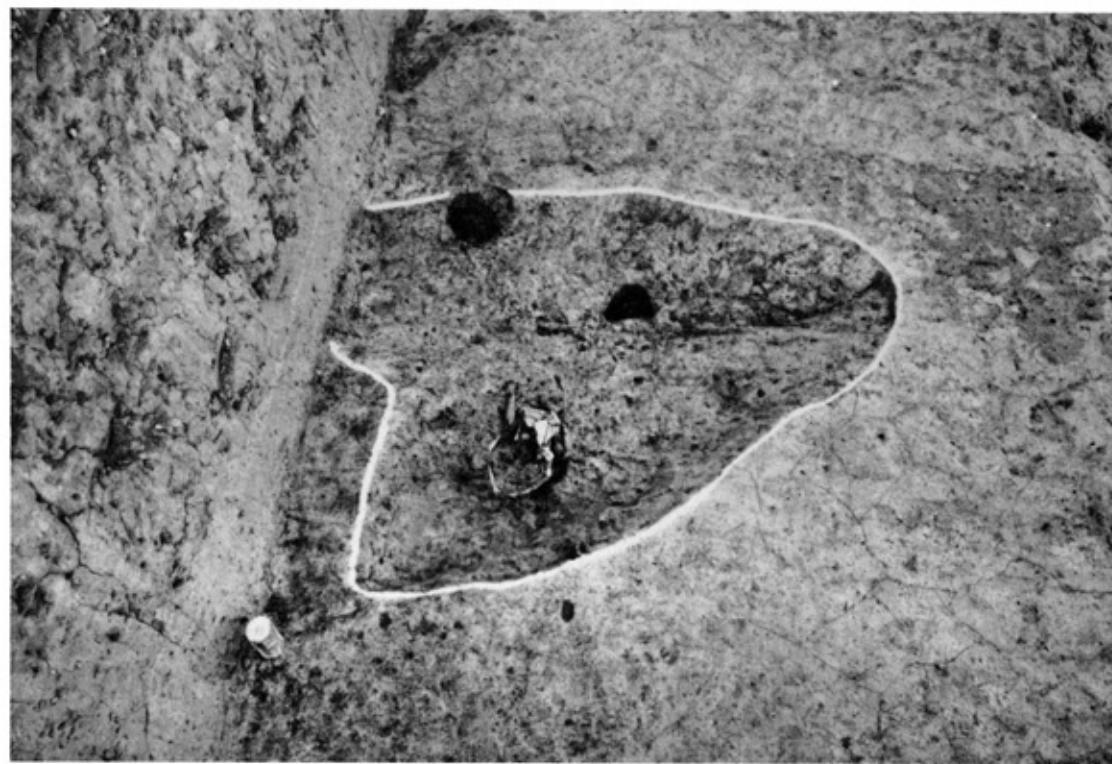


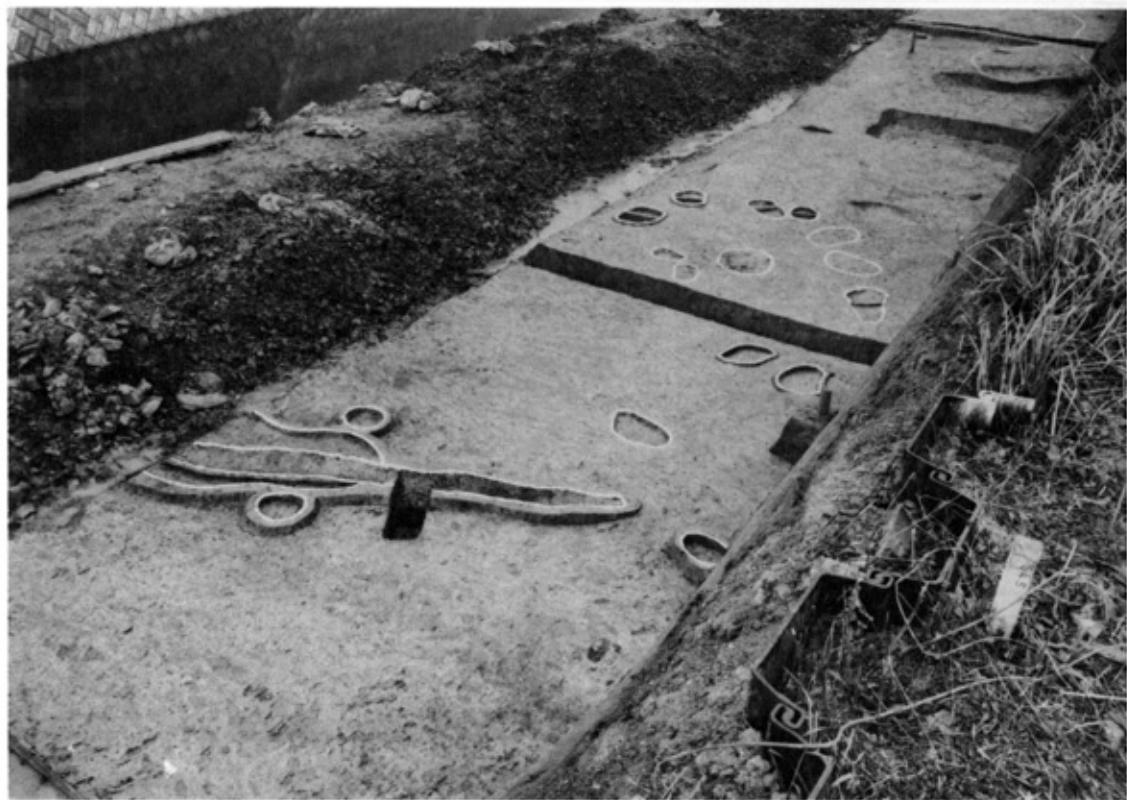
3 SD42土層



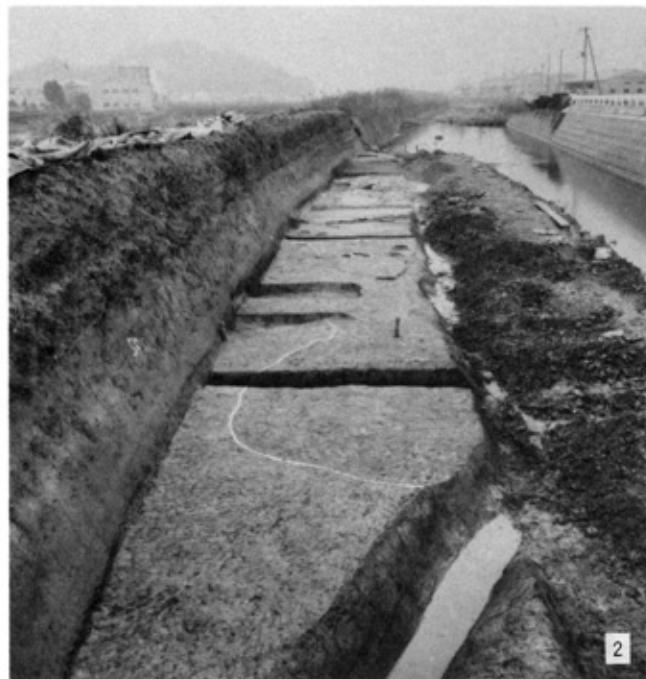
4 7区東端  
(E180)  
南北土層



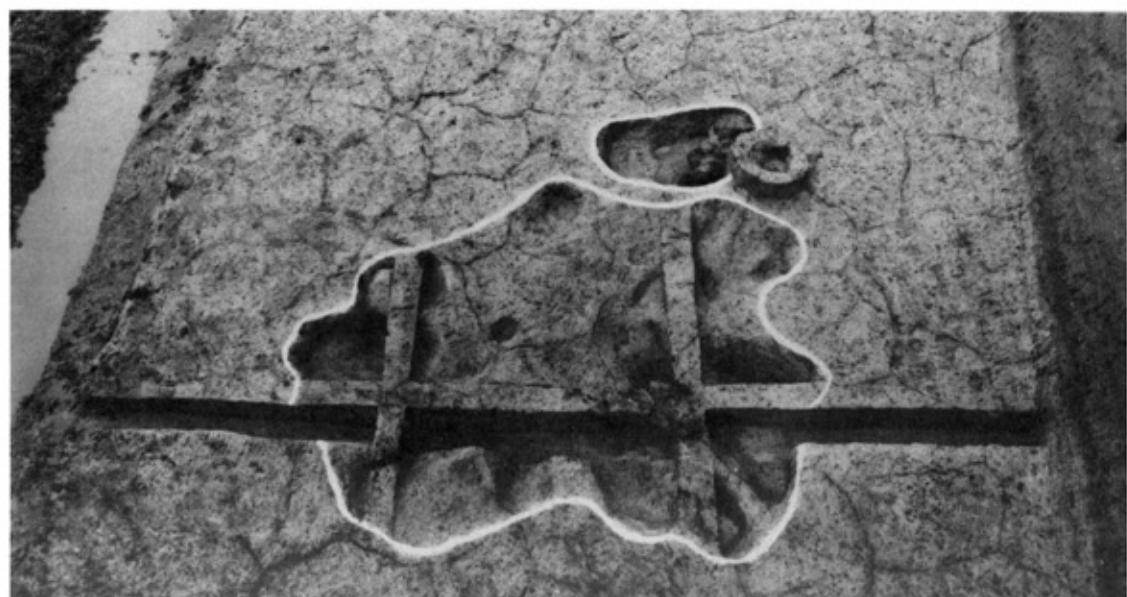




1 6区縄紋時代  
遺構全景  
(西から)



2 同 (東から)  
3 7区トレンチ



4 焼土坑 2  
(西から)



1 8区全景  
(東から)



2 S D53・54  
(北西から)

1 SV05  
(北東から)



2 SV06  
(西から)



3 SD59土層



4 SD58  
遺物出土状況





A2



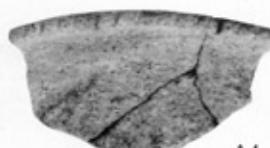
A8



A3



A9



A4



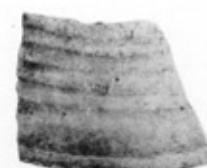
A10



A11



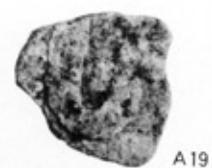
A7



A16



A18



A19



A20



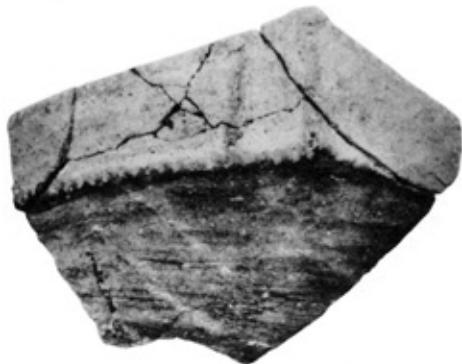
A21



A22



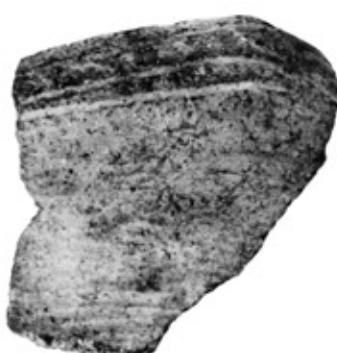
A23



B1



B5



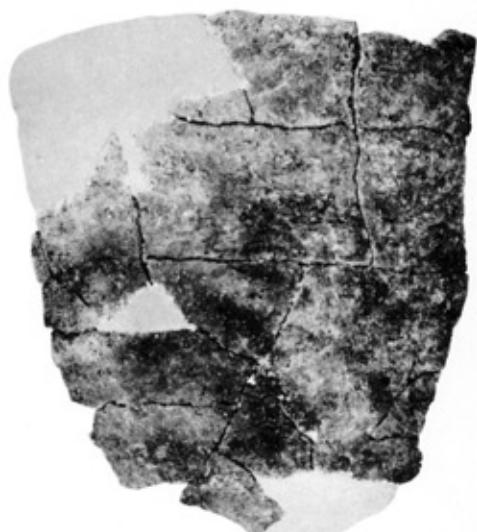
B2



B7



B3



B8



B4



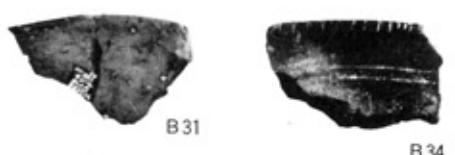
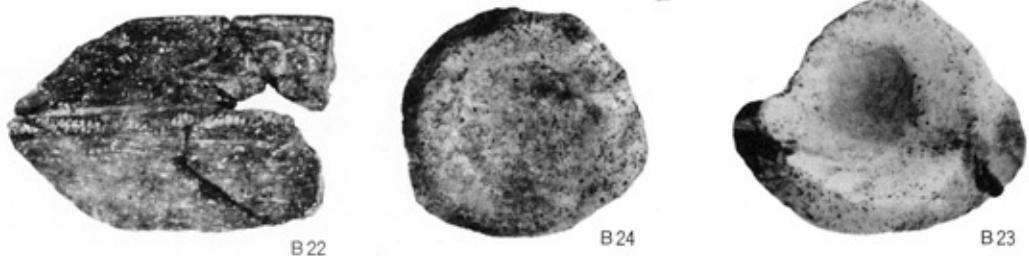
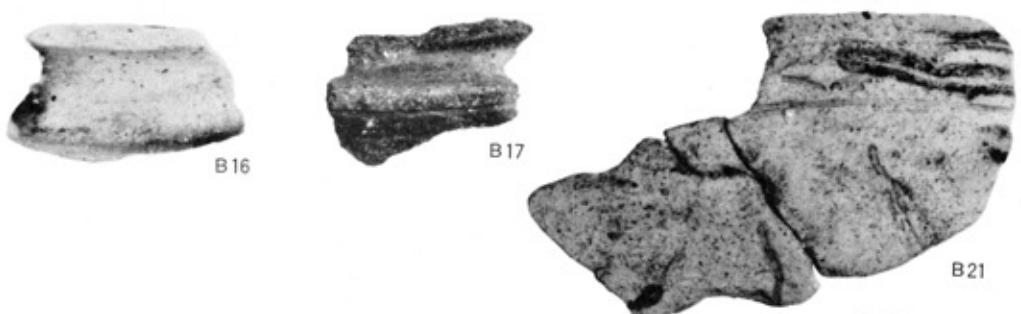
B18

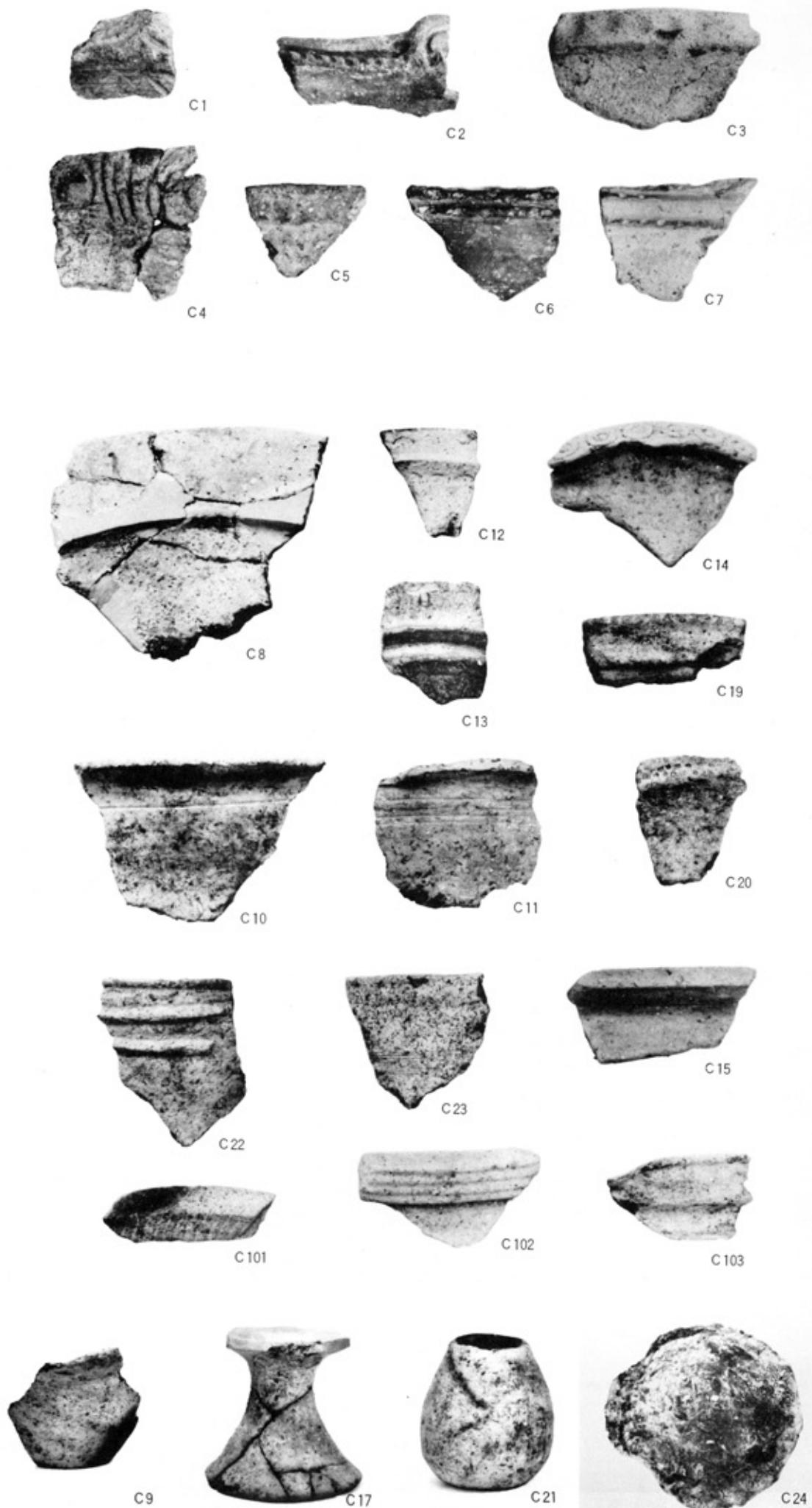


B6



B20







D2



D3



D4



D5



D13



D19



D15



D28



D26



|



D29



D34



D39



D40



D7



D9



D10



D11



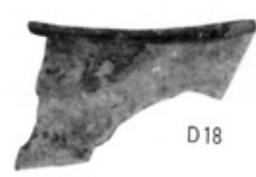
D12



D21



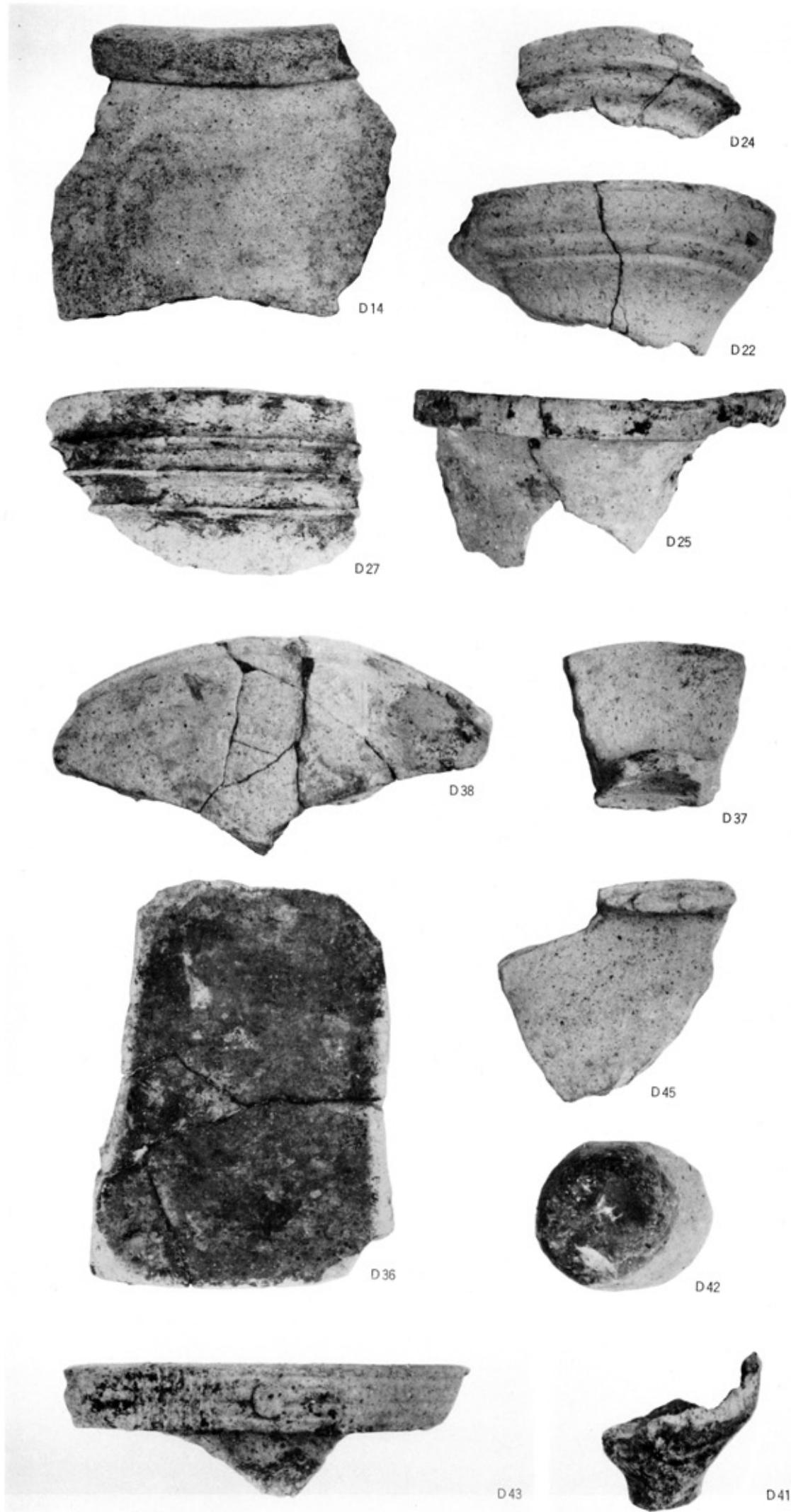
D17



D18



D23





E1



E11



E5



E12



E6



E13



E7



E15



E10



E4



E18





E 29



E 37



E 30



E 42



E 31



E 43



E 34



E 28—S D 28

E 28



E 49



E 101



E 40



E 51



E 44



E 54



E 45



E 55



E 46



E 56



E 52



E 60



E 58



E 62



E 59



E 65



E 61



E 68



E 64



E 69



F10



F16



F11



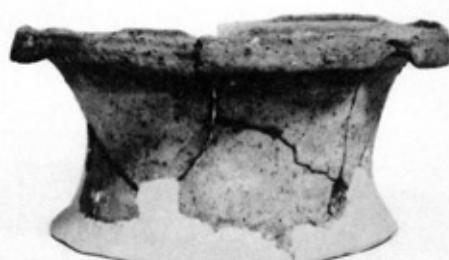
F17



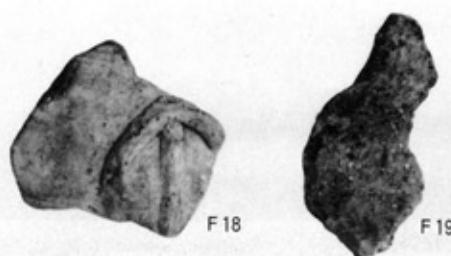
F12



F24



F13



F18

F19



F25



F 30



F 31



F 38



F 37



F 39



F 37

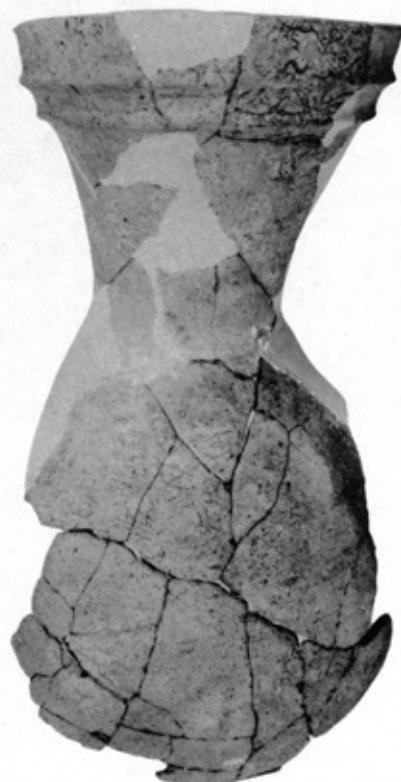


F 28・501—S D34

F 28



F 501



F 35



F 41



F 32



F 42



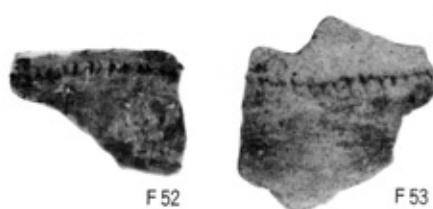
F 33



F 48



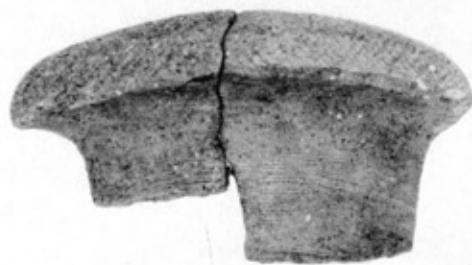
F 51

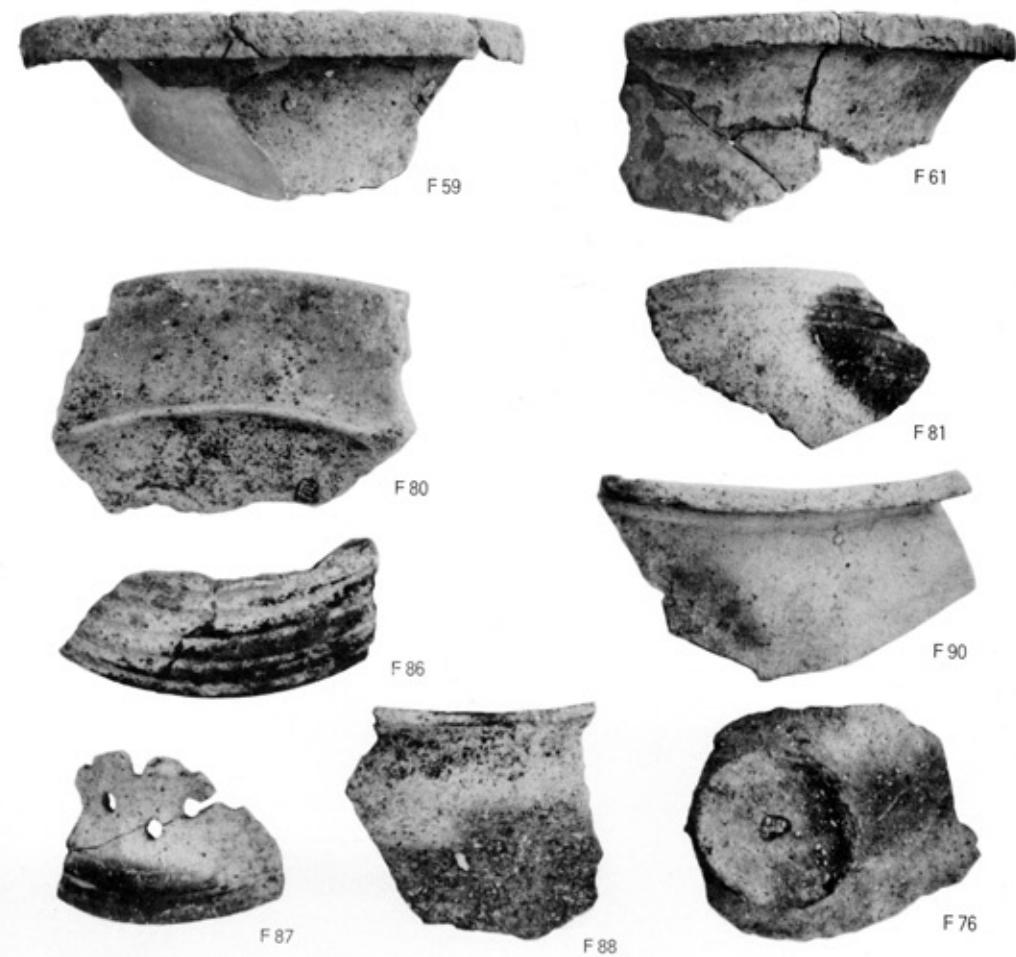
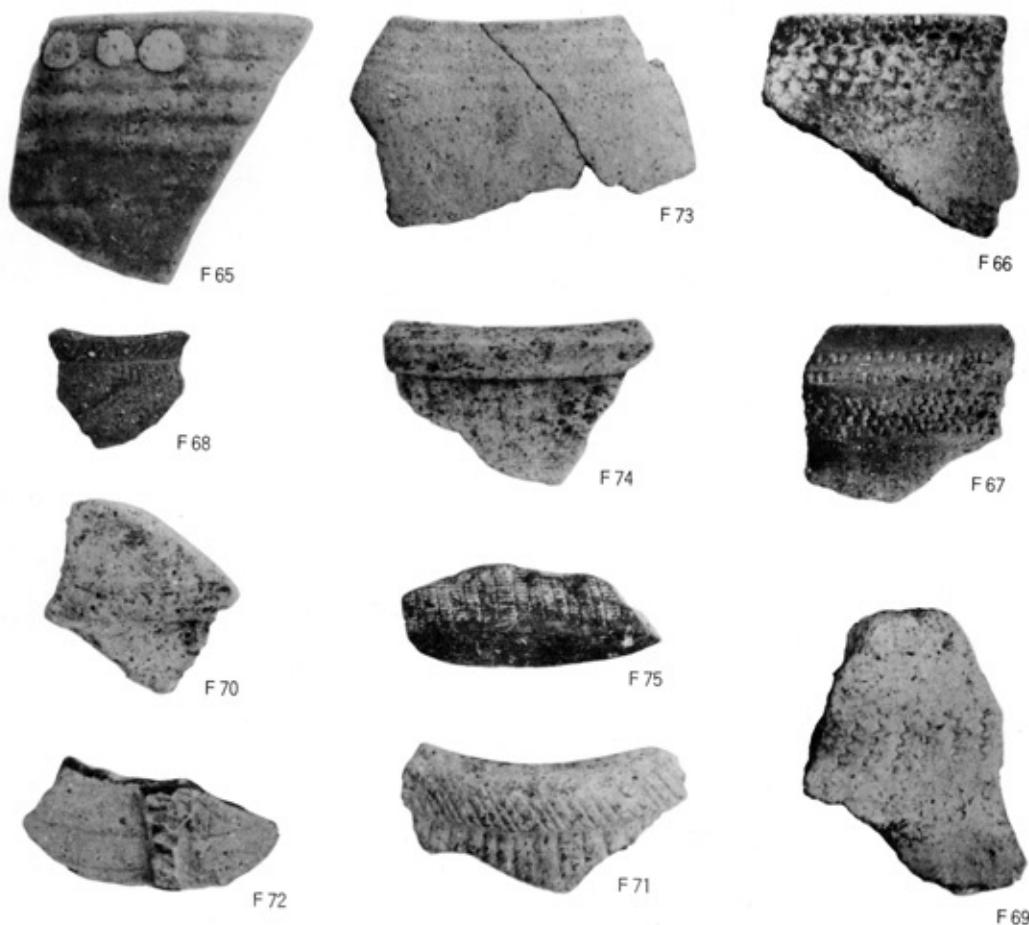


F 52

F 53

F 32·33·35  
— S D35







F 135



F 136



F 141



F 139



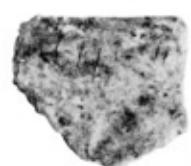
F 115



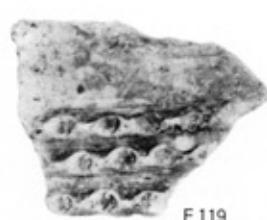
F 116



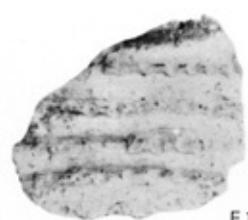
F 117



F 118



F 119



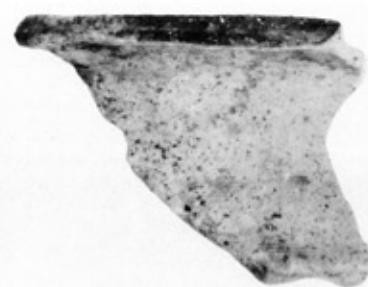
F 120



F 121



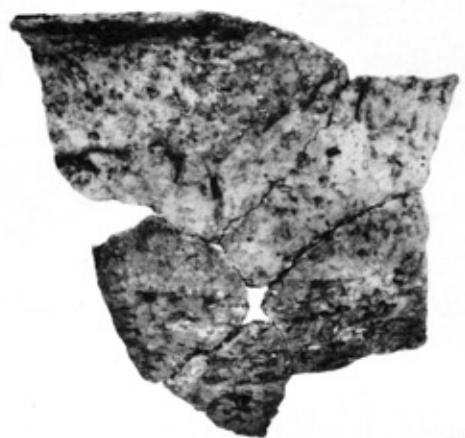
F 133



F 137



F 134



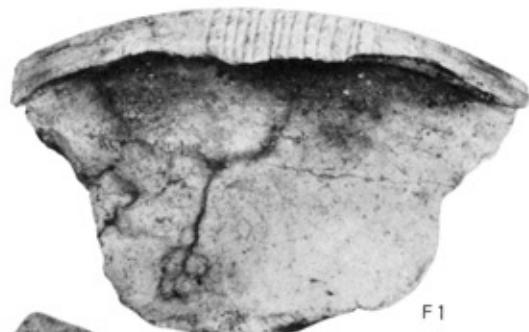
F93



F97



F114



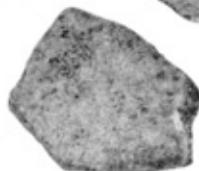
F1



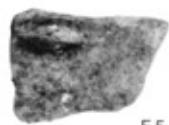
F2



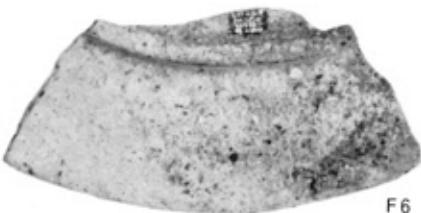
F3



F4

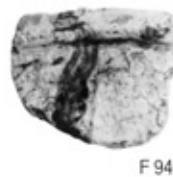


F5



F6

F1~6—S D33



F94



F95



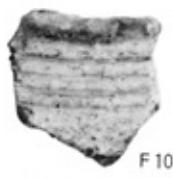
F98



F99



F100



F101



F102



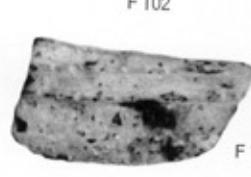
F103



F104



F105



F106



F108



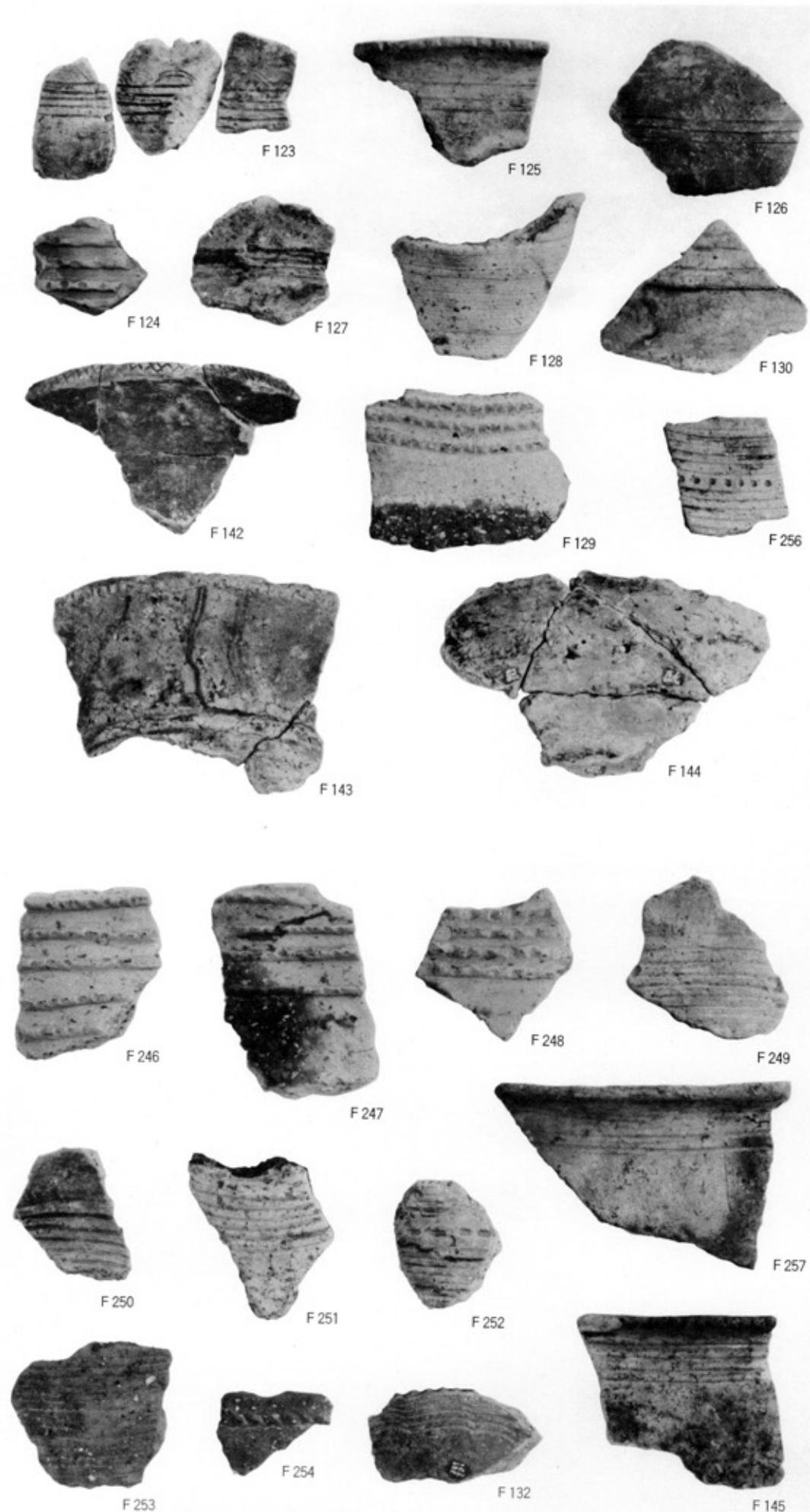
F109

F93~95・97—S D41

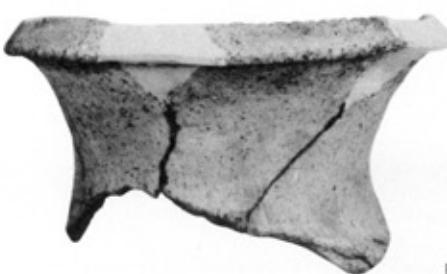
F98~103—S D42

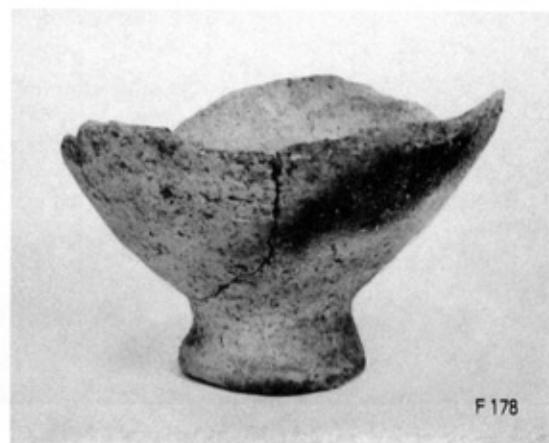
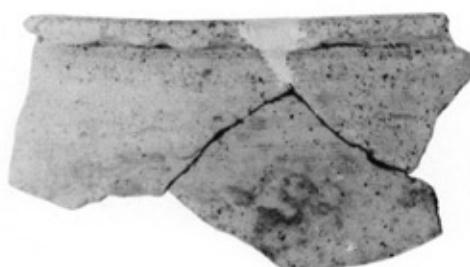
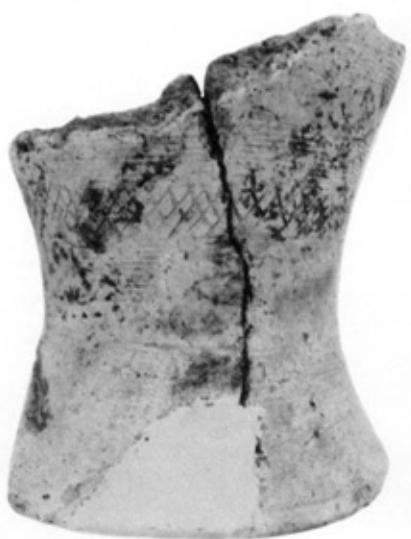
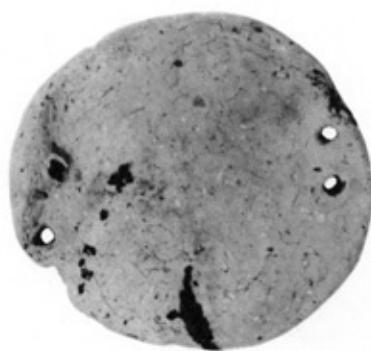
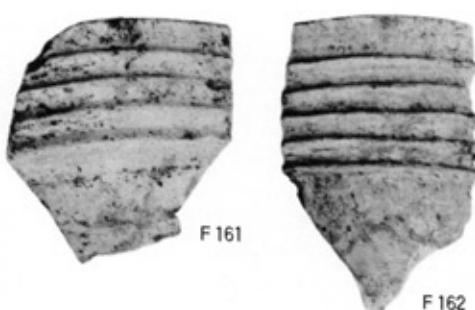
F104~106・108~

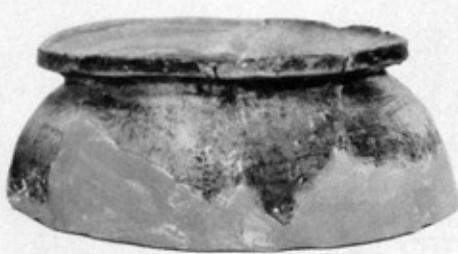
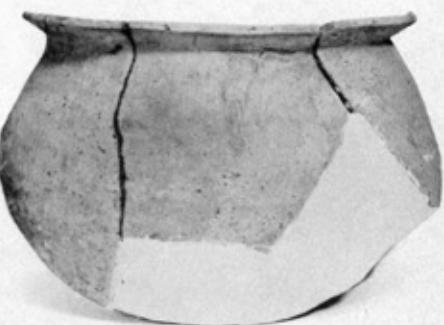
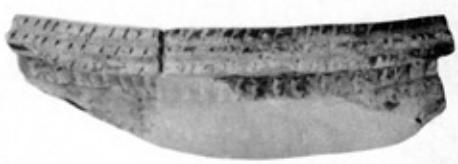
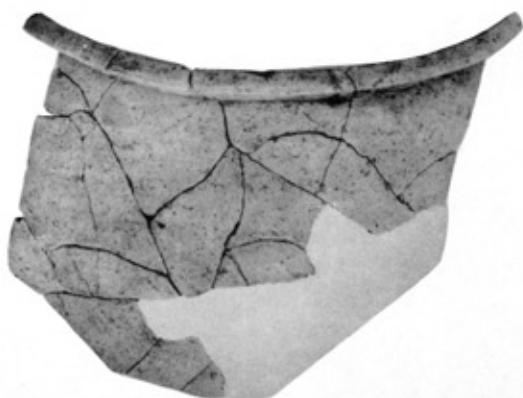
109・114—S D44



F123~128・142~144—S D47, F129・130・145—S D48,  
F132—S D46, F246~254・257—S D52, F256—S D51





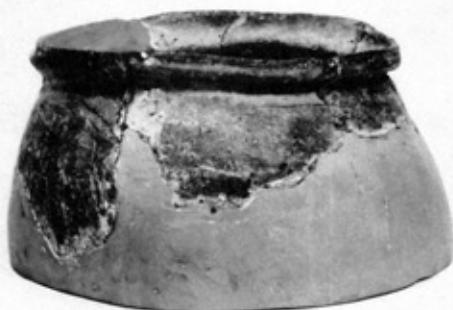




F 188



F 199



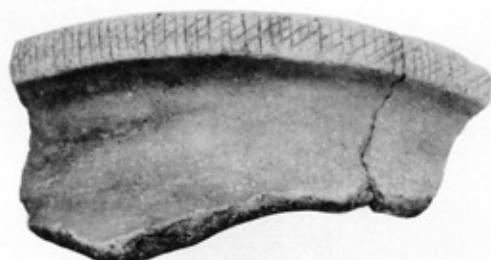
F 190



F 200



F 192



F 195



F 202



F 191



F 207

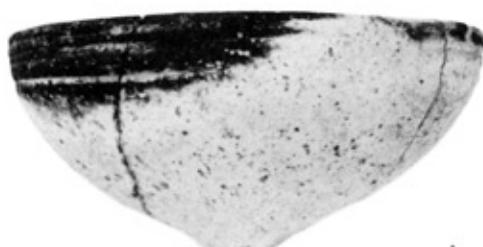
F 208



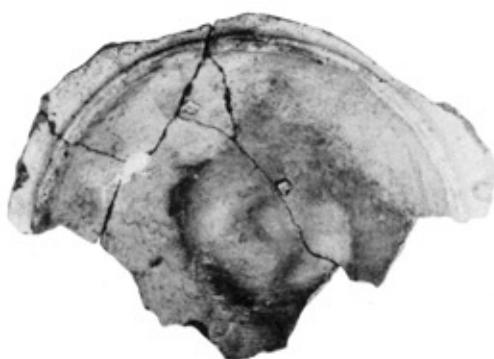
F 210



F 211



F 213



F 217



F 218



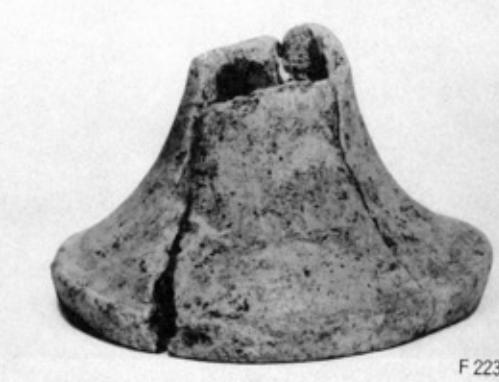
F 219



F 221



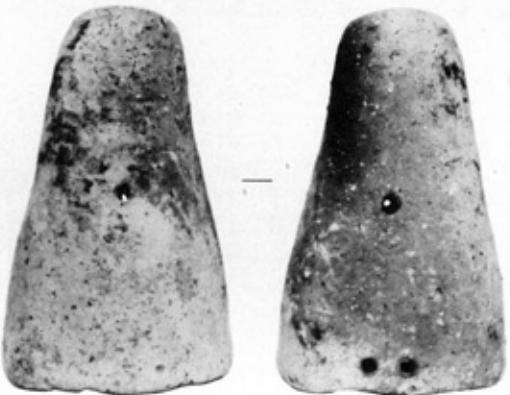
F 220



F 223



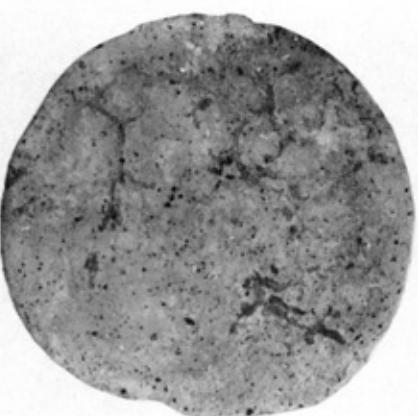
F 242



F 243



F 240



F 230



F 225



F 233



F 234



F 236



F 239



F 163



F 169



F 170



E 181



F 189



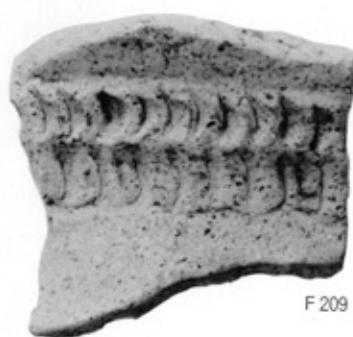
F 183



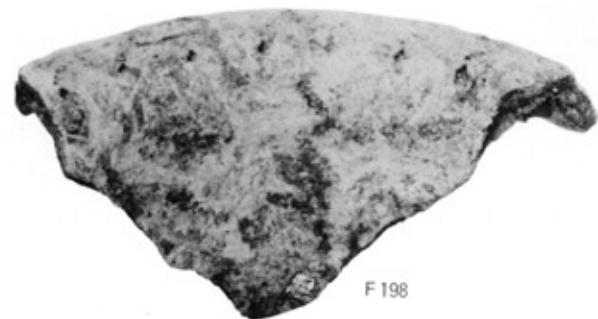
F 193



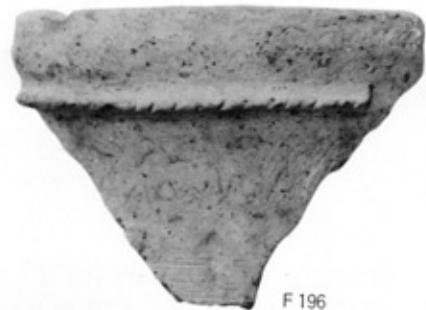
F 194



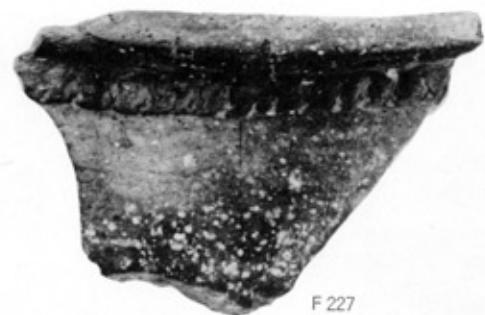
F 209



F 198



F 196



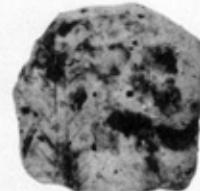
F 227



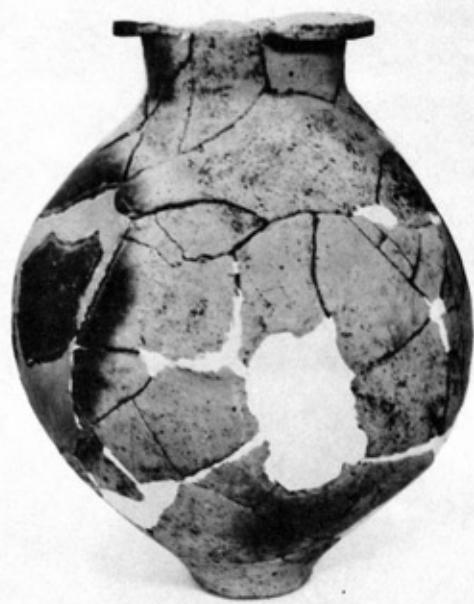
F 203



F 204



F 206

F 261・262・264  
— S K02

F 261

F 262

F 268—S K03  
F 302—ピット

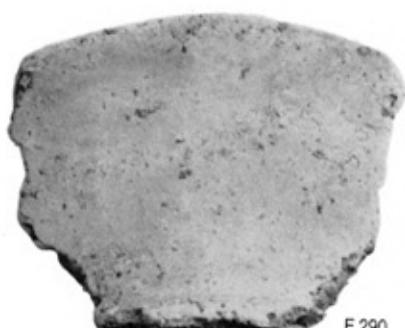
F 268



F 302



F 264



F 290



F 272



F 291



F 292



F 293

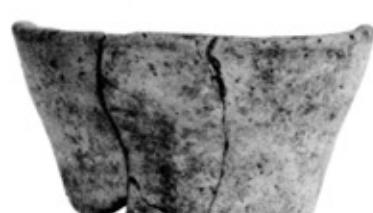
F 272—S K05  
F 290・291—S K06  
F 292・293—S K07



F 274



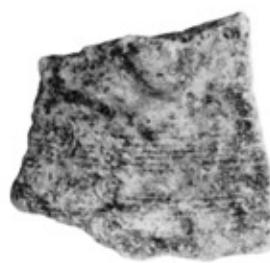
F 275



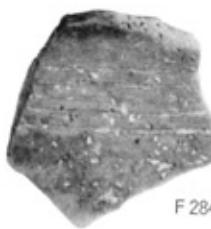
F 278



F 279



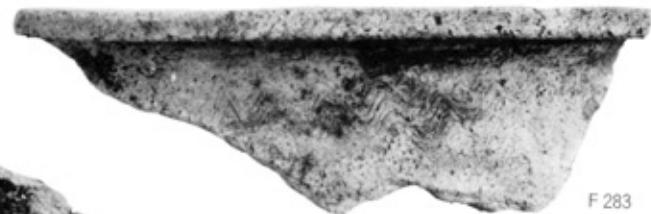
F 282



F 284



F 280



F 283



F 285



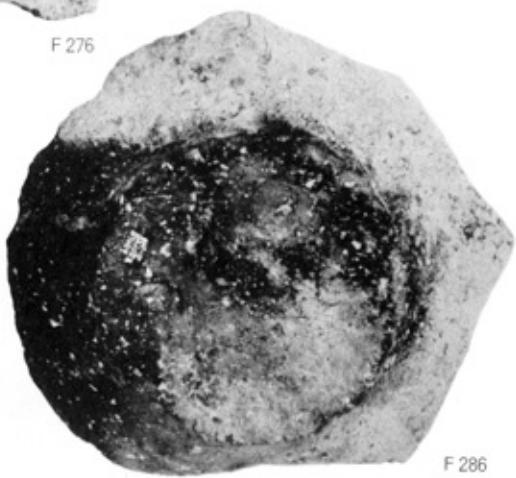
F 276



F 300



F 287

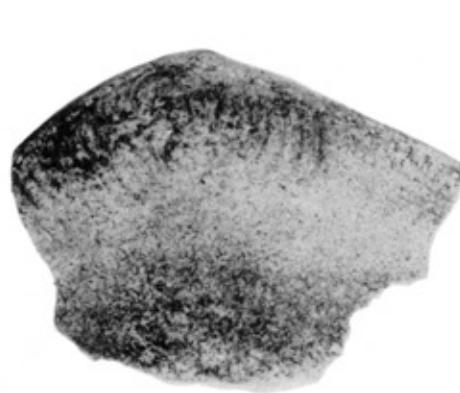


F 286

F 300—SK10



F 303



F 304



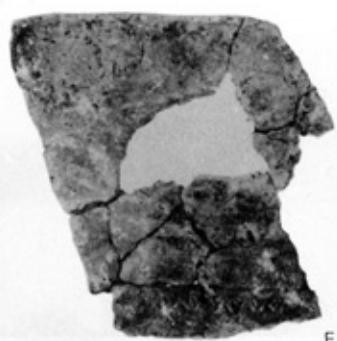
F 303'



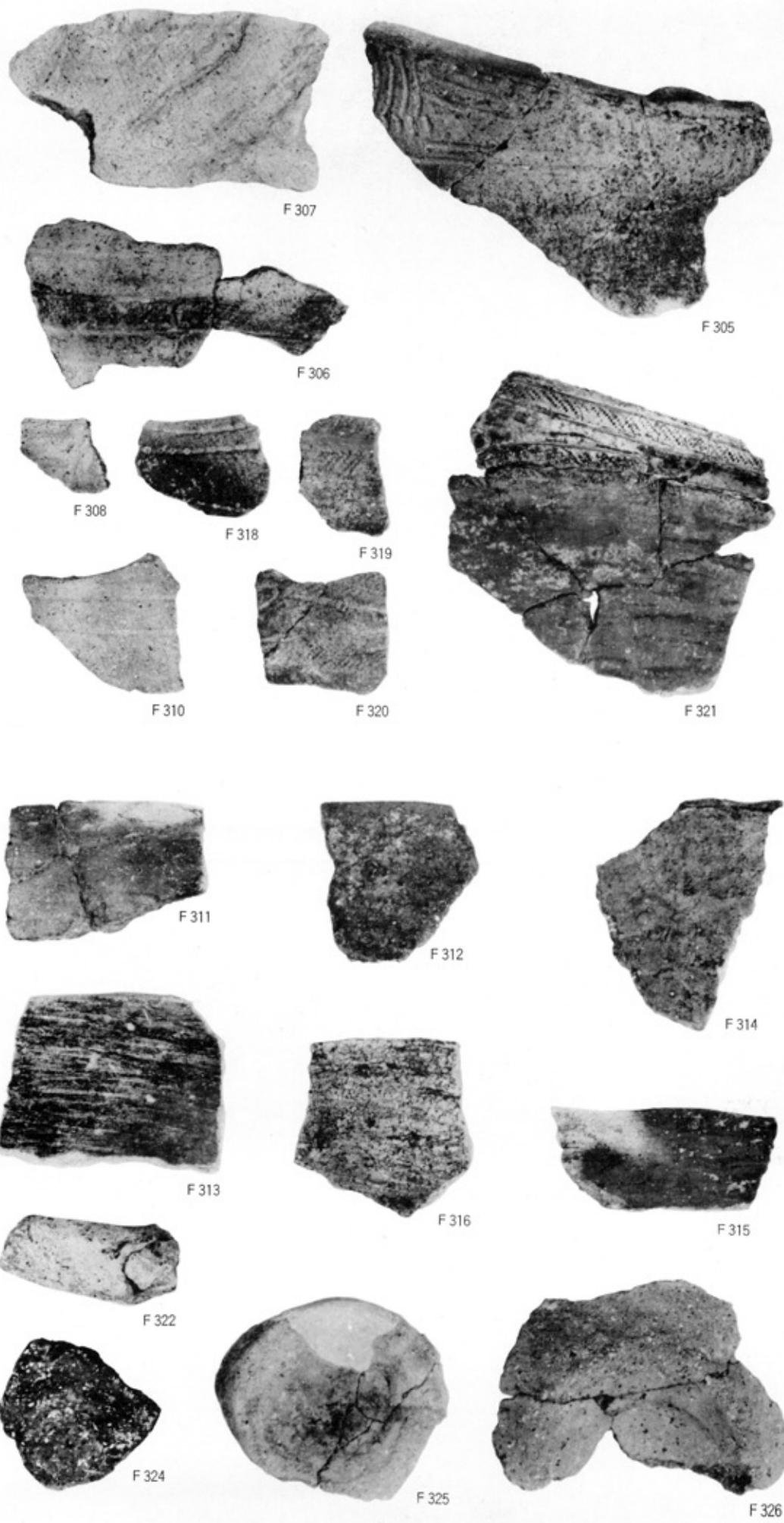
F 332

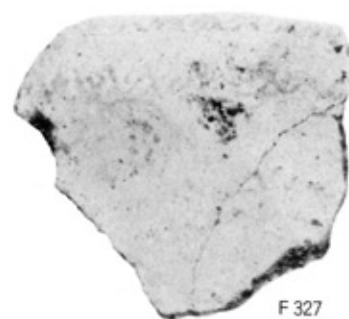


F 317



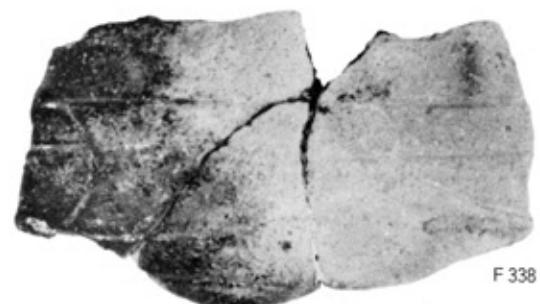
F 337





F 328

F 329



F 338

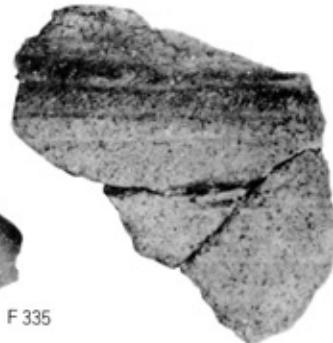
F 342



F 339



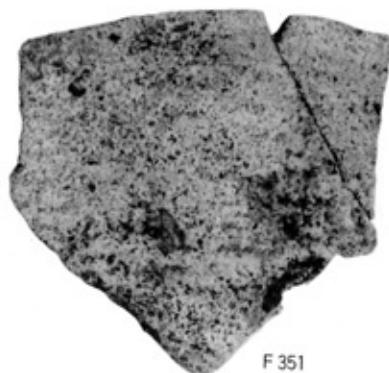
F 335



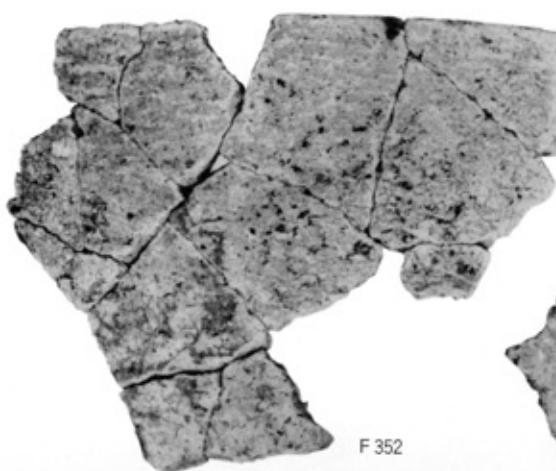
F 340



F 350

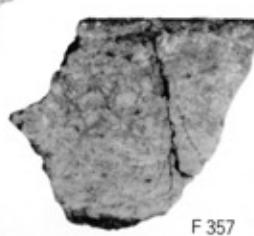


F 351

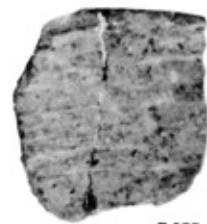


F 352

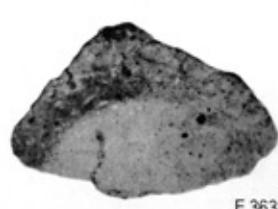
F 356



F 357



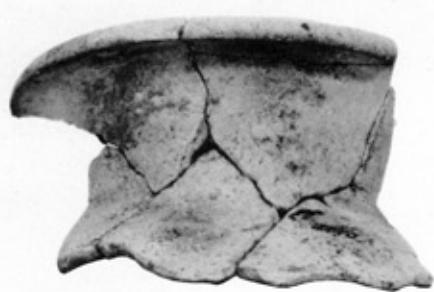
F 355



F 363



F 366



F 368



F 369



F 370



F 371



F 384



F 382



F 388



F 383



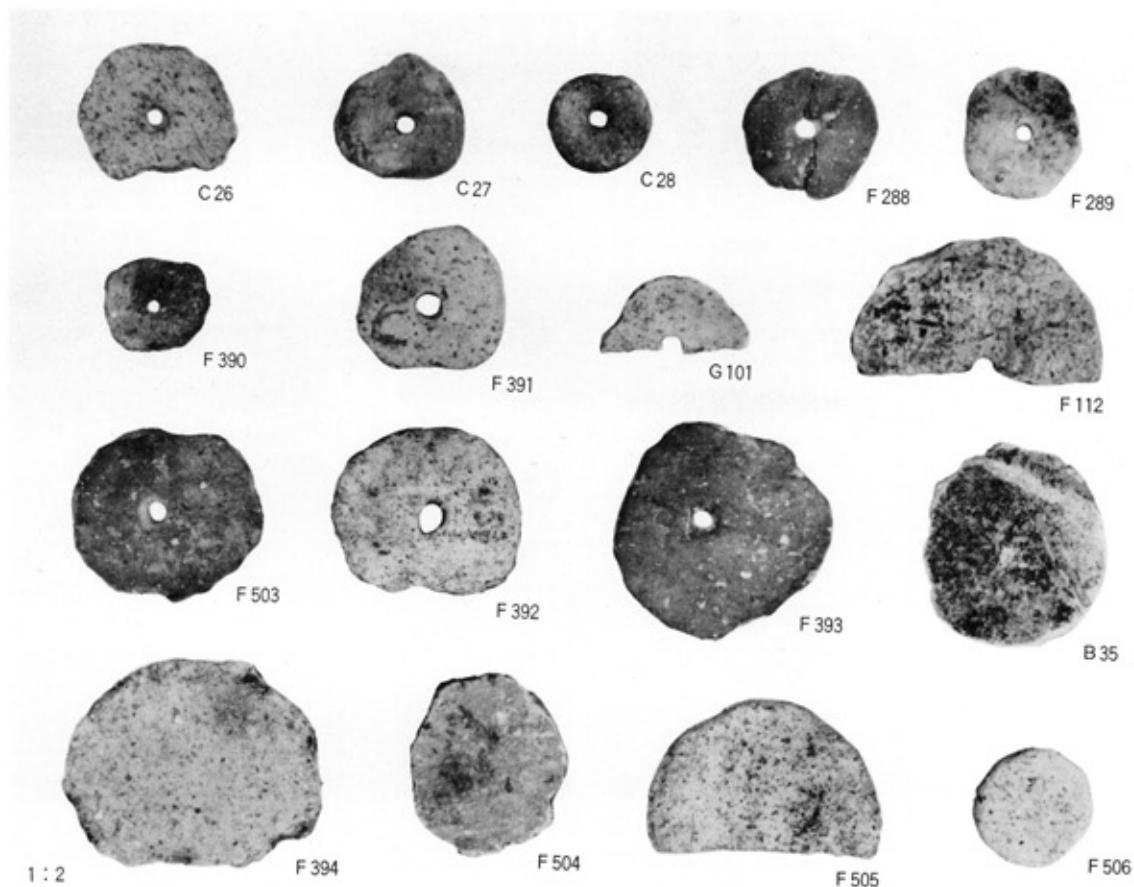
F 386



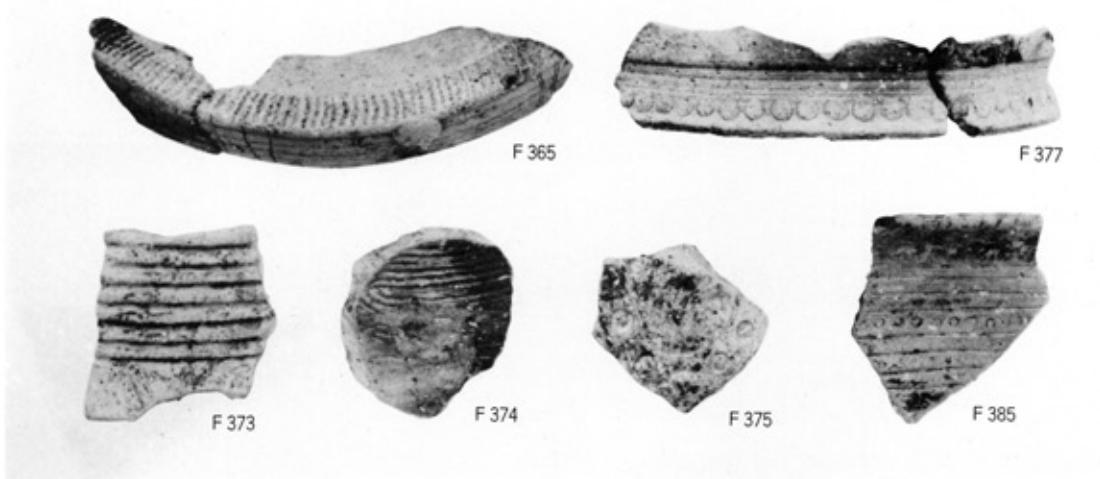
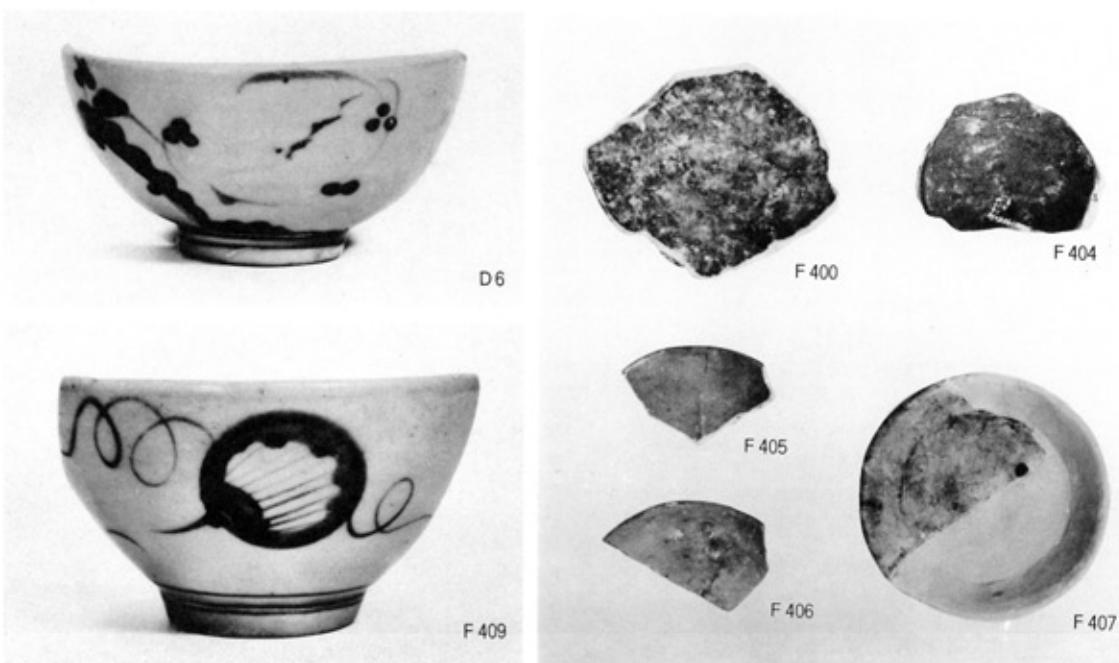
F 387



F 389



紡錘車・円板

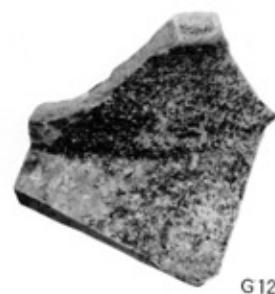
包含層出土  
弥生土器包含層出土  
中・近世の遺物



S D58

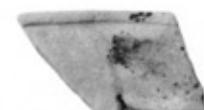


G10



G12

S D59



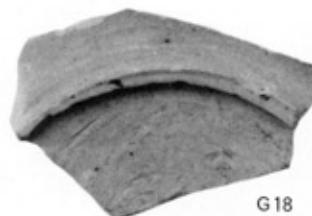
G15



G16



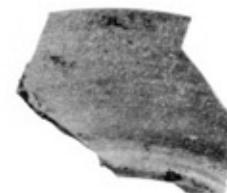
G17



G18



G19



G20



G29



G30



G31



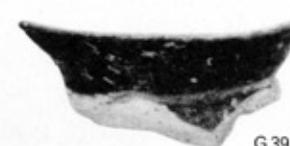
G32



G36



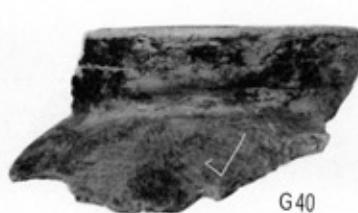
G38



G39



G46



G40

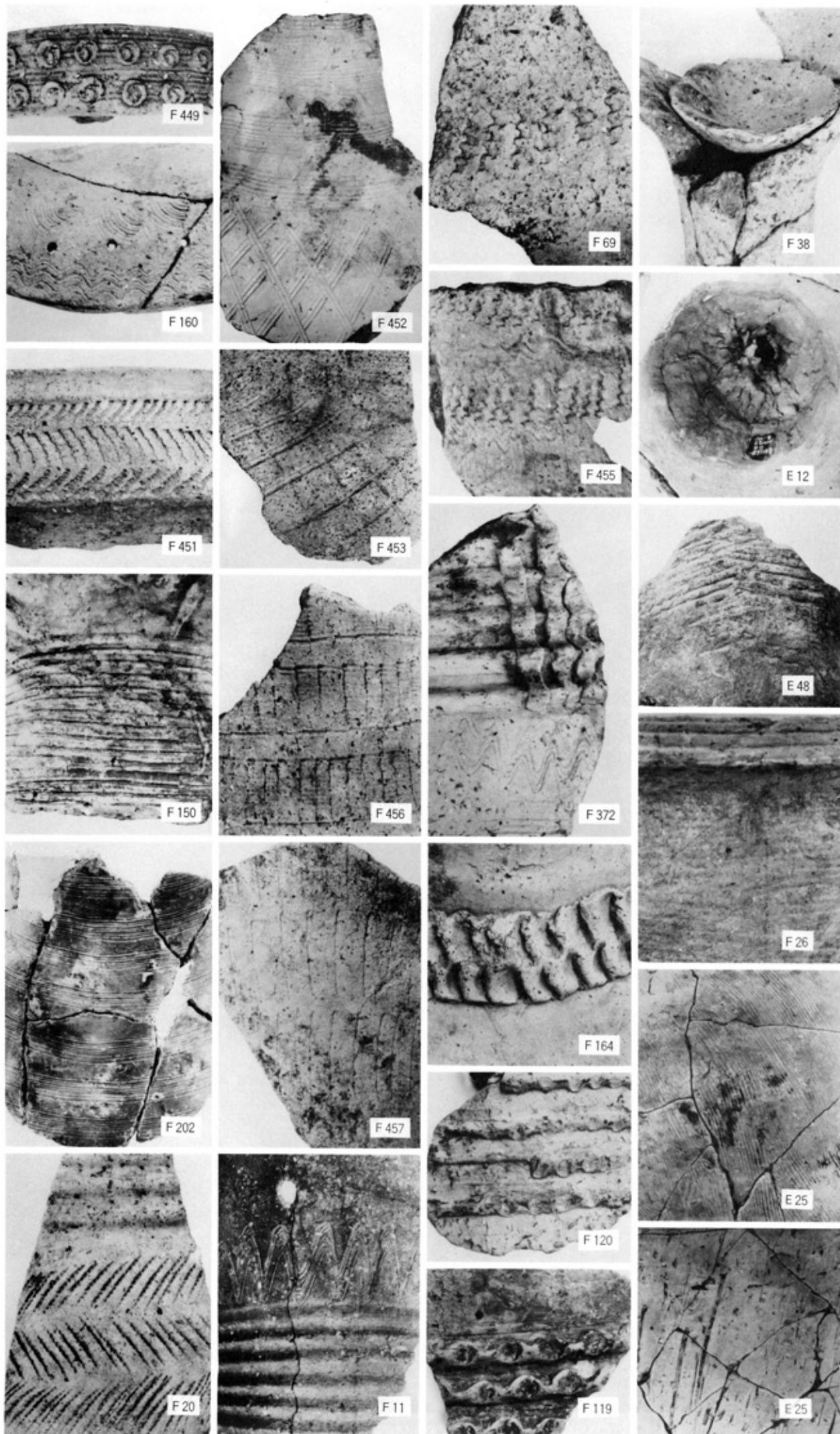


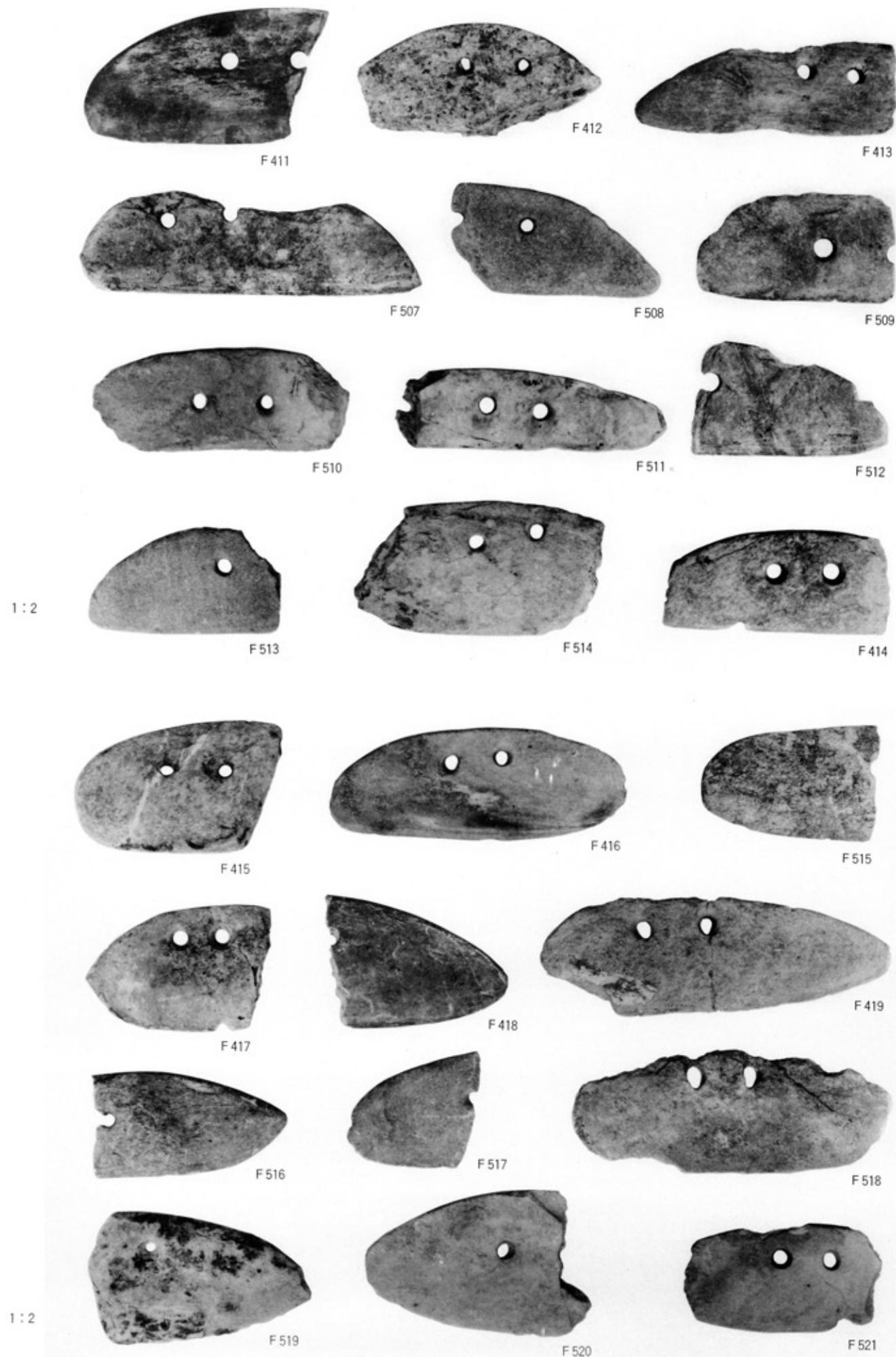
G42



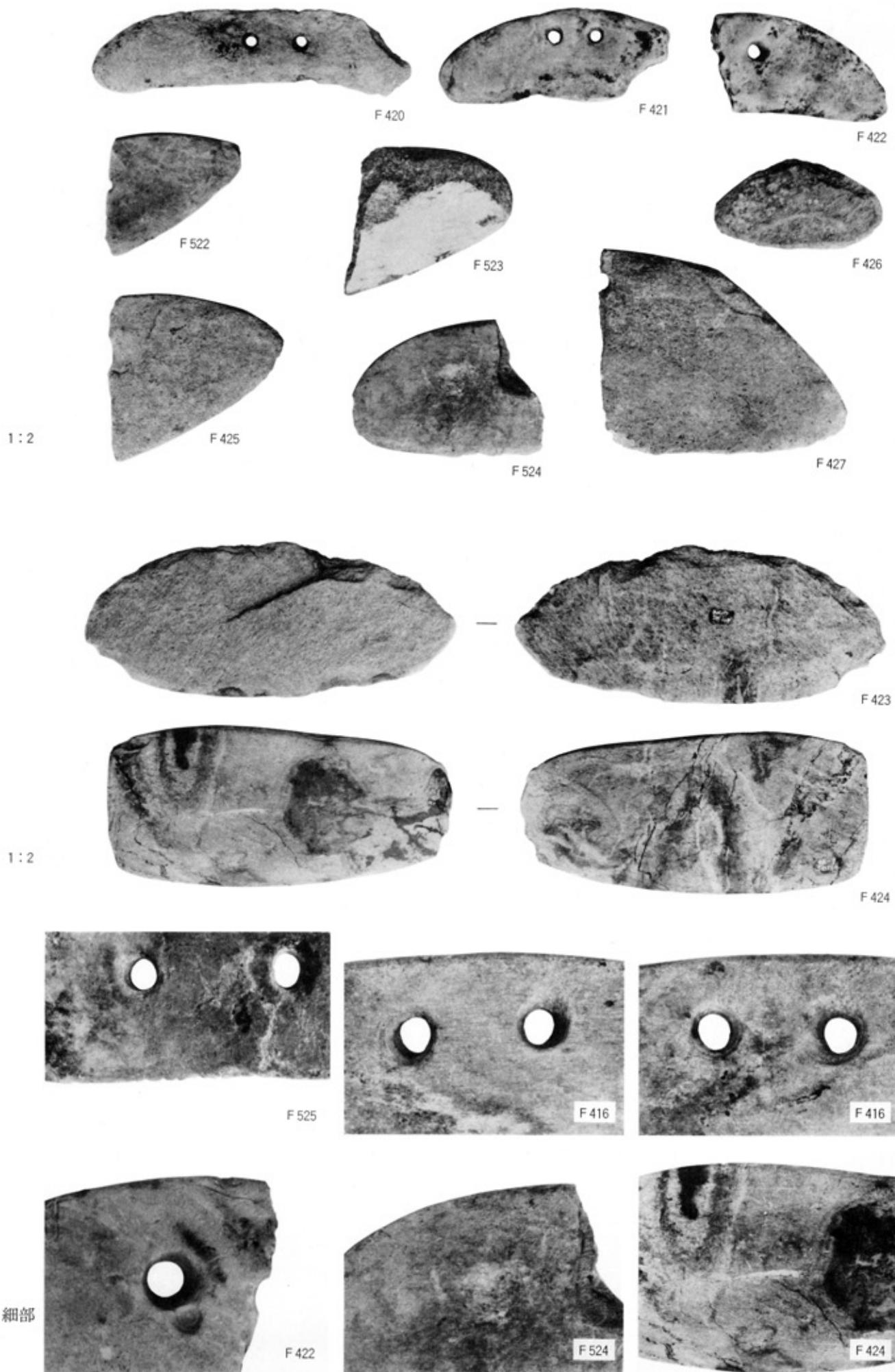
G47

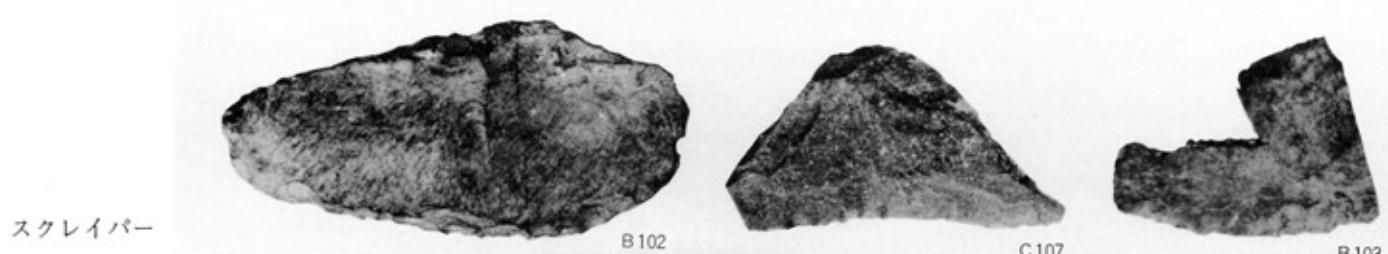
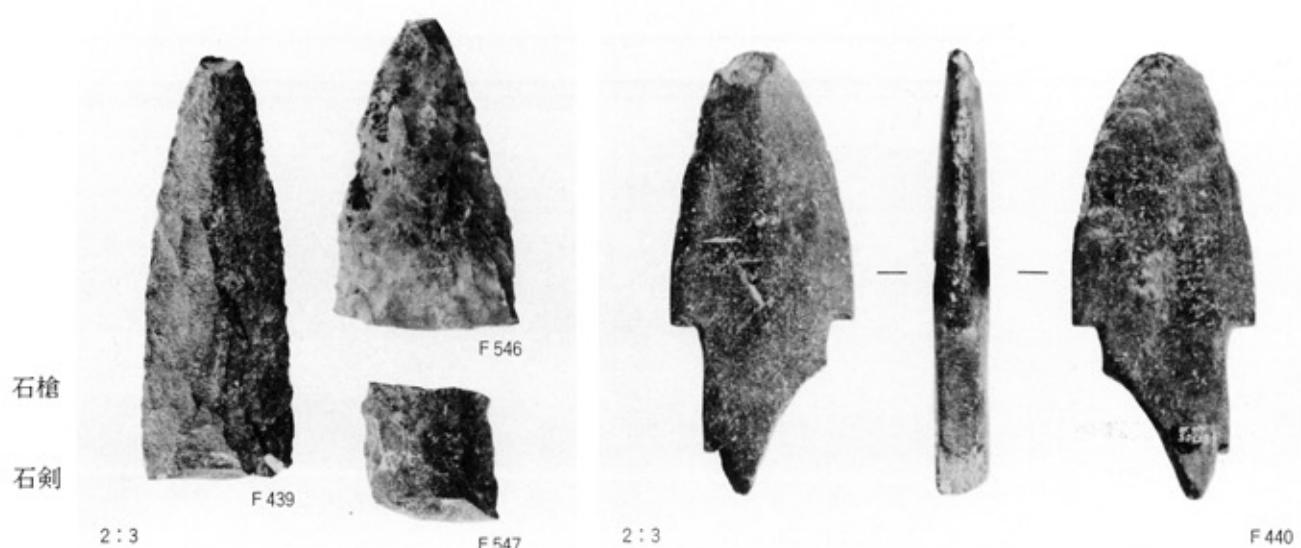
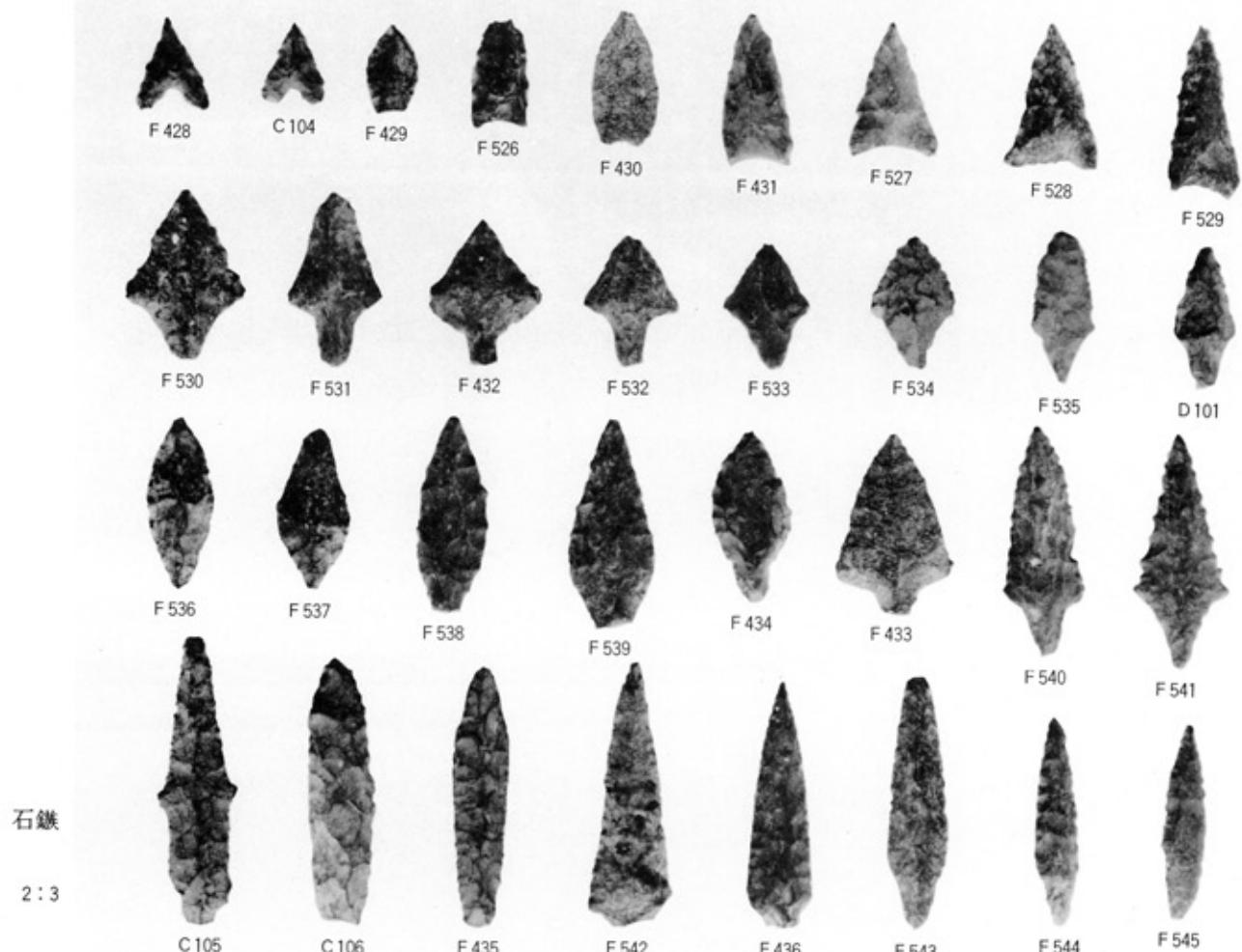
S D58





F411-416-418-516—S D50, F412-509-518—S D40, F517—S K10





D 101—S D 19, F 527·528—S D 41, F 539—S D 40, F 541—S D 44, F 543—S D 41  
 F 546—S K 04, F 547—S D 50



F 441

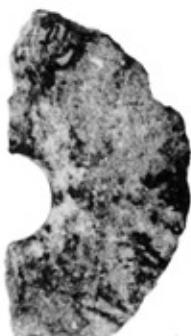
F 548



1:2

F 549

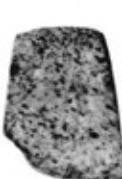
D 102



F 443

F 445

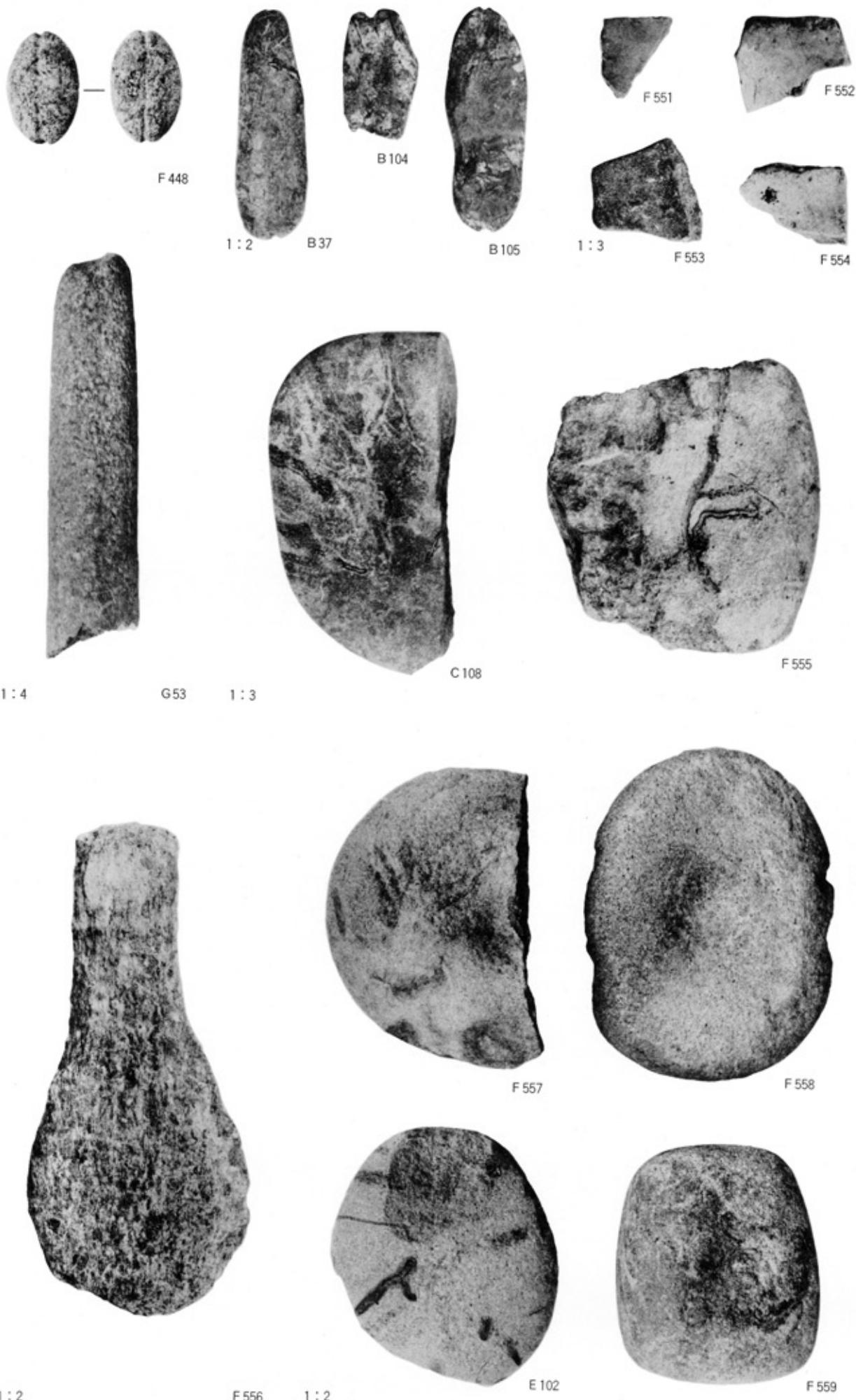
F 447



F 442

1:2

F 446—S D52, F 548—S D48, F 549—S K04



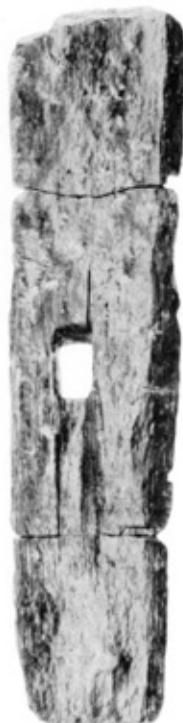
F 448—S K03, F 551~555—S D50, F 556—S D35, F 559—S D37, G 53—S D55



1:9



1:4



E 72 1:4

E 79



A 26



1:4



F 260

1:6



E 81

1:6

E 80



1:4



1:4

E 103



E 80

A 26—S D 01  
E 72·79~81—S D 31  
E 73—S D 29  
E 103—S D 28  
F 260—S D 42



1:3



E 71

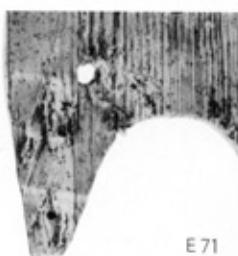


1:4

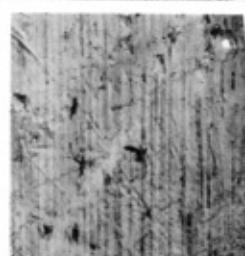
E 74



E 71



E 71



E 71



1:4



E 75

E 75



G 51



1:4

E 78



1:4

E 76



G 52

1:4

E 76

E 71-78—S D31

E 74-75—S D29

E 76—S D30

G 51-52—S D58

1:5

岡村遺跡発掘調査報告書

—亀の川中小河川改修工事に伴う発掘調査—

編 集 (財)和歌山県文化財センター

発行日 1990年3月

印 刷 真 陽 社